



東南アジア「古代史」の下限としての 14・15 世紀に関する 地域・分野横断的研究

2019～2022 年度科学研究費補助金
(基盤研究 A 課題番号 19H00538)

研究代表者 青山 亨(東京外国語大学)

研究成果報告書

2023 年 12 月



東南アジア「古代史」の下限としての 14・15 世紀に関する 地域・分野横断的研究

2019～2022 年度科学研究費補助金
(基盤研究 A 課題番号 19H00538)

研究代表者 青山 亨(東京外国語大学)

研究成果報告書

2023 年 12 月

1. はじめに

本書は、2019～2022（令和1～4）年度科学研究費補助金（基盤研究A、課題番号19H00538）による「東南アジア「古代史」の下限としての14・15世紀に関する地域・分野横断的研究」の研究成果報告書である。

本科研は、過去2期の科研から一貫した問題意識を引き継いだ研究である。今改めて過去2期（①と②）と今期（③）を列挙すると以下のとおりとなる。

- ① 2013～2015年度科研「東南アジア史における絶対年代と相対年代の統合に関する研究：7～10世紀を中心に」（基盤研究B、課題番号25284140、深見純生研究代表）
- ② 2016～2018年度科研「東南アジア史の統合的編年プラットフォームの構築：「長い12・13世紀」を中心に」（基盤研究B、課題番号16H03488、青山亨研究代表）
- ③ 2019～2022年度科研「東南アジア「古代史」の下限としての14・15世紀に関する地域・分野横断的研究」（基盤研究A、課題番号19H00538、青山亨研究代表）

3期10年のなかでメンバーの変動もあったが、漢籍研究、文献研究、刻文研究、考古学、美術史、建築史という多分野の研究者が、漢籍・文献・刻文等のコトバの史料が示す絶対年代と考古学・美術史・建築史等のモノの史料が示す相対年代をいかに統合するかという問題意識を共有し、地域と分野を横断して、東南アジアにおける「古代史」研究を継続してきた。

本科研が対象とする14・15世紀（およびその前後）には、東南アジアの古代史を代表する二つの王国であるアンコールとマジャパヒトが相次いで衰退と滅亡を迎える。この結果、政治的中心の移動、現地語文字史料の形態の変化、ヒンドゥー教・大乘仏教から民衆宗教（大陸部では上座部仏教、島嶼部ではイスラーム）への信仰の変化が生じた。古代的特徴をもった政体の没落と、民衆の信仰に基づく近世的特徴をもった政体の勃興が交錯する遷移的局面こそが「古代史」の下限としての14・15世紀を中心とする時代である。遷移期においては、現地語文字史料が十分に残されておらず、この時代の実態解明にコトバの史料とモノの史料の研究の対話が必要とされることは、東南アジア古代史に共通した課題である。

本科研の研究期間は、2019年末に始まった新型コロナウイルス感染症（COVID19）の拡大の影響をこうむった。このため、当初4回の実施を予定していた海外合同調査は2019年と2022年の2回に縮小され、研究会も初年度を除くと基本的にオンラインで実施せざるをえなかった。このような苦しい状況のなか、当初の予定よりも遅れた形ではあるが、本科研では、本報告書に収められた各メンバーによる個別研究の業績の刊行に加えて、第2期からの課題であった、絶対年代と相対年代を統合した東南アジア古代史の編年プラットフォームの試験版の構築を達成するとともに、若い世代の研究者育成を視野に入れた、これまでの共同研究の集大成とも言える『東南アジア古代史研究入門』（仮称）の制作に向けて具体的な準備を進めることができた。

最後に、本報告書の研究会合・海外合同調査の記録整理には寺井淳一さん、編集・製版には田畑幸嗣さんと下田麻里子さんの献身的なご尽力をいただきました。そのことを記するとともに謝意を表わします。

2. 研究組織（所属は申請時のもの）

■研究代表者

青山亨（あおやま とおる）東京外国語大学大学院

専門分野：東南アジア古代史、東南アジア宗教史、担当：研究総括、刻文史料

■研究分担者

田畑幸嗣(たばた ゆきつぐ) 早稲田大学

専門分野: 東南アジア考古学、担当: 考古学

佐藤桂(さとう かつら) 武蔵野大学

専門分野: 東南アジア建築史、担当: 建築史

原田あゆみ(はらだ あゆみ) 独立行政法人国立文化財機構 九州国立博物館

専門分野: 東南アジア美術史、タイ彫刻史、担当: 美術史

■研究協力者

肥塚隆(こえづか たかし) 大阪大学

深見純生(ふかみ すみお)

松浦史明(まつうら ふみあき) 上智大学

山崎美保(やまさき みほ) 東京外国語大学

寺井淳一(てらい じゅんいち) 東京外国語大学

久保真紀子(くぼ まきこ) 立正大学

3. 研究会合

第1回(2019年5月11日～12日、早稲田大学戸山キャンパス)

第1日: ワークショップ「東南アジア古代寺院建築の配置構成と世界観」(東南アジア考古学会例会との共催)

- ・青山亨「プランバナン寺院のラーマヤナ浮彫が描く「死」のエピソード: テキストとしての浮彫と書承テキストとの比較の視点から」
- ・寺井淳一「ミャンマー・バガン遺跡で見られる四仏・五仏の諸相とそれらを巡る祠堂空間の検討」
- ・久保真紀子「アンコールの仏教寺院プレア・カンにみられるヒンドゥー教図像と統治理念」
- ・コメント: 浅湊毅
- ・小野邦彦「祠堂の平面に図像化された神観念の始原と展開: 古代ジャワのヒンドゥー寺院のコスモロジー」
- ・下田一太「サンボー・プレイ・クックにおける寺院の伽藍配置と祠堂形式にみる信仰の形態」
- ・コメント: 重枝豊

第2日: 実務会議(今後の研究計画・海外合同調査)

第2回(2019年7月27日～28日、早稲田大学戸山キャンパス)

第1日: 研究発表

- ・青山亨「マジャパヒト時代のインドネシア河川流域における『ダルマーシュラヤ』的遺構の位置づけ」
- ・佐藤由似「14～16世紀におけるカンボジア王都に関する調査報告」
- ・横山未来「カンボジア、サンボー・プレイ・クック遺跡群都市区出土土器の研究」(東南アジア考古学会例会との共催)

第2日: インドネシア合同調査地の紹介、実務会議(今後の研究計画・海外合同調査)

- ・肥塚隆「ボゴール諸刻文の紹介その他」
- ・青山亨「『デーシャワルナナ』に見えるカリマンタンの地名の紹介」
- ・岩本小百合「ケダーの諸碑文と西カリマンタンの Batu Pahat 碑文の関連について」
- ・深見純生「チャンディ・アグン(南カリマンタン)の紹介」

第3回(2019年11月30日～2019年12月1日、早稲田大学戸山キャンパス)

第1日: インドネシア合同調査報告、研究発表

- ・合同調査参加メンバー「2019 年度インドネシア調査の報告」
 - ・青山亨「2019 年度インドネシア調査の総括」
 - ・青山亨「『デーシャワルナナ』に見えるシャカ暦について：その前と後も含めて」
- 第 2 日：実務会議（今後の研究計画）

第 4 回（2020 年 2 月 8 日～9 日、早稲田大学戸山キャンパス）

- 第 1 日：研究発表、実務会議（今後の研究計画）
- ・深見純生「ベンガル湾の出入り口としてのラムリとクダ」
 - ・原田あゆみ「更紗をめぐる交流史」
 - ・青山亨「東南アジア古代史の見方を考える：Miksic & Goh, Introduction: History, culture and art in Seasia, Ancient Southeast Asia (2017) を手掛かりに」
- 第 2 日：実務会議（今後の研究計画）

第 5 回（2021 年 7 月 17 日、オンライン Zoom 開催）

- ・佐藤桂「ミャンマーの木造僧院について：『アマラプラ城サンチャウンドー文書』の建築学的解説」（東南アジア考古学会例会との共催）
- ・実務会議（今後の研究計画・繰越金の使途検討・成果物）

第 6 回（2021 年 9 月 18 日、オンライン Zoom 開催）

- ・田畑幸嗣「扶南・真臘の考古学」
- ・実務会議（今後の研究計画・古代史年表データベース構築の進捗報告・成果物）

第 7 回（2021 年 10 月 3 日、オンライン Zoom 開催）

- ・実務会議（今後の研究計画・成果物）

第 8 回（2021 年 11 月 20 日、オンライン Zoom 開催）

- ・原田あゆみ「スコータイ刻文と仏塔建立・修繕」
- ・田畑幸嗣「東南アジア古代史研究入門（仮）の出版提案」
- ・実務会議（今後の研究計画・成果物）

第 9 回（2022 年 2 月 6 日、オンライン Zoom 開催）

- ・寺井淳一「14～15 世紀の刻文について - トゥーパーヨン刻文を中心に」
- ・山崎美保「14～15 世紀の刻文について（ジャワを中心に）」
- ・実務会議（今後の研究計画・東南アジア古代史研究入門書・古代史年表データベース）

第 10 回（2022 年 5 月 14 日、早稲田大学戸山キャンパスおよびオンラインのハイブリッド開催）

- ・実務会議（今後の研究計画・海外合同調査・成果物・古代史年表データベース）

第 11 回（2022 年 7 月 2 日、オンライン Zoom 開催）

- ・実務会議（今後の研究計画・海外合同調査・成果物・古代史年表データベース・次期科研申請）

第 12 回（2022 年 10 月 23 日、オンライン Zoom 開催）

- ・青山亨「『考古学ジャーナル』への記事掲載の報告」
- ・実務会議（古代史年表データベースの項目）

第 13 回（2023 年 1 月 22 日、オンライン Zoom 開催）

- ・実務会議（成果物・古代史年表データベース・東南アジア古代史研究入門書）

第14回（2023年2月12日、オンラインZoom開催）

・実務会議（成果物・東南アジア古代史研究入門書）

第15回（2023年3月26日、オンラインZoom開催）

・科研成果報告書および東南アジア古代史研究入門書の執筆予定者による進捗報告

・実務会議（古代史年表データベース・次期科研の研究計画）

4. 海外合同調査（中核日程の記録）

■ 2019年度インドネシア調査主要日程：2019年8月18日～29日

8月18日 ジャカルタ集合

8月19日 Batujaya 遺跡（博物館、Candi Jiwa、Candi Blandongan、Candi Serut、Candi Telagajaya VIII）、Candi Cibuaya、バンドウン泊

8月20日 Candi Cangkuang、Candi Bojong Menje、Candi Bojongemas、ボゴール泊

8月21日 プールナヴァルマン刻文群（Prasasti Jambu、Prasasti Kebon Kopi I、Prasasti Ciaruteun、Prasasti Muara Cianten、Prasasti Pasir Awi）、ジャカルタ泊

8月22日 ジャカルタ国立博物館、ジャカルタ泊

8月23日 ジャカルタからポンティアナック（西カリマンタン州）に移動、州立博物館、ポンティアナック泊

8月24日 Batu Pahit を目指すも悪路のため断念、ポンティアナック泊

8月25日 ポンティアナックからバンジャルマシン（南カリマンタン州）に移動、バンジャルマシン泊

8月26日 州立博物館、Candi Agung、Candi Laras

8月27日 バンジャルマシンからスラバヤに移動、Prasasti Wurare (Taman Apsari)、スラバヤ泊

8月28日 Trowulan 遺跡（Candi Wringin Lawang、Balai Pelestarian Cagar Budaya Jawa Timur（東ジャワ文化遺産保存局）、博物館、Candi Tikus、Candi Bajang Ratu、Maha Vihara Mojopahit、Candi Brahu、Candi Gentong）、スラバヤ泊

8月29日 スラバヤ解散

■ 2022年度カンボジア調査主要日程：2022年8月20日～8月28日

8月20日 シエムレアプ集合（全日程シエムレアプ泊）

8月21日 アンコール遺跡群（Bayon、Baphuon、Preah Palilay、Preah Pitu、Bat Chum、Angkor Wat）

8月22日 アンコール遺跡群（Lolei、Preah Ko、Bakong、Krol Romeas、Preah Khan、Neak Poan）

8月23日 アンコール遺跡群（Banteay Srei、Sras Srang、Banteay Kdei、Ta Prohm、Thommanon、Chau Say Tevoda）

8月24日 シハヌーク博物館、JASA にて研究発表

8月25日 Banteay Chhmar

8月26日 Preah Vihear

8月27日 PCR 検査、Koh Ker 遺跡群（Prasat Chen、Prasat Thom、Prasat Linga I-IV、Prasat Sralao、Prasat Banteay Pir Chaon、Prasat Chrap、Prasat Damrei、Prasat Neang Khmao）

8月28日 PCR 検査結果受領、解散

目次

はしがき 青山 亨	3
東南アジア史における「古代」―時代区分についての試論― 青山 亨	8
研究ノート：スジャラ・ムラユにおける古地名ムラユ 深見 純生	19
古代クメール刻文の終焉 ジャヤヴァルマン七世期とその後の刻文史料 松浦 史明	22
14～15世紀ミャンマーの重要刻文紹介 寺井 淳一	40
重要刻文（インドネシア） 山崎 美保	60
研究ノート：東南アジアにおける窯業の成立と展開に関する試論 田畑 幸嗣	67
仏教建築史の初源へ ―古代インドから東南アジアへの展開― 佐藤 桂	73
スコータイ刻文と仏塔建立：仏舎利安置と蓮蕾形仏塔 原田 あゆみ	78
クメール美術における『ラーマーヤナ』の浮彫 久保 真紀子	104
肥塚隆司氏追悼 深見 純生	160
肥塚隆先生略歴・主要業績 青山 亨 編	163

はじめに

本稿は、これまで10年間3期にわたって筆者が参加してきた東南アジア古代史を対象とする科研が今期で一区切りすることを踏まえ、東南アジア史における「古代」という時代区分を改めて検討しようとするものである。3期の科研は以下のとおりであり、このうち③が今期の科研となる。

- ① 2013～2015年度科研「東南アジア史における絶対年代と相対年代の統合に関する研究：7～10世紀を中心に」（基盤研究B、課題番号25284140）
- ② 2016～2018年度科研「東南アジア史の統合的編年プラットフォームの構築：「長い12・13世紀」を中心に」（基盤研究B、課題番号16H03488）
- ③ 2019～2022年度科研「東南アジア「古代史」の下限としての14・15世紀に関する地域・分野横断的研究」（基盤研究A、課題番号19H00538）

この間、科研のメンバーには変動があったが、漢籍研究、文献研究、刻文研究、考古学、美術史、建築史という多分野の研究者が、漢籍・文献・刻文等のコトバの史料が示す絶対年代と考古学・美術史・建築史等のモノの史料が示す相対年代をいかに統合するかという問題意識を共有しつつ、東南アジア史における「古代」を共通の対象として、地域と分野を横断する形で研究を継続してきた。3期にわたる研究にあたって作業仮説としてもうけた東南アジア史の「古代」は、おおむね、600年前後を上限（①）、1500年前後を下限（③）とし、12～13世紀前後に中間の区切り（②）を置く時代区分とした。

これらの時代区分は、いずれも緩やかに設定されたこともあり、経験的にこれまでの研究の知見と大きな齟齬を来さないことは明らかであった。しかしながら、時代区分自体についての意識的な検討は十分になされなかったきらいがある。本稿では、3期10年間にわたる研究活動の総括として、そもそも東南アジア史における「古代」という時代区分をいかに設定するかを再検討することによって、東南アジア古代史研究の次のステップに向けての足掛かりとしたい。

1. 時代区分にあたっての前提

時代区分（periodization）は、過去の事象を研究するにあたって、研究の対象として、一定の特徴を共有する時間と空間のかたまりを切り出す作業である。この作業においては、どの特徴を切り出しの指標とするのか、切り出される時代の境界をどう定めるのか、対象となる空間の範囲およびその変化をどう取り込むのかといった問題があり、けっして簡単なものではない。そこで、あらかじめ、時代区分の指標、「世界史」との接続、対象地域のサブ・リージョンへの区分という3つの観点から、本稿における東南アジア史の「古代」を切り出す作業の前提を示しておきたい。

時代区分の指標は、理念的に言えば、史料から得られる歴史事象を帰納的に抽象化する手続きを経て選出されるものと考えられるが、現実の時代区分の指標には、普遍的であろうとすればするほど、一定の観点から逃れられない傾向がある。たとえば、かつてヨーロッパ史で支配的であった「古代」「中世」「近代」という3区分論は、カトリック支配の中世を否定し、ルネサンス以降の近代を暗黒の中世からの脱却ととらえるプロテスタントの歴史観に起源がある。歴史学が学問として独立したのちの進歩史観もこの変種である。新たに有力となった唯物史観では、生産様式の変化が動因となって、奴隷制、封建制、資本主義という時代の変化を引

き起こしたとされるが、そこには来るべき社会主義への移行が前提とされていた。いずれにしても、これらの歴史観では、いったん構築された歴史観から演繹的に時代区分の特徴が記述される傾向があった。

一方、東南アジアの古代史研究では、生産関係や社会関係を再構築するだけの史料が十分に得られていないことの自覚が強いように思われる。このため、史料から見いだされる歴史事象をもとに帰納的に時代区分を想定する段階にとどまらざるを得ない。言い方を変えれば、構造的というよりは記述的な時代区分の指標であってもやむ得ないところがある。

本稿では、東南アジア古代史において単一の普遍的な指標に基づいて時代区分を行うことが困難であることを認識したうえで、現地語による碑文や銅板刻文などの刻文（金石文）の出現から、これらの媒体による積極的な記録活動の終焉までを「古代」という時代区分の主たる指標とし、現地語による年代記の出現を古代に続く時代（「近世」）の上限の指標の一つに定めたい。上限・下限の具体的な年代を定めるにあたっては、漢籍などの東南アジア地域外の文献の記録をも参照することにした。

結果として、コトバの史料が示す絶対年代とモノの史料が示す相対年代という二つの時間軸のうち、コトバの史料を指標とすることになるが、これは、絶対年代を提供する学問領域と相対年代を提供する学問領域の間に優劣を認めようとするものではない。あくまでも、絶対年代に基づく時代区分を作業仮設として定めようとして、相対年代に基づく史料との適合性を明らかにしていこうとする作業過程を示すものである。

コトバの史料をより広い歴史的文脈に置くと、文字という技術の伝播と受容という歴史的過程の産物であるとみることができる。人類史のなかで自ら一次的に文字を発明し組織化した地域はきわめて限られており、当初は、文字が発明された地域の言語を表現するための手段として文字は利用された。しかし、文字は、文字が表現する言語とは独立して利用できる技術であって、ひとたび文字が、当初の元の言語と表裏一体の形で、他の地域に伝来すると、その後は、元の言語から独立して、現地の言語を表現する文字として利用されるようになる。このように、他地域から導入されたリソースの一つである技術としての文字が、現地の社会の自己表出のために利用されるという点で、文字は技術であると同時に、文字を使う社会の主體的な意識の表現行為の結果でもあった。したがって、文字による記録の出現とその形式の変化は、何らかの形で社会関係にも変化があったことを予想させるものであり、その社会関係がいかなるものであったかの考察をとりあえず保留しても、十分に時代区分の基準として扱うに値するものであると考えられよう。

次に、「世界史」(world history) との接合を考えたい（本稿では「グローバル・ヒストリー」(global history) との違いをとくに意識していないが、古代を含む前近代を検討するにあたっては、特徴をもった複数地域間の交流に着目する「世界史」の枠組みがより適合的であると考えられる）。

20 世紀後半以降の歴史学は、国民国家 (nation state) の現在の形から過去を振り返って、その国家の起源から形成にいたる歩みを再構しようとする一国史観からの脱却を図ってきた。その動きが、国家や国民という単位を超えた「地域史」(regional history) であり、諸地域間の交流とその総体という地球規模の単位で歴史を考える「世界史」(world history) である。とくに、世界史において有力なパラダイムとなっている近代世界システム論は世界全体を一つのシステムとしてみなし、システムを構成する「中枢」「準周辺」「周辺」の三層構造におけるリソース（商品）をめぐる分業体制の変化の過程として歴史を説明する。リソースの流通と配分という視点は前近代においても有用な観点である。しかしながら、地球規模のシステムが姿を現す以前の前近代を対象とする場合には、世界をいくつかの地域に分けて検討したうえで、地域間の交流および関係として世界史を考えることが妥当であろう。ここに世界史と地域史の接続を検討する契機が生まれる。

ひるがえって、東南アジア史研究では、東南アジア地域の独自性あるいは自律性を強調する傾向があった。東南アジア地域の独自性を示すことは、東南アジアの脱植民地の文脈では有効な方法論であり、豊かな成果を生み出してきたが、他方、他地域との連関を見失わせるリスクもはらんでいる。「インド化」(Indianization) をめぐる議論においても、インド文明の優位性に対する「土着化」(localization) (Wolters, 1999) の意義の指摘は、東南アジア地域とその周辺地域との関係性をめぐる歴史認識がはらむ緊張を反映している。しかし、グローバ

ル化が進展する近現代はもとより、前近代においても他地域との連関がけっして無視できないことは「インド化」という現象を客観的に見た場合に明らかである。

そこで、本稿では、代表的な世界史の時代区分を参照枠組みとし、そこに東南アジア史の「古代」を接続することを試みる。このことは、世界史の時代区分を権威として受け入れることを意味してはいない。世界史の時代区分も「揺れ」のある区分であることを前提としたうえで、より広範な歴史的な文脈に東南アジア史を位置づけるための方策、いわば東南アジア史の「古代」を世界史という基礎に結びつけるアンカーとして、接続を試みるものである。実際、世界史の時代区分自体も諸説で分かれており、どれを参照枠として選んでも恣意的にならざるを得ないが、本稿では、最近のスターンズ（Stearns 2017）の世界史の時代区分を参照枠としたい。スターンズの時代区分論は既存の代表的な時代区分についての批判的再検討という性格をもっており、それ自体が独自の時代区分を提案しているわけではなく、世界史の時代区分との接続を作業仮説として試みるためには適当な参照枠と考えられる。今後、東南アジア古代史の区分が世界史の時代区分論に貢献することもまたありえることであろう。

以下、スターンズが取り上げる時代区分を、若干のコメントを付したうえで整理する。

A) 前 9000 年以降

農業革命あるいは新石器革命（Agricultural or Neolithic revolution）が起こり、狩猟採集社会から定住社会への移行が促された。

B) 前 3500 年 – 前 800 年から前 600 年

「初期文明時代」(The Early Civilization Period)と呼ばれる。アフロ・ユーラシア大陸の大河川流域(エジプト、メソポタミア、インダス、黄河)に初期文明が出現した。この時代には青銅器時代の開始から鉄器時代の開始が含まれる。

C) 前 600 年 – 後 600 年

「古典時代」(The Classical Period)と呼ばれる。アフロ・ユーラシア大陸に帝国（秦・漢、マウリア・グプタ、ローマなど）が台頭した時代である。文化的には、孔子、仏陀、プラトン・アリストテレス、キリストなどが現れ、儒教、仏教、ギリシア哲学、キリスト教など、後代および周辺地域に影響を及ぼす古典文化が形成されたことが重要である。なお、イスラームを重視するならばムハンマドの活躍まで含めて後 700 年を下限とする考え方もありえる。

D) 600 年 – 1450 年

「ポスト古典時代」(Post-classical)と呼ばれる。ヨーロッパ史においてはローマ帝国の終焉から、いわゆる「中世」を経て、ルネサンスまでの時代にあたる。アジア史においては漢滅亡後に分裂した中華世界が唐によって再統一され、宋、元を経て明に至る時代、および、イスラームの台頭に始まり、ウマイヤ朝、アッバース朝を経てマムルーク朝に至る時代にあたる。

E) 1450–1750 年

「近世」(Early Modern)と呼ばれる。1450 年という始期にはブローデル（Braudel）の「長い 16 世紀」（1450–1640 年）の影響がうかがわれる。「長い 16 世紀」の始期と終期の基準となる出来事は 1453 年の東ローマ帝国の滅亡から 1648 年の三十年戦争の終結までである。ブローデルは地中海世界を対象としているので、「長い 16 世紀」は、ルネサンスから大航海時代を経て宗教改革に至る時代をカバーすることになる。1450 年に始まる時代は、ヨーロッパ史においては航海王子エンリケからヴァスコ・ダ・ガマ、コロンブスの活動に至る一連の大航海時代の始まりであり、東南アジア史においては 15 世紀前半からのムラカの台頭や明朝の鄭和の大航海によって活性化する「交易の時代」(Reid, 1990)を迎える期間にあたる。世界史的にはアフロ・ユーラシア大陸とアメリカ大陸が結合し、真の意味でのグローバルな歴史を準備した時代と言えよう。

F) 1789–1914 年

「長い 19 世紀」(The Long Nineteenth Century) と呼ばれる。フランス革命から第 1 次世界大戦前までを一括りにした時代区分であり、ホブズボーム (Hobsbawm) が広めた概念である。スターンズは上記の「近世」の下限との間にギャップがある点を指摘して、上限を 1750 年に引き上げることを提言している。

G) 1914 年以降

「現代」(The Contemporary Era) と呼ばれる時代。第 1 次世界大戦から現在までである。

以上の整理から分かるように、ここであげた世界史の時代区分のなかで、東南アジア史の「古代」の上限と下限に重なるのは、「ポスト古典時代」の上限と下限であると言ってよいであろう。東南アジア史の「古代」と上限と下限についての具体的な検討はあとの節でおこなうこととし、前提となる議論の最後として、サブ・リージョンについて検討したい。

2. サブ・リージョンの設定

世界史と地域史の接続を検討する作業をおこなうにあたって、もっとも実際的でかつ理論的にも満足のいく手順は、地域史の大きな区分（たとえば「古代」）と世界史の区分との接続をまず検討したのち、地域史の大きな区分の中により細かな時代区分を検討していくことであろう。しかしながら、当然予想されるように、一般的に時代区分は、より細かな視点で検討すればするほど、地域による差異が顕著になってくる。この問題を回避するためには、細かな時代区分をするに先だって、東南アジアという大きな地域区分をさらに細かく分けたサブ・リージョン (sub-region) ごとに検討する必要がある（サブ・リージョンの発想は桜井 (2001) の「歴史圏」に負っている。なお、本稿では扱わないが、桜井は雲南諸盆地に「照葉樹林山地」を設定している）。

サブ・リージョン（必要に応じて「地区」とも呼ぶこととする）を考えるにあたっては、いくつかの前提を示しておきたい。まず、一国史観によるバイアスをなるべく減らすために、サブ・リージョンの名称には、ベトナムやインドネシアといった現在の国名は可能な限りさけることにし、できるだけ地理的単位を名称として採用したい。このため、大陸部においては主として河川流域、島嶼部においては主として島を名称選択の基準とする。なお、この文の中で使われているように便宜上必要な場合は当然としても、本稿では、通例の大陸部、島嶼部という分類を一義的な分類の基準とはしない。なぜなら、大陸部であっても海域的性格をもつサブ・リージョン、島嶼部であっても陸域的性格をもつサブ・リージョンがありえるうえに、両者の性格を併せ持つサブ・リージョンがありえるからである。

また、時間の経過によって、サブ・リージョンの範囲が増減したり、サブ・リージョンの重要性が変化したり、あるいは、複数のサブ・リージョンが組み合わさって一つのサブ・リージョンを形成したり、政治的に統合されたりしたことに注意が必要である。これはサブ・リージョンで活動する主体（民族や政体などの集団）が時代とともに変化することとも関連している。主体となる集団については、いわゆる「民族」の内包と外延が流動的であることに留意しつつ、歴史的事象の主体としての社会集団をいくつか想定することは可能であろう。具体的には、「古い世代」であるクメール人、モン人、ピュー人、マレー人、ジャワ人など、「新しい世代」であるタイ (Tai) 人、ビルマ人など、そして「外来者」であるインド人、アラブ人、ペルシア人、華人、日本人、ヨーロッパ人などが挙げられる。

以下のリストでは、サブ・リージョンは、原則としてユーラシア大陸の中心から周辺にむけて配列することとし、西から東、大陸部から島嶼部の順に配列する。

A) エーヤワディー川流域

アンダマン海に流れ込む流域。いわゆる「上ビルマ」「下ビルマ」を含む地域。支流としてはチンドウィン川のほか、上ビルマのマンダレー盆地ではミッンゲー川が合流する。古代には、ピュー人のシュリークシェー

トラなどの都市（8世紀頃）、モン人のタトン（9世紀）、ビルマ人のパガン（11～13世紀）が栄えた。

B) チャオプラヤー川流域

タイランド湾に流れ込む流域。チャオプラヤー川およびその支流ナーン川、ピン川、ヨム川、ワン川、パーサク川などを含む流域。古代には、モン人のドヴァーラヴァティー（6世紀以降）が栄え、クメール人の勢力圏に入ったのち（12世紀）、上流から下ってきたタイ人の諸政体が栄えた（13世紀以降）。

C) メコン川流域

南シナ海に流れ込む流域。メコン川（その支流バサク川を含む）およびトンレサップ川とトンレサップ湖、コーラート台地を流れるムン川などを含む流域で、上流は雲南を流れる。古代には、下流域で扶南（5～7世紀）、中・上流域で真臘（7世紀～8世紀）、トンレサップ湖北岸でアンコール（9～15世紀）、中流域（15世紀～）でポスト・アンコールの政体が栄えた。

D) ホン川流域

漢字では紅河と表記される、トンキン湾（北部湾）に流れ込む流域。河口部では紅河デルタを形成し、上流は雲南を流れる。古代には、秦による嶺南の占領（前214年）、南越（前203年～前112年）の独立、漢による征服（前112年）を経て、ベト人の李朝が独立（1009年）し、以後、しだいに南方のインドシナ半島東部に勢力を拡張した。

E) インドシナ半島東部

インドシナ半島東部の沿岸部で、ホン川流域の南、メコン川流域の北（沿岸から見た場合）ないし東（内陸から見た場合）の地域。チュオンソン山脈と南シナ海に挟まれた南北に延びる狭隘な地域であり、大陸部であるが海域的特徴を有する。古代にはインド化したチャム人のチャンパーが栄えたが（3世紀以降）、次第に北からのベト人勢力に浸食され、黎朝に王都ヴィジャヤが占領された（1471年）。チャンパーは沿岸部と山岳部を河川で結んだ河川政体の連合体であった。

F) マレー半島

マレー半島はユーラシア大陸の半島であるが海域的特徴をもつ。マラッカ海峡側の南・西岸とタイランド湾側の北・東岸に分けることができる。マレー半島北部はチャオプラヤー川流域やエーヤワディー川流域の政体との交渉が顕著である。マレー半島南部はスマトラ島東岸とマラッカ海峡域を形成し、海域世界との交渉が顕著であった。古代では、タイランド湾側のターンブラリンガ（12世紀末～14世紀初）、マラッカ海峡側のムラカ（14世紀末～16世紀初）が栄えた。

G) スマトラ島

スマトラ島はマラッカ海峡側の低地が広がる東岸（ムシ川やバタンハリ川などで河川流域圏をなす）とインド洋側の狭隘な西岸に分けることができる。マラッカ海峡側ではマレー半島南・西岸と一体的なマラッカ海峡域を形成する。古代では、マラッカ海峡域のシュリーヴィジャヤ（7世紀）、三仏齊（11世紀以降）が栄えた。イスラーム期になるとスマトラ島北部ではイスラーム政体が栄えた（13世紀末以降）。

H) ジャワ島

ジャワ島では西部、中・東部の北岸から内陸部にかけて政体が現れた。島嶼部の島であるが陸域的性格をもつ。これはとくに東部のプランタス川流域の政体に顕著な特徴である。古代では、西部にタールマー国（5世紀前半）、中部にサンジャを始祖とするマタラム（8世紀）、大乘仏教を奉じるシャイレンドラ（8世紀）、東部にクディリ（11世紀）、シンガサリ（13世紀）、マジヤパヒト（13～15世紀）が栄えた。ジャワ島に展開した政体のうち、東部についてはプランタス川流域として独立したサブ・リージョンに切り分けることができる。

I) 小スンダ列島（ボルネオ島以東）

島嶼部においてボルネオ島およびその東方に連なる諸島。古代では、ボルネオ島東部のムーラヴァルマン王の記録（5世紀初頭）が顕著。なお、小スンダ列島世界の東端はオセアニアのメラネシアと接続している点に留意したい。オーストロネシア語族のオセアニア進出により、先史時代からメラネシアと東南アジアは小スン

ダ列島世界を介して接続していた。

J) フィリピン諸島

フィリピン諸島では、16世紀のスペイン到来までバランガイ社会が継続した。900年のラグナ刻文はフィリピン諸島がマレー世界に含まれていたことを示す。なお、フィリピン諸島は（小スンダ列島世界と同様に）東南アジア世界の東端であるとともにオセアニア世界の西端にあたることには留意したい。

サブ・リージョンを検討するうえでは、上記のコメントでも触れたように、サブ・リージョン内部の地理的下位区分にも考慮する必要がある。ジャワ島におけるブランタス川流域はその典型例である。また、ホン川流域に拠点を置いたベト人の政体がインドシナ半島東岸のチャム人の領域を侵食し、最終的にはベト人の政体に併合したように、隣接する二つのサブ・リージョンが歴史的過程のなかで統合される事例や、スマトラ島東岸の河川流域港市群とマレー半島西岸の港市群がマラッカ海峡域として一つの歴史空間を形成した事例にも注目される。

以上の前提となる議論を踏まえて、次節からは東南アジア史の「古代」を区分する上限と下限についてそれぞれ検討してみたい。

3. 「古代」の上限

東南アジアでは、前2千年紀末頃から青銅器の利用、やや遅れて鉄器の利用が始まった。いずれも中国からの影響であるが、ベトナム北部のドンソン文化は銅鼓を特徴とする独自の文化である。金属器の利用と並行して水稻農業が広まり、食料生産力が高まると、階層化した首長制社会が広く出現した。これらの首長制社会のなかでも、銅鼓やインドのガラス製ビーズや回転紋器のような威信財を対象とした交易ネットワーク（もの、ひと、情報、資本の移動を媒介する拠点のつながり）の結節点に立地した集住地（settlement）には人口が密集し、専門化と分業をとともう首長制社会が形成されるようになった（青山, 2022b）。現在遺構として確認できる高度な集住地としては、前2世紀に遡るピュー人のシュリークシェートラ（エーヤワディー川流域）やモン人のドヴァーラヴァティー（チャオブラヤー川流域）などの環濠をもつ古代都市の遺構が出土している。

世界史の接続という観点からは、この時期、東南アジアの北方に位置する中国およびベンガル湾をはさんで西方に位置するインドでの動向が東南アジアに大きな影響を与えている。中国およびインドの状況は、先述の世界史における「古典時代」に位置づけられ、中国では秦・漢帝国、インドではマウリア朝・グプタ朝が成立している。ユーラシア大陸の東端と中央南部に位置するこれら二つの「帝国」的文明圏とのあいだで文物の交流が始まると、中間に位置する東南アジアを経由する長距離交易のネットワークが形成され、ネットワークの結節点を中心に、東南アジアの初期国家の形成が促された。この典型例がメコン川流域下流部に興った扶南である。

中華を統一した秦帝国は南嶺山脈を越えて領域を拡大し、ホン川流域を中心とするベトナム北部まで中国の領土として取り込んだ（秦滅亡後、南越が独立するが、後に漢に併合される）。トンキン湾を介して、海路を通じて交易ネットワークとの接続を狙いとした。この結果、古典時代にあった中華帝国が東南アジアの一部と直接的に接触し併合するという状態が1000年以上にわたって続くことになった。このような中華世界による東南アジア世界の併合・接触の結果、東南アジアの動向が漢籍により高い頻度と精度で記録されるようになった。扶南はその典型である。

扶南という国名が漢籍に初めて現れるのは、3世紀の中ごろに呉から扶南に派遣された康泰が残した記録の中である。同時代の記録は残されていないが、逸文が『水経注』『太平御覧』に引用されることで現在も読むことができる。なお、漢籍に記された扶南という国は、扶南という漢字名でのみ知られており、現地語での国名は、仮にあったとしても、不明である。クメール語の「プノム」（「山」を意味する）を扶南の原音とする説

があるが、あくまでも推測にとどまる。

考古学的には、扶南の王都と推測されるアンコール・ボレイ遺跡（カンボジア南部タケオ州）では紀元前4世紀から、また、扶南の外港と推測されるオケオ遺跡（ベトナム南部アンザン省）では紀元後1世紀から定住が開始されたとされている。オケオ遺跡からは、前漢鏡やローマ皇帝の貨幣が出土しており、さらに紀元後4世紀以降の遺構からは宗教施設やヒンドゥー神像・仏像が出土している。

その後、紀年は欠くが、文字の形態から5～6世紀頃と推測されるサンスクリット語の刻文が複数現れる。これらの中にジャヤヴァルマンとルドラヴァルマンという父と息子の関係にある二人の王の名を記載するものがある。これらの名前は、『梁書』に記された扶南の二人の王、すなわち、斉の永明年間（483年～493年）から朝貢を始め、天監13年（514年）に死去した扶南王闍邪跋摩と、その死を受けて即位した王の庶子留陀跋摩の名前と完全に一致する。こうして、初めて漢籍と現地の文字史料が一致したことで、5世紀末から6世紀初にかけてジャヤヴァルマン（闍邪跋摩）とルドラヴァルマン（留陀跋摩）が「インド化」した扶南の王であったことが確定できる。

メコン川流域下流部においてヒンドゥー教や仏教に関係する宗教遺跡が出土し、5～6世紀頃にサンスクリット語の刻文が出現し、インド的な王名をもった王が出現することは、世界史的にすでに「古典時代」にあったインドからの文化的影響があったことを示している。東南アジアは紀元前からインドとの交渉（人と物の交流は、インドに由来するガラス製ビーズや回転紋器の遺物）があったが、5世紀頃から急速にインド文化の影響が強まることになった。扶南の他にも、他地域に先駆けて4世紀末から始まったチャンパーのインド化（インドシナ半島東岸）、5世紀初頭のボルネオ島東部のムーラヴァルマン王、5世紀前半の西ジャワのプールナヴァルマン王のタールマーの事例を挙げることができる（ただし、チャンパーを除くと継続性がない）。

「インド化」がこの時期に進行したのは、サンスクリット語を媒介とする古典的なインド文化が、4世紀後半から最盛期を迎えたインド北部のグプタ朝において完成し、周辺地域に広がったことによる。なお、この過程でサンスクリット語を表記する南インド系のブラーフミー文字が東南アジアにも普及し、やがて現地語の表記に用いられるようになる。古典的なインド文化はインド南部やインド東部（ベンガル）に広がり、とくに南インドと交易ネットワークを築いていた東南アジアにも広がった。東南アジアで形成されていた初期国家の権力者は、威信と正統性を強めるために、インド文化を積極的に取り込んだ。このような動きは東南アジアの「インド化」(Indianization) (Coedès, 1968) と呼ばれ、また、ベンガル湾の両岸における文化の「収斂」(convergence) (Kulke, 2014)、あるいは、ベンガル湾をまたがる「サンスクリット・コスモポリス」(Sanskrit cosmopolis) (Pollock, 1996) の形成とも呼ばれる（青山, 2010）。

いずれにしても、東南アジア全体を見回したとき、ホン川流域を中心とする地域は紀元前から中国の「古典時代」の中に組み込まれる一方、その他の地域は5～6世紀において、同じく「古典時代」にあったインドの影響下にはいり、次第に、東南アジア史の「古代」に入ったとみることができよう。その始期はサブ・リージョンによって異なるが、東南アジアにおいても初期国家の継続的な発展が観察できる扶南においては、611年の古クメール語刻文の出現を画期とする、7世紀をあてることができよう。7世紀に入るとメコン川流域下流部の扶南が衰退し、かわってマラッカ海峡圏の交易ネットワークを支配するマラッカ島東岸のシュリーヴィジャヤが台頭し、682年に現地語の古マレー語による刻文を發布している。

以上をまとめると、およそ3世紀から6世紀までを東南アジア史における「原史」（プロト・ヒストリー）の時代とし、7世紀を東南アジア史における「古代」の上限に設定することになる。7世紀を上限とする東南アジアの「古代」は、インド化に先立つインドとの長い交渉と、土着の初期国家の形成という長い助走期間を経た結果として始まったということである。また、従来強調されていた「インド化」の現象はさることながら、むしろ「インド化」の結果として起きた現地語化の現象に「古代」の指標を置いておきたい。

4. 「古代」の下限

東南アジア史の「古代」の下限を検討するにあたっては、上限と同様、メコン川流域とジャワ島（プランタス川流域）に展開し、インド化の影響を受けた二つの典型的な政体を取り上げたい。一つはメコン川流域に展開したアンコールであり、もう一つはジャワ島西部のプランタス川流域に展開したマジャパヒトである。いずれの政体においてもヒンドゥー教と大乘仏教が信奉されており、後代の政体・国家に対して規範としての影響をもち、リーバーマン（Lieberman, 2011）の用語による「憲章国家」（charter state）に相当する。

アンコールに関する通史では、ジャヤヴァルマン 2 世が即位した 802 年から、アユタヤの攻撃により王都アンコールが放棄された 1431 年までをアンコール時代とよび、それ以前をプレ・アンコール時代、それ以後をポスト・アンコール時代とよぶ。従来、12 世紀末のジャヤヴァルマン 7 世の治世がアンコール時代の最盛期であり、13 世紀になるとアンコールは急速に衰えたと考えられていたが、13 世紀後半のジャヤヴァルマン 8 世の強権的な廃仏運動の痕跡から、アンコールの王権は 14 世紀までは勢力を保っていたと考えられている。元の周達観による『真臘風土記』に描かれた王都の繁栄とも整合性がある。14 世紀半ばを過ぎると、上座部仏教を信奉するアユタヤの数次におよぶ侵攻によってアンコールは衰退したと考えられる。

一方、ジャワ島のプランタス川下流域に王都をもったマジャパヒトは、13 世紀末の元寇の混乱のなか、シンガサリ王統の後継者として建国され、14 世紀後半のラージャサナガラ王の治世期に最盛期を迎えた。15 世紀初頭、鄭和の分遣隊が来訪した時期に、王都内で内戦が生じるが、この混乱を乗り越えて、15 世紀末までマジャパヒト王家の支配が続いた。しかし、イスラーム化することでマラッカ海峡圏の交易ネットワークを支配したムラカが台頭すると、競争力を失って、16 世紀前半に、ドゥマックを中心とするジャワ島北岸のイスラーム港市国家連合によって滅ぼされた。

アンコールとマジャパヒトの衰退と滅亡は、それぞれ 14 ～ 15 世紀と 15 ～ 16 世紀という約 1 世紀の时期的な差異はあるものの、いくつかの共通点をもっている。一つには、ヒンドゥー教と大乘仏教というインド化の特徴を示す政体の東南アジア史からの退場という点である。より詳しくみるならば、アンコール時代の末期からポスト・アンコール時代にかけて、トンレサップ北岸からメコン川水系への王都の移動、刻文から年代記への現地語文字史料の形態の変化、ヒンドゥー教・大乘仏教から新しい民衆宗教（上座部仏教）への信仰の変化という、大きな変化が見られる（北川, 1994）。一方、ジャワでは、東部ジャワ（プランタス川流域）から中部ジャワ内陸部への王都の移動、刻文から年代記への現地文字史料の変化、ヒンドゥー教・大乘仏教から新しい民衆宗教（イスラーム）への信仰の変化が見られる。ここには、「ヒンドゥー教と大乘仏教の信奉を中心とするインド的原理に基づく政体の没落と、民衆的な信仰に基づく「近世」的政体の台頭が交差するクリティカルな」遷移期であり（青山, 2022a）、この幅をもった時期を「古代」の下限としたい。この遷移期においては、刻文による記録が減少していく一方で、年代記による記録がまだ十分に確立していないという特徴があり、現地語による記録が極端に少なくなる時期でもある。まさに、古い時代が衰退し、新しい時代がようやく台頭しつつある、二つの時代相が交錯する遷移期ということになる。

この遷移期としての下限である 15 世紀は、先述の世界史の観点からは、「ポスト古典時代」の終わりであり、「近世」の始まりでもある 1450 年を含む時代である。1450 年とは、15 世紀の半ばという記号的な年代である。世界史的にはポルトガルによるインド航路の開発が進められた時代であり、コロンブスによる大西洋横断の「前夜」でもある（この結果、アメリカ大陸とアフロ・ユーラシア大陸が接続し、グローバル時代の幕開けとなった）。また、アフロ・ユーラシア大陸の西端ではブローデルの言う「長い 16 世紀」（1450 年頃から 1650 年ころまで）であり、アフロ・ユーラシア大陸の東南端では、リード（Reid）の言う東南アジアの「商業の時代」（1450 年から 1680 年まで）の始まりにもあたる。「商業の時代」の始まりはマラッカの勃興に対応し、終わりは、17 世紀中ごろは清朝（1644 年）、江戸幕府（1603 年）による海禁および鎖国、ヨーロッパの 30 年戦争（1618 ～ 1648 年）に代表される「17 世紀の危機」を背景にしたオランダの貿易独占による商業活動の萎縮期と一致する。

一言で言えば、15世紀後半は、世界史的にみてもグローバルな規模での商業の時代が始まる時代であった。この点からみても、東南アジアにおける経済活動の中心が、内陸的な性格をもつ帝国国家アンコールおよびマジャパヒトから、海域的な性格をもつ港市国家アユタヤとムラカに移動したことをもって、東南アジア史における「古代」という時代の終焉と「商業の時代」に代表される「近世」の始まりを15世紀（より正確には15世紀後半）に置くことは妥当とみなされるであろう。

5. 「古代」の下位区分

東南アジア史の「古代」の上限と下限について検討を終えたところで、「古代」という時代の下位区分についても、簡単ではあるが、見通しを検討しておきたい。「古代」の上限と下限の検討においては、東南アジアという地域単位の歴史を扱ったが、「古代」をさらに区分していくうえでは、東南アジアという地域の単位をさらに分けした「サブ・リージョン」ないしはその組み合わせを単位として考えていかなければならない。（このことは、世界史においても、地域に焦点をあてればあてほど時代区分に差異が生じることと呼応している）。

サブ・リージョンを対象とすることは、ホン川流域における中国世界との交渉に見られるように、あるサブ・リージョンが隣接している地域外の歴史世界との接続も考慮する必要があるということになる。これは「地域史」としての東南アジア史全般においても妥当することであるが、サブ・リージョンのレベルで考えるうえではより顕著となる。先述のインド化では南アジア世界との接続が重要であったが、政治経済的な領域では、中国世界との接続（唐の滅亡、唐宋変革、南宋の南海展開、元の侵攻、明の鄭和遠征など）が重要となる。

さらに、サブ・リージョンごとの歴史自体が、かならずしも東南アジア「地域史」の「古代」にきれいにおさまり切らない以上、サブ・リージョンごとの「古代」の下位の時代区分は、サブ・リージョンごとに足並みがそろわないことをまず前提として検討する必要があるだろう。これは、第2期の科研(②)が「長い12・13世紀」という厳密に区分しがたい時代を対象としたことにも反映している。以下では、主要なサブ・リージョンごとに画期となる「出来事」を示すことで、今後の検討の材料を提供するにとどめておきたい。

A) エーヤワディー川流域地区

ビルマ人の統一王朝の興亡が時代区分の標準となっている。これに従うならば、1044年に即位したアノーヤター王によるパガン朝の台頭と13世紀末のパガン朝の滅亡がそれぞれ画期となる。その後、分裂期を経て第二の統一王朝となるタウングー朝（1531年～1752年）は「古代」の範囲からは外れる。

B) チャオプラヤー川流域地区

一般的にタイ人（Tai）の勃興が時代区分の基準となっている。スコータイのラーマカムヘン王が1292年にタイ語の刻文を發布したことをもって画期とみなしたい。

C) メコン川流域地区

一般的にクメール人のアンコール朝の興亡が時代区分の標準となっている。これに従うなら、クメール語とサンスクリット語の刻文に記された802年のジャヤヴァルマン2世の即位儀礼をもって、プレ・アンコール時代とアンコール時代を分けることができる。

D) ホン川流域地区+インドシナ半島東岸地区

ホン川流域地区では、一般的に、1009年にリー・タイトー（李太祖）が中国世界から独立した最初のベト人の長期王朝を樹立したことをもって画期とする。その後のベト人の諸王朝は南進してインドシナ半島東岸地区のチャム人の政体を侵食していくため（1471年に黎朝が王都ヴィジャヤを占領）、ホン川流域地区とインドシナ半島東岸地区を一体的に捉えることは許されるであろう。

E) ジャワ島

一般的にジャワ人の諸王朝の興亡が時代区分の標準となっている。ジャワ島西部のタールマー国を別にする、ジャワ島中部ジャワにおける717年のサンジャヤ王の即位が一つの画期であるが、あるいはむしろこの

段階までを「古代」の始期としてみなし、ジャワ島東部のブランタス川流域地区における政体の出発点として 929 年のシンドック王の治世開始（～ 948 年）を画期に位置づけるのが適当かもしれない。

おわりに

本稿では、時代区分の指標、「世界史」との接続、対象地域のサブ・リージョンへの区分という 3 つの観点から、東南アジア史における「古代」という時代区分の輪郭の描写を試みた。

指標としては、現地語で書かれた刻文の出現から、現地語刻文による記録活動の終焉までを「古代」とした。これは記述レベルでの時代区分の指標にとどまるが、「現地語による自律的な自己参照の表出と、その手段と方法の出現および変化こそが、東南アジア史においては「古代」を規定する有力な要因」（青山，2022a）とすることは可能であろう。

南インド系のブラーフミー文字による現地語刻文の出現や、漢籍における扶南の記録は、世界史における「古典時代」と東南アジア史の「古代」の上限が密接に関連していることを示している。一方、15 世紀後半において帝國的性格をもつアンコールおよびマジャパヒトが衰退し、港市国家であるアユタヤおよびムラカが勃興したことは、世界史における「商業の時代」の始まりと東南アジア史における「古代」の下限が重なっていることを示している。いずれにしても、他地域との接触・交流・交易が地域に変化・発展をもたらすという視点は世界史の時代区分とも通底する考え方である。

また、上限におけるインド化した政体が出現するまでの「長い助走」の期間や、下限における「二つの時代相の上昇下降が交錯する遷移期」によく表わされているように、世界史と接続する「古代」の上限と下限の時代区分は、決定的な事件によって決まるのではなく、時間幅のある変化の時期と理解することが妥当であろう。ブローデルの三層論は歴史の過程を「事件」「局面」「構造（長期持続）」に分けているが、その用語を借りるならば、「古代」の上限と下限はいずれも「構造（長期持続）」に変化をもたらす「局面」（それ自体は一連の「事件」の組み合わせでもありえる）とみなすことができよう。

最後に、サブ・リージョンによる時代区分の差異について述べておかなければならない。上限については扶南の発展が突出していることが明らかであったが、他方、下限についてはマジャパヒトがインド的王国として他地域よりも 1 世紀も長く存続している。これだけ見ると、時代の変化は大陸部が先行し、島嶼部が後追いするかのようにも見えるが、より詳細に見ていくと、マジャパヒトでは他地域に先駆けて 14 世紀後半に現地語による年代記が作成され、ある意味では「近世」的な性格を先取りしているとみなすことも可能である。東南アジア史における「古代」という時代区分および各時代の特徴をさらに深く検討していくには、このようにサブ・リージョンごとの検討も進めて行かなければならない。そのためには、コトバの史料による絶対年代だけではなく、モノの史料による相対年代からの視点が不可欠となるであろう。

参考文献

- 青山亨 . (2010). 「ベンガル湾を渡った古典インド文明 — 東南アジアの視点から —」『南アジア研究』22: 261–276.
- . (2022a). 「東南アジア古代史の分野横断的アプローチ」『考古学ジャーナル』775: 41–45.
- . (2022b). 「東南アジア世界の形成と展開」弘末雅士編『岩波講座 世界歴史 4 南アジアと東南アジア～15世紀』岩波書店 . pp. 35–70.
- 北川香子 . (1994). 「ポスト・アンコール期カンボジアの諸タイトルについて」『東南アジア：歴史と文化』23, 43–60.
- 桜井由躬雄 . (2001). 「東南アジアの歴史 — 歴史圏の誕生」山本達郎編『岩波講座 東南アジア史 1 原史東南アジア世界』岩波書店 . pp. 1–25.
- Coedès, G. (1968). *The Indianized States of Southeast Asia*. Honolulu: East-West Center Press, The University of Hawaii.
- Higham, Charles. (1989). *The Archaeology of Mainland Southeast Asia: From 10,000 B.C. to the Fall of Angkor*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Kulke, Hermann. (2014). The Concept of Cultural Convergence Revisited: Reflections on India's Early Influence in Southeast Asia. In Upinder Singh & Parul Pandya Dhar (Eds.), *Asian Encounters: Networks of Cultural Interaction* (pp. 3–19). Delhi: Oxford University Press.
- Lieberman, Victor. (2011). Charter State Collapse in Southeast Asia, ca. 1250–1400, as a Problem in Regional and World History. *The American Historical Review*, 116(4), 937–963.
<https://doi.org/10.1086/ahr.116.4.937>
- Pollock, Sheldon. (1996). The Sanskrit Cosmopolis, 300 – 1300: Transculturation, Vernacularization, and the Question of Ideology. In Jan E. M. Houben (Ed.), *Ideology and Status of Sanskrit: Contribution to the History of the Sanskrit Language* (pp. 197–247). Leiden, New York and Koln: Brill.
- Reid, Anthony. (1990). An 'Age of commerce' in Southeast Asian History. *Modern Asian Studies*, 24(1), pp. 1–30.
- Stearns, Peter N. (2017). Periodization in World History: Challenges and Opportunities. In R. Charles Weller (Ed.), *21st-Century Narratives of World History: Global and Multidisciplinary Perspectives* (pp. 83–109). Cham: Palgrave Macmillan.
<https://doi.org/10.1007/978-3-319-62078-7>.
- Wolters, O. W. (1999). *History, Culture, and Region in Southeast Asian Perspectives* (Rev. ed.). Ithaca: Cornell University, Singapore: The Institute of Southeast Asian Studies.

1. はじめに

筆者は論文「7世紀のシュリーヴィジャヤとマラユ」（深見 1981）以来、古地名すなわち史料に記される地名のムラユの位置比定に関心をもってきた。本稿では『スジャラ・ムラユ Sejarah Melayu（ムラユの歴史）』においてムラユの位置はパレンバン、より限定的にはスグンタン Seguntang の丘あるいはその近傍であることを示したい。あわせて、この論述をとおしてこの文献が古地名ムラユを述べる最後の史料であることが自ずから明らかになるであろう。

2. 民族名称としてのムラユ

『スジャラ・ムラユ』は周知のようにムラカ Melaka（英語名マラッカ Malacca）王国の歴史を記したマレー語の書物であり、英語では Malay Annals と呼ばれる。このタイトルは通称であって原題はアラビア語で Sulalatus Salatin といい（註 1）、王の系譜の意味ということである。本書は実際にはムラカ王国の諸王の系譜と事跡、そして宮廷の出来事などを語るものである。

その中でムラユの語は単独で用いられることはほとんどなくて、ふつう次のような成句をなしている。adat Melayu ムラユの慣習、istiadat Melayu ムラユのしきたり、bahasa Melayu ムラユ語、lidah Melayu ムラユの発音、raja Melayu ムラユの王、adat raja Melayu ムラユの王の慣習、istiadat raja Melayu ムラユの王のしきたり、larangan raja Melayu ムラユの王の特権、anak Melayu ムラユの民、hamba Melayu ムラユの臣民、orang Melayu ムラユ人など。これらの訳語の適否については異見もあると思われるが、いま本稿にとって重要なことは、ムラユが王とその高官や臣民などムラカ王国の中心をなす人々の民族名とみなしうることである。すなわち『スジャラ・ムラユ』におけるムラユは現在に連なる民族名であって古地名ではないのである。しかしながら、王の伝説的な出自を示す部分に 1 度だけ古地名のムラユが記されている。次にこれを取りあげる。

3. ラッフルズ 18 号写本の第 3 章冒頭

『スジャラ・ムラユ』の写本は 30 ほどあり、そのなかでラッフルズ 18 号写本 Raffles MS 18 と呼ばれるものがもっとも古いとされる [Miksic 2007: 236]。この写本においてムラユはまずパレンバンにおける地名として現れる。すなわち次にあげる第 3 章の冒頭であり、シュラン Shulan（チョーラ Chola）の 3 人の王子が光り輝くこの丘に降臨する場面へと連なる。

Maka tersebutlah perkataan ada sebuah negeri di tanah Andalas, Palembang namanya. Demang Lebar Daun nama rajanya, asalnya daripada anak cucu Raja Syulan juga, Muara Tatang nama sungainya. Maka di hulu Muara Tatang itu ada sebuah sungai, Melayu namanya. Dalam sungai itu ada sebuah bukit, Si Guntang Mahameru namanya. (後略) [Cheah 1998: 83] (註 2)

語り伝えられるところでは、アンダラス（スマトラ）の地にパレンバンという国があった。その王はやはりシュランの王の子孫でドウマン・レバル・ダウンといった。そこにムアラ・タタン川があった。その上流はムラユ川といった。その中にシ・グンタン・マハメルという丘があった。

マラユの位置を確認しておこう。パレンバン市中心部からムシ川の北岸を西へ 4～5 キロのところに現在カ

ランアニヤル Karanganyar 史跡公園が整備されており、その敷地内の東部にムシ川に注ぐタタン川がある（地図参照）。タタン川の上流でスグンタン（史料ではシ・グンタン）の丘の東から流れてくる川を現在はクドウカン・ブキット Kedukan Bukit 川というが、上の引用に照らせば、このクドウカン・ブキット川がかつてムラユ川と呼ばれていたことがわかる。

スグンタン丘からムシ川まで現在もお小規模な舟運が可能であるという [Manguin 1987: 356-7]。その上流部において舟の発着する所に川の名前の由来となるムラユという地名があったかと想像される。それはおそらく、いわゆるシュリーヴィジャヤ碑文のひとつクドウカン・ブキット碑（西暦 682 年）の発見地であるクドウカン・ブキット村あるいはその近くであろう。というのも、この石碑は 1920 年クドウカン・ブキット村の住民の家にずっと以前から保管されていたものが見つかったのだという [Cœdès 1930: 33]。この村の名はもとはムラユだったかもしれない（註 3）。

その丘の名前シ・グンタン・マハメルについては次項で述べる。

4. シェラベア版の序文から

ラッフルズ 18 号写本の他にいわゆるシェラベア Shellabear 版もよく利用される。上の引用部分はシェラベア版では第 2 章の冒頭であるが、ほぼ同文なのでいまは省略する [Samad 1986: 19; Situmorang 1952: 22]。西暦換算 1612 年に記されたというシェラベア版にはラッフルズ 18 号写本には存在しない序文がついている。そのなかの作者自身について語る中に次の一節がある。

Melayu bangsanya, dari Bukit Siguntang Maha Miru [Samad 1986: 2; Situmorang 1952: 1]

（私は）須弥山たるスグンタン丘の出身のムラユの一族である

原文の *bangsa* を一族と訳してみた。すなわち本書の作者は自身をムラユ民族の出自であると自認しているのである。マハ・ミル（マハメル）の語源はサンスクリット語のマハーメール *Mahāmeru* である。これはインドの伝統的世界観において世界の中心に聳えるという高い山であり（日本では須弥山）、ここではスグンタン丘が世界の中心と位置づけられ（註 4）、ムラユ民族はそこを源郷とするという認識が明示されている。

ムラカ王家がパレンバン出身であることは多くの歴史書が述べているが、それは『スジャラ・ムラユ』によってより限定するならスグンタン丘なのであり、その民族名ムラユはスグンタン丘が位置する地名ムラユに由来すると考えられるのである。

5. おわりに

『スジャラ・ムラユ』における地名ムラユの位置は、パレンバンのスグンタン丘の東側、クドウカン・ブキット村またはその近くに比定できる。スグンタン丘をムラユ民族の出身地と見なす立場からはムラユの位置をスグンタン丘に求めることも可能であろう。

『スジャラ・ムラユ』においてムラユは、地名ムラユの 1 例を別にとすると、その地名ムラユに由来し、現在に連なる民族名である。したがって古地名ムラユの位置比定の問題においては、本書は扱うべき最後の史料ということになり、これ以前の諸史料（深見 1981: 166 および青山 2019 参照）が検討対象になる。

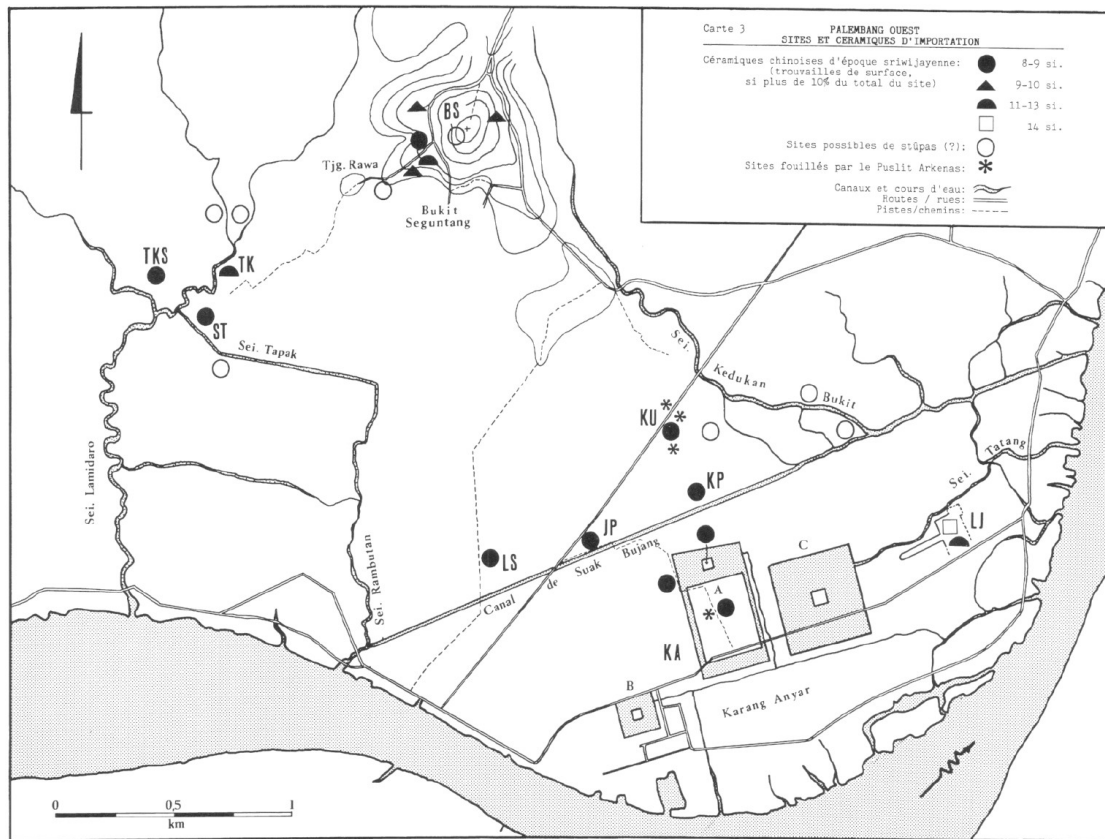


図1 地図 スグンタン丘とカラニアナル地区 (Manguin 1987: 401)

註

1. この書名のアラビア語のローマ字綴り（とそのカタカナ表記）は複数存在する。ここでは Samad 1986 による。
2. 英語では次のように訳される。
3. Here now is the story of a city called Palembang in the land of Andalas. It was ruled by Demang Lebar Daun, a descendant of Raja Shulan, and its river was the Muara Tatang. In the upper reaches of the Muara Tatang was a river called the Melayu, and on that river was a hill called Si-Guntang Mahameru. (後略) [Brown 1970: 13]
4. このムラユは7世紀の文献に見られるムラユと何らかの関係があるかもしれない。別稿において考えてみたい。
5. 現実のスグンタン丘はせいぜい標高30メートルほどで決して高くはない。しかしながら、カラニアナル史跡公園内に作られた望楼に登ると、全体が低平な中でスグンタン丘が視界の中で唯一の高地である。

参考文献

- 青山亨 2019 「ダルマ・シュラヤ試論：ジャワ王権から見た13世紀前後のムラユ」 青山亨編『東南アジア史の統合的編年プラットフォームの構築～「長い12・13世紀」を中心に～」東京外国語大学大学院総合国際学研究院（科学研究成果報告書）：17-36。
- 西村朝日太郎 1942 『馬來編年史研究』岩波書店
- 深見純生 1981 「7世紀のシュリーヴィジャヤとムラユ」『南方文化』8: 161-174。
- Brown, C. C. 1970: *Sĕjarah Mĕlayu or Malay Annals*, Oxford University Press, Kuala Lumpur.
- Cheah Boon Kheng 1998: *Sejarah Melayu, The Malay Annals, Ms. Raffles No. 18, Edidi Rumi Baru / New Romanised Edition*, MBRAS.
- Cœdès, G. 1930: “Les Inscriptions Malaises de Çrivijaya”, *BEFEO*: 30 (1-2): 29-80.
- Manguin, Pierre-Yves 1987: “Etudes Sumatranaises: I. Palembang et Sriwijaya: Anciennes Hypotheses, Recherches Nouvelles (Palembang-Ouest)”, *BEFEO* 76: 337-402.
- Miksic, John N. 2007: *The A to Z of Ancient Southeast Asia*, Scarecrow Press, Lanham / Toronto / Plymouth, UK.
- Samad Ahmad, A. 1986: *Sulalatus Salatin (Sejarah Melayu)*. Dewan Bahasa dan Pustaka, Kuala Lumpur.
- Situmorang, T. D. dan A. Teeuw 1952: *Sejarah Melayu: Menurut terbitan Abdullah*, Djambatan, Jakarta / Amsterdam.
- Winstedt, R. O. 1938: “The Malay Annals or Sejarah Melayu”, *JMBRAS*: 16-3: 1-226.

古代クメール刻文の終焉 ジャヤヴァルマン七世期とその後の刻文史料

上智大学 松浦 史明

はじめに

本稿では、東南アジア大陸部、現在のカンボジアを中心とした地域に存在したアンコール朝の現地史料であるクメール刻文のうち、同王朝の最盛期を築いたジャヤヴァルマン七世期（即位：1181 頃～1220 年頃）およびその後の時代に焦点をあて、当該時期に帰属する刻文史料の状況を述べるとともに、まとまった内容をもいくつかの刻文について紹介する。

本稿でとりあげるクメール刻文の性格について、筆者はかつて以下のようにその概要を述べたことがある。

インド由来の文字を用い、古クメール語やサンスクリット語で書かれたクメール刻文は、基本的に寺院の創建や改修、その他の宗教行事に付随して刻まれたものである。刻文の内容はおおよそ定型化されている。サンスクリット語で書かれた部分では、冒頭にヒンドゥー教・仏教などの神仏諸尊に対する賛辞があり、その時代の王に対するほめ言葉が続き（ただし王について言及しない刻文もある）、次いで当該の建立事業や寄進を行なった中心人物について、その来歴や業績を時に系譜をたどりながら説明し、どのような財物・土地・奉仕者が神仏に寄進されたかを列挙したうえで、これらの儀礼を毀損しようとする者への呪詛で結ばれる。古クメール語の部分では賛辞の部分がおおよそカットされ、主に「誰が、何に対して、何を寄進したか」について詳細に記載している。[松浦 2019a: 195]

クメール刻文は、貝葉や紙、皮革などに記載されたであろう文書が長い時の中で消失してしまったアンコール朝の歴史研究において、ほぼ唯一といえる現地の文字史料であり、アンコール朝の歴史叙述の中核であり続けてきた。そのため、これまでに多くの研究蓄積があるが、その研究史については他稿にゆずり [石澤 2003；松浦 2018]、ここでは詳述しない。

現在も新発見が続くクメール刻文の整理については、フランス極東学院 (EFEO) が「クメール」の頭文字「K」を付した整理番号で管理しており、刻文研究においてはこの K 番号が主に用いられている。EFEO のウェブサイトにも公開されている最新の刻文リスト (2021 年 11 月 9 日付) によれば、K.1 から K.1566 までの登録がなされている。ただし、刻文の点数については数え方が不統一で、一つの K 番号に複数の刻文が登録されている場合もあれば、一連の刻文と捉えても差し支えない刻文に別個の番号が振られている場合もある。これらは発見時、登録時の状況によるものと考えられる。いずれにしても、東南アジア全域と比較してクメール刻文がもっとも数量が豊富であることは間違いない。

クメール刻文の年代幅は、有紀年刻文で言うと、西暦 611 年のトゥオル・ワット・コムヌー（アンコール・ボレイ）刻文 (K.611) から西暦 1917 年のワット・クラン・ドン刻文 (K.771)、西暦 2003 年のプニエ・ルー刻文 (K.1390-1392) など近現代の刻文も含まれる。前述したとおり、本稿では 12 世紀末のジャヤヴァルマン七世即位以後の刻文史料を扱うが、対象範囲は主に 16 世紀頃までに限定する。

本稿の内容は、以下の 3 点である。

- ① アンコール朝の最盛期を築いたとされるジャヤヴァルマン七世期および同王の死後アンコール朝の解体までの時代（アンコール朝末期）における刻文史料の状況を概観する。
- ② この時期における言語の変化、すなわちクメール語学の分野で使用される「古代クメール語 ancient Khmer」と「中世クメール語 middle Khmer」の差異について概観する。
- ③ 上記を踏まえ、ジャヤヴァルマン七世以後、刻文史料が激減し、やがてアンコール朝は解体し、いわゆるポスト・アンコール時代へと遷移するが、刻文史料にこれらの社会変化がどのように反映されているのかについて検討する。

1. 刻文史料の概況

1-1. ジャヤヴァルマン七世期の刻文史料

アンコール朝の歴史で最も有名な王の一人であるジャヤヴァルマン七世は、西暦 1181 年もしくは 1182 年に即位したことが複数の刻文から知られる。死去した年代については研究者間で若干の相違はあるものの、1218 年から 1220 年の間に亡くなったとされる。これは、同王の名が確認される最後の有紀年刻文がシャカ暦 1139 年（西暦 1217/18 年）の日付をもつ金属器刻文 K.1234 であること、同王治世中に継続した隣国チャンパーとの係争が 1220 年に終息したらしいことがチャンパー刻文（C.4 チョディン刻文）にみられる「1220 年、クメール人は聖なる都〔アンコール〕に行き、チャンパーの人々は〔王都〕ヴィジャヤと南北〔の土地〕に戻った」との文言から知られることを根拠とする。

同王の治世中、アンコール朝は最大版図を獲得し、一時期東隣国のチャンパーに傀儡政権を置いて支配下においたほか、現在のラオス、ヴィエンチャン周辺やタイ西端部にも同王に帰属する遺跡や遺物が所在する。またいわゆる「王道」と呼ばれる幹線道路網の整備や施療院の配置、数々の寺院建立などを行ったことはよく知られている。ジャヤヴァルマン七世の事績については、下記の当該期の刻文史料の概要のほか、拙稿〔松浦 2019b〕を参照されたい。

EFE0 による刻文リストを確認したところ、ジャヤヴァルマン七世期に帰属する紀年のある刻文は 49 点である（刻文点数は整理番号ベース。以下同）。このうち、「施療院碑文」と呼ばれる、施療院（*ārogyasālā*）建立の縁起を記したほぼ同内容の碑文（紀年は西暦 1186 年）がおおよそ半数の 25 点を数える（註 1）。また、金属器や石製および青銅製の彫像に奉納者・奉納対象などの情報が 1 行～数行の分量で刻まれた刻文が 17 点ある（註 2）。四角柱の石碑状の形状をもち、寺院建立縁起など比較的豊富な内容をもつ有紀年刻文は、施療院碑文の他には、タ・プローム碑文（K.273/ 1186 年）、プラサート・リチ刻文（K.453/ 1206 年。ただし同碑文は損傷のためほとんど判読不能）、プラサート・トー碑文（K.692/ 1195 年）、プレア・カーン碑文（K.908/ 1192 年）の 4 点を数えるのみである。

紀年はないが、同王に帰属するものと考えられる刻文もある。同王の事績を記した刻文として有名なピミアナカス碑文（K.485）、プラサート・チュルン碑文（K.287, K.288, K.547, K.597）には紀年がない。また、ジャヤヴァルマン七世期に建てられたいわゆるバイヨン様式の寺院にみられる、各部屋の入口側柱等に奉納者や崇拜対象物を記した小刻文の類（60 点あまり）は、その大部分が同王治世下に帰属するものと考えられる〔Maxwell 2007c; 松浦 2014: 45-49〕。このような、紀年はないが、同王治世に帰属する可能性のある刻文史料を含めると、ジャヤヴァルマン七世期の刻文史料は少なくとも 100 点を上回ると思われ、精査は必要だが 150 点に届くかもしれない。なお、K.1005 までの刻文リストをまとめたジョルジュ・セデスは、留保付きのものを含め 63 点を同王治世下に帰属させている〔Cœdès 1937-1966, vol.8: 9〕。

1-2. アンコール朝末期の刻文史料

本稿では、ジャヤヴァルマン七世の死後からアンコール朝の解体までの時代を「アンコール朝末期」と捉える。アンコール朝の解体時期については多くの論争がある〔Jacques 1999〕。刻文中にアンコールの王名が現れるのは 1327 年（註 3）のバイヨン刻文（ジャヤヴァルマパラメーシュヴァラ王）が最後であり、洪武四（1371）年に中国明朝に朝貢した「真臘国巴山王忽児那」（『太祖実録』巻 69）はカンボジア南部を拠点としたとするのが通説であるから、14 世紀にかけて王権がアンコール地方から南部に遷移したと考えられよう。ただ、嚴從簡『殊域周咨録』（1583 年刊）を見ると、永楽元（1403）年に中国からの外交使節がアンコール地方に派遣されている可能性が高く、アンコール地方を含めた権力の多元的状況は 15 世紀に至るまで存続したかもしれない。また、近現代に編纂された『王朝年代記』では、15 世紀半ばにシャムの侵攻によりアンコール王都が陥落したとする版が存在するが、その信憑性を含めてさらなる議論が必要であろう〔北川 2023〕。

アンコール朝の解体時期をその定義を含め明確にすることは本稿にはできないが、刻文史料の検討という点では議論は比較的単純である。なぜなら、「史料上の暗黒時代」と呼ばれる、史料上の断絶期が存在するからである。

カンボジアの歴史には、実は大きな断絶がある。アンコール時代最後の碑文が作られた14世紀から、カンボジアを訪れたポルトガル人が記録を残すようになる16世紀までの二世紀の間については、同時代史料が全く残されていないので、この間に何が起こったのかが、全く分からないのである。この空白の二世紀の前後で、カンボジアの社会や国家の在り方は、全く違ってしまっている。[北川 2009: 256]

北川が述べるように、現地の刻文史料は、少なくとも有紀年刻文については15世紀に入ると姿を消し、16世紀の後半以降に再び現れる。同時に、この断絶期の前後で刻文の内容にも大きな変化がみられる。刻文リスト上で15世紀の年代をもつ唯一の刻文史料が、マレー半島北部のテナセリム地方（現在のミャンマー南部タニンダリ地方）で発見された金葉刻文（K.1121-1124/ 1462-1466年）であるが、この刻文はクメール語で書かれているものの、タイのアユタヤ朝に帰属するものとみなすべきであろう [Vickery 1973]。

以上のことから、アンコール朝の解体時期はさておいても、刻文の検討上は上記の断絶期以前、つまり14世紀までの刻文をアンコール朝末期の刻文として捉えることは、今のところ刻文解釈上は大きな齟齬をもたらさないものと考えられる。

さて、アンコール末期の刻文で紀年のある刻文は、プラサート・タ・アン刻文（K.241/ 1267年）、ワット・プラ・ケオ刻文（K.405/ 1317年）、スコタイ刻文（K.413/ 1361年）、バイヨン刻文（K.470/ 1327年）、487号祠堂（マンガラルタ）刻文（K.488/ 1295年もしくは1296年）、バンテアイ・スレイ刻文（K.569/ 1306年）、コーク・スヴァーイ・チェーク刻文（K.754/ 1308年）、ヴァン・チャンタラカセム刻文（K.988/ 1380年）、コーク・バラン刻文（K.1202/ 1221年）、MIHO MUSEUM所蔵青銅仏刻文（K.1204/ 1231年）、サンフランシスコアジア美術館所蔵金属器刻文（K.1217/ 1230年）、コンボン・トム州カ出土碗刻文（K.1374/ 1233年）、個人蔵碗刻文（K.1482/ 1233年）、個人蔵ガネーシャ彫像刻文（K.1483/ 1293年）の14点が挙げられる。ただし、スコタイ刻文 K.413はスコタイのリタイ王の即位と事績を述べるものであり、スコタイ朝に帰属するものである。このように、タイの刻文であってもクメール語で書かれたものは刻文リストに掲載される事例があり、内容は未検討であるが、ワット・プラ・ケオ刻文、ヴァン・チャンタラカセム刻文、コーク・バラン刻文も同様にスコタイ朝の刻文として分類されるべきかもしれない。なお、クメール文字であっても、タイ語で書かれたものは刻文リストには含まれていない。

2. 古代クメール刻文の終焉

クメール刻文の変化は、言語学の立場からも説明することができる。主にアンコール期以降の刻文史料を解読してきたサヴェロス・プーは、クメール語の発達に三段階があるとして、古クメール語（Old Khmer/ *Epoque ancienne*、5～13世紀）、中世クメール語（Middle Khmer/ *Epoque moyenne*、14～18世紀）、近代クメール語（Modern Khmer/ *Epoque moderne*、19世紀以降）の区分を提唱した [Pou 1989: 3]。その後プーは、古クメール語辞書の編纂にあたり、各言語の帰属年代を6～14世紀（古クメール語）、15～18世紀半ば（中世クメール語）、18世紀半ば以降（近代クメール語）と修正している [Pou 1992: II]。

ブレ・アンコール期クメール語、アンコール期クメール語（註4）、中世クメール語の辞書3冊を編纂したフィリップ・ジェンナーは以下のように述べる。

中世クメール語（Middle Khmer）は、古クメール語（Old Khmer）と現代の言語の間である。その最も顕著な特徴は、大幅な語彙の追加、ヴィラーマ記号の廃止、不安定な綴り字である。これら3つの特徴はすべて、アンコール期のバラモン教から上座部仏教への変化、それに伴いパーリ語がサンスクリットより優勢になったことの所産である [Jenner 2011: ix]。

さらに、異形（ヴァリエント）も顕著に増加しており、ジェンナーはアンコール期にはある程度標準化されていた正書法が、この時期に混乱をきたしていたとしており、「標準化の欠如（the absence of standardization）」について繰り返し指摘している。そのため、多くの単語において、10を超える異形が存在する。しかし同時にジェンナーは、これは「言語が急速に発達する過渡期」であるとも述べている [Jenner 2011: xi]。

いずれにしても、後段でも触れるように、14世紀までの刻文と16世紀後半以降の刻文は、その語彙や記述スタイルにおいて大きく異なっている。ただし、そこに何らかの急激な断絶を見出すことは困難であり、少なくとも現段階の史料状況においては、200年以上の長い時間をかけたゆるやかな変化の帰結として、古代クメール刻文は終焉を迎えたとみなすべきであろう。

3. 刻文解説

本節では、各時代の刻文のなかで、年紀が記載されているもので、比較的好くまとまった内容をもつもの、または当該期の刻文の特徴をよく示すものをいくつか取り上げ、解説を行う。本節では、前節までの議論を踏まえ、便宜上、①ジャヤヴァルマン7世期、②アンコール朝末期、③16世紀後半以降の3期に分けて述べる。なお、発見地等の基本情報については、原則としてフランス極東学院の刻文リストに拠った。

（略語一覧）

BEFEO : Bulletin de l'École française d'Extrême-Orient

BN : Bibliothèque Nationale de France

EFEO : École française d'Extrême-Orient

IC : George Coedès, Inscriptions du cambodge. 8vols. Hanoi-Paris: EFEO

NIC : Saveros Pou, Nouvelles inscriptions du cambodge. 4vols. Paris: EFEO & L'Harmattan

3-1. ジャヤヴァルマン7世期の刻文

3-1-1. タ・プローム碑文

①目録番号 : K.273

②年代 : シャカ暦 1108 年（西暦 1186 年）

③形態 :

— 古クメール文字

— サンスクリット語

— A: 72 行、B: 72 行、C: 72 行、D: 74 行

— 石碑

④所在 :

— 発見地 : タ・プローム寺院（カンボジア、シアムリアプ州）

— 現所在地 : プノンペン国立博物館

⑤図版 : EFEO: 149, 647 à 650 ; n. 551. BN: 138 (53) ; 643 (83)

⑥転写／翻訳：Coëdès 1906; Honda 1993; Kapur & Sahai 2007

⑦概要：

- 1-3 仏 (buddha)、法 (dharma)、僧 (saṃgha) に対する賛辞。
- 4 観音 (lokeśvara) に対する賛辞。
- 5 仏母 (jinajananī、プラジュニャーパーラミター) に対する賛辞。
- 6-12 母方の王統について。ジャヤヴァルマン7世の母であるジャヤラージャチューダーマニは、ブレ・アンコール期の王シュルタヴァルマン、シュレーシュタヴァルマン王に連なる「カンブの家系 (kambuvamśa)」に属するとする。
- 13-16 父方の王統について。ジャヤヴァルマン7世の父であるダラニーンドラヴァルマン2世は、「マヒーダラプラの血統の座 (mahīdharapurābhijānāspada)」にあったジャヤヴァルマン (6世) の姉妹の子であり、スーリヤヴァルマン2世の母の弟でもあるマヒーダラーディティヤと、ラージャパティーンドララクシュミーの子供であるとする。
- 17 ダラニーンドラヴァルマン二世に対する賛辞。仏教に深く帰依していたという。
- 18-27 ジャヤヴァルマン7世に対する賛辞。カールッティケーヤ、シヴァ、ヴィシュヌ、カーマなどの諸神と対比させつつ同王を称賛。「ハリ (ヴィシュヌ) が大洋を攪拌したように敵どもを打ち倒した」(第21偈)、「もし大洋と三界が王の名声と同じであるなら、ヴィシュヌは大洋から大地を引き上げることはできないだろう」(第24偈) など。また、王は「太陽家系の生まれ (amśumālivamśodbhava)」であるとする。
- 28-34 王の業績について。「チャンパーに行きその王を捕らえて釈放した。それを聞いた他の王たちはジャヤヴァルマン7世に頭を下げた」(第28偈)、「王の灌頂の際に、グル (師) に対しジャヤマンガラールタデーヴァという名前とラージャパティーンドラ村の土地を与え、彼の家族に、王の家族 (avanibhṛtkula) を名乗ることを認めた」(第30偈)。「王は、母に王宮の一部 (rājagrhaikabhāga) と傘を与えた」(第31偈)。「兄 (pūrvaja) (註5) に王国の一部と傘を与えた」(第32偈)。王は食料なども4つに分け、グル、母、兄〔と自身〕に分け与えた。
- 35-36 タ・プローム寺院の建立について。王は、シャカ暦1108年〔西暦1186年〕にラージャヴィハーラという名の寺院を作り、そこに母のジャヤラージャチューダーマニの姿をした仏母〔プラジュニャーパーラミター〕を確立した。
- 37 タ・プローム寺院に祀られた尊格について。王は、彼のグルの姿をしたシュリー・ジャヤマンガラールタデーヴァとシュリー・ジャヤキールティデーヴァを〔プラジュニャーパーラミターの〕左右に確立し、さらに262の尊格を確立した。
- 38-42 「毎日の崇拜のため」に寺院で用いられる物品のリスト。
- 43-44 尊像を荘厳するための布地などについて。「中国絹で作られた (cīnāmuśkamayā) 蚊のために広げられた布」など。
- 45 種々のソーマ祭 (sattra) を行う師と弟子のための米の配分について。
- 46-52 毎年行われる18の祭礼のための配分について。
- 53-61 各村 (grāma) から拠出された品々のリスト。
- 62-67 寺院に関わる人々について。12,640人が奉仕。66,625人が礼拝。これらの79,365人にはPukam (ビルマカ)、チャンパーなどの人々が含まれている。
- 68-80 寺院を飾るための品々 (金、銀、絹など) と寺院の規模について。
- 81-82 寺院に起居する人々について。1409人がともに住んでおり、439人の賢き者 (vipaścita)、法を保護する者 (dharmadhārin) は、毎日王宮 (rājamandira) で食べる〔出仕する〕。
- 83-89 チャイトラ月 (3-4月) の白分第8日より始まる春の祭礼 (vasantotsava) について。アーガマに従っ

て、2つの祭礼 (yāga) が行われる。第 14 日にはヴィーラシャクティなど諸尊とともに 3 回右饒する。傘などで飾られ、太鼓音や踊りをともなう。若者は布施 (dāna) や持戒 (śīla) など〔いわゆる六波羅蜜か〕を行う。3 人のグルと 1000 の神 (devatā) とさらに 619 の神 (deva) が崇拝される。1000 人の比丘などがこれに関わる。

90-102 王の倉庫から (koṣān mahībhrtaḥ) 祭礼の時に抛出される物品についてのリスト。

103-116 王の倉庫から毎年抛出される物品のリスト。

117 施療院 (ārogyasālā) について。それぞれの地方 (viṣaya) に、102 の施療院があり、798 の神 (sura) が置かれている。

118-140 施療院の諸尊とそこに住む者、患者のための支給品のリスト。838 の村から 81,640 人の男女がかかわっている。

141-144 未来のカンプジャの王たちに (anāgatakamvujendrān)、寺院の保護等を請願。

145 碑文作成者について。スーリヤクマーラという名の王子 (rājakumāra)、ジャヤヴァルマン〔7 世〕王の第一王妃より (agranyām devyām) 生まれた者が、この碑文 (praśasti) を記した。

⑧解説：

タ・プローム寺院は、アンコール遺跡公園内、アンコール・トムの東に所在する。砂岩を積み上げた建物に覆いかぶさるように樹木が繁茂する様子から、同遺跡公園内でも有名な観光地の一つとなっている。

この碑文は、同寺院の建立縁起等を記した創建碑文 (Foundation Stele) であり、ジャヤヴァルマン 7 世期の創建碑文としては最も早い日付をもつ (註 6)。上記の概要にみられるように、この寺院はジャヤヴァルマン 7 世が母のジャヤラージャチューダーマニをプラジュニャーパーラミターとして祀るために建立したとされ、同時に師 (グル) と兄を祀る尊像を脇侍とし、さらに 262 の尊格も祀られたという。

同碑文には、寺院に配置された建物や日々の運営に関する内容も記載されているが、次に掲げるプレア・カン碑文と比べ、寺院境内に関する言及に終始している印象を受ける。例外的に、第 117 偈では、施療院が全国各地の「ヴィシャヤ」(行政区画の類。各ヴィシャヤには「ヴィシャヤの長 (khloñ viṣaya)」が任命され、徴税等を行う) に配置されたことを記し、102 の施療院があったという。

ジャヤヴァルマン 7 世の即位のおよそ 5 年後に記されており、同王の統治初期の事績を知る上で重要な碑文である。

3-1-2. プレア・カン碑文 (K.908/ 1192 年) [Coedès 1942; Honda 1999; Maxwell 2007a]

①目録番号：K.908

②年代：シャカ暦 1113 年もしくは 1114 年 (西暦 1191 年もしくは 1192 年)

③形態：

- ―古クメール文字
- ―サンスクリット語
- ―A: 72 行、B: 72 行、C: 72 行、D: 72 行
- ―石碑

④所在：

- ―発見地：プレア・カン寺院 (カンボジア、シアムリアプ州)
- ―現所在地：アンコール保存事務所

⑤図版：EFEO: n. 1178. BN: 1136, 1137 (94)

⑥転写／翻訳：Coedès 1942; Honda 1999; Maxwell 2007a

⑦概要：

1-18 ※ タ・プローム碑文と同内容のため省略。

- 19-31 ジャヤヴァルマン7世に対する賛辞。ブラフマー神が完璧な徳を備えた至上の王(anavadyaguṇādhirāja)を願って生まれたのがジャヤヴァルマン7世である(第19偈)。王は古い言語を好んでおり、サンスクリット語に精通しており、若い時から「文法学者」パーニニのように有名であった(第21偈)など。
- 32-33 プレア・カン寺院(ジャヤシュリー)の建立について。王は戦いにおいて勝利(jayaśrī)を獲得し、敵の血のあるところ(dviṣad-rudhira-dhāman)、をこの[jayaśrīという]名前の町(purī)を作った。ジャヤシュリーには仏陀・シヴァ・ヴィシュヌの「3つの」沐浴場(tīrtha)があるという。
- 34 ジャヤヴァルマン「7世」王は、ジャヤヴァルメーシュヴァラという名の、父の姿(pitṛmūrti)のローケーシャ【観音】を、シャカ暦1113[or 1114]年「西暦1191年 or 1192年」(註7)に開眼した。
- 35-40 プレア・カン寺院における尊像に配置について。中央の観音(avalokiteśa)の周りに、283の神々(deva)を確立した(第35偈)など。
- 41-43 寺院の外に安置された神々について。14[の神々]を、千体リング(liṅga-sahasra)とともにラージャシュリーの小島(rājyaśrī-pulina)(註8)に確立したことなど。
- 44-53 ローケーシュヴァラを始めとした神々のために毎日捧げられるもののリスト。
- 54-60 毎年行われる18の祭礼のための品々のリスト。
- 61-77 毎年、各村から神々に捧げられる品々および人員のリスト。5324の村が王および村の所有者(grāmat)により奉納され、全体で97,840人「が奉仕する」(第73-74偈)。
- 78-94 毎年、王の倉庫(bhūḥṛt-koṣṭha)から取られるべき物品のリスト。
- 95-102 寺院を荘厳するのに用いられた金属や宝玉のリスト。253の金の祠堂(prāsāda)(第95偈)。
- 103-107 寺院内の石の建物の種類と数について。
- 108-111 寺院に起居する人々について。
- 112-121 王が行ったその他の業績について。王は全国各地の23の地域(deśa)において、ジャヤブッダマハーナータという名の尊像を確立した。
- 122-126 国内の幹線道と宿駅について。全体で121の宿駅を設置したという。
- 127 それぞれの地方(pratikṣetra)に、金(rai)・銀(rūpya)・真鍮(kaṁsa)・石(aśman)で作られた、ヤマやカーラを含む神々(deva)は、全体で20,400である。
- 128-140 「これら全国の」神々に対する礼拝のために毎年支給される品々のリスト。
- 141-144 これら全国の神々に奉仕する人びとについて。8,176の村(grāma)が、王と村の所有者によって寄進され、208,532人の男女が神の奉仕者(deva-bhujīṣyaka)となっているという。
- 145-152 「これら全国の」寺院を荘厳するのに用いられた金属や宝玉のリスト。祠堂(prāsāda)などを荘厳するための金などを列挙。
- 153-157 建てられたものの総計。尖塔のある祠堂(valabhiprāsāda)が514、石の家(śilā-veśma-khaṇḍa)が2066など。
- 158-166 パールグナ月(2-3月)の祭礼について。毎年、パールグナ月において、以下の神々は「ここで見られる(atrādhyeṣya)(註9)」とし、全国で祀られた諸神とともに礼拝するような儀礼が行われたとする。この祭礼に際して、王の蔵から(nṛpater nidheh)抛出される品々についてのリスト(第161-165偈)。スーリヤバッタなどのバラモンたち、ジャワの王(javendra)、ヤヴァナの王(yavaneśvara)、2人のチャム人の王(cāmpendra)がこの祭礼に参加したという。
- 167-170 貯水池ジャヤタターカについて。王は、石(upala)と黄金(kanaka)と花環(mālā)で彩られた鏡(ādarśa)であるジャヤタターカを作ったとし、その内側には小島(pulina)があり、罪を清めるという。
- 171-172 これらの善行は、すべての生き物のために行われたが、とりわけ父親のためであった。
- 173-178 将来にわたって、これらの善行が守護されるように請願。ここの306,372人の、チャム人、ヤヴァナ「大

越?〕の人々、プカーン〔ビルマ?〕の人々、ルヴァン〔モン?〕の人々を含む〔神々に奉仕する〕男女と 13,500 の村と、木や石やその他の素材で作られた、神々を崇拝するために用いられるあらゆるものが、全て保護されるように。

- 179 碑文作成者について。ジャヤヴァルマン〔7 世〕王陛下の第一の (agryā) 妻 (sati) であるラージェーンドラデーヴィーの長子であるヴィーラクマーラが、この碑文を書いた。

⑧解説：

プレア・カン寺院は、アンコール遺跡公園内、アンコール・トムの北側に位置し、東側には方形貯水池のジャヤタターカを擁する。ジャヤタターカの中央には、ニアック・ポアン遺跡が存在する。

前述のタ・プローム寺院と同じく、創建碑文の一種であり、西暦 1191 年もしくは 1192 年にプレア・カン寺院が創建されたことを記す。本尊は父の姿をした観音像であったようである。ジャヤヴァルマン 7 世は、タ・プローム寺院において母を、プレア・カン寺院において父を祀っており、両者は対の関係であるように見える。このことは、碑文の第 1 ～ 18 偈までがほとんど同内容であることから看取できよう。しかし、タ・プローム碑文と違い、プレア・カン碑文においては、王の版図全体を見渡したような記述が豊富に含まれる。すなわち、王国全土に安置された神々の総数や、それに奉仕する人びとを列挙し、各地方へのルート上に宿駅を設置したことを記すなどがそれにあたる。前述したように、タ・プローム碑文における同種の記述は、施療院の設置を記すのみである。これは、タ・プローム碑文の作成後、およそ 5 年間で達成された統治の成熟を示すものであろうか。しかし、であれば施療院の設置についてもプレア・カン碑文で繰り返されてもよいように感じる。想像をたくましくすれば、タ・プローム碑文には、施療院などの福祉的な側面を、プレア・カン碑文には領域統制的な側面を語らせる、といったような両寺院・碑文がもつメッセージ性の違いを見出すこともできるかもしれない。

いずれにしても、ジャヤヴァルマン 7 世治世下の領域の規模や統治に関する史料として、同碑文は極めて貴重な情報を我々に提供する。

なお、碑文作成者のヴィーラクマーラと、前述のタ・プローム碑文の作成者スーリヤクマーラは、ともに第一王妃ラージェーンドラデーヴィーの子と解され、ヴィーラクマーラが兄、スーリヤクマーラが弟であったことが分かる。

3-1-3. プラサート・トー碑文

行数 (言語) : A: 36 行、B: 36 行、C: 36 行、D: 32 行 (sk.)

①目録番号 : K.692

②年代 : シャカ暦 1117 年 (西暦 1195 年)

③形態 :

- 古クメール文字
- サンスクリット語
- A: 36 行、B: 36 行、C: 36 行、D: 32 行
- 石碑

④所在 :

- 発見地 : プラサート・トー寺院 (カンボジア、シアムリアプ州)
- 現所在地 : アンコール国立博物館

⑤図版 : EFEO: n. 853. BN: 882 (88)

⑥転写／翻訳 : IC1: 227-249; Honda 1994

⑦概要：

- 1-4 シヴァ・ヴィシュヌ・ブラフマー・ガンガーに対する賛辞。
- 5 ブーペンドラパンディタに対する賛辞。「尊者の頭の上にいる蜂の群れが蓮にお辞儀をするように、ブーペンドラパンディタの足に敬礼せよ。彼は輪廻の流れから世界を救済する（引き上げる）ためにグヒヤティーカー〔グヒヤ・スートラの注釈〕の道によってヤマの住居を空虚にした」。
- 6-41 ジャヤヴァルマン7世への賛辞と王の業績について。王が行った供儀の炎は、ゴーヴァルダナ山を支えるハリ（クリシュナ）の手ようであった（第22偈）など、王の資質や業績をヒンドゥーの諸神や聖仙などになぞらえて褒めたたえる。
- 42-44 王国が一時困難に見舞われた（チャンパーによる侵攻を想起）が、王が再び征服したことを称賛。
- 45 チャンパーに対して勝利した後、王はすぐさま力強い西の王（註10）を（*tejasvinam inam aparam*）降した（*adhahkr̥tya*）。
- 46 （ブーペンドラパンディタの）母バーギーシュヴァリー・バガヴァティーと、父のナマッシヴァーヤに対する賛辞。
- 47-49 ブーペンドラパンディタに対する賛辞および業績について。水がめで生まれし者（アガスティヤ仙）よりも優れているとする（第47偈）。ジャヤヴァルマン〔6世〕、ダラニンドラヴァルマン〔1世〕、スーリヤヴァルマン〔2世〕の三人の王のもとで、ブーペンドラパンディタ（*Bhūpendrasūri*）は判事（？）（*sabhyadarśin*）（註11）であった（第48偈）。彼はリングと自身の肖像を（*pratikṛtim svayam*）、ここブーペンドラデーシャにおいて、同じように確立した（第49偈）。
- 50 大ブーペンドラパンディタの息子であるスーリヤパンディタは議長（*sabhāpati*）（註12）であり、スーリヤヴァルマン〔2世〕の *sausnātika*（註13）であった（第50偈）。
- 51-59 ブーペンドラパンディタの家系について。このブーペンドラパンディタ議長は、王からラージェンドラパンディタという名を与えられ、そしてスーリヤパンディタという名を与えられた。なぜなら以前の師よりも優れていたからである（第51偈）。19歳で父より学識を獲得し、金の輿などを使用した（第53偈）。スーリヤパンディタは、母バガヴァティーと父ブーペンドラパンディタ、そして自身と妻の肖像を奉納した（第57偈）。スーリヤパンディタは両親への愛を通してシヴァ（*īśvara*）に対して宝石や金・銀・銅・鉄など、様々な奉獻を行った（第58偈）。
- 60 ブーペンドラパンディタの姉妹の息子で、大ブーペンドラパンディタの孫は、最善の議長（*agryas sabhāpati*）であり、クシャスタリーのブーペンドラパンディタという名で呼ばれた。
- 61 ジャヤディティヤプラの村において、ジャヤヴァルマン〔7世〕王の宮廷の長（*sabhyādhipa*）であるスーリヤスーリ（*sūryasūri*）が、シャカ暦1117年（西暦1195年）にこの碑文を書いた。

⑧解説：

プラサート・トー寺院は、アンコール遺跡公園内、プラダック村に属し、大貯水池の東バライ北東角の近傍に位置する。プラサート・トーの名称は近世以降に名づけられたものと思われる。トー（*Tor*, 𑀭𑀸𑀓）は「樋、雨樋」の意であるが、寺院近くを流れる水路を同じく「トー川」というから、これにちなんだ名称であろう。

ジャヤヴァルマン7世期の刻文のほとんどが王を主体として書かれているが、この碑文は王以外の高官によって書かれている点で注目に値する。この碑文は、ブーペンドラパンディタの名を世襲する家系によって書かれており、この家系はヒンドゥー教を信奉していたようであるが、議長（*sabhāpati*）や宮廷の長（*sabhyādhipa*）など、おそらく要職に就いていることが見て取れる。仏教を国家の中心に据えたことで知られるジャヤヴァルマン7世であるが、タ・プローム碑文、プレア・カン碑文にもヒンドゥー教的な要素は多くみられるし、各寺院にヒンドゥー教に由来する図像が多数刻まれていることから明らかなように、仏教とヒンドゥー教は融和的に取り入れられていた。その意味で、この碑文がヒンドゥー教的な要素を多く含むことについても驚くに値しない。他方で、この碑文のように、刻文作成者の家系の正統性を、数代前に遡りつつ記述する刻文は、10世

紀後半から 11 世紀にかけて盛行するが、ジャヤヴァルマン 7 世期にはほとんど見つかっておらず、まとまった内容をもつ（判読可能な）碑文は、現在のところこの碑文だけである。王以外の統治機構に関する情報が乏しい当該時期の史料のなかで、この碑文は重要な位置を占めると言えるだろう。

3-2. アンコール朝末期の刻文

本節では、ジャヤヴァルマン 7 世期より後の刻文史料を紹介する。なお最近、北川香子により当該期以降の刻文史料が検討されている。『王朝年代記』も活用しつつ、各碑文の要約と検討を行っており有益である〔北川 2023〕。

3-2-1. 487 号寺院（マンガラルタ）碑文

①目録番号：K.567

②年代：14 世紀前半（註 14）13 世紀第 4 四半期～14 世紀第 3 四半期

③形態：

- ー古クメール文字
- ーサンスクリット語
- ー A: 28 行、B: 28 行、C: 30 行、D: 32+2 行
- ー石碑

④所在：

- ー発見地：487 号寺院（マンガラルタ寺院、東トップ寺院とも。カンボジア、シアムリアプ州）
- ー現所在地：アンコール保存事務所

⑤図版：EFEO: 855 ; n. 418. BN: 815 (87)

⑥転写／翻訳：Finot 1925: 393-406; Finot 1926: 95-111

⑦概要：

- 1-8 ジャヤヴァルマン七世に対する賛辞。シュリーンドララージャブラにおいて敵どもを打ち払い、1181 年に王位に就いた。人民を我が子のように扱い、カリユガにドヴァーパラユガを現出させた。
- 9-13 ジャヤマハープラダーナというバラモンは、ナラパティデーシャ（ビルマカ）の Trikatantu 村（grāma）で生まれ、リシのバラドヴァージャの家系に属した。ヴェーダを学び、そして 1243 年、インドラヴァルマンの平和のためにビーマプラのシヴァに祈りを捧げに行った。
- 14-18 彼はラージェンドラ村出身のシュリープラバーと結婚した。彼女には 4 人の息子と 2 人の娘がいた。長男は ... バッタという名で、ヴェーダの学習が得意で尊敬されていた。三男はニシャーカラバッタという名で、雄弁で、全てのシャーストラを熟知していた。次女はジャヤヴァルマン八世の王妃となり、チャクラヴァルティラージャデーヴィーを名乗った。
- 19-21 別の正妻は義務をよくこなし、とても美しい 1 人の娘と才能にあふれた 5 人の息子を産んだ。シュリープラバーの妹は、王の教師（adhiyāpakādhipa）であるジャヤ・マンガラルタの息子をもうけた。この息子は・・・バドラという名であった。
- 22-26 シュリーンドラジャヤヴァルマンの治世下で王の教師となりジャヤ・マンガラルタを名乗り、名声も徳も父と同じであった。王はこのバラモンを好み、彼と彼の母の彫像を建てた。
- 27-35 1295 年、王〔ジャヤヴァルマン八世〕が二つの彫像を建てた。王はバラモンの彫像にジャヤ・トリヴィクラマ・マハーナータという名を与えた。女性バラモンの彫像はジャヤ・トリヴィクラマ・デーヴェーシュヴァリーという名である。王は二つの彫像に金銀と土地、奉仕者、さらに踊り子、楽人などを寄進した。この彫像の崇拝を確立するため、王はこのバラモンの家族の長が〔儀礼を担当するよう

に？] した。そして将来、男系〔の子孫〕が絶えた場合、女系が儀礼を行うこととした。

36 二つの彫像に寄進された土地の境界 (sīmā) は、王の命令により、大臣 (mantrin) のレーカケン
ドラによって建てられた。

37-40 寄進された土地の広さについて。

41 娘婿 (jāmātr) のシュリーンドラ〔シュリーンドラヴァルマン〕に〔王位が〕引き継がれる。

41-46 シュリーンドラヴァルマンの業績について。二つの彫像に対し奉仕者を寄進。

47-49 1307 年、王位をユヴァラージャに与えてから、王は天界に行った。〔新しい王は〕シュリーンドラジャ
ヤヴァルマンを名乗った。彼は三つの敵に勝利した。

50-57 ニシャーカラバッタへの賛辞。王〔シュリーンドラジャヤヴァルマン〕は彼にシュリーンドラシェー
カラの名を与えた。シュリーンドラシェーカラは寺院を金と銀で〔荘厳した〕。王は他者に対する善
行を保護し、シュリーンドラシェーカラの優れた業績を発展させるよう命じた。

58-61 同王による寄進。バラモンたちが住まいとなる建物を建設。これらの行為の保護について。

⑧解説：

487 号寺院は、マンガラルタ寺院、東トップ寺院とも呼ばれ、アンコール・トムの州城内、バイヨン寺
院の東北東に位置する。

ジャヤヴァルマン 7 世が 1220 年頃に死去して以降は、刻文史料の数量が少なくなる。そのなかでこの碑文は、
ジャヤヴァルマン 7 世から 4 代後の王シュリーンドラジャヤヴァルマン（在位 1307～1327 年）の時代に書か
れたものと思われ、ジャヤヴァルマン 7 世以後の王の系譜を明らかにする。また、冒頭にジャヤヴァルマン 7
世に対する賛辞を載せ、タ・プローム碑文にもその名が見られるジャヤ・マンガラルタの名前が世襲されて
いた点など、ジャヤヴァルマン 7 世の治世からの連続性を見て取ることができる点も、アンコール朝末期の様
相を考える上で有益な情報を我々に提供している。

3-2-2. バンテアイ・スレイ刻文

①目録番号：K.569-2

②年代：シャカ暦 1228 年シュラーヴァナ月黒分第 10 日木曜ムリガシラー（註 15）（西暦 1306 年 8 月 4 日）

③形態：

ー古クメール文字

ー古クメール語

ー 26 行

ー開口部側柱

④所在：

ー発見地：バンテアイ・スレイ寺院（カンボジア、シアムリアプ州）

ー現所在地：同上

⑤図版：EFEO: n. 420. BN: 817 (87)

⑥転写／翻訳：Finot 1926: 77-82; Pou 2001: 166-171

⑦概要：

1-9 シュリーンドラヴァルマン王は、ジャヤヴァルマン八世によってユヴァラージャ（皇太子）に任命
され、その後王となった。シュリーンドラブーペーシュヴァラチューダーは第一王妃であり第一王
女であった。即位式を行ったマドウレンドララージャパンディタは、〔バンテアイ・スレイを建立
した〕ヤジュニャヴァラーハの子孫で、ジャヤヴァルマン八世に仕えていた。

9-14 ジャヤヴァルマン七世の治世下、軍隊の長 (khloñ vala) のトリパーターカが、王の倉庫に銅を置き、
イーシュヴァラプラのトリブヴァネーシュヴァラ（バンテアイ・スレイ寺院の主神）に捧げる薪を購

入した。神に仕える集団 (varṇa) がそれを記録したが、銅について全て書き落とした。王はこの件について前例に従い考慮することを命じた。

14-19 議長 (sabhāpati) であるラージェンドラパンディタや審査官 (guṇadoṣa[darsin]) などがダルマシャーストラに従い法を定め、木を取り除き、[もとの薪の所有者である] Tak Cis の人々 (vraḥ vnvak) に配り、神に仕える集団は他の寺院に移ることを命じ、これを碑文に刻ませた。

19-24 シャカ暦 1228 年 (西暦 1306 年)、シュリーンドラヴァルマン王は、文書の保持者であるダラニーンドラパンディタとヤショーダラパンディタに、木を数え、Tak Cis の人々に配るよう命じた。王命に従い、4 人の役人 (bhūtāsa) が改めて記録した。

24-26 これは、シュリーンドラヴァルマン陛下とシュリーンドラブーペーシュヴァラチューダーの崇高な御業である。聖なるダルマシャーストラによって、人々と財貨を守るものである。

⑧解説：

バンテアイ・スレイ寺院は、アンコール・トムの北西約 20km に位置する。アンコール遺跡群の中でも著名な遺跡の一つであり、遺跡の概要については多言を要しないであろう。

この刻文は、1011 年 4 月 1 日の日付をもつ刻文 (K.569-1) の下段に書かれているが、内容に K.569-1 とのつながりはない。シュリーンドラヴァルマン王 (在位 1295 ~ 1307 年) の治世下、同王の死去の前年に書かれたものと思われ、マドゥレーンドラパンディタなる人物が同寺院の建立者ヤジュニャヴァラーハの係累であることを主張しつつ、同寺院にまつわる権利について王に訴え、それが認められたことを記録する。10 世紀に建立された同寺院の運営について、14 世紀初頭のこの時期においても建立者ヤジュニャヴァラーハからの血統が重視されていた点、ジャヤヴァルマン 7 世期に確執が生じたらしき点など、興味深い内容もつ。

3-2-3. コーク・スヴァーイ・チェーク (註 16) 碑文

①目録番号：K.754

②年代：シャカ暦 1230 年ブシュヤ月白分第 9 日日曜アシュヴィニー (西暦 1308 年 12 月 22 日)

③形態：

- ー古クメール文字
- ーパーリ語、古クメール語
- ー A: 20 行、B: 31 行
- ー石碑

④所在：

- ー発見地：コーク・スヴァーイ・チェーク寺院 (カンボジア、シアムリアプ州)
- ー現所在地：アンコール保存事務所

⑤図版：EFEO: n. 952. BN: 930 (89); 1036 (92)

⑥転写／翻訳：Coedès 1936

⑦概要：

パーリ語部分：

- 1 仏法僧に対する賛辞。
- 2 シュリーンドラヴァルマン (Sirindavamma) は 1296 年にヤショーダラプラで即位した。
- 3-10 1308 年、同王は大上座 (mahāthera) のシュリーンドラマウリー (Siri Sirindamoḷi) に、Sirindaratanagāma 村を与えた。この高僧がヴィハーラを建て、1309 年に仏像を造立し寄進を行った。王は 4 つの村をこのヴィハーラに寄進し、8 区画の土地 (稲田) を祭官 (yājaka) に与えた。

古クメール語部分：

- 1-31 パーリ語部分で述べられた僧院と仏像の造立について。仏像については、シュリー・シュリーンド

ラマハーデーヴァ(śrīśrīndramahādeva)と呼称されている。さらに、僧院に寄進された財貨と人を列挙。

⑧解説：

この碑文はアンコール王都近郊で確認される最も古いパーリ語碑文として知られる。パーリ語部分では、仏法僧への賛辞に始まり、当代の王について述べ、当該地でシュリーンドラマウリーなる高僧が寄進行為等を行ったことが述べられる。そして古クメール語部分では、同様の行為について、寄進された土地や人員のリストが書かれている。これらの記載内容は、サンスクリット語と古クメール語が併用される刻文に典型的な構成であり、いわばそれまでサンスクリット語で書かれていた内容が、そのままパーリ語に置き換わったような形で書かれている。また、各固有名詞について、古クメール語部分では、おおむねサンスクリット語の借用語が用いられている。例えば、シュリーンドラヴァルマン王の名前は、「sirindavamma (パーリ語部分) / śrīndravarman (古クメール語部分)」であり、僧シュリーンドラマウリーの名も「sirindamoḷi (パーリ語部分) / śrīndramaulī (古クメール語部分)」となっている。

ただし、シュリーンドラマウリーの肩書である大上座は、「mahāthera (パーリ語部分) / mahāsvāmi therā (古クメール語)」となっている。ジェンナーによれば、古クメール語におけるパーリ語「thera (上座)」の借用例は、この碑文のみである [Jenner 2009b: 223]。

いずれにしても同碑文は、カンボジア地域における上座部仏教の浸透を示す初期の例として、高い史料価値をもつと言えよう。

3-2-4. バイヨン刻文

①目録番号：K.470

②年代：シャカ暦 1249 年（西暦 1327 年）か

③形態：

- 古クメール文字
- 古クメール語
- 27 行
- 開口部側柱

④所在：

- 発見地：バイヨン寺院（カンボジア、シアムリアプ州）
- 現所在地：アンコール保存事務所

⑤図版：EFEO: n. 39 (3 or 4?); n. 181. BN: 758 (86)

⑥転写／翻訳：IC2: 187-189

⑦概要：

- 1-4 シヴァリングの建立と宝物の寄進について。
- 4-10 建立を行った師 (sthāpakācāryya) の工人・芸術家 (śilpi)、占星術師 (hora) などへの贈り物のリスト。金・鉄・錫・青銅製品、ヴィシュヌの円盤 (sahasrādhāra) など。
- 10-14 ジャヤヴァルマ・パラメーシュヴァラ (Jayavarmadeva Paramēśvara) の治世 1 年目 (註 17) に、シヴァプージャーの儀式を行なったバラモンに、チャム人の村 (sruk cāmpa) を贈ることを宣言した。王の記録所 (vrah kralā pāñjiy) がこの返還 (saṃnon) を記録した。
- 14-16 シャカ暦第 9 年 (navaśaka) の卯年 (thoḥnakṣatra) (註 18) アーシュヴィナ月 [9-10 月] に、ブーパティヴァルマンとサルヴァーディカーリサーラがこれを記録した。
- 16-22 チャム人の村に付随して贈られた財物のリスト。贈られた土地とその境界 (sīmāvadhi) は、チャム人の村に統合 (pansam) され、装飾された境界石 (goll racanā) が再設置された。
- 23-27 奉獻された奴隷 (dāsa) のリスト。〔寺院に〕飾るための花を集める者、シヴァに捧げられた穀物を

掃除する者をそれぞれ列挙。全体で 13 名。

⑧解説：

周知のごとく、アンコール・トムの中央に位置するバイヨン寺院は、ジャヤヴァルマン 7 世時代に中心寺院として建立された仏教寺院である。碑文は、同寺院の外回廊北東角から 25m 程の地点で見つかった。

⑦概要の注に記したように、この碑文の紀年をめぐる異論の余地は残されているものの、現在のところ、この刻文がアンコール期の王名を載せる最後の刻文である。付言すれば、アンコール王都周辺で曲がりなりにも紀年が確認できるアンコール期の刻文は、この刻文が最後である。同碑文以降の有紀年刻文としては、ほかにスコータイ碑文（K.413 / 1361 年）とヴァン・チャンタラカセム刻文（K.988 / 1380 年）があるが、前述したとおり、スコータイ碑文はリタイ王の事績を載せるなど明らかにスコータイ朝に帰属するものであり、ヴァン・チャンタラカセム刻文もほとんどが判読不能であるものの、タイのアユタヤ出土であることも踏まえるとアンコール朝に帰属するとは考えづらい。

同碑文以降、古代クメール刻文はやがて終焉を迎えることになる。

3-3.「史料上の暗黒時代」以後、16 世紀後半以降の刻文

本節では補足として、いわゆる「史料上の暗黒時代」を抜けた後の、16 世紀後半以降の刻文を若干紹介する。

3-3-1. プノン・バケン刻文

①目録番号：K.465

②年代：シャカ暦 1505 年（西暦 1583 年）

③形態：

- －中世クメール文字
- －中世クメール語
- －26 行
- －石材

④所在：

- －発見地：プノン・バケン寺院（カンボジア、シアムリアプ州）
- －現所在地：同上

⑤図版：EFEO: 154 ; n. 484. NIC1: pl. 3

⑥転写／翻訳：NIC1: 20-25

⑦概要：

- 1-4 ラージャムニ・パヴィトラ（Samtec brah Rājamuni Pabitr）が、プノン・バケン（bnam pākhaen）の頂上で石柱を建立した。古い仏像が損壊していたため、これを修復した。26 の彫像を朱と金で塗った。
- 4-9 ウドン（bnam rājadraby）に滞在していた時、彼は 50 の彫像を修復し、辰砂と金で塗った。さらに涅槃仏と布薩堂（brah bihar）も修復した。
- 9-10 ラージャムニ・パヴィトラが、カンボジア国内を旅して積んだ功德について。
- 13-17 チェイチェッター王への賛辞。国内を安定させ、長寿で、生涯にわたり敵どもを追い払い、子供たちが王の後も王国を統治できるようにした。

⑧解説：

プノン・バケン寺院は、アンコール・トムの南に位置する同名の小丘の上に立地する。10 世紀初頭にヤショーヴァルマン 1 世により創建されたと伝わるが、後世に何度か改築があったことが知られる。同遺跡からは、この刻文と同内容の刻文がもう 1 点見つかった（K.285）。

中世クメール刻文の時代になると、語彙や肩書、人名などにおいて、古代クメール刻文にはみられない要素が多数あらわれる。また、プノン・パケン (bnam pākhaen) のように、現代で通用される遺跡名に対応するものが現れ始めるのもこの時期以降のことである。

この碑文は、ラージャムニ・パヴィトラなる人物が仏像などの修復を行ったことを述べている。修復を行ったとされる涅槃仏や布薩堂などは、おそらく同寺院創建期にあったものではなく、後世に作られたものであろう。ということは、同碑文以前のいわゆる「史料上の暗黒時代」にあっても、人々は寺院に対して仏像の奉納などの行為を行っていたことが分かる。

また、後段において当時の王についても触れているものの、同王とこの人物の関係は不明である。古代クメール刻文においては、刻文作成者は王との関係の近さなど、自身の家系の正統性を述べるのが普通であるが、この時期の刻文では、刻文作成者の信仰心など、言うなれば個人的な事情に起因して刻文が書かれているように感じられる。言い換えれば、刻文を残すという習慣そのものが、前の時代とは大きく異なっている可能性を示唆している。

3-3-2. ワット・プレア・ニペアン刻文 (K75、1628CE / 990 cūlasakaraj)

① 目録番号：K.75

② 年代：小暦 990 年（西暦 1628 年）

③ 形態：

－中世クメール文字

－中世クメール語

－21 行

－リング

④ 所在：

－発見地：ワット・プレア・ニペアン寺院（カンボジア、コンボンスプー州）

－現所在地：プノンペン国立博物館

⑤ 図版：EFEO: 287 ; n. 934 ; n. 1218; n. 181. BN: 269 (31) ; 510 (80). NIC1: pl. 7

⑥ 転写／翻訳：NIC1: 33-35

⑦ 概要：

小暦 990 年（西暦 1628 年）、王の母 (varamātā paramapabitr) が、副王 (mahāopparaj) に、'nak Som に対し稲田を与えるようにさせた。彼の死後、王女 (rājaksātrīy) によりその稲田は 'nak samtec brah ボーディナーンに移された。オクニャー・ヴァンサーパラ... の稲田は王女の命令により 'nak サマラヴィリヤーに移され、ボーディナーン・インに [与えられた]。争議があり、mahāsaṅgharāj Samtec ボーディナーンが、'nak samtec brah Dā..... に伝えた。

⑧ 解説：

この刻文は、リング中段の八角柱を呈する部分の 7 面に 3 行ずつ、合計 21 行にわたって書かれている。年紀に小暦 (cūlasakaraj) が使用されているが、これは以前からミャンマーのバガン朝で採用され、その後 16 世紀にタウンゲー朝がアユタヤを一時支配した際にタイ地域に広まり、その影響を受けてカンボジア地域でも用いられるようになったものと思われるが、クメール刻文の用例としては稀である。

内容は、もともと王族がかかわった土地の権利をめぐる何らかの争議があり、それを裁定するような内容である。裁定を行ったのは mahāsaṅgharāj (大僧正) のボーディナーンであったようである。このような内容をもつ刻文が、なぜリングに刻まれたのかは不明であるが、当時の現地社会の動静を伝える希少な証言である。

おわりに

以上、アンコール朝の最盛期といわれるジャヤヴァルマン7世期から王朝末期、そして16世紀後半以降の近世にあたる刻文史料を概観してきた。

刻文史料は、石材や金属に文字を刻んで作られるという点では共通しているものの、各時代において書かれるべき内容や込められたメッセージは変化している。ヨーロッパの碑文研究等でみられる「碑文習慣(epigraphic habit / la pratique épigraphique)」の議論なども参照しつつ、刻文点数の増減を王権や社会の盛衰に直結させるのではなく、個々の刻文の史料的性格を精査しながら、これらの時代の変化を踏まえて考えていくべきである。そのためには、各刻文にみられる“研究上有益な”部分のみをつまみ食いするのではなく、刻文全体の構成や傾向を踏まえた上での検討が不可欠であろう。

註

1. K.12, 160, 209, 368, 375, 386, 387, 395, 402, 435, 537, 602, 614, 667, 912, 952, 955, 1170, 1402, 1519, 1520, 1521, 1522, 1523, 1524。
2. なお、金属器に刻文が書かれるのは、今のところ西暦1007/08年のK.1218が初出である。
3. この刻文の年代については異論の余地があるが、詳しくは後述する。
4. 本稿では詳述しないが、古クメール語と総称される、8世紀までのプレ・アンコール期と9世紀～14世紀のアンコール期のクメール語のあいだにも、綴り字等に違いがみられる。例えば人物や神々の肩書に、プレ・アンコール期には *poñ*、*vā*、*ku* が用いられ、アンコール期には *vāp*、*gho*、*tai* が用いられる、正書体や綴り字の違いとして、*k* 字が有気音化 (*kh*) する (*kñum*→*khñum*) ことなど。
5. *pūrvaja* は長子とも解せるが、次の第33偈で「この兄の主な妻たちに (*tasyāgrajasyāgravadhūṣu*)」も尊称 (*abhiḥhyā*) の授与などをしているので、ここでは兄 (ジャヤキールティ) でよからう。
6. タ・ブローム寺院に先行して、同寺院の南東に隣接するバンテアイ・クデイ寺院が建立されたとする説もあるが、刻文上にその根拠を見出すことはできない。
7. 当該箇所年数表記は、姿 (*rūpa*) [=1]、月 (*candra*) [=1]、月 (*indu*) [=1]、ヴェーダ (*veda*) [=3 or 4] である。4つのヴェーダのうち、最後に形成されたアタルヴァ・ヴェーダを含めるかどうかによって、「3」とも「4」とも解釈できる。
8. ラージャシュリーはニアック・ポアンのことと思われるが、同遺跡にある中央祠堂の観音像や神馬バーラーハではなく、「千体リングとともに」と表現されている。ちなみに1920年代のアンリ・マルシャルによる同遺跡の発掘調査では、北側の区画からリングが出土しており、このことを含めてボワスリエは、同遺跡にはヴィシュヌ、シヴァ、仏陀の三尊が祀られているとした [Boisselier 1970]。
9. 「*adhyeṣya*」は「*adhiṣṭi*」(認める、学ぶ、暗誦するなどの意)の未来分詞であり、マクスウェルが述べるように様々な意味に解釈されている [Maxwell 2007a: 95]。この箇所以下で述べられる諸神を、尊像を実際に目にするか、あるいは朗誦などを通して心の中に想起するかは判じたいが、何らかの儀式によって身近に感じるようにすることであると解しておきたい。
10. セデスは「おそらくビルマの王」とする [IC1: 246, n.7]。
11. セデスは「*inspecteur des magistrats*」とする。バッタチャリヤは「*sabhāpati*」(議長、裁判官)と同様であるとするが [Bhattacharya 1991: 25]、詳しい職責等は不明である。
12. 「*sabhāpati*」は、*sabhā* (会堂、宮廷、寺院)の主という意味であり、ある集団における高位の意思決定権者と思われる。時に「裁判官」と訳されることもあるが、その職責を限定するにはさらなる検討が必要である。ここではひとまず「議長」とする。
13. 「*saṁnātika*」は、王の沐浴に係る役職のようである。
14. EFEO によるリストでは、シャカ暦13世紀(西暦13世紀第4四半期～14世紀第3四半期)となっているが、後述するようにこの碑文はシュリーンドラジャヤヴァルマン王治世下で書かれた可能性が高いことから、14世紀前半と年代を限定することが可能である。
15. ムリガシラーは星宿 (*nakṣatra*) の一つ。
16. EFEO のリストでは出土遺跡が Kok Svay Chek であるが、BEFEO 第33巻の発見報告では、ジョルジュ・トルーヴェの踏査により発見された、同遺跡より3km北東に位置する Vat Kok Khpuos 出土とされている [BEFEO 33: 1134-1135, 1137]。EFEO と文化芸術省による遺跡データベースである CISARK においても、同碑文は Vat Kok Khpuos 出土として登録されており、混乱が見られる。碑文を訳出したセデスが Kok Svay Chek 出土であるとした理由は追跡できなかった。今は通例に従い、コーク・スヴァーイ・チェーク刻文と呼称しておく。
17. 「治世1年目」と訳した原文は「*saṅkat mvay ta rājya*」であり、「*saṅkat*」は「時期、部分」の意、「*mvay*」は「1」であるが、「治世中のある時」と解釈することも可能である。セデスは、ラオ語の *sunkat* が「年」を意味するとして、「治世の一年目」の解釈を採用している [Cœdès 1928: 145]。

18. ここでの年数表記は、十二支と10年紀が用いられているが、クメール刻文においては異例の表記である。セデスは、487号寺院（マンガラルタ）碑文（K.567）により前王シュリーンドラジャヤヴァルマンが1307年に即位したことが分かることを踏まえ、14世紀におけるシャカ暦年の末尾が9年で卯年にあたる年が西暦1327年と1387年であるとし、「1387年では遅すぎる」との理由で1327年にあたると考えた [Cœdès 1928; IC2: 187, n. 2]。

参考文献

- 石澤良昭. 1979. 「碑刻史料と歴史考察——カンボジア碑文・チャンパー碑文の事例から」『南方文化』6: 49-87.
- . 2003. 「カンボジア史の構築に見られる碑刻文史料：揺れ動く研究成果を再確認」大澤正昭編『歴史家の工房』上智大学出版会、145-167頁.
- . 2021. 『アンコール王朝興亡史』NHK出版.
- 北川香子. 2000. 「「水王」の系譜——スレイ・サントー王権史」『東南アジア研究』38-1、50-73頁
- . 2006. 『カンボジア史再考』連合出版
- . 2009. 『アンコール・ワットが眠る間に——カンボジア歴史の記憶を訪ねて』連合出版
- . 2023. 「アンコール時代とポスト・アンコール時代の間隙——碑文と年代記の隙間を見きわめる」『東洋学報』104-4、01-33頁。
- 松浦史明. 2014. 「アンコールの彫像にみる人と神——刻文史料の検討から」『佛教藝術』337: 36-55.
- . 2018. 「クメール刻文研究の新時代」『東方学』136.
- . 2019a. 「刻文史料から見たアンコール朝の仏教とその展開」肥塚隆編『アジア仏教美術論集 東南アジア』中央公論美術出版.
- . 2019b. 「仏教王ジャヤヴァルマン七世治下のアンコール朝」千葉敏之編『歴史の転換期4 1187年：巨大信仰圏の出現』山川出版社
- Ang Chouléan អាំង ជូលាន. 2013a. មូលដ្ឋានរឿងខ្មែរបុរាណ(Basics on Old Khmer Epigraphy). Phnom Penh: Yasothor. 282p.
- . 2013b. *Inscriptions of Angkor Wat: Ancient, Middle and Modern Periods*. Phnom Penh, Siem Reap: APSARA Authority, Center for Khmer Studies. 193p.
- Bhattacharya, Kamaleswar. 1991. *Recherches sur le vocabulaire des inscriptions sanskrites du Cambodge*. Paris: École Française d'Extrême-Orient.
- Billard, Roger & John C. Eade. 2006. Dates des inscriptions du pays khmer. *Bulletin de l'École Française d'Extrême-Orient*, 93, 395-428.
- Cœdès, George. 1906. "La stèle de Ta-Prohm." *Bulletin de l'École française d'Extrême-Orient*, 6, 44-86.
- . 1917. Documents sur la dynastie de Sukhodaya. *Bulletin de l'École Française d'Extrême-Orient*, 17, 1-47.
- . 1928. "Études cambodgiennes XXII: La date d'avènement de Jayavarmaparamesvara." *Bulletin de l'École Française d'Extrême-Orient*, 28, 145-146.
- . 1932. "Études cambodgiennes XXX: A la recherche du Yaçodharāśrama." *Bulletin de l'École Française d'Extrême-Orient*, 32, 84-112.
- . 1936. Etudes cambodgiennes XXXII: La plus ancienne inscription en Pāli du Cambodge. *Bulletin de l'École Française d'Extrême-Orient*, 36, 14-21.
- . 1937-1966. *Inscriptions du cambodge*. 8vols. Hanoi-Paris: EFEO.
- . 1951. "Études cambodgiennes XXXIX: L'épigraphie des monuments de Jayavarman VII." *Bulletin de l'École française d'Extrême-Orient*, 44-1, 97-120
- Finot, Louis. 1925. "Inscriptions d'Angkor." *Bulletin de l'École Française d'Extrême-Orient*, No. 25, 289-409.
- . 1926. "Troisième Partie: Les Inscription et l'Histoire." *Le temple d'Içvarapura: Bantây Srei*, Cambodge, Henri Parmentier et al., 69-133.
- Jacques, Claude. 1971. "Supplément au Tome VIII des inscriptions du Cambodge." *Bulletin de l'École Française d'Extrême-Orient*, 63, 177-194.
- . 1999. "Les derniers siècles d'Angkor." *Comptes-rendus des séances de l'Académie des Inscriptions et Belles-Lettres*, 143-1, 367-390.
- . 2003. "A propos de la découverte inespérée d'un objet inscrit au Cambodge: une dédicace du roi Jayavarman VII en 1217." *Comptes-rendus des séances de l'Académie des Inscriptions et Belles-Lettres* 147-1: 415-425.
- . 2007. The Historical Development of Khmer Culture from the Death of Suryavarman II to the 16th Century." Joyce Clark (ed.) *Bayon: New Perspectives*. Bangkok: River Books, 28-49.
- Jenner, Philip N. 2009a. *A Dictionary of Pre-Angkorian Khmer*, Canberra: Pacific Linguistics, Research School of Pacific and Asian Studies, The Australian National University.
- . 2009b. *A Dictionary of Angkorian Khmer*, Canberra: Pacific Linguistics, Research School of Pacific and Asian Studies, The Australian National University.
- . 2011. *A Dictionary of Middle Khmer*, Canberra: Pacific Linguistics, School of Culture, History and Language, College of Asia and the Pacific, The Australian National University.

- Lustig, Eileen. 2009. *Power and Pragmatism in the Political Economy of Angkor*. PhD Diss., University of Sydney.
- Majumdar, Ramesh Chandra. 1953. *Inscriptions of Kambuja*. Calcutta: The Asiatic Society.
- Matsuura, Fumiaki. 2017. "Recent Development in Khmer Epigraphy." *Asian Research Trends New Series*, 12, 85-106.
- Maxwell, Thomas S. 2007a. "The Stele Inscription of Preah Khan, Angkor: Text with Translation and Commentary." *Udaya, Journal of Khmer Studies* No. 8, 42-45.
- . 2007b. "Religion at the Time of Jayavarman VII." Joyce Clark (ed.) *Bayon: New Perspectives*. Bangkok: River Books, 72-121.
- . 2007c. "The Short Inscriptions of the Bayon and Contemporary Temples." Joyce Clark (ed.) *Bayon: New Perspectives*. Bangkok: River Books, 122-135.
- . 2009. "A New Khmer and Sanskrit Inscription at Banteay Chmar," *Udaya, Journal of Khmer Studies*, No. 10, 135-201.
- Pou, Saveros. 1989. *Nouvelles inscriptions du Cambodge I*. Paris: École Française d'Extrême-Orient.
- . 1992. *Dictionnaire Vieux Khmer-Français-Anglais*. 1ère édition. Paris: L'Harmattan.
- . 2001. *Nouvelles inscriptions du Cambodge II & III*. Paris: École Française d'Extrême-Orient.
- . 2004. *Dictionnaire Vieux Khmer-Français-Anglais*. 2e édition. Paris: L'Harmattan.
- . 2011. *Nouvelles inscriptions du Cambodge IV: avec la collaboration de Grégory Mikaelian*. Paris: L'Harmattan.
- Soutif Dominique. 2010. "Le pendentif inscrit du musée national du Cambodge: une «bague de Rāma» datant du règne de Jayavarman VII (K.1277)?" *Arts Asiatiques*, No. 65, 121-132.
- Vickery, Michael. 1973. "The Khmer inscriptions of Tenasserim: Reinterpretation." *The Journal of the Siam Society*, No. 61-1, 51-70.

14～15 世紀ミャンマーの重要刻文紹介

東京外国語大学 寺井 淳一

ミャンマー地域で現在までに発見された刻文の網羅的なリストは存在しない。唯一の刻文リストは、英領期に出版された *A List of Inscriptions found in Burma* [Duroiselle 1921] だが、当然のことながら、それ以降も多くの刻文が発見・確認されており、このリストだけでは不十分である。今回、14～15 世紀の刻文リストを作成するにあたり、まずは上記の 1921 年のリストに基づいて情報を入力し、Nyein Maung によって全 5 巻 (註 1) で刊行された刻文集 [Nyein Maung 1972-98] (以下 SMK) により不足を補うこととした。その後、その他の既刊の刻文資料を参照して完成を目指す予定であったが、筆者の力量不足により、SMK からの情報入力途中で時間切れとなってしまった。途中経過を報告すると、2023 年 8 月現在で、リストに加えた刻文数は 718 点 (註 2)、そのうちコンバウン朝のボードーパヤー王 (在位 1782-1819) 等により作成された複製が 322 点であった。これらの複製刻文は、マンダレー近郊のマハームニ寺院の境内に置かれ、いまでも見ることができる (註 3)。



図 1：マハームニ寺院境内の複製刻文 (2014 年 2 月筆者撮影)

今後の研究に資するため、本科研の研究課題と関わる範囲で、既刊の刻文関連資料を以下に列挙する。その際、1970 年代以前に刊行されたものについては、[大野 1979] で紹介されているので、これを参照しながら簡単な内容紹介も付しておく (註 4)。

Forchhammer. 1892. *Inscriptions of Pagan, Pinya and Ava*. Rangoon: Government Press. (in Burmese) 12 世紀から 19 世紀までの 800 年間の刻文 171 点を収録 [大野 1979: 2]。(以下 PPA)

Tun Nyein. 1899. *Inscriptions of Pagan, Pinya and Ava: translation with notes*. Rangoon. 上記刻文集の英訳。(以下 PPA-tn)

Archaeological Survey of India. 1897. *The Inscriptions copied from the stones collected by King Bodawpaya and placed near the Arakan Pagoda*. 2vols. Rangoon: Government Press. (in Burmese) 第 2 巻は目次 30 ページ、本文 457 ページ (pp.506-962) からなる [大野 1979: 2]。

Archaeological Survey of India. 1900-3. *Inscriptions collected from Upper Burma*. 2vols. Rangoon: Government Press. (in Burmese) 第 1 巻は目次を含め 537 ページ。刻文毎に、刻文名、オリジナルかコピーか、発見地、現在地、年代 (仏暦、緬暦)、施主名などが書かれる [大野 1979: 2]。地域に分けて、全部で 271 点を

- 収録。貝葉に記録された刻文や寺院内部の壁面に墨で書かれた墨文の内容も収録。(以下 UB)
- Archaeological Survey of India. 1913. *The Original Inscriptions Collected by King Bodawpaya in Upper Burma and now placed near the Patodawgyi Pagoda, Amarapura*. Rangoon: Government Press. (in Burmese) 緬暦 420 (西暦 1085) 年～緬暦 1243 (西暦 1881) 年の 485 点の刻文を年代順に整理 [大野 1979: 2-3]。このうち 1300 年以後の刻文は 234 点。135 点が紀年不詳。14 世紀が 159 点、15 世紀が 54 点、16 世紀が 12 点、17 世紀が 2 点、18 世紀が 4 点、19 世紀が 3 点。(以下 Amar)
- Duroiselle, Charles ed. 1921. *A List of Inscriptions found in Burma*. Rangoon. 緬暦 346 (西暦 984) 年～緬暦 1259 (西暦 1897) 年の刻文 1249 点および紀年不詳の刻文 208 点、計 1457 点の刻文の年代、発見地、現在地、言語、完形か断片か、要約、施主、オリジナルかコピーか、出典等の一覧。14 世紀が 388 点、15 世紀が 230 点、16 世紀が 56 点、17 世紀が 20 点、18 世紀が 58 点、19 世紀が 83 点。(以下 List)
- Pe Maung Tin and G. H. Luce. 1933-1956. *Inscriptions of Burma*. Portfolio I-V. Rangoon. 約 600 点の刻文や墨文の拓本写真を収録。一番年代が新しいものは緬暦 742 (西暦 1380) 年の墨文だが、刻文で一番新しいものは緬暦 726 (西暦 1364) 年のもの [大野 1979: 3] (以下 IB)
- Nyein Maung. 1972-98. *Shehaung Myanma Kyauksa-mya* [Old Burmese Inscriptions]. 5vols. Rangoon. (in Burmese) vol.1: 緬暦 600 (西暦 1238/9) 年以前のオリジナル刻文 187 点、複製刻文 38 点、計 225 点を収録 [大野 1979: 3]。(以下 SMK)
- Than Tun. 2005. *Hnaungtwe Kyauksa-mya* [Recently Found Inscriptions]. Yangon. (in Burmese) 西暦 1130 年～1552 年の刻文 40 点を収録。
- Department of History, University of Yangon ed. 1989. *Mandale Mahamuni Dadaing Atwin Shi Kyauksa-mya* [Inscriptions in Mandalay Mahamuni Pagoda]. vol.1. Yangon: Universities Press. (in Burmese) マハームニニ寺院境内の複製刻文の集成。
- Than Tun and team on behalf of the Myanmar Historical Commission. 2006. *Mandale Mahamuni Dadaing Atwin Shi Kyauksa-mya* [Inscriptions in Mandalay Mahamuni Pagoda]. vols.2-3. Yangon: Universities Press. (in Burmese) 上記の続巻。
- Oun Kyi ed. 2012-19. *Mandale Mahamuni Dadaing Atwin Shi Kyauksa-mya* [Inscriptions in Mandalay Mahamuni Pagoda]. vols.4-10. Yangon: Scientific Press. (in Burmese) 上記の続巻。
- Department of Archaeology, National Museum and Library ed. 2009-10. *Htupayon Kyauksa* [Htupayon Inscription]. 2vols. Yangon: Pyi U Pe Press. (in Burmese) ザガインにあるトゥーパーヨン・パゴダ近くに集められた刻文の集成。(以下 HK)
- Department of Archaeology, National Museum and Library ed. 2011. *Mandale Nan-dwin Kyauksa* [Mandalay Palace Inscription]. 2vols. Mandalay: Taw Win Nan Offset. (in Burmese) ボードーパヤー王によりアマラプーラのパトドーデー・パゴダに集められ、その後マンダレーの王宮内に移動、収蔵されている刻文の集成。第 1 巻は、緬暦 420 (西暦 1058) 年～緬暦 744 (西暦 1383) 年までの刻文 29 点を収録。第 2 巻は、緬暦 545 (西暦 1183) 年～緬暦 779 (西暦 1418) 年までの刻文 26 点を収録。(以下 MNK)
- Department of Archaeology, National Museum and Library ed. 2013. *Mandale Nan-dwin Kyauksa-yon 2 Shi Kyauksa-mya* [Inscriptions in Mandalay Palace Inscription Shed No.2]. Yangon: Swai Taw U Press. (in Burmese) マンダレー王宮内の刻文の第 2 収蔵庫にある 114 点を収録。紀年不詳で断片のものが多い。
- Department of Archaeology, National Museum and Library ed. 2015. *Zagaing Taing-detha-gyi Atwin Shi Athit-twe Kyauksa-mya* [Newly Found Inscriptions of Sagaing Region]. (in Burmese) ザガイン管区で発見された緬暦 670 (西暦 1308) 年～緬暦 1128 (西暦 1767) 年の刻文 22 点を収録。
- U Tha Htun and Kyaw Htun Aung eds. 2017. *Yakhaing Kyauksa Baunggyouk* [Collections of Rakhine Inscription]. Yangon: U Than Htun Press. ラカイン州で発見された刻文の集成。レーミョウ期 10 点、ミャウツウー期

70点、コンバウン期及び英領期14点、紀年不詳40点、計134点、緬暦209（西暦847）年～緬暦1268（西暦1907）年の刻文を収録。

重要刻文を紹介するにあたり、その選定基準を記しておく。一つ目は、先行研究で引用され、各論において重要な論拠として示されている刻文、二つ目は王の在位年代が分かる刻文、あるいはその根拠となっている刻文、三つ目は前回（12～13世紀の重要刻文解説）と同様に、寺院の創建年代が分かる刻文、これらの刻文を重要刻文として紹介する。14～15世紀のミャンマー史研究については、時間の制約もあり関係するすべての論考を見ることは叶わないので、以下のものを主要なものとして、重要刻文の選定に活用した。

伊東利勝. 2001. 「エーヤーワディ流域における南伝上座仏教政治体制の確立」『岩波講座 東南アジア史 2』岩波書店: 287-316.

Than Tun. 1959a. "History of Burma: A.D. 1300-1400." in *Journal of Burma Research Society*. vol.42. pt.2: 119-133.

Aung-Thwin, Michael. 1996. "The Myth of the 'Three Shan Brothers' and the Ava Period in Burmese History." in *The Journal of Asian Studies*. vol.55. no.4: 881-901.

Aung-Thwin, Michael. 2017. *Myanmar in the fifteenth century: a tale of two kingdoms*. University of Hawai'i Press.

今回紹介する重要刻文は、各論考で引用・参照されている部分に限らず、その前後や刻文の冒頭部分を含め、出来るだけ多くの訳文を提示するよう努めた。それは、資料として引用されるのはごく一部だが、刻文の性格を知るには、その前後や冒頭部分を見ることが重要と考えるからである。また、本来であれば、刻文の原文（ローマ字転写）も併記するべきであるが、時間の都合で今回は割愛させていただく。その代わり、研究者が気になるであろう、「国」や「民族」、建築や仏教に関する用語、固有名詞については、出来る限りその直後に（）で原文を挿入するようにした（註5）。なお、訳文中の【】は行数を示す。駆け足で訳文を作成したため、前後のつながりが悪い箇所が散見されるものと思う。提示する訳文は、試訳としてご寛容いただきたい。また、バガン遺跡に関する情報は、Pichard, Pierre. 1992-2001. *Inventory of Monuments at Pagan*. 8vols. UNESCO. を参照し、略号IMPを使用する。

1. ダインパトー（487号）寺院刻文

- ・所在地：マンダレー管区、バガン遺跡、ダインパトー（487号）寺院内部
- ・サイズ：幅53cm×高さ120cm
- ・行数：22行
- ・図版／テキスト／翻訳：List: no.394; IB: 282; PPA: 284; PPA-tn: 131-132; SIP: 131-2; SMK-III: 173.
- ・遺構情報：IMP-II: 310.
- ・内容

【1】緬暦651年セー（Cay）年ムルエーダー（Mlwaytā）月白分12日月曜日（1289年5月31日もしくは6月30日）に、【2】菩薩（phurhālōn）〔大王〕が灌頂を受け（apisip kham）〔即位式を行っ〕て、タンビイン（saṃpyaṇ）ゼーヤダデーダー（Ciyasatthiy-kṛī）を【3】賞賛し、お与えになった褒賞、カンティー（Khantī）地区にあるンガ【4】チャンピッ（Ñakraṃphlac）が管理する田んぼ150、このうちダインパトー（Turaṇ-puthūiw）に【5】寄進した田んぼ10、黄金寺院（rhhy-kū）に寄進した田んぼ10、アーマナー（Āmānā）の東において私が造った【6】僧院に寄進した田んぼ130、この寄進を支援する者は、私と【7】同様に〔利益を〕得させる。この寄進を害する者は、仏陀が【8】現れても、その者は〔説法が〕耳に聞こえなくさせる。阿鼻（Awacyi）を始めとする【9】五無間（Pañcā-ānantrit）に沈ませる。緬暦656【10】年パツ（Phat）年ピャドー（Plasuiw）月黒分11日水曜日（1295

年1月12日)に、陛下(purhā-rhañ)が宮殿を【11】お出でになり、お命じになったことには、チャントウ・カラー(Krañtū-kulā)700を始めとする【12】土地のうち、カンシー(Kanchī)の田んぼ100を、ゼーヤダデー(Jeyyasatthiy)が造った尖塔(prasat)のある【13】僧院に寄進させよとお命じになった。命令なさったのを聞いて【14】いたのは、タンビイン(samṇyañ)のアティンカヤー(Asaṅkhayā)1人、マハーボー(Mahābui)1人、デッ【15】カナー(Dakkhañā)1人、エッガパティ(Aggapātī)1人、サトウインガパティ(Caturaṅgapātī)1人、【16】ブンニャー(Puñā)1人、エインドラセイ(Indracit)1人、このような大臣【17】9人の前で、タンビイン(samṇyañ)ゼーヤダデー(Jeyyasatthiy)にお与えに【18】なった。後の世にこの善行を害する【19】者は、阿鼻(Awīci)を始めとする悪趣(Apai)地獄(naray)で苦しませ【20】る。この善行を支持する者は、【21】仏陀(purhā)が称える利益を私と同様に得させる。【22】奴隷はンガンギー(Naṇī)、ンガパデー(Napakrī)、ンガスイン(Nacañ)。

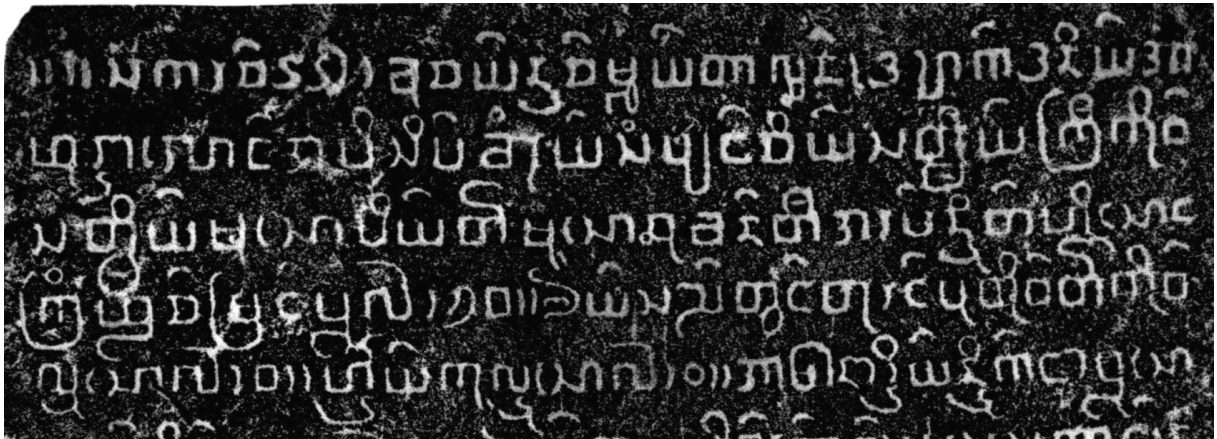


図2：ダインプトー（487号）寺院刻文1行目から5行目 [IBより転載]

元朝の軍勢により王都バガンが陥落した後に即位したチョースワの即位式が1289年に举行されたことがわかる刻文である。また、以前と同様に王の権威の下に高官の寄進が行われていたこともわかる。さらに、即位式(Abhiseka)の前は、王は菩薩(phurhālōñ)と呼ばれていたのに対し、1295年には仏陀(purhā-rhañ)と呼ばれていることも興味深い。

2. アティンカヤー (Athinkhaya) 煉瓦僧院刻文

- ・所在地：マンダレー管区、バガン遺跡、ウェッチーイン(Wetkyi-in)僧院の東、アティンカヤー(Athinkhaya)煉瓦僧院(未確認)
- ・サイズ(刻文部分)：高さ43cm×幅73cm
- ・行数：13行以上
- ・図版／テキスト／翻訳：List: no.387; IB: 276a; PPA: 64; PPA-tn: 30; SMK-III: 158.
- ・内容

【1】Namo tassa bhagavato arahato. 緬暦654年アータツ(Āsat)年ダバウン(Tapoñ)白分11日木曜日(西暦1293年2月16日)に、上流部(añā)【2】はンガサウン(Nāchoñ)まで、下流(akreñ)はタライン(Taluin)まで、東はタンルイン(Sanlwañ)、西はミッサギーリ(Maccha-gīri)、このように国(praṇ)【3】を統治している、シリトゥリパワナーディティヤパワラパンディタダンマラーチャー(Siri-tribhawanāditya-pawara-panḍita-dhammarājā)という、アリマッダナプラ(Arimaddana-pura)というバガン(Pukañ)大王の名代(kuiwtū)【4】である、比類なき将軍(cac-sūkrī)である、シリアティンカヤー(Siri-asaṅghayā)、ヤーザ(Rāja)、ティーハトウ(Sīhasū)という、モンゴル(Taruk)の軍勢を撃退できた【5】兄弟3名のうち、長兄であるシリアティンカヤー(Siri-asaṅghayā)という王が(後略)。



図3：アティンカヤー煉瓦僧院刻文1行目から5行目 [IBより転載]

ビルマ化したシャン系のアティンカヤー (Athinkhaya)、ヤーザティンジャン (Yazathingyan)、ティーハトゥー (Thihathu) の三兄弟が、バガン王に比肩し、モンゴル軍を退けるほど有力となっていたことを示す刻文として、よく引用される [伊東 2001: 289-291]。

3. ブッタガヤー刻文

- ・発見地：インド共和国、ビハール州、ガヤー県、ブッタガヤーのマハン (Mahant) 僧院 (現在は紛失し所在不明)
- ・行数：19 行
- ・図版／テキスト／翻訳：List: no.405; UB-I: 271; IB: 299; SMK-III: 192; Luce 1976: 40-42.
- ・内容

【1】仏陀の教法 218 過ぎた時 (紀元前 326-5 年) において、ジャンプディーパ (Camputip) 島を統治するシ【2】リダンマソーカ (Siridhammasoka) という大王の仏塔 (cetī) 8 万 4 千のうち【3】斎飯を召し上がった乳粥 (pāyāsa) のこの場所を、時が経ち壊れ【4】て修理した主ピンタグーデー (Paṇsakūkri) 1 人、その完成した 1 回が壊れ【5】たので、ダドー (Satuiw) 王が〔修復を〕行った。その完成した 1 回が壊れた【6】ので、白象主正法大王が自分の代わりに師シリダンマ【7】ラージャーグル (Siri-dhamma-rāja-kuru) を派遣した時に伴っていた【8】弟子のシリカッサパ (Siri-kassapa) が行おうとした財物があり、【9】行うことができなかったので、ヴァナヴァーシ (Vanavāsi) の主である長老 (thera) に斎飯を受けさせ、プ【10】タテイン (Putasin) 王が言った。「行わせよ」。若い主に、尊師である長老 (the) に【11】許可が得られたので、緬暦 657 年 10 月白分 10 日金曜 (西暦 1295 年 12 月 16 日) に〔修復を〕行った。【12】緬暦 660 年 8 月白分 8 日日曜日 (西暦 1298 年 10 月 13 日) に寄進させた【13】幟、幡を捧げた。斎飯 1000、灯明【14】1000 を何度も捧げた。息子や娘とみなした子供 2 人【15】、金花、銀花、杯、布を吊り下げた如意樹 (pataṇṣā) も捧げた【16】。全ての時において、斎飯の義務を絶えず果たすように【17】土地と奴隷と牛を買って寄進した。この私の行った【18】善行は、涅槃 (nippaṇ) の資材の支援としたい【19】。弥勒 (Myattaṇ) 仏の御世に阿羅漢果を得たい。

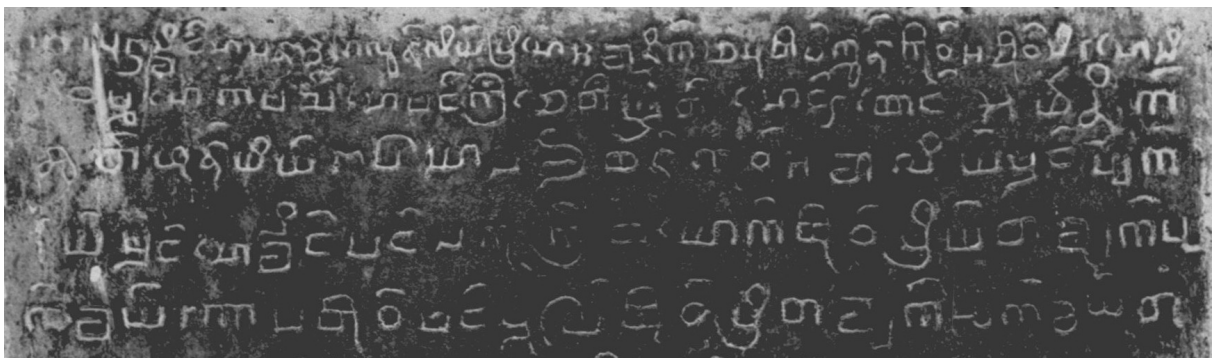


図4：ブッタガヤー刻文1行目から5行目 [IBより一部改変]

9 行目から 10 行目に登場する「プタテイン (Putasin) 王」に関して、ルースはブッタセーナ (Buddhasena) の転訛との解釈を示している [Luce 1976: fn. 40]。また、6 行目の「白象主正法大王」に関しては、刻文上ではシュ

エナンシン（Rhuy-nan-syan）と呼ばれ、年代記ではチョースワ（Kyawswa）の名で知られるバガン朝の王とされる [Luce 1976: 39]。さらに、それに遡る修復として5行目に「ダドー（Satuiw）王」の名が挙がるが、この人物はバガン朝のチャンスイッター王（Kyanzittha）と考えられている [ibid]。その理由は、同王が残したモン語の刻文に「シュリーヴァジュラーサナ（Śrī-bajrās）」の修復について言及があるからであり、妥当な見解だと思われる。

4. マハーボーディ寺院出土傘蓋刻文

- ・発見地：インド共和国、ビハール州、ガヤー県、マハーボーディ寺院の西
- ・行数：ビルマ文字1行、ナーガリー文字2行
- ・図版／テキスト／翻訳：Cunningham 1892: 75, pl.29; Luce 1976: 39.
- ・内容
緬暦 655 年（西暦 1293-4 年）シリダンマラージャークル（Siri-dhamma-rājā-kuru）...



図5：マハーボーディ寺院出土傘蓋 [Cunningham 1892: pl.29 より転載]

上記3の刻文と共通して「シリダンマラージャークル（Siri-dhamma-rājā-kuru）」が登場し、年代も近いので、この人物は「白象主正法大王」が派遣した僧侶と考えて間違いないだろう。ビルマ人がインドに巡礼し、寄進した物が残っている例として貴重である。ただ、現在どこに収蔵されているのかは未確認である。

5. サーティン（610号）寺院刻文

- ・発見地：マンダレー管区、バガン遺跡、サーティン（610号）寺院
- ・所在地：マンダレー管区、バガン遺跡、バガン考古学博物館 156号刻文
- ・サイズ：幅 41cm × 高さ 82cm × 厚さ 12cm
- ・行数：18行
- ・図版／テキスト／翻訳：List: no.408; IB: 290b; PPA: 107; PPA-tn: 55-56; SMK-III: 193-194.
- ・遺構情報：IMP-III: 89-91.

・内容

【1】緬暦661年マーカ（Mākha）年ナヨン（Naiyun）月白分8日【2】木曜日（1299年5月8日）、王宮をお出でになった菩薩（phurhālōn）シリ【3】トリバワナーディッティルヤーパワラダンマラージャー（Siritribhawanādittiyāpawara-dhammarājā）、ミンルリン（Mañlulañ）の【4】御前において乞い、タラポー（Sarapuiy）地域において、我々が造った【5】僧院（kloñ）である。永遠に教法が確立する【6】ために、田んぼ200を寄進なされたのは、永遠に確立するように【7】と乞うたので、寄進なされた土地は、チャントゥー（Kramtū）地域におけるクンムン【8】ドー（Kaṇmwantau）池の田んぼ100、サントラトゥー（Cantrasū）の息子、ンガトウエ（Nathuy）〔という〕戦士が造った100、土地の合計【9】200を寄進なされ、目録に載せなかった。その際、【10】言ったのが、タンビインの長（saṃpyaṇ-kṛī）アティンカヤー（Asaṅkhyā）、タンビイン（saṃpyaṇ）ヤーザー【11】ティンジャン（Rājāsankrañ）、タンビイン（saṃpyaṇ）ティンカトゥー（Sinkasū）、テッカナー（Takghanā）、サトゥインカピスィー（Caturāṅkapicañ）、エツカ【12】パター（Akkapatiy）、エインタピッサヤー（Intapaccarā）、ポンニヤー（Punñā）、トゥーパリッ（Sūpharac）、ピエツカトゥー（Phyakkasū）、マハータマ【13】ン（Mahāsaman）、このようなタンビイン（saṃpyaṇ）、カラン（kalan）全員が乞うてあげ、アナンタパター（Anantapatiy）【14】が働いて、僧侶（phuntau）に寄進し、清浄なる御水を垂らした。この善行【15】を支援する人は、ニャウンウー（Ñoñ-ū）を始めとするタイェーピサヤー（Sariyppicarā）までの【16】全ての土地の善行の利益を得させる。支援せず【17】破壊する人は、全ての土地の堆積のみならず、阿鼻（Awiciy）の中の地獄（naray）に【18】沈ませる。仏陀（bhurhā）が現れても拝ませない。

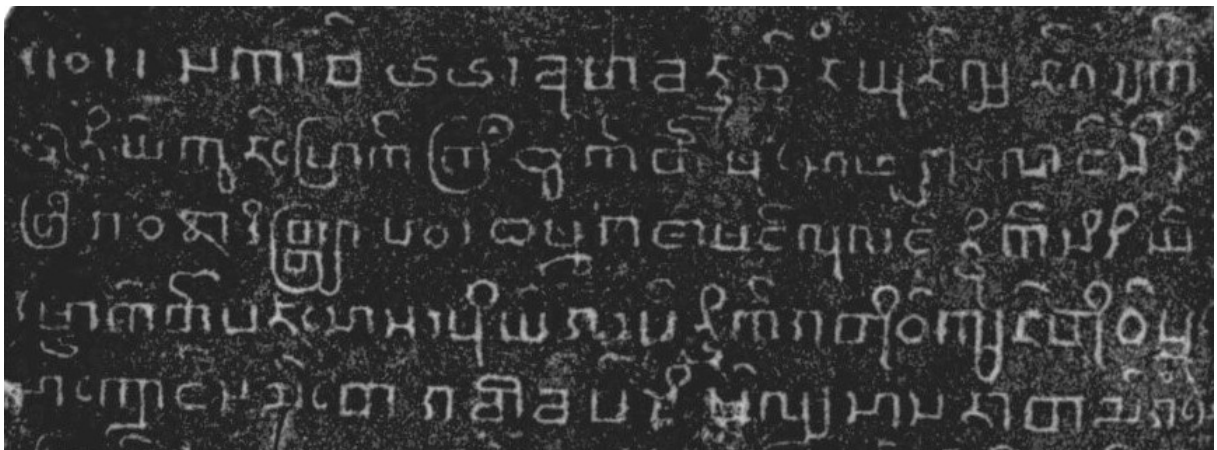


図6：サーティン（610号）寺院刻文1行目から5行目 [IBより転載]

年代記ではソーニツ（Saw-hnit）の名前で知られる王の即位年が分かる刻文とされている [Luce 1969-1970: vol.2, in pocket, Names, Titles, and Regnal Dates of the kings of Pagan]。ただ、刻文を見る限り、西暦1299年が即位年であるかどうかは明確ではない。

6. トードウイン（Tawdwin）村チャウゼーディー（Kyauk-zedi）刻文

・発見地：マンダレー管区、チャウセー（Kyaukse）郡、トードウイン（Tawdwin）村の南、チャウゼーディー（Kyauk-zedi）

・所在地：マンダレー管区、チャウセー（Kyaukse）郡、刻文収蔵庫6号刻文

・サイズ（刻文部分）：高さ61cm×幅49cm

・行数：22行

・図版／テキスト／翻訳：IB: 412a; SMK-III: 245.

・内容

【1】緬暦672年ポウッタ（Phussa）年カソン（Kachun）月満月（西暦1310年4月13日）正午【2】25パワー

(足の裏の長さ) 月曜日、アティンカヤー (Asaṅkhayā)、ヤーザー (Rājā)、ティンガトゥー (Siṅkasū)、王 3 【3】 名が困難なく王都 (prañ) と国土 (tuin) を揺るぎなく 【4】 統治していたところ、兄である貴いアティンカヤー (Asaṅkhayā) が亡くなり、【5】 ヤーザー (Rājā)、ティンガトゥー (Siṅkasū) がともに大いなる都 (prañ-kri) を統治していた。(後略)

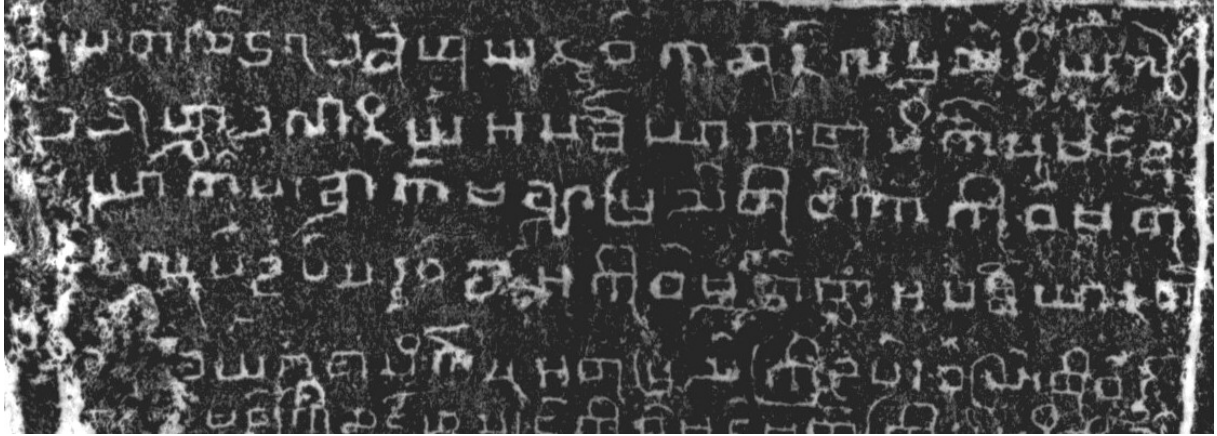


図7：トードウイン村チャウゼーディー刻文1行目から5行目 [IBより転載]

バガン朝末期に有力となった有名なシャン系の三兄弟、アティンカヤー (Athinkhaya)、ヤーザティンヂャン (Yazathingyan)、ティーハトゥー (Thihathu) のうち、長兄のアティンカヤーの死亡について伝える刻文である [Than Tun 1959a: 123]。

7. ティッサーワディー (918 号) 寺院 (Thitsa-wadi Temple) 刻文

- ・所在地：マンダレー管区、バガン遺跡、ティッサーワディー (918 号) 寺院の前室
- ・サイズ：幅 63cm × 高さ 140cm × 厚さ 20cm
- ・行数：表面 32 行、裏面 10 行
- ・図版／テキスト／翻訳：List: no.488; IB: 451-452; PPA: 311-312; PPA-tn: 143-144; SMK-III: 343-345.
- ・遺構情報：IMP-IV: 132-137.
- ・内容

【1】 緬暦 696 年ポウッタ (Pussa) 年タントウー (Santū) 月白分 3 日木曜 【2】 日 (西暦 1334 年 8 月 31 日) にアリマツダナプラ (Arimattanapūra) という王都 (prañ) を統治するスリトゥリ 【3】 ブワナーディティヤパワラダンマラージャー (Sritribhuwanādittiyapawaradhammarāja) という正法大王の祖母ソー (Caw) が造った 【4】 御寺院 (kū-tau) に寄進した奴隷は、ペーサウ (Payca-u) 1 名、夫ンガビィ (Nāplañ) 【5】 1 名 (後略)

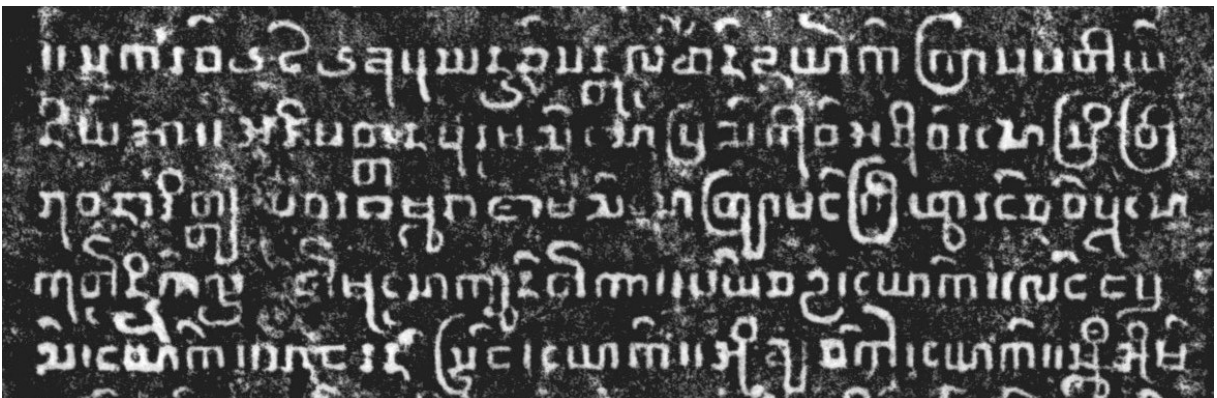


図8：ティッサーワディー (918 号) 寺院刻文表面1行目から5行目 [IBより転載]

この寺院は東正面、2階建てであり、各階中央の煉瓦柱を背に東西南北各方位を向いた仏陀坐像が本尊として安置されている。堂内にあまり多くの壁画は残されていないが、前室の天井や入り口上部のアーチ部分に幾つか壁画が確認できる。バガン朝崩壊後、14世紀～15世紀はあまり大規模な寺院は建立されていないが、その中でもシンビューシン（697号）寺院と並んで、最大規模の寺院である。

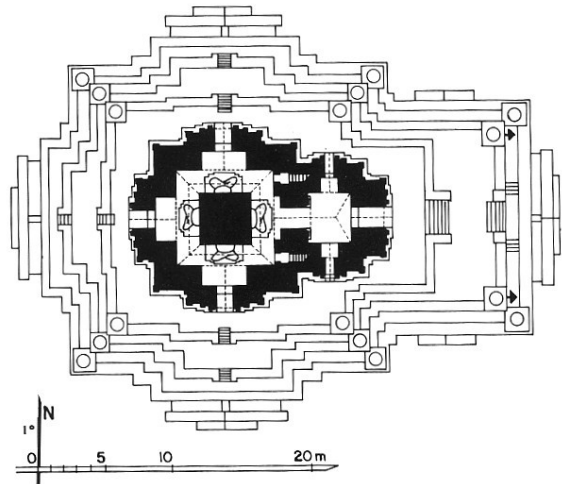
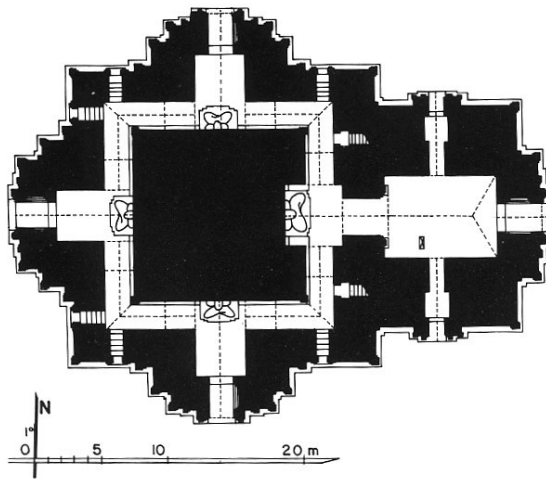


図9：ティッサーワディー（918号）寺院1階平面図（左）、図10：2階平面図（右）[IMPより転載]



図11：ティッサーワディー（918号）寺院外観（左）、図12：内部1階前室より東本尊（中央）、図13：2階外観（右）[2004年8月筆者撮影]



図14：ティッサーワディー（918号）寺院の前室南天井の千仏画（左）、図15：主室回廊外壁（右）[2004年8月筆者撮影]

8. スインビューシン (Hsinbyushin) 寺院 (697 号) B 刻文

- ・所在地：マンダレー管区、バガン遺跡、スインビューシン (697 号) 寺院内部
- ・サイズ：幅 65cm × 高さ 116cm × 厚さ 11cm
- ・行数：表面 22 行、裏面 24 行
- ・図版／テキスト／翻訳：IB: 503-504.
- ・遺構情報：IMP-III: 218-221.
- ・内容

【1】南無一切仏。白象主の師 (chriyā) 7 代が過ぎ、緬暦 692 年 (西暦 1330-1 年) 【2】御僧院に居るセータディサープラモッカ (Setṭhadisāprāmokkha) という大長老 (mahāthe) サンガラージャ (saṅgharājā) が、一切智 (sabbaññutaṇa) 【3】の褒賞を欲するので、緬暦 703 年ナドー月白分 10 日土曜日 (西暦 1342 年 11 月 7 日)、【4】レンガ大僧院を造った。563½、銀塊 (?) が 1084 かかった。描いた壁画の 【5】工賃と絵具代の財物の合計が 514、描いた金が 229、銀塊 (?) が 185、喜捨した寄進 【6】が 683、合計で銀が 2760½ かかった。銀塊 (?) の合計が 1269 かかった。緬暦 【7】713 年セイター (Jīṭṭhā) 年 (西暦 1351-2 年) に、大臣ポンニャ (Puñṇā) がクカン (Kukhan) を得て、白象主の師、大長老 (mahāthe) であるサンガラージャ (saṅgharājā) がクカン (Kukhan) 【8】に来て、托鉢をしたダボードウエの満月の日に、グーニー (Kūnī) 僧院において提灯 (mīphun) を施与し、私が造った僧院 【9】は、敬意をもって行った。物品は貴い大臣が先に物品を寄進し、教法 5000 【10】年間、私の寄進が確立するように、托鉢に来て、大臣ポンニャ (Puñṇā) を始めとするチャプ (Krapu) の全て、【11】キンオン (Khañ-un) 水路の端における天水田 80 を寄進した。このように大臣ポンニャ (Puñṇā) が寄進した、白象主の 【12】師、大長老 (mahāthe) であるサンガラージャ (saṅgharājā)、セータディサープラムッカ (Setṭhadisāprāmukkha) がザガイン (Catkuin) に来て、大王ティーハパティ (Sīhapati) 【13】のところに托鉢に来たので、緬暦 714 年アータツ (Āsat) 年ダボードウエ黒分 11 日木曜日 (西暦 1353 年 1 月 30 日) に、【14】ザガイン (Satkuin) の西、仏塔 (ceti) に内蔵しようとレンガを組んだ場所において、チッローピーンゲー (Khyacluiwplañnai) という 【15】名前の象の上で、この土地に一滴清浄なる水を垂らして寄進をなさった。【16】居たのは、弟のタヤービャ (Tryāphyā)、弟のミンイェ (Mañray)、大臣ブンニャ (Puñṇā)、大臣ナカタマン (Nakasman)、アティンカヤ (Asaṅkhayā)、ヤーザティンヂャン (Rāja 【17】 saṅkrañ)、ダガウンレッヤ (Takoñlak-yā) の領主 (prañcuiwsa) ピンガトウ (Phaṅkasū)、タイエスィートウ (Sare-cañsū) 王の孫のチャウ (Khrok) 首長 (sūkri) 【18】アマツヤ (Amatryā) を始めとする全ての兵士が居た。緬暦 715 年アー 【19】タツ (Āsat) 年ダバウン (Tapon) 月白分 3 日木曜日 (1354 年 1 月 25 日) に、クカン (Kukhan = 現在のパカンヂー) にサンガラージャ (saṅgharājā) を始めとする全ての主 (skhiñ) たちが来 【20】て、土地と (後略)

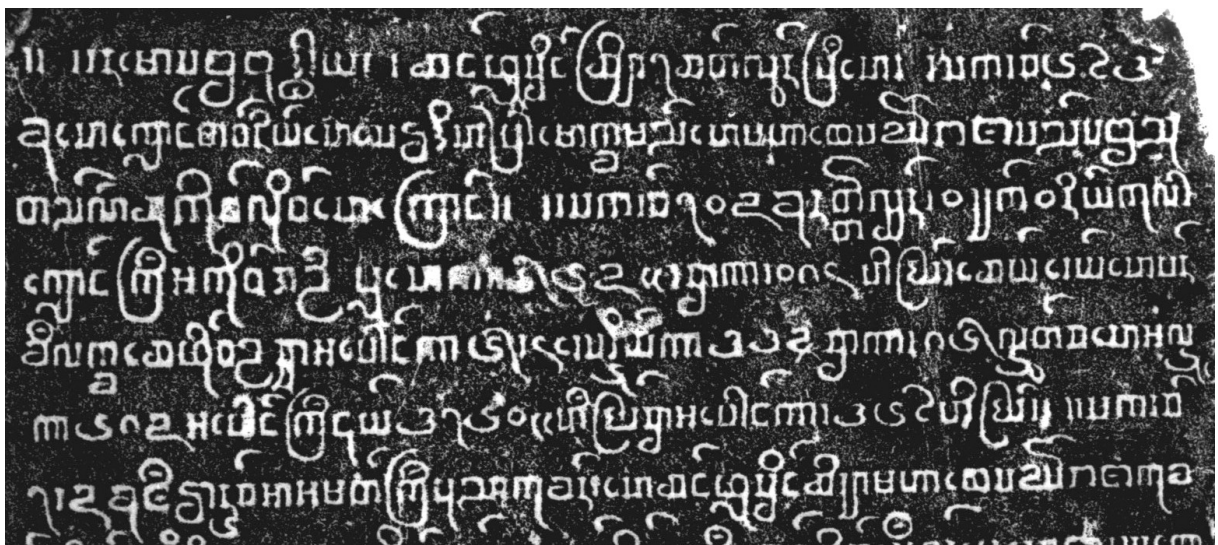


図 16：スインビューシン (697 号) 寺院 B 刻文表面 1 行目から 7 行目 [IB より転載]



図17：スィンビューシン（697号）寺院内部の刻文（左側が刻文B）[2014年2月筆者撮影]

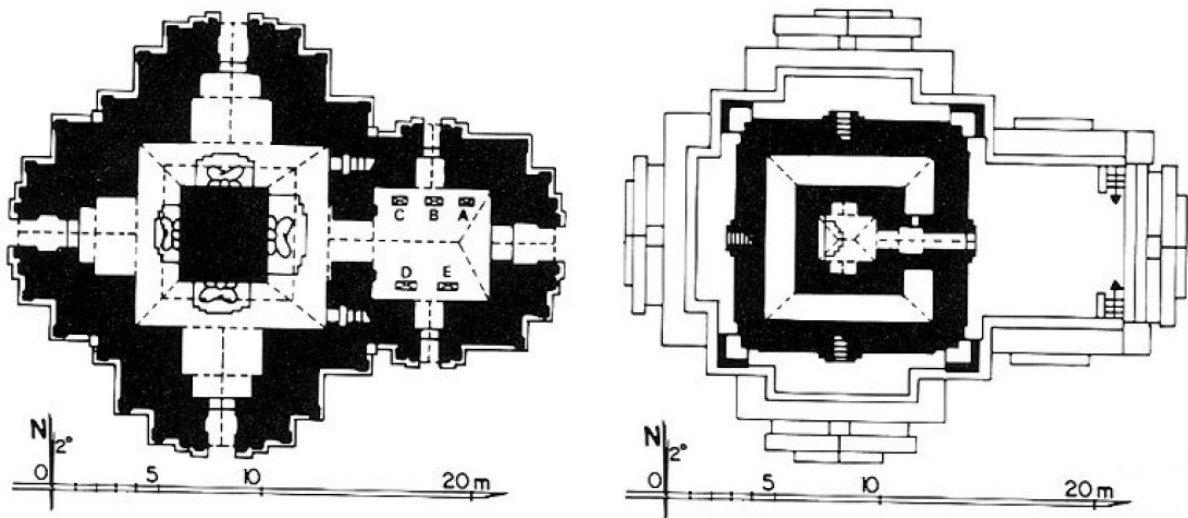


図18：スィンビューシン（697号）寺院1階平面図（左）、図19：2階平面図（右）[IMPより転載]



図20：スィンビューシン（697号）寺院外観

寺院内部に壁画はほとんど残されていないが、この寺院の周囲には非常にたくさんの僧院遺構が集まっており、コンプレックスを成している。先に紹介した7.ティッサーワディー（918号）寺院刻文と同様、寺院建立が少ないこの時期において、寺院と刻文が結び付いた数少ない例である。

9. キンムン (Khinmun) 村シュエズイーゴン (Shwe-zigon) 仏塔刻文裏面

- ・所在地：ザガイン (Sagaing) 管区、チャウンウー (Chaung-u) 郡、キンムン (Khinmun) 村、シュエズイーゴン (Shwe-zigon) 仏塔の基壇上の小祠堂内
- ・サイズ (刻文部分)：高さ 35cm × 幅 81.5cm
- ・行数：表面 42 行 (緬暦 717 = 西暦 1355 年)、裏面 11 行
- ・図版／テキスト／翻訳：List no.581; IB: 519a; UB-I: 154.
- ・内容

【1】緬暦 718 年 (西暦 1356-7 年) チャダイツ (Kratuik) 年、王テインガパター (Sinkapasiy) が王となった時に、キンムン (Khañmwan) 【2】の首長にチンドウイン (Khyantwañ) に出陣させた。戦勝したので、喜んで【3】王に乞うた。褒賞を与えた。勇猛への褒賞を与え、得た土地は、イエー【4】ピットーセイン (Riyphactawcim) の土地を与えた。僧院に寄進しようと申し上げたので、寄進する【5】許可を与えた。川の地域は 75 ペー (pai) である。山の地域は【6】35 ペー (pai) である。2つを合計したイエーピツ (Rephac) の土地は 110 である。主たちに灯明【7】のためのチェー (Kryay) の土地を寄進した。ンガパウンティン (Napoñsañ) のチャウンウー (Khyoñ-ū) の土地は【8】100。ナンペースイー (Nhañphaycañ) の土地は 50。このように私が寄進した土地の税を【9】私の僧院に住む大長老を始めとする主たる聖者たちに以前のように【10】配分させる。この寄進は王テインガパター (Sinkapate) が清浄なる水を垂らして【11】得たので、キンムン (Kañmwan) 王が寄進した土地の部分は以上である。

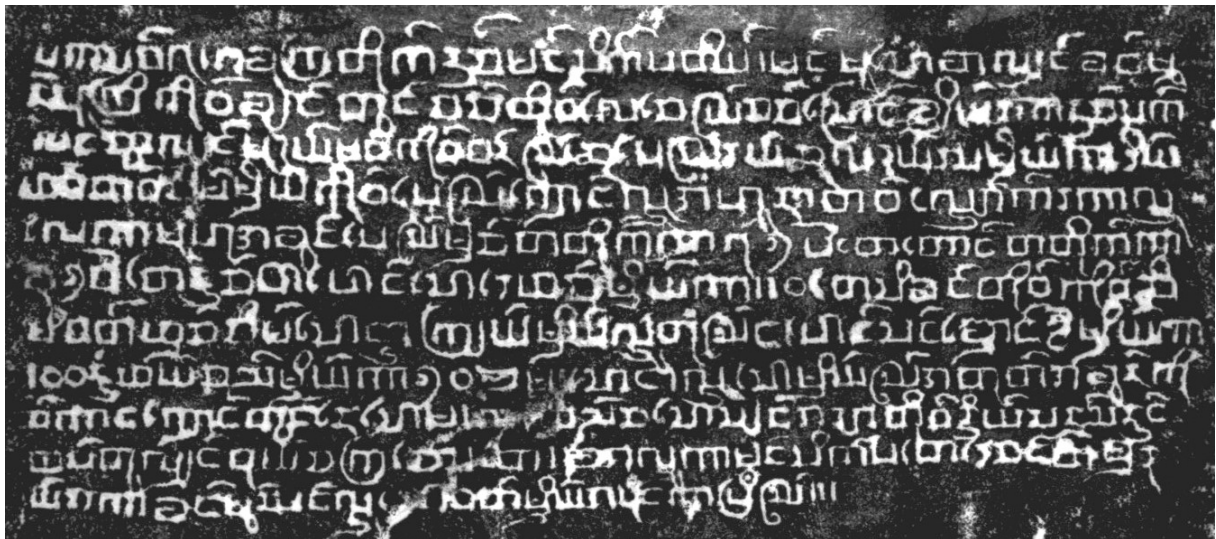


図 21：キンムン村シュエズイーゴン仏塔刻文裏面 1 行目から 11 行目 [IB より転載]

マオ・シャンの襲撃を伝える刻文 (註 6) として、よく引用される [Than Tun 1959a: 129; 大野 2002: 223]。

10. キンムン (Khinmun) 首長キングアトゥー (Kingathu) 僧院刻文

- ・発見地：マンダレー管区、アマラプーラ (Amarapura)、パトードーヂー (Pahto-daw-gyi) 仏塔境内 (註 7)
- ・所在地：マンダレー管区、マンダレー市、王宮址の刻文収蔵庫 (未確認)
- ・行数：54 行
- ・図版／テキスト／翻訳：List no.682; Amar: 281.
- ・内容

【1】(前略) 仏陀が入滅されてから 1918 年の時に、緬暦 736 年ピシェツ (Pisyak) 年【2】ダバウン (Tapon) 白分 8 日月曜日 (西暦 1375 年 2 月 7 日) に、900,000 のカーン (Khan) 大王の兵士に対し武力によって勝利【3】

して、ミャンマー (Mranmā) 国 (prañ)、シャン (Syam) 国 (prañ) の全てを統治するティーハトゥーラ (Sīhasūra) という白象主である正法大王の御孫であるシーリティリパワナーディティヤー【4】パワラパンディタダンマラージャー (Sīritiripawanādityāpawarapaṇḍita-dhammarāja) の威徳、威力、威厳が日月のように輝いている大正法王 (Mahādhammarāja)、黄金僧院の檀家、非常に【5】正法に対し篤信である白象主大王タヤービヤー (Trāphyā) が、仏陀の教法が輝いているシンハラ (Sinkhuw) 島を外道 (micchādittī) のチョーラ (Krañ) が粉碎し【6】破壊したその島を帝釈天 (Sikrā)、梵天 (Bruhmā)、四天王 (Catulokapālā)、大地 (phummā)、樹木 (rukkha)、虚空 (ākāsa) と夜叉 (yakkha) の神 (dewā) が支援して、再び貴き仏陀【7】の教法を輝かせることができ、貴き弥勒 (Mitryā) 仏の右脇侍という授記を得たアバヤドゥッタガーマニ (Aphayadutha-kāmani) 大王のように、ジャン【8】ブディーパ (Japuthit) 上で仏陀の教法が輝いているミャンマー (Mranmā) 国を外道シャン (Syam) たちが徹底的に破壊したところ、武力と智慧によって外道シャン (Syam-dittī) を撃退することが【9】でき、以前よりも貴き教法を輝かせ、布施 (dāna)、持戒 (sīla) を日夜常に実行して、僧侶 (rahan)、婆羅門 (puṁnā)、女性、男性、人々の繁栄と幸福【10】を探し与える能力を持って、ミャンマー (Mranmā) 国全土を統治して、忉利天 (Tāwatinsā) の街と同様に美しいアワ (Awa) の都において【11】[大王が] あらせられる時、キンムン (Khaṁmwan) の首長キングトウ (Kaṅkasū) が、輪廻 (saṁsārā) の苦しみを大いに恐れるので、配偶者であるサンタピツ (Santaphrac) と共に、御前にて【12】乞い、我々の僧院において永続的に安定するようにクーカン (Kūkhan) (註8) の地区におけるレッパンカインドーセイン (Lakpaṁkuīntaucim) の御土地を僧侶 (phuntau) に寄進して【13】整地しようと請い、……整地せよと[大王が] おっしゃった。(後略)

マオ・シャンの襲撃を、スリランカを破壊したチョーラ軍に譬えていることで有名な刻文である [Than Tun 1959a: 130-131; 大野 2002: 223-224]。また、14世紀の刻文の特徴として、「カーン (Khan) 大王」、すなわちモンゴル皇帝の軍隊に勝利したティーハトゥーラ王 (在位 1309-1324) との関係について言及している。

11. シュエズイーゴン (1号) 仏塔 (Shwe-zigon) F 刻文裏面

- ・所在地：マンダレー管区、バガン遺跡、シュエズイーゴン (1号) 仏塔の境内
- ・サイズ：幅 73cm × 高さ 86cm × 厚さ 10cm
- ・行数：表面 21 行 (緬暦 646 = 西暦 1284 年)、裏面 13 行
- ・図版／テキスト／翻訳：List: no.710; PPA: 15-16; PPA-tn: 5-6; SMK-IV: 180.
- ・内容

【1】南無一切智 (namassarbbañña)。仏陀の教法 1925 年 (仏暦 1925 年 = 西暦 1381 年) が過ぎ、緬暦 743 年セイツタ (Cissa) 年 (西暦 1381 年) のときに、ワペー (Wape) の長【2】が、仏陀のシュエズイーゴン (Rhuycañkhuṁ) を篤く尊崇する気持ちが生じ、輪廻 (saṁsārā) の苦痛を恐れるため、輪廻 (saṁsārā) の苦痛【3】を消すために自らの代わりに男性奴隷ンガキンナウン (Nakhañnon)、妻の代わりにエインピュー (Imphlū)、牡牛 1 頭、牝牛 1 頭、アレー (Alai) 池地区の【4】ワラウンオウ (Waloñ-uw)、ワペー (Wape) 地区のカンオウ (Khan-uw)、エインスイシン (Imchichai) 地区の大池 (Mahā-kan)、チャウタウン (Khlokton) 地区のカラン (Kalan) 池の土地と扇椰子を私が寄進し【5】た。(後略)



図 22：シュエズイーゴン (1号) 仏塔 [2014 年 2 月筆者撮影]

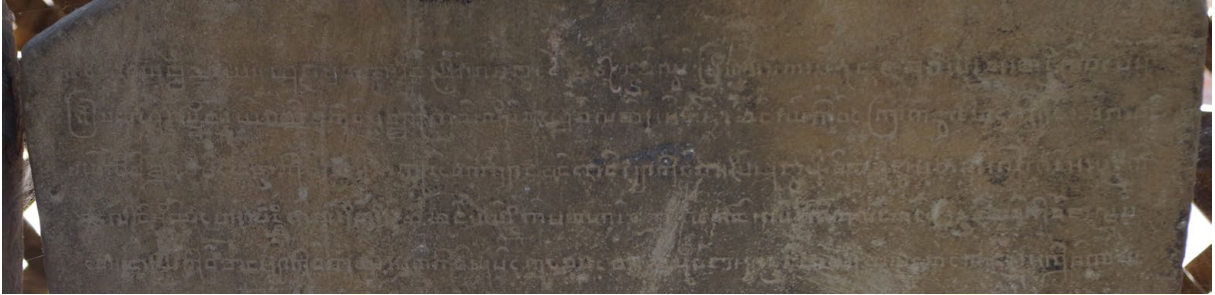


図 23：シュエズイーゴン（1 号）仏塔 F 刻文裏面 1 行目～5 行目 [2014 年 2 月筆者撮影]

シュエズイーゴン（1 号）仏塔は、11 世紀にアノーヤター王により建造が開始され、チャンスイッター王によって完成した仏塔である。その仏塔が、14 世紀の後半になっても、変わらず人々の信仰を集め、寄進が行われていたことを示す刻文である。

12. ソーオンマー（Saw-onma）僧院刻文表面

- ・発見地：ザガイン（Sagaing）周辺（詳細は不明）
- ・所在地：ザガイン管区、ザガイン市、トゥーパーヨン（Htupayon）仏塔北側の刻文収蔵庫 9 号刻文
- ・行数：表面 57 行、裏面 26 行（仏暦 1943 = 西暦 1399 年、および仏暦 1973 = 西暦 1429 年）、裏面下側 12 行（緬暦 723 = 西暦 1361 年、および緬暦 755 = 西暦 1393 年）
- ・図版／テキスト／翻訳：List no.729; UB-I: 63-66; HK-I: 57-63.
- ・内容

【2】（前略）ジャンブディーパ（Jambudit）上に比類なき 1,200,000 のカーン（Khan）【3】大王の兵士を、9 日進んでも尽きないほどの厚みをもつ悪魔の兵士に対しスドー【4】ダナ（Suddhodana）大王の愛息である正法王たる仏陀が勝利した姿のように、威徳、【5】威力を具えているシュリートリバワナーディティヤプラワラダンマラージャー（Śrī-tribhawanāditya-prawara-dhammarājā）という白象主である大王が、ディター（Disā）象【6】の鼻であると、武力によって再び蹂躪しないように勝利して、ミャンマー（Mraṇmā）国を始めとする【7】シャン（Syaṃ）の国（prañ）全土、ダヌ（Tanu）、パウンラウン（Poṇloṇ）、カドゥー（Kantū）、アミイーヤウ（Amrīyok）を始めとする野蛮の国（prañ）全土、ラカイン（Rakhuin）を始めとするカラー（Kulā）の国（prañ）【8】全土、バゴー（Paikū）を始めとするタライン（Tanluin）の国（prañ）全土を統治しており、全ての人民【9】を息子のように統べ、賢劫（Bhadda-kap）の世界の始まりにおいて、マハータマダ（Mahāsammata）王の姿のように大地の【10】味を享受する不安定な仏法であるという無常性（aniccatā）の状態に至っているので、白象主たる大王の愛する妹と共に、【11】ピー（Prañ）王の娘である愛する姪の息子、無限の慈しみという御慈悲（garuṇā）によって、全ての生物【12】を甘露（amruik）である涅槃（nibbān）に到らせたい心を持っている正法王たる仏陀が外道（ditthi-takktwan）たちに対し誤った信仰を消す【13】ために双神通（yamuikprāṭihā）を見せた場所である池というマンゴーの木に似た有名なタイエツ（Siryak）王【14】の息子であり、全ての大地の上の三宝に篤信であり、tacanakphlwāphak である同胞という力を【15】具え、妹である王妃ソーオンマー（Cau-uṇmā）を始めとする兄君であるピー（Prañ）王はシュエナンシン（Rhuynansyañ）といい、品物を揃えて配置し、【16】勇猛さを具え、智慧、努力、武力によって全ての敵を打ち滅ぼして、ミャンマー（Mraṇmā）国（prañ）を始めとする全ての国（nuinnam）を【17】祖父と同様に統治して、人民を息子のように統べ、仏陀の教法という務めを引き受け、大王が為した【18】善行はタロウ（Talup）御僧院、ヤメーディン（Ramañsañ）御僧院、ピンヤ（Pañya）のンゲーチー（Ñai-krañ）御僧院、アワ（Awa）のズイーゴン（Cañkhum）を始めとする善行を為した。その他、長子を始めとする【19】ソーミャッケー（Cau-mlat-kai）、白象主、チョースワー（Klau-cwā）、ソーチャンダー（Cau-khyaṃsā）が為した善行を歓迎なさった。地震が壊して壊れた以前の御善行である【20】チェツィエツ（Krakyak）を始めとするティラインシン（Thiluin-syañ）寺院、タウンバルー

(Toṇpīlū)、グードーティツ (Kūtau-sac)、ピンヤ (Pañya) のズイーゴン (Cañkhum)、ダイン (Tūyañ)、ナンカイン (Naṃkuin) を始めとする様々な善行を管理できる【21】時間が減じている時において、仏陀の教法を永続的に確立させたい気持ちが生じ、数多の王たちの上に、善行と必需品 (sambhāra) と【22】共に、正法によって涅槃 (nibban) の代価を探し、威徳と名声を具えているシュリートウリバワナーディティヤプラワラダンマラージャー (Śrī-tribhawanāditya-prawara-dhammarājā) という【23】白象主タヤービヤー (Tryāphyā) 大王は、ティハトウーラ (Sihasūra) という白象主たる大王の孫、歴代の王妃の家系であり、【24】ザガイン (Cackuin) のズイーゴン (Cañkhum) の檀家、陛下の第一王妃の娘であり、代々引き継いできたタドー (Satuiw) という名前と共に、ダガウン (Takoi) 王の【25】家系であり、三宝において篤信であり、貴い名声と共に、素晴らしい容姿を具える天人の従者のように多くの【26】女官を始めとする全ての女性の上の頂点であり、威徳を具えている陛下の王妃ソー (Cau) と共に、ウェーザヤンター (Wejayantā) 尖塔 (prasat) の上【27】における天女たちの監督者であるスジャーター (Sūjātā) という妻と帝釈天 (Sikrā-natmañ) が愉しむ姿のように純金の御屋敷の上で【28】愉しんで、陛下の王妃ソー (Cau) は、自身に生じた正法を思念なさり、無常、苦、無我 (aniccam dukkham anattā) という三相 (lakkhaṇā rañ 3 pā) を【29】仏陀が説かれたことを御心に実践し、真実の篤信 (satthā)、誠意 (cetanā) が生じたので、輪廻 (saṃsārā) の苦しみから抜け出したいので、求めた【30】貴い願望を叶えたいので、求めた貴い願望がまだ叶えられておらず、転生する輪廻 (saṃsārā) において陛下 (phurā-rhañ) 大王と共に貴く【31】現れ、善行と必需品 (sambhāra) を満たしたいので、求めた貴い願望を叶え、甘露 (amruik) である涅槃 (nibban) に到り【32】たいので、ザヤプーラ (Jayyapūra) というザガイン (Cackuin) 都 (prañ) の西に、このピンスインチャン (Plaṇcañkrañ) という土地において、仏陀の教法 1925 年、【33】緬暦 743 年カソン月黒分 7 日月曜日 (1381 年 4 月 14 日) 夜中過ぎの時間に、教法が 5,000 年確立するように、四方 (catuddisa) からやってくる主たる【34】僧伽 (saṅghā) がお休みになるために、大僧院 (mahāwihāra)、尖塔 (calac) と頂部飾り (mwañkhoñ) を付けた高く大きな僧院 (kloñ) をお造りになった。(中略)【38】僧院に住んでいる主 (skhiñ) たちに四資具を揃えるために、緬暦 748 年ダグー (Tankhū) 月黒分 14【39】日 (西暦 1386 年 3 月 29 日) 布薩日新年木曜日、南のティンガヤーザー (saṅgharājā)、北のティンガヤーザー (saṅgharājā) を始めとする聖僧伽 (aryā-saṅghā) に、息子である【40】白象主を始めとする大臣、カラン (kalan)、タンビイン (sañbyañ) と共に、プエピイ (Pwayplañ) において、金のキンマ容器 (kwañphalā) 150 個、象 5 頭を持って、陛下 (phurā-rhañ) たる大王【41】に乞い、[大王が] 下賜なさったムヤカン (Murakañ) の土地を王妃ソー (Caw) が寄進なさった。(中略)【48】緬暦 746 年 (西暦 1384-5 年)、ダバツティー (Taphatsaṇ) が大王と王妃ソー (Saw) に riy-ñhi (苔色の?) 綿布 1 枚、santuinnī-rañkhat (布の一種か?) 1 枚、【49】黒色の綿布 (phyañ-mañ-khañ-kri) 1 枚、牛 7 頭、豚 5 頭、ヤギ 10 頭、酒 30、このように乞い得た土地が (後略)。

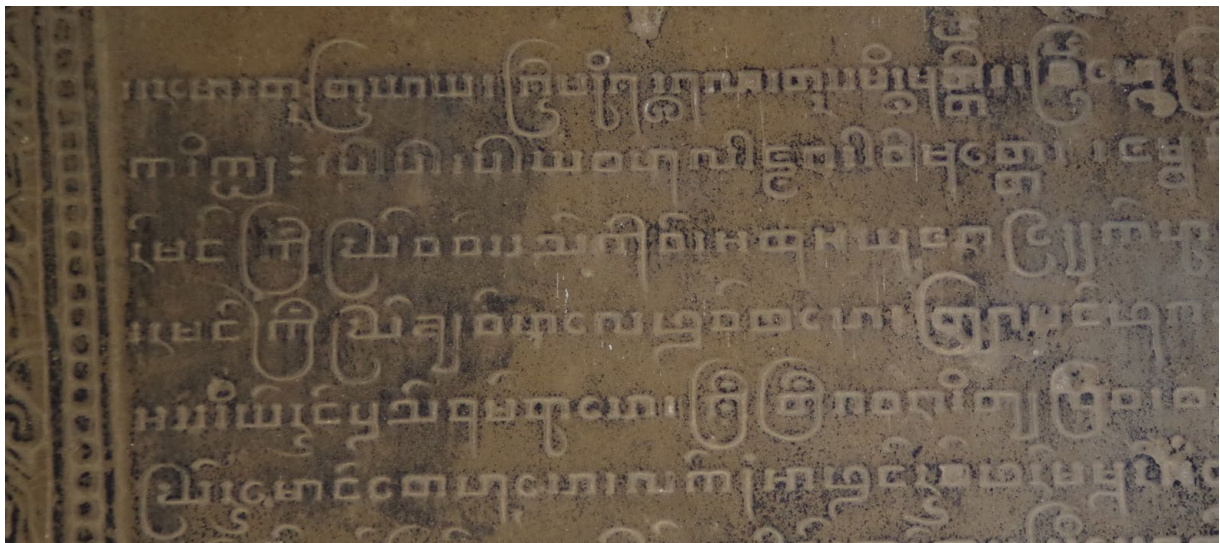


図 24：ソーオンマー僧院刻文表面左側 1 行目から 6 行目 [2014 年 2 月筆者撮影]

この刻文でも、先に紹介したキンムン首長キンガトゥー僧院刻文と同様に、「カーン (Khan) 大王」に対する勝利について言及している。また、建立した僧院について言及している箇所 (34 行目) があり、建築に関して資するものがあるかもしれない。ただ、この刻文の重要性は 49 行目に書かれている饗宴の規模にある。土地の購入や寄進の際に、証人や関係者を集めて、施主や購入者が肉や酒を提供し、饗宴を開催することがバガン時代から続く習わしであったが、「牛 7 頭、豚 5 頭、ヤギ 10 頭、酒 30」(49 行目) というのは、その中でも最大規模のものである [Than Tun 1959b: 103; 伊東 2001: 304]。また、土地の購入や開発を積極的に行っていた「森の僧院 (taw-kloñ) (註 9)」とこうした饗宴を関連付ける傾向にあり、彼らは飲酒肉食を行う良くない集団とされることも多い [Than Tun 1959b; 伊東 2001: 305]。さらに、この刻文でも登場する「ティンガヤーザー (saṅgharājā)」は、「森の僧院」の長と考えられている [Than Tun 1959b: 114; 伊東 2001: 301]。ただし、この称号は名前からも分かる通り、僧伽 (saṅgha) の王 (rāja)、つまり僧院の長を示す名称にすぎない。スリランカの例をみても、サンガを統括する存在がサンガラージャなので [ゴンブリッチ 2005: 266]、「森の僧院」の長に限定される称号と考えない方が良いだろう。また、刻文の内容を見る限り、僧侶と飲酒肉食の関係は、それほど明確ではない。

13. ミャダウン (225 号) 煉瓦僧院 (Mya-daung-ok-kyauṅ) A 刻文

- ・所在地: マンダレー管区、バガン遺跡、ミャダウン (225 号) 煉瓦僧院の境内の刻文収蔵庫内 (2 基あるうちの 1 基)
- ・サイズ: 幅 153cm × 高さ 218cm × 厚さ 33cm
- ・行数: 表面 46 行、裏面 52 行、左面 46 行、右面 38 行
- ・図版/テキスト/翻訳: List: no.934; PPA: 78-90; PPA-tn: 37-47; SMK-V: 21-33.
- ・遺構情報: IMP-I: 339-340.
- ・内容

【表面 1】(前略) 三法において非常に仏法に篤信であるタウンドウイン (Toṇḍhwaṇ) 王、ティーハパ【2】テ (Sihapatei) 王の愛する孫、真の善人である、シリタリバワナーティッティヤーパワラパンディタダンマラージャー (Siritaribhawaṇātittiyāpawarapaṇḍita-dhammarājā) という陛下 (phura-rhañ) 正法王 (mañ-tryā) の甥が、ミャンマー (Mraṇṇmā) 国 (preñ) 全土【3】を統治して、国々 (a-praṇ-praṇ) に名が知れわたっている大王チョースワー (Kyauswā) の義理の兄弟であり、八方の地域を余すところなく優れた威徳によって統治し、【4】歴代の愛する祖父、愛する父の古い歴史、野蛮な国中を統治し制圧し、全ての兵士や人民、在家や出家の幸福と繁栄を実現でき、転生する【5】輪廻 (saṅsarā) において経験が豊かであり、ジャンプディーパ (Jambūḍip) 島上で慈愛ある太陽のように光り輝いている、タウンドウイン (Toṇḍhwaṇ) 王、ティリゼーヤトゥーラ (Sirijeyyasūra) 王は、自身の母親の腹の中で【6】胎児であったとき、深遠なる智慧により生じた心、武力、権謀、努力に加え、施与する際に賢明な大胆さを始めとする全ての思慮分別によって生じるあらゆる慈悲【7】を具え、四阿僧祇十万劫の上に功德を積み、自身と同日同時刻産まれ菩提樹の下の黄金の玉座の上で、四諦、正法を悟り、【8】一切智者へと至った貴い仏陀が、〔輪廻から〕抜こうと、梵天 (brhmā)、人、天人 (nat) の全て、衆生 (sattawā) 全てを〔輪廻から〕抜いて、涅槃 (nerabban) に到ってから 1986 年 (西暦 1442-3 年) が過ぎた時に、輪廻 (saṅsarā) の全ての苦しみを取り除くところ【9】である涅槃 (nibban) の果報を欲するので、タウンドウイン (Toṇḍhwaṇ) 王、ティリゼーヤトゥーラ (Sirizeyyasūra) 王は、白象主陛下 (phura-rhañ) マハーティーハトゥーラ (Mahāsīhasūra) 正法大王の御娘である貴嬪と共に、この人の身において、【10】限りなき篤信、尊崇の念が生じたので、モーニイン (Muñ-ñāñ) という街 (preñ) を鎮圧し、御伯父陛下 (phura-rhañ) 正法王が教法 1962 年経った時 (西暦 1418-9 年) に、緬暦 788 年ナヨン (Naṇmyun) 月黒分 10【11】日木曜日 (1426 年 5 月 30 日) 星宿 26 [のとき] に、威徳、威厳、権謀、智慧、武力、全てを具えているので、アワ (Awa) という黄金宮にお登りになった。教法 1982、緬暦【12】800 (西暦 1438-9 年) が満ちるとき、バガン (Pukaṇ) の王宮が途切れたとき、集まった王

たちが検討しなかったことを、ミャンマー (Mraimmmā) 国 (preñ) 全土において、ペーダ (petañ) と三蔵 (pittakat) に精通する有識者たちと協議して、タウン【13】バルー (Toñpilū) の北、アワ (Awa) という玻璃宮の右、南の空き地の外、純銀の塗料で広大な仮屋 (mantap) と集会所 (kannā) を造って、王子、王女、王孫、王族を始めとする大臣、兵士、【14】周囲の僧侶 (rahan)、婆羅門 (puṁmṇā) とともに、全ての白傘蓋、金、銀、宝石、象、馬、奴隸、水牛、牛、衣類、粃米、水、脱穀米、余さずたくさん喜捨して、有名で難しすぎ、古くから維持された暦 (sakkarac) 【15】を廃止なされた。このように仏陀から授記を得たトゥリッサ (Suracca) が、美しい純粋な玻璃の天井の上、帝釈天 (Sikrā) のように比類なき御伯父である陛下 (phura-rhañ) 正法王と御伯母である南宮妃ソー (Cau) が、後に記録され作られた暦 (sakkarac) の6 (西暦1442年) のとき、ダゲー月白分13日日曜日 (3月24日) 朝、日が昇り、17パワー (足の裏の長さ) (中略) アリマッダナプラ (Arimattana-pūra) という都 (preñ) において、仏陀 (phurā-sikhañ) のシュエズイーゴン (Rhweceñkhuṁ) の西、テツヌエ (Taknway) 川の東側、とても素晴らしい徴のある【19】土地において、教法が5,000年確立するように祈念して、四方 (catutissa) からよく見える、尖塔 (calac)、頂部飾り (mwañkhoñ)、張り出し屋根のある玄関 (chañwañ) 等によって、特別壮麗に仕上げた僧院 (kyoñ) を【20】お造りになった。(中略)

【裏面36】(中略) 御僧院に来るであろう人々 (amyuiwsā) に教えるために、ペーダ (petañ) と共に三蔵經典 (pittakat-surimpuṁ) 【37】をお書きになった。(後略)

この刻文は、引用部分 (裏面37行) に続いて、左面から右面にかけて、寄進のために筆写された經典295経の題目を列挙しており、当時の僧院で教学に用いられ、読誦されていた經典を知ることができるという点で大変重要である。さらに、その中に少なくとも4つのサンスクリット語 (大乘仏教) 經典と少なくとも3つの密教經典が含まれているという指摘がある [Ray 2002(1936): 41-43]。該当箇所は、右面の10行目から13行目であり、サンスクリット語の經典とされているのは、Nyāyabindu、Nyāyabindu-tīgā、Hetubindu、Hetubindu-tīkā、密教經典とされているのは、Mṛtūvañcana、Kālacakkrī、Kālacakkrī-tīgā である。『ニヤーヤ・ビンドウ』(正理一滴論) と『ヘートウ・ビンドウ』(論証因の滴) は、ともに7世紀頃のダルマキールティ (Dharmakīrti) による著作で、仏教認識論・論理学の小論である [斎藤ほか 2020(1966): 197-201]。また、ティーカー (tīkā) はその復註の意である。そして、レイによると Mṛtūvañcana はタントラの用語であり、その名を冠した經典は実在するとし、Mahākālacakka もしくは Mahākālacakra はタントラ經典であり、ネパールの写本カタログに似た名前の經典名が含まれると主張する [Ray 2002(1936): 43]。確かに、名前からすると有名なカーラチャクラ (時輪)・タントラ (Kālacakra-tantra) (註10) を連想させ、顕密の仏教を総合し、インド仏教の集大成として位置付けられる同經典 [斎藤ほか 2020(1966): 133-134] が15世紀のバガンの僧院で筆写されたとすれば、十分に注目に値する。また、この刻文の末尾には、經典の筆記者の名前が列挙されている。ただ、残念ながら、その名前だけで彼らの出自や背景を知ることはいできない。

この刻文の重要性について、もう一点指摘しておきたい。試訳の12行目から15行目にかけて、賢人を集めて協議し、暦を廃止したことが記されている。このことは『フマンナン大王統史』等の後世の年代記にも記されており [Daw Kyan 2008: 335-336]、「暦 (sakkarac) の6のとき」と、この新暦が実際に使用されたことが窺える。ただ、この新暦は定着せず、人々は旧来の暦年を使い続けたようである [Aung-thwin 2017: 88]。

14. カルヤーニー (Kalyani) 刻文

・所在地：バゴー管区、バゴー市、カルヤーニー戒壇院内の刻文収蔵庫

・図版／テキスト／翻訳：

パーリ語 (3柱)

Taw Sein Ko tr. 1892. *The Kalyani Inscriptions Erected by King Dhammaceti at Pegu in 1476A.D.: text and*

translation. Rangoon.

澤田英夫 2006「カルヤーニー戒壇碑文 パーリ語第1柱表面」高島淳・澤田英夫編『東南アジアのインド
古典語碑文選 チャム文字・モン＝ビルマ文字編』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所：
49-63.

モン語（7柱）

Duroiselle, C. ed. Blagden, C.O. tr. 1928. *Epigraphia Birmanica*. vol.III. pt.II. Rangoon: 75-290.

Lu Pe Win tr. 1958. *Kalyani Monkyauksa*. Rangoon.

・内容（概要）

1476年に、ハンターワディー・ペゲー朝のダマゼーディー（Dhammazedi）王（在位1472-1492）がバゴ
郊外のカルヤーニーに設置した。パーリ語3柱、モン語7柱あり、ともに第3結集後のソーナ（Soṇa）とウッ
タラ（Uttara）のスヴァンナブーミ（Suvāṇṇabhūmi）来訪から始まり、プガーマ（Pugāma＝バガン）王アヌルッ
ダ（Anuruddha＝アノーヤター）によるスダンマ（Sudhamma＝タトーン）征服、ウッタラージーヴァ（Uttarājīva）
大長老のスリランカ訪問、その弟子チャパタ（Chapata＝サパダ）がスリランカで修行し、バガンへの帰還後
のスリランカ由来のサンガの繁栄と分裂、ラーマーディパティ（Rāmādhipati＝ダマゼーディー）王の即位、
スリランカへの長老32名の派遣、長老たちの帰国後のサンガの浄化までが語られる〔澤田2006: 49〕。



図25：カルヤーニー刻文〔2012年1月筆者撮影〕

この刻文は、ミャンマーにおいて15世紀に上座部仏教体制が確立したと主張する〔伊東2001〕の重要な根拠の一つとなっている。また、以下に示すように、『フマンナン（Hmannan）大王統史』（1829年成立）等でも参照されるほど、後世に強い影響を及ぼした刻文である。「カルヤーニー刻文にも、緬暦543年（西暦1181年）に到着したとき、王都バガンではナラパティスィートウー（Narapatisithu）という王の治世であり、セイロン島からサパダ（Sapada）大長老等が到着したことのみに述べている」〔Daw Kyan 2008: 186〕。

おわりに

14～15世紀のミャンマーを語るうえで、紹介すべき重要な刻文はこの他にもたくさんある。しかし、時間に限りがあるので、今回はここまでにしておきたい。一般に、衰退や混乱の時代として語られることが多い14～15世紀のミャンマーであるが、キンムン（Khinmun）首長キングアトゥー（Kingathu）僧院刻文やソーオンマー（Saw-onma）僧院刻文などを見ると、刻文上では非常に豊かな世界が展開されている。論文で引用されるのはごく一部で、刻文全体を参照されることは稀であるが、刻文全体を見渡して感じ取れる世界観、そうした記述が成立した背景を、刻文に限らず様々な史資料を活用して注意深くみていく必要があるだろう。

続いて、この時期の刻文の特徴について、気づいた点を述べたい。バガン時代（11～13世紀）の刻文は、紀年が冒頭に書かれることが多く、王への賛辞はそれほど長くないが、14～15世紀の一部の刻文は、大人の身長を優に超えるほど長大なものが制作され、王の業績や王への賛辞が物語のように冗長に語られる。そして、紀年がなかなか現れず、実際に行った積徳行為に行きつくまでにかなりの行数を読まなくてはならない。

このような叙述は、ちょうどこの時期に書かれ始める「年代記（Yazawin）」を想起させ、無関係ではないように思われる。刻文と年代記の関係性も検討する必要があるだろう。



図 26：トゥーパーヨン仏塔刻文収蔵庫
[2014年2月筆者撮影]

最後に、今回の作業過程で気づいた、刻文資料の発行状況について触れておきたい。一見、全てのビルマ語刻文を網羅しているように見える [SMK] であるが、先行研究で引用されている刻文の中には、この [SMK] に未収録のものがあることが分かった。また、刻文の図版も [IB] は西暦 1364 年の刻文までしか掲載していないので、原文（文字）を確認できないものも多数存在する。英領下に出版された刻文集の多くは、刻文の原綴りではなく現代ビルマ文字で書かれ、誤読が多いと言われるが [大野 1979: 3]、これらの刻文集に収録され、[SMK] に未収録のものも認められた（註 11）。そのため、網羅的な刻文リストを作成するためには、こうした 20 世紀初頭に刊行された刻文集を漏れなく入手し、現地にて刻文の実物や拓本に照らして修正し、未公開のものは現物から転写する等の作業が必要となる。当然、個人で実行可能な範囲を越えているので、刻文に関心を持つ国内外の研究者との連携が必要となる。道のりは長いですが、継続して刻文リストの作成を進めていきたい。

註

1. 考古局により第 6 巻が 2013 年に刊行された。収録されている刻文は、緬暦 1000（西暦 1638）年から緬暦 1148（西暦 1786）年までの 38 点である。
2. 2023 年 8 月時点で、SMK を参照し 1342 年頃までの 96 点の刻文情報を 1921 年刊行のリストに追加した。
3. ボードーパヤー王は、仏塔や寺院、僧院に寄進された土地、いわゆる寺領地の確認と整理のために、全土から刻文を王都アマラプーラに集め、接收可能な土地は接收し、寺領地として残すものはそのままにして、そのときの修正内容を記してこれらの複製刻文を作成した。その総数は約 600 点あるという [大野 1979: 1]。
4. ミャンマーに関する刻文の研究状況については、[Frasch 2018] に詳しい。
5. 刻文に関わるローマ字表記については、[Than Tun 1955: iii] の転写方式に従った。
6. 大野は西暦 1342 年としているが、タントウンの論文や刻文の原文を見る限り、キンムンの首長が褒賞を得たマオ・シャンの襲撃は、西暦 1356 年の誤りと思われる。
7. キンムン (Khinmun) 村、キングアトゥー (Kingathu) 僧院から運ばれたものと思われる。
8. 現在のマグウェー (Magway) 管区、イエサヂョー (Yesagyo) 郡、パカンヂー (Pakhan-gyi) 村のことである。
9. 伊東が「森住派」と呼ぶ僧院である。
10. 正式名称は Paramādibuddhoddhṛtaśrīkālacakra-nāma tantrarāja であり、Kālacakra-tantra はその略名である [斎藤ほか 2020(1966): 133]
11. 渡邊は、歴史の大変動を考える際、気候変動の影響について、年代記や刻文等の史料から、関連する記述の拾いおこしの必要性を指摘しているが [渡邊 2023: 274-275]、例として挙げている「1331 年の大洪水」も刻文のテキストは [UB-II] にしか収録されていない。

主要参考文献リスト（本文中で書誌情報を示したものを除く）

- 石井米雄ほか編．1999.『新版世界各国史 5 東南アジア I 大陸部』山川出版社．
- 大野徹．1979.「ビルマ語碑文から見たパガン時代の奴隷」『南方文化』6: 1-33.
- 大野徹．2002.『謎の仏教王国パガン 碑文の秘めるビルマ千年史』日本放送出版協会．
- ゴンブリッチ著．森祖道・山川一成訳．2005.『インド・スリランカの上座仏教史』春秋社．
- 斎藤明ほか編．2020(1966).『仏典解題事典 第 3 版』春秋社．
- 渡邊佳成．2023.「モンゴルの東南アジア侵攻と「タイ」人の台頭」荒川正晴ほか編．『岩波講座世界歴史 第 10 巻 モンゴル帝国と海域世界 12～14 世紀』岩波書店：261-278.
- Cunningham, Alexander. 1892. *Mahabodhi or the great Buddhist temple under the Bodhi tree at Buddha-Gaya*. W.H. Allen: London.
- Daw Kyan et al. ed. 2008. *Hmannan Mahayazawindawgyi*. Thihara Sape: Yangon.
- Frasch, Tilman. 2018. "Myanmar Epigraphy: Current State and Future Tasks." Daniel Perret ed. *Writing for Eternity: A Survey of Epigraphy in Southeast Asia*. Paris, École française d'Extrême-Orient: 47-71.
- Luce, G.H. 1969-1970. *Old Burma Early Pagan*. 3vols. New York.
- Luce, G.H. 1976. "Sources of Early Burma History" in C.D. Cowan and O.W. Wolters eds. *Southeast Asian History and Historiography: Essays Presented to D.G.E. Hall*. Cornell University Press: London.
- Ray, Niharrajan. 2002(1936). *Sanskrit Buddhism in Burma*. Orchid Press: Bangkok.
- Than Tun. 1955. *The Buddhist Church in Burma during the Pagan Period 1044-1287*. Thesis for the Degree of Doctor of Philosophy presented to the University of London.
- Than Tun. 1959b. "Mahākassapa and his tradition." in *Journal of Burma Research Society*. vol.42. pt.2: 99-118.

重要刻文（インドネシア）

東京外国語大学 山崎 美保

はじめに

インドネシアにおける14～15世紀の紀年のある刻文はジャワ、スマトラ、バリで発見されている。今回はジャワのマジャパヒト時代の刻文を中心に紹介するが、マジャパヒト時代は西暦1294年に始まるため、13世紀末の刻文も含む。マジャパヒト時代の刻文の総数は短いものも含めて52点（紀年のあるもの）が知られている。

刻文の主な内容としては、大王の恩恵（シーマ定立、土地の授与）、川の堤防建設、チャイティアの建立、川の舟渡の規定などである。刻文では寺院の建立年代を記すものはほとんどないが、遺構の部材に直接、年代を刻んだものが数点ある。

本稿で紹介する刻文には、可能な限り、次の情報を記載する。①年代、②形態（文字、言語、行数、形状）、③所在（発見地、現在地）、④図版、⑤転写・翻訳、⑥内容、⑦解説。

本稿では、刻文に記された人名や地名などの原綴りに関して、その刻文の転写に依拠する。ただし、古ジャワ語刻文と古マレー語刻文では「w」、サンスクリット語刻文の場合は「v」に統一する。

（略語一覧）

BKI : *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde van Nederlandsch-Indië*

BPA : *Berita Penelitian Arkeologi*

DP : Dinas Purbakala (Jakarta) (写真整理番号 OD の後続)

est. : rubbing (拓本)

JBG : *Jaarboek koninklijk bataviaasch genootschap van kunsten en wetenschappen*

OJO : *Oud-Javaansche Oorkonden* [Brandes, J. L. A. 1913]

OD : Oudheidkundig Dienst (写真整理番号)

VBG : *Verhandelingen van het Bataviaasch Genootschap van Kunsten en Wetenschappen*

VG : *Verspreide Geschriften* [Kern, H. 1917].

1. クダドゥ Kudadu / グヌン・ブタク Gunung Butak

①年代：シャカ暦1216年（西暦1294年）

②形態

- 文字：古ジャワ文字
- 言語：古ジャワ語
- 行数：不明
- 形状：銅板10枚（7、9、13枚目なし）

③所在

- 発見地：モジョクト
- 現在地：不明

④図版：

⑤転写・翻訳：VBG 49: 78-85 (pl. 1-6); OJO LXXXI (pl. 8, 10-12); Brandes 1920: 94-100 (pl.1-6); Yamin 1962 (I): 206-219

⑥内容：

大王クルタラージャサ (註1) の恩恵を記す。クダドゥ村がクルメのサン・ヒャン・ダルマ (寺院) の所有 (シー

マ）となるよう命じられた。クダドウ村の長（*karāmān*）が保管するために石、銅に文字が刻まれたものが作られた。クダドウの村の自由（スワタントラ）が続くように。その理由は、未だ王でない、ナラールヤ・サングラマウィジャヤ *Narārrya Sanggramawijaya* という名であったとき、王が敵に追われていた際に、王に隠れ家を与えたという村の長の行為による（3 枚目）。続けて、ウィジャヤたちがこの村にたどり着くまでの、ジャヤカトワン（註 2）の軍との戦いの経過が具体的に記されている。また 6 枚目裏面には、ジャヤカトワンがクルタナガラ王を殺した時に、逃亡中のウィジャヤを助けることを禁じる宣言をジャワ島全土に行っていたことを示唆する文章がある（註 3）[Krom 1931: 348]。

8 枚目以降は、王たちへの贈り物リスト、立ち入りが禁止された者のリスト、違反者への呪詛が記される。

⑦解説：

シンガサリ王であったクルタナガラが死去した、ジャヤカトワンの反乱当時のクルタラージャサの足取り、様子が伺える資料である。

2. マンジュシュリー *Mañjuśrī* 像の刻文

①年代：シャカ暦 1265 年（西暦 1343-1344 年）

②形態

- 文字：古ジャワ文字
- 言語：サンスクリット語
- 行数：9 行
- 形状：石像

③所在

- 発見地：マラン
- 現在地：ベルリン民族博物館；ジャカルタ国立博物館 D124（複製）

④図版：est. 177

⑤転写・翻訳：BKI LXXVII: 194

⑥内容：

ジャゴ寺院に奉納されたマンジュシュリー像に刻まれた刻文で、像の正面上方と背面に刻まれている。正面上方には、1343 年にアールヤヴァンシャーディラージャ *Āryyavañśādhirāja* によってマンジュシュリー像が奉納されたこと、背面にはラージャパートニー王の統治する王国において、同じ一族の出身であり、マントリー・プラウダタラ（*mantrī prauḍhataṛa*）の官位にあるアーディティヤヴァルマン *Ādityavarman* が 1343 年に、ジャワの地のジナーラヤプラに両親とその一族のために華麗な寺院を建立したことが記される [Bosch 1921: 194]。

⑦解説：

アーディティヤヴァルマンはスマトラ中部で王として、1347 年の紀年をもつ刻文をはじめ複数の刻文（註 4）を残しているが、スマトラで即位する以前に、ジャワの宮廷の高官であったことがこの刻文から分かる。

3. アモーガパーシャ *Amoghapāśa* 像背面刻文

①年代：シャカ暦 1269 年（西暦 1347 年）

②形態

- 文字：古ジャワ文字
- 言語：サンスクリット語
- 行数：27 行（12 詩節：1. *Śārdūlavikrīḍita*, 2. *Mālinī*, 3. *Anuṣṭubh*, 4. *Śārdūlavikrīḍita*, 5. 不明, 6. *Mālinī*, 7. *Mālinī*,

8.Śārdūlavikrīḍita, 9.Śārdūlavikrīḍita, 10.Anuṣṭubh, 11.Mālinī, 12.Drutavilambita)

- 形状：

③所在

- 発見地：ランバハン（バタンハリ川上流）

- 現在地：ジャカルタ国立博物館：D198-6469

④図版：VG 7: (167); OD 3779, 3780

⑤転写・翻訳：VG 7: 166-175

⑥内容：

アーディティヤヴァルマン（ウダヤーディティヤヴァルマン Udayādityavarman）王への賛辞、王の高官であるデーヴァ・トゥーハン Deva Tūhan への賛辞、アーチャールヤ・ダルマセーカラ ācāryya Dharmmasekara によるガガナグニャ Gaganagñja という名の仏像の建立、アーディティヤヴァルマンの贈り物であるアモーガパーシャ（不空罽索観音）像をデーヴァ・トゥーハンが建てたこと、ある儀礼の執行について記される。最後に、ウダヤの地上での名声は正当なものとなるとある。

⑦解説：

この不空罽索観音像は 1286 年にクルタナガラ王の命令でジャワからマラユに運ばれたもので、マラユの王であるシュリー・マハーラージャ・トリブワナラージャ・マウリワルマデーワ Śrī mahārāja Tribhuwanarāja Mauliwarmadewa たちマラユ国の人々を喜ばせたことがパダン・ロチョで発見された台座刻文（ダルマシュレーヤ刻文）から知られている。その後、1347 年にアーディティヤヴァルマンがランバハンに移動させたものである。

この刻文ではアーディティヤヴァルマン（ウダヤーディティヤヴァルマン）を王の中の王と記し、ジャワの影響を全く感じさせない。また儀礼では、憤怒相のアモーガパーシャ（刻文ではマータンギニー matāṅgīnī あるいはマータンギニーシャ matāṅgīnīśa）への言及がある。

4. クスマラ Kuśmala / カンダンガン Kandangan

①年代：シャカ暦 1272 年（1350 年）

②形態

- 文字：古ジャワ文字

- 言語：古ジャワ語

- 行数：18 行

- 形状：石

③所在

- 発見地：クディリ

- 現在地：アイルランガ博物館（クディリ）：A03014

④図版：est. 2417

⑤転写・翻訳：TBG LVIII: 337-347; BPA 47: 38-39; Yamin 1962 (II): 73-74

⑥内容：

ウィジャヤラージャサ（註 5）の命令で、クスマラの堰（dawuhan）がラクルヤーン・ドゥムン rakryān dēmung であるサン・マルタブン・ランガ・サプ sang martabun rangga sapu によって完成させられた。シャカ暦 1272 年、ランガは堤防を完成させた。ランガは常にそれを見守り修理し、その結果、川の堤防は長く完全なものとなる。

⑦解説：

王族の命による治水事業である。王による治水事業は 11 世紀のアイルランガ王によるブランタス川下流の堰堤修造が知られる（1037 年、カマラギヤン刻文）が、マジャパヒト時代における治水事業に関する刻文は、

内容が明確に読み取れる刻文としてはこの刻文のみである。

ウィジャヤラージャサは、1365 年成立の『デーシャワルナナ』（第 4 章第 1 詩節）ではウンクル王の称号を冠しているが、ここではマタフン王と記される。

5. ガジャ・マダ Gajah Mada B / シンゴサリ Singosari VIII

①年代：シャカ暦 1273 年（西暦 1351 年）

②形態

- 文字：古ジャワ文字
- 言語：古ジャワ語
- 行数：17 行
- 形状：石

③所在

- 発見地：マラン
- 現在地：ジャカルタ国立博物館：D111

④図版：est. 449; DP 741, 741a

⑤転写・翻訳：Boechari 2012: 522-523; BKI LVIII: 655-656

⑥内容：

シャカ暦 1213 年に、シヴァ・ブッダに埋葬されたバターラ（クルタナガラ王）が亡くなされた。シャカ暦 1273 年に、第一のマハーマントリであるラクルヤン・マパティーのムプ・マダ mpu Mada が、バターラ（クルタナガラ王）と、バターラの足に倒れたサン・マハーウリダマントリ（官職名）と共に亡くなった、シヴァ教と仏教の最も高位のブラーフマナ（mahābrāhmāṇa śewasauḡata）のためにチャイティアを修繕した。ラクルヤン・マパティーによるチャイティアの目的は子孫たち（santana pratisantana）の献身を捧げる場所である。それはジャワ島のマンダラ（yawadwipamaṇḡala）のラクルヤン・マパティーによる賞賛すべき行いである。

⑦解説：

ムプ・マダ（ガジャ・マダの名で知られる）はクルタナガラ王の孫である、シュリー・トリブワノトゥンガデーウィーを筆頭とするバターラ・サプタ・プラブ（七人の王族）のヨニと称されている [Boechari 2012: 523]。ガジャ・マダは 30 年以上宰相としてマジャパヒトの全盛期を支えた人物であり、彼と王族との結びつきの強さが読み取れる刻文である。

6. チャング Caṅgu / トロウラン Trowulan VII

①年代：シャカ暦 1280 年（西暦 1358 年）（註 6）

②形態

- 文字：古ジャワ文字
- 言語：古ジャワ語
- 行数：60 行（表裏 6 行ずつ）
- 形状：銅板（1、3、5、9、10 枚目のみ）

③所在

- 発見地：モジョクルト
- 現在地：ジャカルタ国立博物館：E54, 36

④図版：

⑤転写・翻訳：Pigeaud 1960 (I): 108-112; Pigeaud 1960 (III): 156-162; Yamin 1962 (II):97-104

⑥内容：

ラージャサナガラ (註 7) 王が、そのジャワ島のマンダラの舟渡について命じた。最初にアジャラン・ラタ Ajaran Rata という名のパンジ・マルガバヤ Panji Margabaya (チャング Cangu に住む場所をもつ) が、銅板と石に刻まれた、このラージャサナガラ王の命令を実行し、それによって、ジャワ島のマンダラの舟渡を確実なものとする。

ブランタス川とソロ川の複数の場所での乗客の渡しの規定について記す。舟渡の場として川の傍にある村々がスワタントラ (自由) の地位を得て、パンクル、タウン、ティリップ、その他によって干渉されない。

⑦解説：

河川交通の円滑化に関する王の命令である。東部ジャワ時代を通して、刻文には王による河川の治水や舟渡に関する命令が記される。当時の交易における河川の重要性が読み取れる。

7. ワリンギン・ピトゥ Warinin Pitu / スロダカン Surodakan

①年代：シャカ暦 1369 年 (西暦 1447 年)

②形態

- 文字：古ジャワ文字
- 言語：サンスクリット語 (1 枚目裏面～6 枚目表面 4 行まで)・古ジャワ語
- 行数：154 行 (各面 6 行。14 枚目表面のみ 4 行)
- 形状：銅板 (14 枚)

③所在

- 発見地：クディリ
- 現在地：ジャカルタ国立博物館：E67

④図版：

⑤転写・翻訳：Yamin 1962 (II): 181-210 ; Boechari 1985-86: 126-135 ; JBG V (1938): 117-119 (E. 67), 127 (E. 67 a-n)

⑥内容：

ウィジャヤパラクラマワルダナ王 (註 8) の命令とダハなどの 14 人の諸侯の命令を記す。ワリンガンピトゥのサン・ヒャン・ダルマの免税地 (rājadharmma) の義務を内容とする。このサン・ヒャン・ダルマはすでに王の祖母であるディア・ヌリタジャーという名のラージャサドゥヒーテーシュワリーによって王国の免税地として決定していた。シュニャーラヤで亡くなったシュリー・パドゥーカ・パラメーシュワラの父 (ramanira śrī pāduka parameśwara sang mokta ring śūnyālaya) の場所としてしっかりと整えられることを目的とした。すでにラカ・ニ・シュリー・バターラ・ヒャン・プカス・イン・スカによって以前に整えられていた。今その目的となるものは再び変えられることのないようにダルマの定立を強固にすることである。

⑦解説：

史料の少ない 15 世紀半ばの刻文であり、また当時の王族の系譜関係についての情報を提供するものである。この系譜の情報を与える王や諸侯に関する章句の箇所はサンスクリット語で、続く免税地についての箇所は古ジャワ語で記されている。

8. プタク Pētak

①年代：シャカ暦 1408 年 (西暦 1486 年)

②形態

- 文字：古ジャワ文字

- 言語：古ジャワ語
- 行数：6 行
- 形状：石

③所在

- 発見地：モジョクト
- 現在地：マジャパヒト博物館：No.625

④図版：est.512

⑤転写・翻訳：OJO XCI; Yamin 1962 (II): 234-235

⑥内容：

シュリー・ギリンドラワルダナ（註 9）が、ムリターティサラヤ・・・（文字不明）に埋葬された王とマハー
 ラヤバワナに埋葬された王の恩恵を強化する。その恩恵は、シュリー・ブラフマーラージャ・ガンガダラ Śrī
 brahmārāja ganggadhara へのブタクと谷や山を含む土地の授与である。恩恵を与えられたシュリー・ブラフマー
 ラージャだけが、彼の子孫までその結果を持つ。戦いがマジャパヒトに対して起こった時のギリンドラワル
 ダナ王（ジャンガに住む王）への援助を理由とする。

⑦解説：

この時代に争いがあったことが分かる。マジャパヒト時代の終焉について記す史料はないが、15 世紀後半
 にはおそらく王家内での争いがあり、統治が不安定であったことが示唆される。

註

1. 称号は次の通りである。śrī mahāwiratameśwarānandita parakramottunggadewa mahābalāsapatnādhīpawināśakarāṇa śīlāsāragu
 nārūpawinayottamānuyukta samastayawadwīpeśwara sakalasujanadharmmasangrakṣaṇa narasinghanagaradharmmawīśeśasantana,
 narasinghamūrtisutātmaja kṛtanagaraduhitāsamāgamasampanna kṛtarājasajayawarddhananāmarājabhiṣeka [Brandes 1920: 94]
2. 刻文では、「jayakatyēng」。
3. 残念ながら、続く 7 枚目の銅板が欠如しているため、詳細ははっきりしない。
4. パガルユン刻文として知られる 9 つの刻文である。磨滅や破損により、内容が不明瞭なものも含まれる。9 つの刻文のうち、
 アーディティヤヴァルマンの名前が確認できるものは 3 つである。このほか、スマトラ中部で発見されたサルアソ I、II、ラ
 ムバタン I、クブラジョ I、オムビリン I 刻文にアーディティヤヴァルマンの名前が記される。
5. 称号は次の通りである。bhaṭāre matahun śrī bhaṭāra wijayarājasānānta wikramotunggadewa [BPA 47: 39]
6. 9 枚目が 8 枚目と表記され、10 枚目の転写なし。
7. 称号は次の通りである。śrī tiktawilwanagareśwara śrī rājasanagara nāma rājābhiṣeka raṇaprathita mantrinirjita nṛpāntaropayana
 surāṅgaṇopamānāneka warakāminī sewyamāna garbhotpatti nāma dyaḥ śrī hayāmwuruk [Pigeaud 1960 (I): 108]
8. 称号は次の通りである。śrī mahārāja śrī sakalayawarājādhīrājaprameśwara śrī bhaṭṭāra prabhu dewajyeśasadrśya
 lokanikaraprāwānyabhūteśwaraḥ wiśwakṣenasamānasarwari puradhargonnatiochedakaḥ sarwwajñātu liteśwaratwa
 bhuwanastomaprapūjyātmaḥ bhāswatkīrttiyaśo witānawilasat sadwaktrapāṅkeruhaḥ samastarājānyakirīṭabhṛṅgagaṇasprśat
 saccaraṇāmbujātah jitadwiśaddweśawīśeśabhṛtyabhṛtipradāna pra kṛtapraharṣaḥ samhr̥ṣṭacittaśaraṇāgata samstutāṅgo gaṅgāmbuwegasadrś
 aśrutidānatādrah adr̥śapā dasatatasthitacittasālah ślāghyo jagatsumahatām paramaika nādaḥ sadmārttyawaktrakumudaprawiwodha nenduh
 duṣṭaprawrttitimiroṣṇakaropamānaḥ satswāgateśwa bhīmukhowimukhaḥkhaleṣu lokeṣunirmalarucā tulitassukīrttyā wijayaparākramawar
 ddhananāmarājābhiṣeka garbbhaprasūtināma dyaḥ kṛtawijaya [Bochari 1985-86: 126-127]
9. 称号は次の通りである。śrī bhaṭṭāra prabhu girindrawarddhana garbbhotpattināma dyaḥ raṇawijaya wuddhopadeśa [OJO XCI]

参考文献

- 青山亨．2001．「東ジャワの統一政権 ― アイルランガ政権からクディリ王国へ」『岩波講座東南アジア史 2 卷東南アジア古代国家
 の成立と展開』岩波書店．
- ．2001．「シンガサリ＝マジャパヒト王国」『岩波講座東南アジア史 2 卷東南アジア古代国家の成立と展開』岩波書店．
- Boechari. 2012. *Melacak sejarah kuno Indonesia lewat prasasti /Tracing ancient Indonesian history through inscriptions*. Jakarta: Kepustakaan
 Populer Gramedia.
- Bosch, F. D. K. 1921. De Inscriptie op het Mañjuśrī-Beeld van 1265 Śaka. *BKI* LXXVII, 194-201.

- Brandes, J. L. A. 1913. *Oud-Javaansche Oorkonden, Verhandelingen van Het Bataviaasch Genootschap Van Kunsten en Wetenschappen* 60, Batavia: Albrecht, 's Hage: Nijhoff.
- . 1920. *Pararaton (ken Arok) of het Boek der Koningen van Tumapel en van Majapahit*, tweede druk. 's-Hage: M. Nijhoff, Batavia: Albrecht & Co. (VBG LXII)
- Budi Istiawan. 2006. *Selintas Prasasti dari Melayu Kuno*. Balai Pelestarian Peninggalan Purbakala Batusangkar.
- Damais, L. Ch. 1955. II. Etudes d'épigraphie indonésienne: IV. Discussion de la date des inscriptions. *Bulletin de l'Ecole française d'Extrême-Orient* 47 (1): 7-290.
- Kern, H. 1917. *Verspreide Geschriften*. deel 7. Leiden: M. Nijhoff.
- Krom, N. J. 1916. Een Sumatraansche inscriptie van koning Krtanagara. *Verslagen en Mededeelingen der Koninklijke Akademie van Wetenschappen, afd. Letterkunde*, 5 (II) (1917): 306-339.
- . 1931. *Hindoe-Javaansche Geschiedenis*, 2nd revised ed. The Hague: M. Nijhoff.
- Machi, S and Richadina, K. (ed) 1996. *Laporan Penelitian Epigrafi di wilayah provinsi Jawa Timur (Berita Penelitian Arkeologi 47)*. Proyek Penelitian Arkeologi Jakarta; Pusat Penelitian Arkeologi Nasional; Departemen Pendidikan dan Kebudayaan.
- Pigeaud, Th. G. Th. 1960-63. *Java in the 14th Century: A Study in Cultural History*, 5 vols. The Hague: M. Nijhoff.
- Yamin, H. Muhammad. [1962]. *Tatanegara Madjapahit: jaitu risalah Sapta-parwa berisi 7 djilid atau parwa, hasil penelitian ketatanegaraan Indonésia tentang dasar dan bentuk negara Nusantara bernama Madjapahit*, 1293-1525. Djakarta: Jajasan Prapantja.
- Zoetmulder, P. J. 1982. *Old Javanese-English dictionary*, part 1, 2. The Hague: M. Nijhoff.

参考 URL

Virtual Museum Airlangga

Koleksi (<https://keditourism.kedirikota.go.id/museumairlangga/koleksi/>) (2023/07/12 閲覧)

はじめに

有機的な組成をもたない陶磁器は、生産や貿易といった社会経済状況や、それをうみだした文化的背景をさぐるための資料（特に年代の指標）として非常に有効であり、今日の前近代東南アジア研究でも広く活用されている。しかし、陶磁器研究者以外には十分に理解されていない問題点もいくつかあり、たとえば、詳細な、数十年単位での生産年代を与えうるのはほとんどの場合中国産・日本産の陶磁器であり、在地の陶磁器類についてはタイ・ベトナムなどでの少数の例外を除き、（数）世紀単位でしか年代を与える事ができないという研究の現状は、考古学を専門としない他の東南アジア研究者にはほとんど理解されておらず、生産年代と流通・消費・廃棄年代の差や出土コンテキストなどに注意が払われないまま、陶磁器＝考古資料＝歴史史料という図式が安易に使われがちである。

東南アジア産陶磁器の研究は、現地研究者と外国人研究者が各地で精力的に取り組んでいるテーマではあるが、残念ながら既知の遺跡・資料に対して研究者の絶対数が少なすぎる。かつて、1980年代から90年代の東南アジアにおける陶磁器研究をリードした、ロクザナ・ブラウンやドン・ハインのような欧米の研究者が、東南アジア産陶磁器を一括して基礎的な年代観や技術系譜の整理を行ったが（Brown 1989, Hein 2008）、新たな遺跡・資料が次々と発見されている現状では、個々の研究者が地域ごとの調査に集中せざるを得ず、東南アジア全域を対象としたこれまでの研究の見直しは、全くと言って良いほど進んでいない。また製品を支えた窯業技術全体について論じた研究が非常に少ないのが現状である。そこで今回、各地の近年の研究成果をもとに、東南アジアにおける窯業の成立と展開について、年代、技術的系譜などの問題を改めて論じてみたい。

1. 東南アジアにおける窯業

東南アジア産陶磁器の研究は、それなりに研究の積み重ねはあるが、日本や中国、韓国の陶磁器研究に比べると、遅れの目立つ分野ではある。そのためか、他分野の研究者が東南アジア産陶磁器の研究成果を援用することも少ない。例えば、近年刊行された地理学研究者による『焼き物世界の地理学』（林 2023）では130頁ほどある各地の窯業史に関する記述のうち、東南アジアのそれはわずかに7頁を割くだけであり、内容もベトナム北部における陶器生産の現状紹介と、タイ産陶磁器についての俗説の紹介だけで、現地ならびに外国人陶磁器研究者による詳細な研究が取り上げられることはなく、東南アジア大陸部と島嶼部での陶磁器生産の差異についてもまったく触れられていない（ibid.:194–200）。

広義の陶磁器には、素焼で焼成温度が低く、野焼きでも生産が可能な土器、生産には土器に比して高温（焼成には窯が必要）が必要な陶器（炆器）、陶器よりも高温で焼成され、素地がガラス化する磁器が含まれる。このなかで、前近代に東南アジア全域で生産が確認されているのは土器だけであり、先史時代より現代まで、土器の内側に丸い礫や土製の当て具（をあて、叩き板で外側を叩きながら成形するという叩き技法が主流となっている）。

一方、陶器・磁器（註1）については、前近代に遡る窯業生産が確認できるのは大陸部だけで、島嶼部東南アジアでは一切確認されていない事が指摘されている（田畑 2022:219）。島嶼部東南アジアで前近代の窯業が欠如している理由は不明であるが、近代以降の技術流入により、現在インドネシアなど島嶼部で小規模であるが陶器の生産が認められることから、原材料の欠如が理由とは考えにくい。本稿ではこの問題に立ち入る余地はないが、今後、他の要因も検討する必要があるだろう。

2. 東南アジア産陶磁器研究略史

東南アジア産の陶磁器については、20世紀前半までに散発的な資料紹介はあるものの、研究が開始されたのは1960年代にはいつてからでありそれもタイなど一部の地域に限られていた。本格的な研究が進展しはじめるのは70～80年代にかけての事である。1969年にはシンガポールで陶磁器愛好家と研究者が中心となり Southeast Asian Ceramic Society が設立され、1971年には最初の展覧会、Ceramic Art of Southeast Asia を開催し、以降、Chinese White Wares (1973)、Chinese Blue & White Ceramics (1973)、Chinese Celadons (1979)、Khmer Ceramics: 9th–14th Century (1981)、Vietnamese Ceramics (1982) といった展覧会とそれに伴う図録・研究書が出版されている。東南アジア産陶磁器で初めて本格的な展覧会（および図録とそれに収録された研究論文）がおこなわれたのは、クメール陶器であった。

クメール陶器は生産の開始年代で言えば東南アジアでも最も古くから生産が始まった陶器のひとつであり、また、研究も80年代からかなり行われていた。本格的なクメール陶器の研究は、ベルナル・フィリップ・グロリエ（B.P. Groslier）によって始められたが、彼は、9世紀末には中国の影響がクメール陶器生産に決定的なものであり、胎土、仕上げ、釉薬、形態などすべてが中国式で、こうした新技術は単に中国から輸入されたものを見て再現したとは思えず、中国人（あるいは中国化した）陶工が作り上げ、職人を育てたのではと考えていた（Groslier 1981: 20）。

東南アジア産陶磁器の起源を語る際にしばしば見かける、典型的な「中国の直接的影響」節である。こうした考えかたはながらく支配的なものであり、例えば美術史家 L. コートはクメールの灰釉合子について、唐代後期から宋代の磁器を思わせることから中国陶磁器の影響を示唆している（コート 田畑訳 2002:133）。

アジア各地域における施釉陶器の成立を考える上で、世界で最も古くから陶磁器生産が開始された場所の一つであり、宋代以降は世界中に製品を輸出した中国の影響をどのように評価するのかは難しい問題である。東・東南アジア各地で、これと全く無関係に陶磁器生産が開始されたとは考え難い。しかし、「まず中国ありき」で考え、古典的な伝播論のみで産業の開始と発達を説明してきたため、それぞれの地域のもつコンテキストに十分な注意が払われなかった。

したがって、これまでの東南アジア産陶磁器の研究は、どれほど個別の研究でそれぞれの地域の独自性が強調されようとも、全体としては、『中国のコピー』というパラダイムがまずあり、そのため、中国陶磁との距離感が東南アジア産陶磁器研究の方向性を規定していたと言って良いだろう。また、これまでの研究の特徴として、各国・地域別の調査研究、とくに製品の研究は実施されてきたが、東南アジア全体を見通す生産研究がほとんど行われてこなかったことも指摘出来る。

このような状況のなか、例外的に、オーストラリア人研究者ドン・ヘイン（D. Hein）は、東南アジア大陸全体での在地窯業全体についての唯一のまとまった論考を発表している。彼の東南アジア産陶磁器にたいする基本的なアプローチは古典的な伝播論であり、中国を起原とする東南アジアの窯業の発達を、複線的ゾーン・モデル（bi-zone model）として概念化し、二つの伝播ルートを想定している（図1）。一つは、安南山脈の東側（ベトナム）を北から南に伝わり、カンボジア北部平原とコーラート高原南部にいたる「沿岸部」ルートであり、もう一つは内陸部のミャンマー、ラオス、北部タイの河川域と高地にひろがる「内陸部」ルートである（Hein 2008:1–13）。

さらに彼は窯体構造により、沿岸部は地上式窯であり、内陸部は地中式窯が主流で、一部中間的なものがあらわれ、地上式窯に変容する変化をしている（Ibid.）。しかしドン・ヘインの論文では、地上式、地下式の代表的な窯跡を紹介するだけで、実際に沿岸部と内陸部とされる窯跡の最古層のものが、伝播論的に直接的に中国に起因するものなのかどうか、事例をもって示されていないし、幾つかの矛盾もみられる。最新の調査成果をもとに、彼のモデルの妥当性を検証し、あわせて、彼の理論から完全に欠如している、窯業の「東南アジア化」を理論づける必要があるだろう。

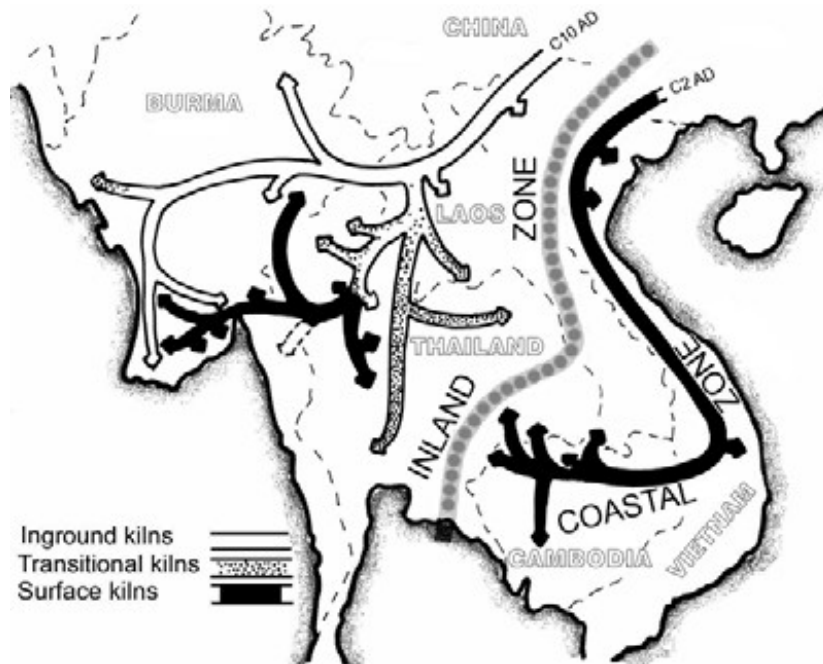


図1 ハインによる複線的ゾーン・モデル (Hein 2008 : 1 Fig.1)

3. 各地での成果

まず、ハインの理論で起点となる、ベトナム北部の調査例から、複線的ゾーン・モデルを検証したい。管見の及ぶ限り、ベトナムで発掘された最も古期の窯は、オロフ・ヤンセ (Olov Janse) が 1939 年に調査をしたハノイの南約 150 キロ、タインホア省タムトー (Tam Tho) の窯で、単室の地上式窯が発掘されている (Janse 1941: 253–254)。窯の年代についての詳細は不明であるが、ヤンセは製品の様式 (漢から六朝) などから、タムトーの窯の操業はおそらく紀元 2 世紀から 6 世紀までだと考えていたようである (Janse 1951:245)。ハイン自身はこれを沿岸部モデルの祖型のひとつととらえ、バックニン省のドウオンサー (Duong Xa) で発見された 9 世紀後半から 11 世紀にかけての窯では、タムトーの流れを汲むものである可能性が高いとしている。しかし、この調査自体が、ハインの理論への挑戦となっている。西村昌也らによって発掘されたこの窯は、碗類の器形・目跡などから、明らかに中国越州窯系の製品を模倣して生産されたと考えられており、また外来陶磁器資料として越州窯系製品が共伴している。その年代はその年代は 9 世紀末あるいは 10 世紀前半から 10 世紀後半に収まるとしているが (Nishimura and Bui 2004 : 91)、実はこの窯は地下式窯である。地下式窯から地上式窯への移行が、ハインがスワンカロックで例示するように各地で自律的に起きるのなら、地上式窯 → 地下式窯という北部ベトナムの事例は矛盾するし、両者が混在するのならば、バイゾーンという彼の理論はそもそも成り立たない。

ミャンマー

ミャンマーでは昇焰式の土器窯の存在が知られているが、その年代について確定的な事はなにもわかっておらず、陶器窯との関係は不明である。陶器窯については、1990 年にハインらにおけるラグインビーでの窯跡発掘をはじめに、トワンテ、ナップドー、ミャウンミャ (Myaung Mya)、などの発掘が実施されている (佐々木ほか 2007: 147)。確かにミャウンミャでは、1999 年のハインの発掘で地下式窯が確認されているが、近年発掘されたトワンテの窯は煉瓦で構築された地上式窯である。また、これらの窯の関係を検討した佐々木達夫は、製品と窯道具から判断すると、タイの技術がトワンテに移転し、ナップドーがトワンテ廃絶以後に興り、さらにミャウンミャに広がり、その技術が現代窯業に継続すると考えており、また年代についても、トワンテ

などで大量に生産されたミャンマー青磁の生産年代に関する手がかりの少なさはあるものの、アラビア半島での出土例などから、上限が14世紀まで遡るものの、主体は15世紀が中心であるとしている（Ibid. 161）。この考えにたつと、内陸部は地中式窯が主流で、一部中間的なものがあられ、地上式窯に変容する変化するというハインの説を認めることが困難になる。

カンボジア

前述の通り、クメール陶器の成立については、中国の圧倒的な影響下のもとに窯業技術が成立したとの見解が一般的であり、フランス人考古学者、B.P. グロリエはクメール陶器の胎土、仕上げ、釉薬、形態などのすべてが中国式であると考え、中国の影響がクメール陶器生産に決定的なものであったとしている。さらに彼は、こうした新技術は単に中国から輸入されたものを見て再現したとは思えず、中国人（あるいは中国化した）陶工が作り上げ、職人を育てた可能性があるとしている（Groslier 1981: 20, 1995: 27）。この問題については、すでに筆者が何度か論じており、器形や装飾といった表現的なものと、製陶技術は注意深く分離されなければならない、また製陶、特に窯詰め技術でみると、クメール陶器にこれまで指摘されてきたような中国からの直接的影響は見られない（田畑 2008）。

クメール陶器窯の構造については、これまでの筆者らの、その基本構造を明らかにしているが、それは次の通りとなる。マウンドないし堤の斜面上に築かれた横焰式地上窯であること、粘土（註2）で築いていること、細長い長方形～楕円形の平面プラン、燃焼室と焼成室間の約1mの段差、傾斜した焼成室の床面、天井の支柱などがあげられる。これをもってクメール陶器の基本構造とできよう（田畑 2008: 64、田畑 2017: 272）。年代については、プノン・クーレンのアンロン・トム窯焚口採取の炭化材で暦年校正年代値は903–1015 calA.D. となっており、東南アジアで最も古期に属する在地窯である（田畑 2008: 159）。

4. 陶磁器生産の東南アジア化

それでは、ここで、改めてハインの理論を検討してみたい。

まず、ハインが全く問題としていなかった、窯とその製品の年代である。大陸部の窯は、現在判明している生産の開始年代でいえば、北部ベトナム、カンボジアが10世紀以前に遡り、他の地域は14・15世紀以降の生産開始となろう。東南アジアの最古の窯がどれであるのか、現状では特定するのが難しい。地上式窯であるタムトー（Tam Tho）がヤンセの考える通りであるならば、紀元2世紀から6世紀のどこかに最古の窯の年代がくることになり、近年の調査例でいえば、9世紀末あるいは10世紀前半から10世紀後半とされるドウオンサー窯がそれに続くことになる。

また、製品のありかたも大陸部では一様ではなく、大きく3つのグループに分けられる。まず、北部ベトナムのように、10世紀までは政治的には中国であった地域では、やはり中国陶磁器の器形・文様から出発し、独自の製品群を生産している。いっぽう、10世紀以前の東南アジア世界のなかで、中国領ではない地域で唯一陶器を生産していたカンボジアでは、中国陶磁と共通する器形もあるが、碗のバリエーションに乏しく、盤・皿などの器形を欠いており、什器よりも儀器としての性格が強く、後に生産が開始される陶器群とは年代も製品の在り方も異なる。14・15世紀以降に生産が開始されるタイ・ラオス・ミャンマーでは、壺・甕類のような大型の製品はともかく、小型の製品の中心である碗・盤・皿類は、中国青磁のコピーモデルから出発する。

こうしてみると、それぞれのグループで生産年代と製品のありかたに大きな乖離がみられ、それらを直線でつないで系譜を論じることがいかに困難であるかが理解できよう。そのうえで地上式と地下式窯について考えてみたい。ハインは沿岸部においては一貫して地上式窯が、内陸部では地下式窯→中間的な窯→地上窯という技術的な移行がみられるとしている。しかし、前述の通り、沿岸部とされる北部ベトナムで地下式窯が検

出されており、ミャンマーでは、15 世紀以降と考えられるトワンテによりも新しいと考えられる、ミャウンミヤが地下式窯である。

確かに、ハインの言う沿岸部、すなわちベトナム北部、中部、ラオス、カンボジア（ラオスやカンボジアを沿岸部とするのはやや抵抗があるが）には地下式窯しか存在しないが、しかし、それをもってこのルートを技術伝播のルートと見なす訳にはいかないだろう。ドゥオンサーの例から、もともと地上式と地下式が混在していて、それが沿岸と内陸とに分岐した可能性も考えられるが、ミャウンミヤの例をみると、地下式窯から過渡期をへて地上窯へと単純に移行するとも考えがたい。直線的な伝播と時間的変遷にともなう構造の変化としてとらえると、現状での各窯跡の年代観と構造は、ハインの理論と矛盾しているように見える。むしろ東南アジアでは、10 世紀前後から横焰式地上式窯と地下式窯が混在しており、それぞれの地域的な条件（地形・植生その他）に応じて、地上式窯と地下式窯が用いられたと考えたほうが良いのではないか。

こうして見ると、際立つのがクメール陶器の独自性である。年代的には東南アジア最古であるこの陶器群を支えた技術について、筆者は幾つかの論じてきたため（田畑 2008、2017）詳細についてはここでは触れないが、結論から言えば、クメール陶器の生産遺跡と製品に見られる製陶技術の諸特徴には、他地域との技術的連関を窺わせる点が全く見られない。もちろん、窯業の主たるコンセプト（窯という集約的な生産を可能にする施設や、釉薬という硅酸塩鉱物による製品のコーティングなど）すべてが、アンコールで発明されたとは考えられず、過去のいずれかの時点で他地域からもたらされた可能性は高く、その第一候補がすでに窯業が高い技術的成熟段階にあった中国であることは間違いないだろう。

しかし、中国の窯業技術が、直接アンコールの窯業にもたらされた証拠は全くなく、むしろアンコールの技術的独自性が目立っている。中国（陶磁）によるクメール陶器の支配的な影響関係を認める事はできない。

窯業の基本的な考え方は、中国からアンコールにもたらされたのであろうが、それは間接的なものであり、伝播の経過中には中国起源の窯業技術は東南アジアの文脈に吸収され、東南アジアの窯業としてアンコールで花開いたのであろう。

したがって、クメール陶器と中国陶磁の様式的な類似は、中国陶磁とクメール陶器の関係は、前者が後者を規定するのではなく、前者は製品の造形と生産方式を拘束しない、規範的でないモデル関係が具現化されたものと考えられる。

また、幾つかの製品には、土器の製作技術と共通する技術と共通する点（器形や製作法）も見受けられることから、在地の土器製作との関連が考えられる。アンコール独自の文脈のなかで製品のデザインや製作法が展開している。クメール陶器やそれを生み出したアンコール時代の窯業については、生産の規模や携わった集団の社会的位置づけなど、解決すべき問題が山積しているのであるが、今後は、窯業の自律的展開という視点からの研究が望まれる。

註

1. 厳密に言えば、タイ青磁など東南アジア産の「磁器」と呼ばれるものは、素地のガラス化の度合いなどが中国や日本の磁器とは異なる事が多い。
2. アンロン・トムでは、燃焼室の一部でレンガが検出されている。しかし、これもレンガが一個確認されているだけで、レンガが窯の主体となる構築材がレンガというわけではない。

文献一覧

グロリエ, ベルナール 津田武徳訳

1998「アンコール王朝陶磁入門 — 9世紀末から15世紀初め」『東南アジア考古学』第18号: 167-212

コート, ルイズ・アリソン 田畑幸嗣訳

2002「クメール陶器 — ハウギコレクションを中心としたクメール陶器の研究 — 」『東南アジア考古学』第22号: 129-168

佐々木達夫・野上建紀・佐々木花江

2004「ミャンマー窯跡踏査と採集陶磁器」『金沢大学考古学紀要』第27号: 147-246.

林上 2023 『焼き物世界の地理学』名古屋・風媒社・432p.

田畑幸嗣

2008年『クメール陶器の研究』東京・雄山閣: 196 p.

2017「前近代カンボジアにおける陶器生産」佐々木達夫(編)『中近世陶磁器の考古学』第5巻: 259-296 東京 雄山閣.

2022「東南アジアの古代国家」荒川正晴ほか(編)『岩波講座 世界歴史第4巻 南アジアと東南アジア ～15世紀』岩波書店: 219-236.

Brown, Roxanna M.

1988 *The Ceramics of South-East Asia, Their Dating and Identification*. 2nd ed. Singapore: Oxford University Press.

Cort, Louise Allison

2000 Khmer Stoneware Ceramics . In *Asian Traditions in Clay*: 91-149: Wahington, D. C.: Smithsonian Institution

Ea, Darith

2009 New Data on the Distribution of Khmer Ceramics Kilns. In Osaka-Otani University Museum (ed.) *Khmer Por B-1 Kamaato: Hakutsu Chosa Hokoku* (The Excavation Report of the Khmer Por B-1 Kiln): 84-106: Osaka, Osaka-Otani University Museum.

2016 *Torp Chey: Analysis of an Angkorian Kiln*, Singapore: APSARA National Authority & Nalanda-Sriwijaya Center, ISEAS-Yusof Ishak Institute.

Fine Arts Department, Thailand

1989 *Kilns in Ban Kruat, Buriram Province* (in Thai). Bangkok: Fine Arts Department.

Groslier, Bernard P.

1981 Introduction to the Ceramic Wares of Angkor. In Diana Stock (ed.) *Khmer Ceramics: 9th-14th Century*: 9-39 Singapore: Oriental Ceramics Society.

1998 (reprinted) La céramique chinoise en Aise du Sud-Est: Quelques points de méthode, *Archipel*, No 21: 93-121.

Hein, Don

2008 Ceramic Kiln Lineages in Mainland Southeast Asia. in CERAMICS IN MAINLAND SOUTHEAST ASIA: COLLECTIONS IN THE FREER GALLERY OF ART AND ARTHUR M. SACKLER GALLERY (https://publications.asia.si.edu/publications/seaceramics/essays/resource_items_url_137.pdf 2023, 02 Mar)

Nishimura, Masanari and Bui, Minh Tri

2004 Excavation of the Duong Xa site in Bac Ninh Province, Vietnam. *Journal of Southeast Asian Archaeology* 24: 91-131.

Tabata, Yukitsugu

2008 Some Aspects of the Anglong Thom Kiln, Cambodia. *Journal of Southeast Asian Archaeology* No.28 : 61-74.

2016 Chronological Framework of Ceramic Trading in Angkorian Cambodia. In Sumio Fukami(ed) *Multidisciplinary research in the ancient history of Southeast Asia*: 37-49, Osaka, Research Institute of St.Andrew's University.

Tabata, Yukitsugu and Chay, Visoth

2007 Preliminary Report of the Excavation of the Anglong Thom Kiln Site, Cambodia *Journal of Southeast Asian Archaeology* No.27 : 63-69

TABATA, Yukitsugu; SATO, Yuni; SOK, Keo Sovannara; SUGIYAMA, Hiroshi

2015 Preliminary Report of the Excavation of the Veal Svay Kiln in Cambodia: Feb 2013-Dec2013. *Bulletin of the Graduate Division of Letters, Arts and Sciences of Waseda University* 60-IV: 57-68.

2016 Preliminary Report of the Excavation of the Veal Svay Kiln in Cambodia: December2014. *Bulletin of the Graduate Division of Letters, Arts and Sciences of Waseda University* 61-IV: 19-35.

仏教建築史の初源へ

ー古代インドから東南アジアへの展開ー

武蔵野大学

佐藤 桂

1. はじめに

建築はその時代の技術を用い、その地域の自然条件と社会基盤の中でつくられるものであるから、建築史とは、自然と人間の歴史そのものである。しかし建築はその性質上、常に破壊と更新にさらされており、建築史研究はそのため残された僅かで断片的な手掛かりから、失われた時間を辿っていく難しい作業となる。

仏教史研究の分野においても、經典を含む圧倒的な量の文献史料や、主題をもって制作された彫刻・絵画史料に比べ、建築に関する史料は極めて限定的である。それでも、ブッダの教えがその後、アジア一帯に広く伝播していく過程において、それぞれの拠点には必ず建築がつくられ、大きな役割を担ったことは疑いないであろう。

本稿は、東南アジアの多様な仏教建築の世界を建築史的観点から紐解いていくために、まずはその初源に遡り、古代インドにおける仏教建築の萌芽とその後の展開について考察するものである。以下では、仏教誕生の時代に立ち戻り、仏教建築としての僧院、仏塔、祠堂の前史からそれぞれ振り返ってみたい。

2. 僧院（ヴィハーラ）前史

紀元前 600 年頃のガンジス川流域では、農村社会を基盤としたバラモンの支配がその上流域を占め、中・下流域では各地に複数の都市 Pura/Nagara が誕生し、発達をみせた。これら新興の都市社会では、自由な行動と経済活動のもと、既存の身分制度や祭祀至上主義を否定し、合理主義的思考を求めた新しい思想・哲学が数多く出現した（註 1）。

こうした新宗教のうち、正統派のバラモン教に対して非正統派の二大宗教と呼ばれたのが、ジャイナ教と仏教である。いずれも生きることを「苦」と捉え、そこから解脱するための方法として、出家と修業による個人の知的完成を希求した教えであった。仏教では出家者の教団は僧伽 Sangha（註 2）と呼ばれ、出家前の身分や階級にかかわらず対等な存在として、日中は放浪しながら托鉢と修行を行い、夜は仮住処で明かしていた。遊行の生活を基本とし、雨季の 3 か月間は雨安居 Vassavasa と呼ばれ、屋内にこもり、集団で修行した。

このとき拠点となったのは、洞窟や岩窟といった自然の地形を利用した空間、あるいはアヴァーサ Avasa と呼ばれた、竹や茅等でつくられた仮設の覆屋であった。信者が僧伽に建物を寄進することもあり、これはアラマ Arama と呼ばれた。ブッダが寄進を受けたアラマのうち、シュラヴァスティのそれには住居に加え、倉庫、回廊、沐浴場、東屋も備えられていたとの記録も残る（註 3）。寄進者は主に都市の住民で、とりわけ王侯や商人であったが、都市の発展・拡大とともに、その近傍に住み援助を受ける僧侶が増えはじめ、やがて、建築としての僧院（精舎）Vihara が形成されていく（註 4）。

建築としての僧院には、僧侶が個人として瞑想するための個室と、訓練（ニッサヤ Nissaya）や議論（アビダルマ Abhidhamma）、儀式（ウポーソト Upposatha、パリヴェナ Parivena、カティナ Kathina）等を執り行うための共同の空間との両方が必要とされた。そのため初期の僧院は、矩形の広間または中庭を中心に、周囲を小さな僧房が並ぶ形式をもつ。なお、古い仏典には、僧院（ヴィハーラ vihara）、平覆屋（アッダヨーガ addhayoga）、殿楼（パサダ Pasada）、楼房（ハンミヤ hammiya）、窟院（グハ guha）の 5 種の建築の存在が記されているが（註 5）、これらが具体的にどのような建物であったのか、詳細はわかっていない。

3. 仏塔（ストゥーパ）前史

ガウダマは35歳のときブッダガヤーの菩提樹の下で覚りを開き、以降、ガンジス川中・下流域で修行と布教を続けた後、80歳でクシナガラで没した。遺体は火葬され、遺骨（仏舍利）は8つに分けられ、8国の塔（ストゥーパ Stupa）に納められたという（註6）。

ストゥーパ Stupa とは、「盛り上げる」を意味するパーリ語の「stup」を語源とするとされ（註7）、土製の墳墓に由来する。ブッダ以前のストゥーパに関しては、アーンドラ州のクリシュナ川流域で紀元前8世紀頃より、死者のためにストゥーパを建立する習慣があったとの報告があり（註8）、一定の地域的広がりをもつ土着の埋葬方法であったことが窺える。つまり、地域の習慣や伝統が、後に仏教という宗教的枠組みに吸収されていったことを示唆しており、神格化された「死」をめぐるシンボルが後に崇拜の対象となっていくという意味で、キリスト教における十字架とも共通する。ブッダは自らの死を前に、あらかじめ信者らに自分の遺体を火葬し、遺灰を仏塔に安置するよう指示していたといわれ、このこともストゥーパの概念が既に共有されていたことを物語っている。

初期の仏塔は、サーンチーのマハストゥーパ（4世紀）に見られるように、伏鉢（アンダ Anda）の上に平頭（ハルミカ Harmika）を載せ、傘蓋（チャットラヴァリ Chattravali）を立てたもので、周囲にはプラダクシナのため石製の欄楯（ヴェディカ Vedika）がめぐらされた。このように、通常のストゥーパは内部空間をもたないが、ブッダの髪や爪等を納めた聖遺物塔（サリリカ・ストゥーパ Saririka Stupa）の場合は、中心に空間を有していた。

仏塔崇拜はブッダの入滅後、まずは在家信者の間に、やがて比丘、比丘尼の間に広まったとされる。初期の僧院が、後にその隣地または境内に仏塔を併設するようになったのは、こうした理由による。さらに時代を下ると、仏塔はブッダの象徴という存在を超え、「生きたブッダの肉体そのもの（サリリカ・ダット Saririka Dhat）」と考えられるようになり、仏塔建立が聖地を拡大していった。そのデザインやシルエットについては様々な伝播の経路や文化的融合もあり、仏塔のモデルとして小型のストゥーパが伝播の媒体としても機能したようである。

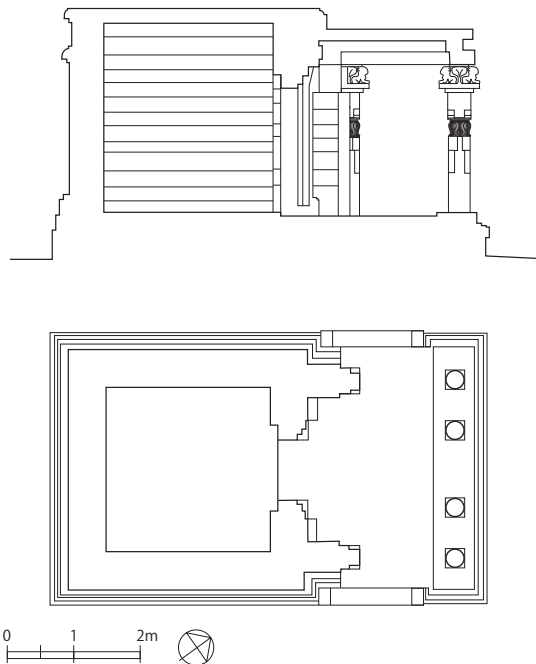
4. 祠堂（チャイティヤ）前史

偶像崇拜が禁じられていた初期の仏教では、ブッダは蓮華や菩提樹、車輪、仏塔、仏足石等で表されることを常とした。しかし、マウリヤ朝アショーカ王の時代（在位：紀元前268年頃～紀元前232年頃）に中央アジアまで拡大した仏教は、ギリシャ文化の影響を受けたヘレニズムと融合し、1世紀末頃になると、人間の姿をした仏像が誕生する（註9）。このことは、仏教建築史にも大きな転機をもたらした。

仏像の誕生以前、仏教の信仰は主に仏塔建立と菩提樹の植樹によって拡大した。菩提樹崇拜はボディガラ Bodhigara、すなわち「菩提樹の家」と呼ばれた建築類型を生み出すが、これは菩提樹を欄楯（玉垣）で囲んだ屋根のない聖域であり、菩提樹の前方には、ブッダが覚りを開いた際に坐していたとされる石製の台座が安置された。初期のボディガラは現存しないが、浮彫り彫刻に描かれた図像表現から、その平面には円形や半円形、正方形、八角形等があったことが推察されている（註10）。

これらは、聖なる場所を意味するチャイティヤ Caitya、またはチャイティヤ・グリハ Caitya-griha と呼ばれるもので、日本語では祠堂や寺院といった呼称が当てられる。デカン地方の石窟群には、矩形平面のヴィハーラ窟とともに、前方後円形平面のチャイティヤ窟が確認される、これらは石窟内に菩提樹を植えることができなかったため、小型のストゥーパが祀られたものと考えられるが、時代を下り、5世紀頃になると、仏像を祀るチャイティヤ窟も登場した。

地上の建築においても同じく5世紀頃から仏像を安置する祠堂が登場するが、これは当時のインドにおいて、神像を祀るヒンドゥー教やジャイナ教の祠堂とほぼ変わらないものであったようである。現存する最古



のボディガラは、グプタ朝期の建立とされるサーンチーの17番寺院（5世紀）（図1）であり、正方形平面の祠堂正面に4本の列柱が支えるポーチが取り付けその形式は、ティガワールのヒンドゥー教寺院であるカンカーリー・デヴィー寺院（5世紀）と酷似することが指摘されている（註11）。このことから、仏教が仏像という崇拜対象を獲得して以降、建築としての祠堂は、他のインド系宗教とほぼ区別なく発展したことが窺える。

図1 サーンチーの17番寺院
上：断面図
下：平面図

5. 僧院、仏塔、祠堂、それぞれの東南アジアにおける展開

以上で見てきたように、仏教建築としての僧院、仏塔、祠堂は、それぞれ異なる背景と機能的要求から生じたものであったことがわかる。これ以降、仏教建築がアジア地域に伝播していく中でも、それぞれの建築類型の変容のメカニズムは同じではない。

例えば僧院は、ヴィハハラ窟と同様の中庭・広間型平面が煉瓦造としても伝わったことは、パキスタンのタクト・イ・バヒ（紀元前1世紀頃）、タキシラのモーラ・モラドゥ（2～5世紀頃）、ジャウリアン（5世紀頃）等で確認できる。ナーガールジュナコンダ（3～5世紀）やナーランダ（5世紀～13世紀）といった大規模僧院群からは、その建築モデルがミャンマーにも伝わったと考えられており、ペイタノのKKG2（4世紀）、バガンのソーミンヂー No.1147（11世紀）等に同形式の僧院を見ることができる。ただし、このような煉瓦造僧院は、ミャンマーの碑文では「外国の（＝インドの）僧院」を意味する「クラー・クロン」と記され、あくまでも外来の建築類型であったことが了解される。ミャンマーの僧院は以後、現地の住宅と同じく木造が主体となり、バガン時代の煉瓦造僧院は廃墟として残されることになる。木造建築文化圏における僧院建築の展開には、同様の傾向があったことが指摘できる（註12）。

他方、仏塔は、紀元前3世紀頃にスリランカに伝わり、ダゴバ Dagoba と呼ばれるが、これは dhatu（遺物）と garbha（子宮）を組み合わせた語であったという。古い仏典には、ダゴバには壺型、鐘型、泡型、稲積型、蓮型、アムラ型（インドスグリ）の6種があったと記され（註13）、さらに法輪状の円形基壇に載せて欄楯をめぐらせ、全体をドームで覆ったヴァタダージ Vatadage も登場する。

スリランカからミャンマー、タイ等の各地に伝わった仏塔は、それぞれの地域で独自の形状やプロポーションを創出し（註14）、その一方で、西域を経由して中国に伝わった仏塔は、木造の層塔状となり、ダゴバ Dagoba が転じてパゴダ Pagoda という呼称も誕生する（註15）。ここから朝鮮半島を経て、日本に伝わった卒塔婆（＝塔婆・塔）はストウパを語源とするが、これに対して東南アジアの仏塔は、ミャンマーではゼディ Zedi、タイではチェディ Chedi、インドネシアではキャンディ Candi というように、チャイティヤ Caitya に由来する呼称が多い。あるいは、スリランカのヴァタ Vatta、ラオスのタート Tat、タイとカンボジアのワット Wat 等、サンスクリット語由来の寺院という呼び名も一般的であるほか、ミャンマーのパヤー Paya、タイとカンボジアのプラサート Prasat 等、上述したパサダ Pasada に似た呼称もあり、これらの言葉の整理は今後の課題

である。

仏塔はまた、方形基壇に載せられることで、新たな建築形式が展開をみせる。方形基壇の各辺を張り出した十字形基壇の外側に多数の陶板を嵌め込む形式は、シュリークシェトラのマテーギヤゴンやキンバーマウンド（5～7世紀）、ビハール州のヴィクラマシーラ（8世紀）、パハルプールのソーマプラ（8世紀半ば～9世紀）、バガンのアーナンダ（11世紀）等に確認され、これらの関連も指摘されている。

祠堂に関しては、ブッダガヤーのマハボディ寺院（5世紀）のように、祠堂上部に方塔（シカラ Shikhara）を載せ、さらに4隅に小塔を載せた5点型（パンチャヤタナ Panchayatana）に発展する。ミャンマーではシュリークシェトラを経てバガンへ、インドネシアやカンボジアではヒンドゥー教と結びついてチャンディ・セウ（9世紀）やアンコール・ワット（12世紀）といった大規模寺院の建築表現にも繋がっていったようである。幾重もの環濠や周壁で空間を区切ることで中心性を高め、高い基壇を重層させることで垂直性を増し、中心軸と垂直軸との両軸が交差する究極点に、天と地を繋ぐ宇宙の中心としての祠堂が掲げられた。これらは既に仏教を超え、インド的宇宙観の中での須弥山、メール山の象徴だけにとどまらず、各地の山岳信仰とも結びついた宗教建築の一つの完成形とみることができるだろう。

6. おわりに

仏教は発祥地インドでは11世紀頃から衰退をはじめ、13世紀には消滅する。その一方で、周辺諸地域においては、僧院は集団生活の場として、仏塔は象徴的造形として、祠堂は神格化された偶像の住処として、人間の創造性を喚起し、それぞれの地域的文脈の中で建築による世界創造の可能性が追求されてきた歴史が垣間見られる。この多様でダイナミックな仏教建築史の世界が、いつか描き出されることを望みたい。

註

1. ジャイナ教を唱えたヴァルダマーナ、仏教を唱えたガウダマ・シッダールタを含む「六十二見」の思想家が現れた。なお、ここで62とは多数を意味する。Cf. 辛島, p. 58.
2. はじめは男性のみの教団（比丘）であったが、のちに女性の教団（比丘尼）も認められた。
3. ブッダはラージギールやヴァイシャリのアンバパーリーヴァナ、シュラヴァスティ等のアヴァーサで雨季を過ごしたこと、シュラヴァスティ、カウシャンピ、ラージギールでアラマの寄進を受けたことの記録がある。カウシャンピでは銀行家ゴーシタが寄進したゴーシタラーマ、ラージギールでは医師ジヴァカが寄進したジヴァカラマがあった。Cf. Vikram, p. 27.
4. 溝口明則「初期仏教の展開と僧院の成立」、中川武編著『アジア仏教建築』丸善出版, 2023, pp. 3-4.
5. パーリ仏典で出家修行者が属する僧伽内の作法や規則を記した書物である臥坐具健度『チュッラ・ヴァッガ Culla-vagga』『マハー・ヴァッガ Maha-vagga』に記述がある。Cf. 坂詰秀一「初期伽藍の類型認識と伽藍構成における僧地の問題」立正大学文学部論叢 63 (1979)
6. マガダ、ヴァイサーリーのリチャヴィス、カピルヴァストウのサキャ族、ラーマグラマのコリヤ族、アッラカカッパのブラーヤ族、ヴェータドヴィーパのバラモン族、パヴァとクシナーラのマラ族の8国。遺骨はそれぞれストウーパに安置され、さらに2つのストウーパが遺骨と遺灰を納めた骨壺の上に建てられた。
7. 諸説あり。
8. Padma & Barber, Buddhism in the Krishna River Valley of Andra, p.20. Cf. Wayne, p.7.
9. 仏像の誕生を2、3世紀とする説もある。
10. ラート、マトウラー、サーンチー、アムラヴァティー等から発見された11の浮彫に描かれたボディガラの表現に基づく。Cf. Lall, p. 23.
11. 神谷, p. 351.
12. ペイタノーがナーガールジュナコンダから直接影響を受けたとする従来の説をWayneは否定している。なお、僧院に関するもう一つの重要な類型として、ウポーソトの儀式のための布薩堂があり、セーマと呼ばれる境界石で結界が張られる特徴をもつ。
13. Cf. Lall, p.17.
14. スコータイとラオスにおける仏塔の変容に関しては、溝口明則「ワット・マハタートの仏塔 スコータイの仏舎利」「タート・ルアン」の仏塔 伝統と革新を融合する、中川武編著『アジア仏教建築』丸善出版, 2023 (pp. 55-63, 129-137) に詳しい。
15. パゴダ pagoda の語源については、ペルシア語のプトカド but-khdah、タミル語のパガヴァド、ポルトガル語のパゴデー pagode 等の諸説がある。

主要参考文献

- 神谷武夫『インドの建築』東方出版, 1996
- 神谷武夫『インド建築案内』TOTO 出版, 1996
- 辛島昇編『南アジア史』新版世界各国史 7, 山川出版社, 2004
- 坂詰秀一「初期伽藍の類型認識と伽藍構成における僧地の問題」, 『立正大学文学部論叢』63 (1979)
- 高田修「僧院と仏塔ーインドにおける伽藍の形成ー」, 『仏教芸術』69 (1968)
- 塚本啓祥「インドにおける仏教伽藍の形成」, 『法華文化研究』1 (1975)
- 中川武編著『アジア仏教建築』丸善出版, 2023
- F. D. K. Ching et al, *A Global History of Architecture*, Third Edition, New Jersey, 2017
- S. Dutt, *Buddhist Monks and Monasteries in India*, London, 1962
- V. Lall, *Architecture of the Buddhist World*. The Golden Lands. Cambodia, Indonesia, Laos, Myanmar, Thailand & Vietnam, Kuala Lumpur: JF Publishing, 2014.
- D. Mitra, *Buddhist Monuments*, Calcutta, 1971
- W. Morris, "Influential factors in the design of religious monuments in ancient Bagan"
- H. Sarkar, *Studies in Early Buddhist Architecture of India*, New Delhi, 1966

はじめに

スコタイの中心寺院、ワット・マハータート
の中心には、塔身上の伏鉢部の形状が蓮の蕾に見えるスコタイ独特の仏塔（蓮蕾形仏塔）を中心に 8 方向に小仏塔が配される（図 01）。この中心仏塔および 8 方向の小仏塔は、ワット・シーチュム刻文【資料 1-1】などの記録から（註 1）、改修・建造されたものであると考えられている。また、同刻文にはスリランカから請来した仏舎利を塔内におさめたことが記されている。蓮蕾形仏塔は、スコタイを中心に、シーサッチャナーライ、カムペンペット、またチェンマイにも建立されたことが、現存する仏塔や古写真から知られるが、その建造時期はリタイ王（在位 1347-1368/74）在位期およびその後の短い期間に限られている。



図 01 ワット・マハータート中心仏塔

本稿では、中心寺院ワット・マハータートを取り上げ、特にリタイ王が関わったと考えられる蓮蕾形仏塔建立に着目し、スリランカ請来の仏舎利安置と蓮蕾形仏塔の建立について刻文史料と造形美術の関係について整理し、それを踏まえて 14 世紀、15 世紀における造塔造仏の理念について検討したい。

1. ワット・マハータート

スコタイ王朝は、スコタイ、シーサッチャナーライの両都市を中心に、13 世紀から 15 世紀まで約 200 年間栄えた。スコタイの都城跡は二つの区域があり、旧都城とされる 600 メートル四方の環壕区域と、東西 1810 メートル、南北 1400 メートルの環壕区域である。ワット・マハータートは、後者の中心やや南に位置し東面する。200 メートル四方のレンガ製の周壁が残る。

境内の中心に、方形基壇上に中心仏塔とその 8 方向に小仏塔を配し、回廊部は東側に大列柱を残す大堂宇ウィハーンルアン（註 2）が、北、西、南側には小堂宇跡の基壇が接続する（図 02）。中央の仏塔の左右後方には、立方体建造物モンドップを配し、それぞれ高さ 9m の 2 軀のプラ・アッターロットと呼ばれる仏立像が安置される。そのほか布薩堂はじめ、境内には数世紀にわたって建てられたと考えられる建造物が密集する。

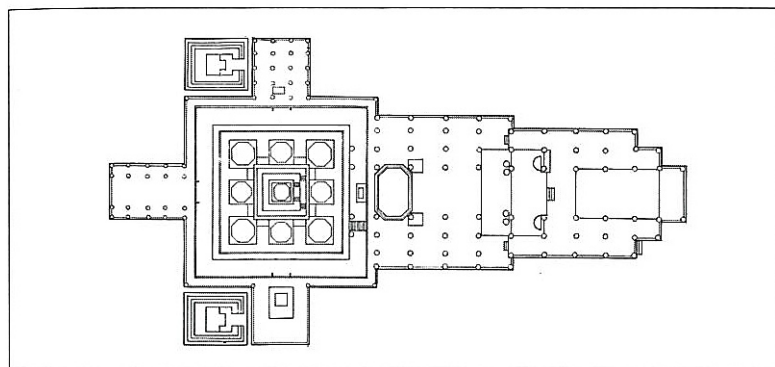


図 02 ワット・マハータート図面（部分）

1-1. 中心仏塔（蓮蕾形仏塔）

中心仏塔は、重層の方形基壇上に須弥座、正方形の4隅を凹凸状に欠込み20の出隅をもつ多角形台座を据え、同じく20出隅を呈する塔身に伏鉢部、相輪、尖頭（ブリー）が載る（図03）。伏鉢部が蓮の蕾形を呈し、頂まで尖塔形であることから、このタイプの仏塔を現地では「蓮蕾形仏塔（チェーデー・ソノヨートドークブアトウム）」もしくは「稲穂形仏塔（チェーデー・ソンプムカーオビン）」と称するが、本稿では「蓮蕾形仏塔」に統一する。この独特な形状の仏塔はスコタイ独自の仏塔であることは知られているが、基壇を高く作る点は北タイのランナー、出隅のある塔身の形はクメール建築、伏鉢上に平頭（バンラン／ハミルカー）を作らない点はバガン時代の仏塔と部分的に共通するなど、各地の建造物の要素が取り入れられ、スコタイの地で創出された形式の仏塔といえよう。

蓮蕾形仏塔の4方4隅には、2種類の仏塔が配されている（図04）（図05）。4隅の仏塔は（図04）、方形基壇上に20出隅台座の方形塔身、塔身の4面に尖頭形アーチの仏龕をつくる。塔身の上には、8角露盤の伏鉢を中心に4隅には尖塔形小仏塔を置く。中心の伏鉢は下部に蓮弁をめぐる釣鐘形である。この形式は、北タイのハリブンチャイ、チエンセーンの仏塔にも見られることから、本来は釣鐘形を3段重ね、頂まで尖頭形をなしていたと考えられている。4方塔身に龕を設け5つの尖塔形の頂（ハーヨート）を作る仏塔は「チェーデー・ソンプラサートハーヨート」と称され、中心仏塔の4隅に配された仏塔は、このタイプの仏塔にあたる。

一方、4方に配されている仏塔は（図05）、それぞれが中央仏塔の基壇に接している。方形塔身の3面に仏龕をつくり、龕上部には中心にカーラ、両端にマカラもしくはキンナラを表わした尖頭3弁アーチ状の龕飾り（スム・ナーナーン）をつくる。塔身上部に短形にした塔身を重ねる重層形で4隅には小仏塔をつくらない。頂部は欠失し定かではないが、タイではプラーンと称されるクメール式祠堂の形式と言える。

中心仏塔とその周囲に配された8基の仏塔が建つ基壇の周囲には、168 軀の合掌遊行する僧形像が巡らされている。中心仏塔および8基の仏塔の下辺がこの基壇に隠れていることから、増築部分であることがわかる。

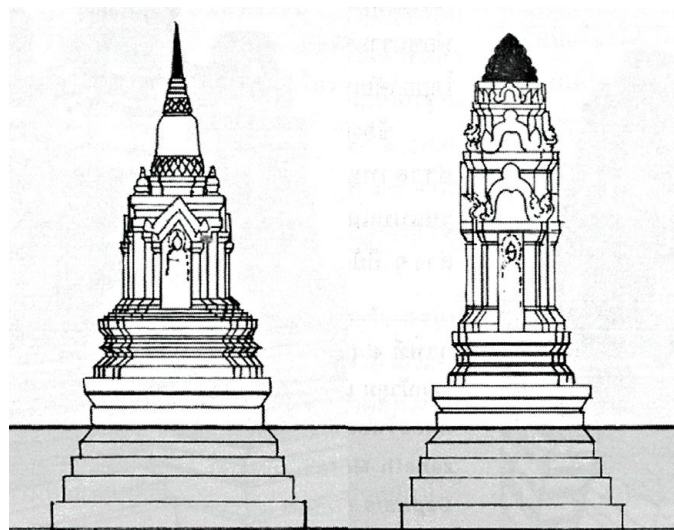
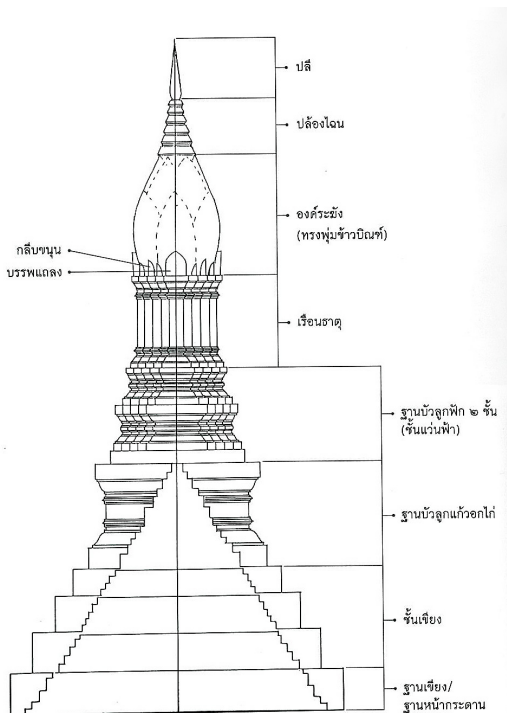


図04 4隅の小仏塔図

図05 4方の小仏塔図

図03 蓮蕾形仏塔図

1-2. 仏堂・精舎（ウィハーン）

中心仏塔東側に位置する堂宇（図06）（図07）はウィハーンルアンと称される。仏塔回廊部に接続する奥行9間の大堂宇である。ウィハーンは、出家修行者の僧院、精舎を意味するサンスクリット語のヴィハーラを語源とするが、タイにおけるウィハーンは、仏像を安置する仏堂であり、説法を行う場として出家者、在家者の修道施設としての機能を有する。堂宇入口から奥に大列柱が並び、中央に方形の壇（3間2間）、最奥（西）に台座（幅8.16m、奥4.59m）が残る（図08）。ワット・パーマムアン刻文〔第4基〕および〔第5基〕には、リタイ王が、スリランカから大僧正を招請した1361年、大僧正がワット・パーマムアンで安居入し、安居があけると王は布施を行い、仏陀と同じ大きさの仏像を鑄造し、スコータイの中央、仏塔の東に安置したことが記される。この記録から、中心仏塔の東にあるウィハーンルアンの建立はリタイ王在世時期であり、本尊を安置していた台座が上述の台座だと考えられている（註3）。

ウィハーンルアンのさらに東には、仏陀坐像が坐す堂宇が残る。高い基壇をつくることなどから、アユタヤ期に増築されたウィハーンであることがわかる。

1-3. 仏陀像

ワット・パーマムアン刻文〔第4基〕および〔第5基〕に記される1361年造立の仏像は（註4）、ワット・マハータート中心仏塔の東、ウィハーンルアンに安置されていた。これに当たる仏像は、現在、バンコク都庁前、ワット・スタットのプラウィハーンに安置されているサーカヤムニー仏である（註5）。ラタナコーシン朝草創期、ラーマ1世王の命でスコータイからバンコクに運ばれたと伝えられている（註6）。

サーカヤムニー仏は、高さ約8m（像高約6m）、膝張6.25mのブロンズ像である（図09）。頭部は大きく、卵形の顔は、伏し目で鼻梁がやや長く、口角が上がった小さい口を作る。肩幅は広く、脇腹をぐっとすばめ、右手は降魔印を結び、左手は腹前掌を上に向け、左足の上に右足を乗せる勇猛坐の形で坐している。なお、本像はラーマ2世王期に大きく改変されている。当初の仏頭よりも大きく鑄直し、触知印を結ぶ指先は、元は第



上左 図06 ウィハーンルアン
（ワット・マハータート）

上右 図07 ウィハーンルアン 奥に本尊の台座が見える
（ワット・マハータート）

左 図08 本尊の台座
（ワット・マハータート ウィハーンルアン西側）

2 指から第 5 指の長さは異なっていたが、4 指の長さを揃えるなど改変された（註 7）。なお、4 指の長さを揃える形式は、ピサヌロークのワット・プラシーラタナマハータートの西側ウィハーンに安置されているチンナ



図 09 サーカヤムニー仏 ワット・スタット

ラート仏（図 10）、またかつて同寺の北側ウィハーンに安置されていたチンナシー仏（図 11）、南側ウィハーンに安置されていたサーサダー仏などに見られる特徴である。これらの仏像は、リタイ王期、ピサヌロークに遷都された 1362 年以降の造立と考えられており、ピサヌローク派と呼ばれる。一方、1361 年造立のサーカヤムニー仏は、スコータイとシーサッチャナーライを中心に造立された仏像群、タイ語で主流派を意味する「ムアットヤイ」の仏像と位置付けられるものの（註 8）、実際には、頭部を鋳直した現状からは、その判別は難しい。



図 10 チンナラート仏 ワット・プラシーラタナマハータート



図 11 チンナシー仏 ワット・ボウォーンニウェート

2. 刻文史料から見る造寺造仏

スコータイの刻文史料の中で、その第 1 基（以下、「第 1 刻文」と記す）として知られるラームカムヘーン王刻文（註 9）は、スコータイ王朝第 3 代ラームカムヘーン王（在位 1275-99/ 1317）が建立したとされ、その内容からスコータイ時代の繁栄期を記した代表的な史料として知られる。1833 年、ラーマ 4 世王（在位 1851-68）が即位前の僧侶時代に、スコータイのワット・マハータート南側の丘に祀られていたものを、バンコクに運んだと伝わるが、近年、本刻文はラーマ 4 世の手によるものではないかとの説が出され（註 10）、長く議論が続けられている。本刻文については、吉川利治氏（1996）、赤木攻氏（2019）によって日本語全訳がなされているため、本稿の資料編からは割愛したが、第 1 刻文にある造寺造仏について確認しておきたい。なお、ここではシリントーン人類学研究所による刻文データベースと照らし合わせた上で、赤木氏の翻訳（註 11）を引用する（文中にある（）□内は、赤木氏による記載）。

2-1. ラームカムヘーン王刻文（第1基）

第2面 23-33行

「スコータイの中心(城内)には、数々の仏像安置所(仏殿)がある。黄金仏像、アッターロット仏像、大型仏像、中型仏像などがある。また、大きい仏殿もあれば、中位の仏殿もある。プークルー[師僧。現在のプラクルーか]という僧位の僧侶がいる。また、ニサイムット[5回の法臘を経た僧]、テーラ[長老。10回の法臘を経た僧]、マハーテーラ[大長老。20回の法臘を経た僧]といった僧侶もいる。スコータイの西側には、アランジックがある。ラームカムヘーン王は、大長老で賢人の大僧正に寄進を行なう。(大僧正は)三蔵を完全に修め、このクニの他のどの僧侶よりも聡明であり、シータムマラート[現在のナコーンシータムマラート。セイロンから仏教が伝来した町と言われている]のクニから出てきている。アランジックの中には、大きくて長方形で、極めて高く華麗な1つの仏殿がある。(そこには、)プラアッターロット仏像が立っている。スコータイの東側には仏殿があり、プークルーがいる。」

第3面 1-5行

「スコータイの北側には、市場またはバザールがある。アッチャナ仏像、僧侶のための寓居、ココヤシ林、ビンロウ林、カヌン林がある。田畑もあり、居住地があり、大小の村が存在する。スコータイの南側には、庫裏や仏殿があり、プークルーが住んでいる。また、水溝がある。」

第4面 1-8行

「大暦1207年猪年(1285年)、国王は仏舎利の発掘を命じた。だれもが仏舎利を見ることができた。仏舎利に対する崇拝のための祭儀は1ヶ月と6日に及んだ。そして、仏舎利をシーサッチャナーライの中央に埋め、その上に仏塔を建設した。その建設には6年を要した。仏舎利塔を囲む石堀が造られ、3年間で完成した。」

以上の第1刻文抜粋からは、「スコータイ城内」およびその周辺の仏教堂宇や仏像の様子がうかがえる。アッターロット仏という名は、数字の18を意味する「atthārāsa」に由来する。古代の尺度単位である1肘は約50センチであるから、18肘は約9メートルとなる。本刻文にある「城内」のアッターロット仏は、ワット・マハータート中心仏塔の左右後方にあるモンドップに安置された仏立像を(図12)、スコータイの西側「アランジック」(森林住僧、アランニク)のそれは、ワット・サパーンヒンの仏立像(図13)が、該当するのではないかと考えられている。



図12 アッターロット仏
ワット・マハータート



図13 アッターロット仏
ワット・サパーンヒン

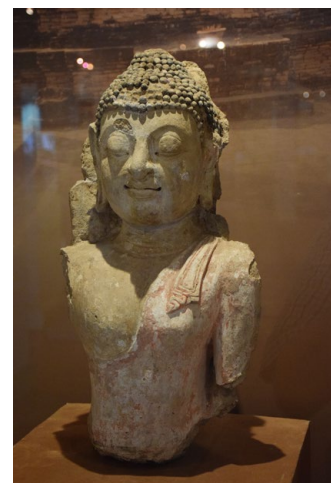


図14 ブッダ像
ワット・プラパーイルアン出土
ラームカムヘーン王国立博物館



図 15 ワット・チャンローム シーサッチャナーライ



図 16 ワット・チャンローム塔身仏龕

刻文にある「アッチャナ仏」は、スコータイ北側にあるワット・シーチュムの仏坐像に同定されているが、修復前の 1891 年の古写真から検討する限り、やや細長い卵形の頭部や大きくはった両肩などは、14 世紀初頭に遡るスコータイ初期の仏像 (図 14) とは異なる。また、大仏造立の傾向は 14 世紀半ば以降であるため、ワット・シーチュム仏坐像は「古典様式」もしくは「ムアットヤイ (主流派)」期の仏像とされている (註 12)。スコータイに限らず仏像、建造物共に修繕が重ねられることは常であり、古写真をもって当初の造立時期は断定できないものの、同仏像が安置されている堂宇モンドップ周壁に設けられた隧道内のジャータカ線刻は改めて後述するが、その美術様式、タイ文字年代の検討から (註 13)、14 世紀半ばから 14 世紀後半に位置付けられる。このことから、ワット・シーチュム仏造立は同時期もしくは、それ以前の造立と考えられる。

造寺に関しては、第 1 刻文に記載される仏舎利埋納と仏塔建立の場所がスコータイではなくシーサッチャナーライであることから、同地のワット・チャンローム (図 15) が、基壇に象の彫刻を巡らせたスリランカ式仏塔として、第 1 刻文に記載される仏塔であると考えられていた。しかしながら、1984 年から 85 年にかけて実施された同寺跡の発掘調査によって、最後の居住跡と認められる層位から中国、元時代 (1297-1368) の焼きものが出土したことなどから同寺の建立は 13 世紀末以降であり、塔身仏龕 (図 16) の仏像形式や仏塔上部の平頭と相輪の間に遊行像を巡らすなどの特徴から、14 世紀半ば頃の建立であると結論づけられた (註 14)。ただし、次節に見るように、シーサッチャナーライ東部には 13 世紀建立と考えられる仏教寺院が残っている。

2-2. ワット・シーチュム刻文 (第 2 基) 【資料 1-1】

ワット・シーチュム刻文 (第 2 基) は、上述の仏坐像が安置される方形堂宇モンドップの外壁に設けられた隧道内で見つけられた。スコータイ王族出身のシーサッター大僧正に関する刻文史料である。スコータイとスリランカの関係を知る上で欠かせないだけでなく、パームアン王家に関する記録としてはほぼ唯一の史料であり、パームアンがヤショーダラプラ (アンコール) の王から、欽錫名と勝利の剣、王女を賜ったことなどが記されており、スコータイ成立期におけるクメールとの関係や、パームアン王統の位置付けを物語る刻文としても重要なものである。プラルアン王家第一代のバーンクラーンハーオ (シーイントラーティット) の、スコータイ統治を支援した友人としてパームアンの事績が記されているが、欽錫名と勝利の剣、スコータイをバーンクラーンハーオに譲り、パームアン王統のシーサッターが出家したのは、政治的な力関係が背景にあったと考えられている (註 15)。その制作年代については、刻文中にリタイ王を指すと考えられる「タンマラーチャー」 (第 1 面 37-38 行)、「シーイントラーティット王の孫の一人、その名をタンマラーチャー・ブン、徳を知り、



図17 ワット・プラシーラタナマハータート チャリエン

法を知り、知力を備えた・・・」などの記述や、子音文字の表記法などから、リタイ王時代の他の刻文と同時期のものだと考えられている。

第1面8行から20行にかけては、シーナーオトムが、シーサツチャナーライの水辺に、「プラシーラタナマハータート」を建立したことが記されている。シーナーオトムは、プラルアン王家シーインタラーティット王(在位1220年-1238年)の義理の父、パームアン王家パームアンの父にあたることから(【資料3-2王統図】参照)、その建立時期は13世紀初頭であることがわかる。水辺に建立されたマハータート、これはシーサツチャナーライのチャリエンにあるワット・プラシーラタナマハータートである(図17)。現在も蛇行するヨム川に囲まれた区画に東面して建っている。修繕および改築は数世紀におよぶため、バイヨン期の四面祠堂のミニチュアをあしらった塔門、ラテライト製の周壁、スコタイ中期14世紀後半から15世紀初頭の造立と見られる遊行像(図18)やナーガ上のブッダ坐像など、寺域には様々な時期の造形が残る。現在の中心仏塔はアユタヤー初期の尖塔形仏塔(プラン)であるが、塔身内には蓮蕾形仏塔のミニチュアが祀られている(図19)。その大きさや形状から見るに、本来の中心仏塔ではないにせよ、中心仏塔の塔身に、蓮蕾形仏塔のミニチュアが安置されてきたということは、それがブッダないし仏舎利の象徴として見做されていたと言えるだろう。

ワット・チャーンロームが建つ現在のシーサツチャナーライ遺跡公園から東方1キロから2キロにあるチャリエンという地域には、上述の寺院のほか、バイヨン期のクメール祠堂が残るワット・チャオチャンや、ドヴァーラヴァティー期の集落跡などが確認されており、プラルアン王統が治めたスコタイ以前の社会的中心の一つだったと言える。

ところで、本刻文にはもう一つマハータート(註16)が建立されたことが記されている。第1面36から41行には、シーインタラーティットの息子、ラームラート王(ラームカムヘーン王)がシーサツチャナーライにプラシーラタナマハータートを建立したとある。これは、先に記したチャリエンのマハータートではなく、チャリエンの西の地域、つまり現在のシーサツチャナーライ遺跡公園を中心とするエリアに建立された寺院だったと考えれば、第1刻文



図18 ブッダ遊行像
ワット・プラシーラタナマハータート チャリエン



図19 蓮蕾形仏塔のミニチュア
ワット・プラシーラタナマハータート チャリエン

に記されているシーサッチャナーライの中心に仏舍利を埋納するために建立された仏塔は、第2刻文のそれと一致する。しかしながら、第1刻文にある仏舎利の発掘については記されていない。第1刻文によればラームカムヘーン王のマハータート建立は大暦1207年猪年（1285年）、それ以前に仏舎利を納めたマハータートは、スコタイだったのか、それともチャリエンのマハータートだったのかは定かではない。

第2面には、シーサッター大僧正の放生会や仏塔修繕などの積徳について、インド、スリランカにおける仏跡巡礼と聖遺物請来、スコタイのワット・マハータートの修繕、仏舎利の埋納と、仏舎利のさまざまな奇跡について記されている。ワット・マハータートの中心仏塔建立についての記述に注目すると、シーサッター大僧正は、シーハラ（シンハラ）を去る際に一群の平信徒を連れてきたこと、スコタイにレンガを積み上げ9つの聖なるものを造り、シーハラのマヒヤンガナ大仏塔からもたらした2つの仏舎利（仏牙舍利と喉仏舎利）を塔内におさめた、とある（40行目から45行目）。9つの聖なるものとは、スコタイのワット・マハータートの中心仏塔およびそれを囲む小仏塔8基を指すと考えられており、この刻文内容に従えば、中心仏塔と4辺4隅の小仏塔は、同時期に建立されたことになる。

2-3. ナコーンチュム刻文【資料1-2】

ナコーンチュム刻文（第3刻文）は、かつてカムペンペットのシヴァ祠堂にあった刻文で、ダムロン親王によって同祠堂からシヴァ神像とともにバンコクに運ばれた。元はカムペーンペット遺跡とピン川を挟んで西岸に位置する地域、ナコーンチュムのワット・プラボロマトート南方にあったと伝わっており、そこには、蓮蕾形仏塔、ワット・チェーディークラントウン（図20）が残っている。

本刻文によると、1357もしくは1358年、リタイ王は、カムペンペットのナコーンチュムに、スリランカから請来した真舍利をおさめるために仏塔を建立し、仏塔の後側に聖菩提樹を植えた。その舎利の正当性を伝え、仏舎利埋納から99年後に三蔵は失われ、本生譚を暗唱できるものもいなくなり、1000年後には戒律を知る僧侶はいなくなるが、真舍利は残るということ、正法の世にあるうちに急ぎ功德を積むべきことなどを伝えている。このことから、スコタイにおける末法思想がうかがえるとともに、舍利信仰と具体的な積徳行としての造寺造仏が増大していったものと考えられる。また、本刻文の第2面には、リタイ王がスリランカのスマナクータ山上の仏足跡を写させ、4つの山頂に仏足跡を安置させたことが記されている。

次節に見るワット・パーマムアン刻文【資料1-3】によると、リタイは副王として1339年から1347年の間、シーサッチャナーライを統治し、王は名高い高僧から三蔵について学んだことが記される。リタイ王がスコタイで王位に就く前のこの時期の著作といわれる『トライプーム（三界経）』は、「欲界」「色界」「無色界」という仏教的宇宙を構成する世界について説かれており、「欲界」、特に人間界以下の地獄について具体的に記述される。『トライプーム』はその巻頭と巻末に典拠とした資料が列举され、その原典資料研究から約30種類の三蔵経義疏、復註がもとになっていることが知られ（註17）、石井米雄氏は、その中に独立弥勒文献であり「終末論」を記した『未来史』も含まれていることを指摘している（註18）。少なくとも14世紀前半のスコタイ、シーサッチャナーライには、数多くの経典が伝わり、その内容を教えることのできる高度な知識を持った学僧がいたことがうかがえる。



図20 ワット・チェーディークラントウン ナコーンチュム

2-4. ワット・パーマムアン刻文【資料 1-3, 4, 5, 6】

ワット・パーマムアン刻文は全部で4基確認され、すべてリタイ王の事績について記される。本刻文については、吉川利治氏によって詳細に紹介されている。クメール文字、クメール語の第4刻文(SKh. 3)、タイ文字、タイ語の第5刻文(AY. 1)クメール文字、パーリ語の第6刻文(ST. 4)、タイ文字、タイ語の第7刻文(SKh. 5)の4基は全て4面体である。ワット・パーマムアンは、スコータイ都城の西、約1キロにある寺院跡で(図21)、リタイ王がスリランカから大僧正を招くにあたりマンゴー林(パーマムアン)に建てられ



図21 ワット・パーマムアン

たと伝わる。また、大僧正を招請した1361年の安居明けに、スコータイの中心仏塔の東側に仏陀と同じ大きさの仏像を鑄造して安置したことが第4基および第5基に記される。1361年造立のこの仏像は、上述の通り、ワット・マハータート中心仏塔の東、つまりウィハーンルアンに安置されていたサーカヤニー仏である。同じく第4基および第5基には、リタイ王は宮殿に安置された黄金仏の前で受戒し、沙弥として出家したとある。

第5基には、この寺域はかつてラームラート王(ラームカムヘーン)がマンゴー林とし、リタイは三蔵經を学んだ後、祖父(ラームカムヘーン)や父(ルータイ)に代わってシーサッチャナーライ、スコータイの王として即位したこと、王者の十正道護持によって民を慈しむ慈愛王としてマハータンマラーチャーティラートの称号を得たことなどが記されている。また、「王は他人の米を貪らず、他人の財を欲しがらない」「捕虜として捕らえた者であっても殴ったり殺すことはない」などの文言は、第1刻文(ラームカムヘーン王刻文)にもそっくり見られることから(註19)、リタイ王の存在は、理想とするラームカムヘーン王の正当な継承者として本刻文中に記されたと言える。

クメール語の第4刻文には、リタイが三蔵について高僧から学んでいたことのほかに、1349年にマンゴー林にあるマハーカセート神殿にシヴァ神、ヴィシュヌ神像を安置したこと、バラモンから太陽暦、太陰暦を学び自ら新たな暦を発案したことなど、王がヒンドゥー教にも通じていたことを伝えている。それぞれの言葉で記された刻文は、タイ族、クメール族それぞれの民に王の功績を伝える役割を担っていたと言える。

パーリ語の第6刻文には、仏教王としての統治について具体的に記され、王として守るべき十の法、さらに十波羅蜜をなす仏法王は菩薩となり、未来に弥勒仏として出現することが記されている。

タイ文字タイ語の第7刻文は、表面の摩滅が著しく、判読できない箇所が多いが、リタイ王の出家とその時、大地が揺れ動いたことが読める。第4面は部分的にしか確認できないが、それによると末法の時代における危機について語られている。

2-5. チュタームニ大僧正金葉刻文【資料 1-7】

リタイ王が1361年に、「マハーサーミーサンカラート(大僧正/法王)」を招き、ウィハーンルアンに大仏を安置してから、15年後の1376年銘の金葉である。チュタームニ大僧正が、ワット・マハータートに、ウィハーンを建立したこと、仏舍利(プラタート)とさまざまな素材で作られた仏像を安置したことが記されている。タイ語の部分については、スコータイ期のタイ文字で、パーリ語についてはランナーのタム文字によって記されている(註20)。この金葉は、布薩堂本尊の台座部分から見つかったというが、この刻文が記すウィハーンは金葉が発見された布薩堂のことなのか、寺院内のどの堂宇なのか、または他の寺院のことを記しているのかは不明である。しかしながら、仏舎利の安置、銀や金や象牙製の仏像を安置するだけの力を持った「ソムデッ

トマハーテラ（大僧正）」によるものであるから、中心寺院のワット・マハータートに建てられた建造物のいずれかのことではないかと考えられる（註 21）。

ワット・マハータートからは、別の金葉も見つかっている。1384 年銘（仏暦 1927）の金葉（第 94 基）には、プラマハーサンカラート（大僧正 / 法王）がタンマラーチャー 1 世（リタイ王）の遺骨を安置した仏塔を修繕し、仏塔の 4 辺に新たな仏塔を増築したことが刻まれている（註 22）。ワット・マハータート中心仏塔の南側、第 16 号仏塔の基壇の特徴が、リタイ王期に多く建立された蓮蕾形仏塔の特徴を有すること、また寺院内で中心仏塔をしのぐ規模の仏塔であるため、金葉に記されるリタイ王の遺骨を納めた仏塔に相当すると考えられている（註 23）。

2-6. ワット・アソーカーラーム刻文【資料 1-8】

ワット・アソーカーラーム刻文（第 93 基）は、スコータイ都城壁東南隅から南に 800 メートルに位置する寺院跡で見つかった。第 1 面にタイ文字タイ語、第 2 面にクメール文字パーリ語が刻まれている。タンマラーチャー 2 世の正妃であるシーチュラーラックが、王と親族の菩提を弔い、1399 年にワット・アソーカーラームに仏舎利を埋納し仏塔を建立したことが記される。寺院創建にあたって王妃は大僧正ソーラパンカテラを招いて祈願を行ったとある。大僧正ソーラパンカテラは、第 2 面のパーリ語ではプッタサーコンという名も併記されており、グリスウォルド氏とプラスート氏は、ワット・チャーンローム刻文（パノム・サイダム刻文、第 106 基、STh. 16、1384 年）に、プッタサーコン大僧正という名で記されるスリランカから来た僧侶と同一人物であろうとしている（註 24）。ワット・チャーンローム刻文は、リタイ王の乳母の夫と思われるパノム・サイダムによって作られたものである。サイダムがリタイ王に倣って出家しリタイ王の教団に入り、王が崩御したのちに入った教団が、プッタサーコン大僧正の教団だった。サイダムはさらにスリランカから来たアヌラーダ大僧正の教団に入ったことが述べられるなど、スコータイにはスリランカから多くの高僧が来国し、いくつかの教団が形成されていた様子が伝わる。

アソーカーラーム刻文の内容として注目すべきは、王妃が成した功德により未来に男性として生まれ、弥勒仏の教えを拝聴できるようにとの願いが述べられていることである。積徳の目的が未来に弥勒に見えること、またそのために（更なる積徳のために）男性として生まれてくること、といった具体的な内容から、当時の上座部仏教社会をうかがい知ることができる。

同寺に残る仏塔の基壇は、ワット・マハータート中心仏塔（蓮蕾形仏塔）の基壇と同様であり、仏舎利をおさめた仏塔が蓮蕾形仏塔だったと考えられている（図 22）。いつの頃か崩れ落ちた仏塔の塔頂部が寺院内に今も残っている。



図 22 ワット・アソーカーラーム

3. 蓮蕾形仏塔と仏舎利埋納

周知のごとく、仏舎利を納める仏塔はブッダの象徴として各地で信仰され、その舎利は真舎利を第一とするが、のちには大きな信仰をあつめた高僧の遺骨もまた同様に信仰の対象となった。上述の刻文史料には、仏塔の建立にあたり、舎利の正当性を強調するほか、正法王（マハータンマラーチャー）の遺骨を納めた仏塔にもウィハーンが併設され信仰の対象となっていたことがうかがえる。

それでは、第3刻文に記されている真舎利、リタイ王が1357年にナコーンチュムに安置したとする真舎利はどこから来たものなのか。第2刻文にあるシーサッター大僧正がスリランカのマヒヤンガナから請来した2つの仏舎利（仏牙舎利と喉仏舎利）のように、誰かの手によって直接運ばれてきたものなのか。それとも第1刻文にある仏舎利の発掘のように、スコータイの仏塔に埋納されていた真舎利を発掘し、分舎利し新たに仏塔を建立したのだろうか。

3-1. 中心仏塔（蓮蕾形仏塔）と8つの小仏塔

スコータイのワット・マハータートの中心仏塔およびそれを囲む小仏塔8基は、第2刻文に記されるシーサッター大僧正が持ち帰った仏舎利を安置するために「レンガを積み上げ9つの聖なるものを造った」仏塔である。第2刻文の内容に従えば、中心仏塔と4辺4隅の小仏塔は、同時期に建立されたことになるが、実際には4隅の小仏塔はレンガ製だが、4方の小仏塔はレンガではなく、ラテライト製の仏塔である。

サンティ・レックスクム氏は、中心仏塔と小仏塔の基壇の状態、蓮蕾形仏塔の形式などから、リタイ王の一世代前の時代、ルータイ王期（在位1298-1346/47）に9基が一緒に建立されたと結論づけた（註25）。一方、プラスート・ナ・ナコーン氏は、同寺から出土した仏暦1927年銘（1384）金葉〔第94基〕は中心仏塔について記したものと捉え、本金葉にある仏塔の修繕とその際に4方に新たに仏塔を増築したという内容から、リタイ王の時代に中心仏塔が建立され、周囲の小仏塔は金葉に記される1384年に増築されたと推察した（註26）。サクチャイ・サーイシン氏は、上記の金葉以外の刻文、例えば1361年のワット・パーマムアン刻文【資料1-3, 1-4】にも、マハータートの中心仏塔について触れられていることから、中心仏塔は遅くも1361年以前には建立されていたこと、中心仏塔と蓮蕾形仏塔とそれを囲む小仏塔プランの変容から、建立時は中心仏塔は4方の小仏塔（図06）と同形式であって、のちにリタイ王の治世下に元の中心仏塔を蓮蕾形仏塔で覆ったと推察している（註27）。

ここでは、サーイシン氏が示した蓮蕾形仏塔のプランの変容について見ておきたい。

グループ1 ワット・マハータート中心仏塔 No. 1(図02)

中心仏塔とそれを取り囲む小仏塔8基は、同じ基壇上に建てられ、4方の小仏塔の宣字形台座は中心仏塔に接続している。4隅の小仏塔は中心仏塔の台座と一部重なっているが、4方の小仏塔に比べると中心仏塔からは独立している。

グループ2 ワット・マハータート仏塔 No. 017(図23)

中心仏塔 No. 1 の南西方向にある仏塔 No. 017 は、中心の蓮蕾形仏塔と周りの小仏塔は別基壇上に建つ。小仏塔は塔身と上部は現存せず、基壇のみだが、8基とも同じ形状、大きさの基壇であることから、8基の小仏塔はほぼ同じ形状だったと考えられる。8基の小仏塔の間にも一回り小さい基壇があるので、蓮蕾形仏塔を16基の小仏塔が囲んでいたことになる。

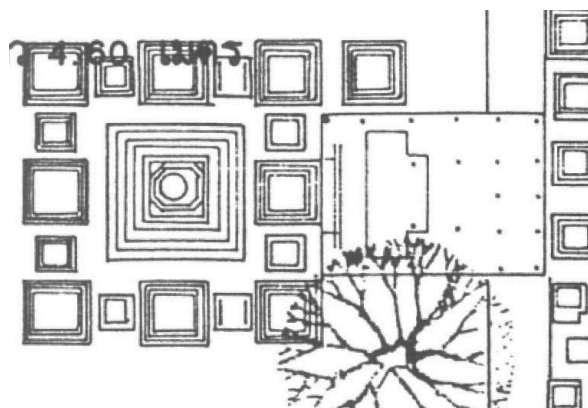


図23 ワット・マハータート仏塔 No. 017

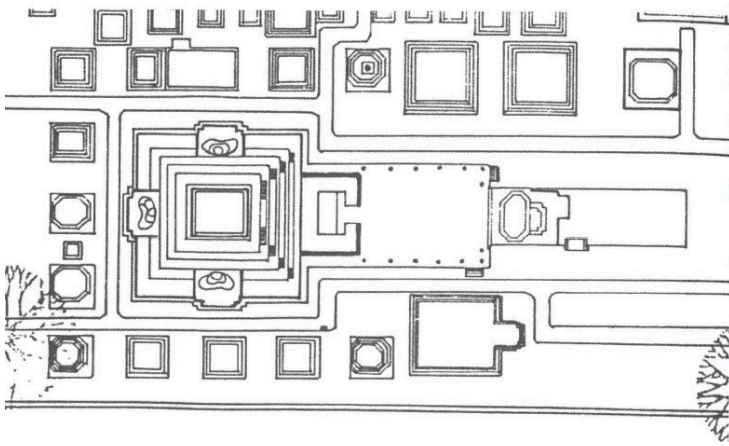


図 24 ワット・マハータート仏塔 No. 016

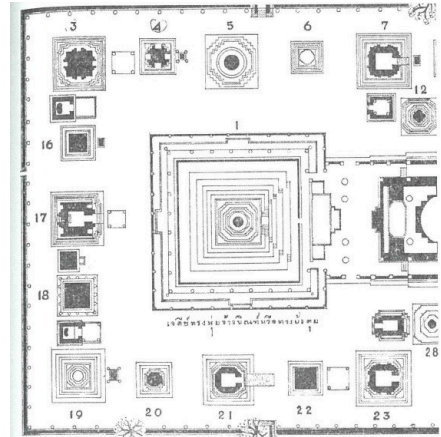


図 25 ワット・チェットテオ
シーサッチャナーライ

グループ3 ワット・マハータート仏塔 No. 016 / ワット・チェットテオ

ワット・マハータート仏塔 No. 016 は (図 24)、中心仏塔 No. 1 のほぼ真南に位置する。中心の蓮蕾形仏塔 No. 16 は、同寺の中心仏塔 No. 1 よりも基壇幅、高さともに大きい。蓮蕾形仏塔の 3 段の基壇と塔身の一部を残すが上部は崩れ落ちている。基壇の北、西、南面には仏陀坐像が安置され、東面は仏塔前に建てられたウィハーンの仏像台座が接している。蓮蕾形仏塔の周りの小仏塔は、ウィハーンが仏塔と接続した構造により東面の 3 基分がなくなり、13 基になっている。それぞれの形態はさまざまであるが、蓮蕾形仏塔を中心に 4 隅に建てられている小仏塔は上層部が崩れているものの、蓮蕾形仏塔 No. 1 の 4 隅の小仏塔と同様のタイプ (図 04) が配されている。

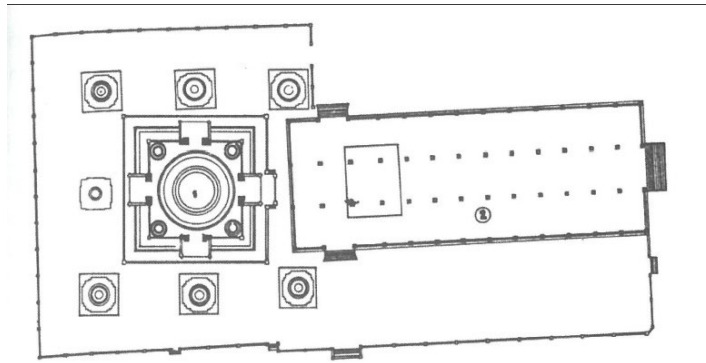
シーサッチャナーライのワット・チェットテオの蓮蕾形仏塔と周りの小仏塔のプランも (図 25)、このグループに属する。すなわち蓮蕾形仏塔の東面にウィハーンが接続し、中心仏塔の周りの小仏塔は 13 基を基本とするプランである。小仏塔はさまざまな形態で構成されており、あたかも各地の仏塔のミニチュアを集めた仏塔博物館のようだと評されている。北西隅の小仏塔 No. 3 は、ワット・マハータート仏塔 No. 1 の 4 隅に建てられている「チェディー・ソンプラサートハーヨート」と同系統になる。

3-2. 蓮蕾形仏塔の広がり

蓮蕾形仏塔は、上述の通り仏舎利を安置した中心仏塔として、その 4 辺 4 隅に 8 基の小仏塔を配置することを基本とし、そのプランは、仏塔前面 (東面) に構えたウィハーンの位置が仏塔に寄っていくことで、小仏塔の位置や数、さらにその形態も変容していった。一方、ナコーンチュム刻文に 1357 もしくは 1358 年建立とあるワット・チェディークラントウン (図 20)、1399 年建立のワット・アソーカーラムの蓮蕾形仏塔 (図 22) のように、中心仏塔を取り囲む小仏塔を伴わず、単体で建立されたと考えられる蓮蕾形仏塔も複数存在している。

蓮蕾形仏塔建立の広がり、スコタイ、シーサッチャナーライに限らず、スコタイ時代の版図内ないし関係性の深かった地域に確認できる (註 28)。現在は、その姿を変えてしまったが、チェンマイのワット・スワンドークにも蓮蕾形仏塔が建てられていたことが古写真 (図 26) から知られている。

ランナーのクーナー王 (在位 1367 ~ 88) は、スコタイから、より純粋な仏教と考えられていたラーマン派 (旧ランカーウォン派) と呼ばれる教派を国内に導入したと伝わる。ワット・パーデーエン刻文 (第 9 基・第 2) (註 29) には、リタイ王がスマナ長老をワット・パーデーエンに招き、マハータートを供養し、1369 年に北の国 (ランナー) に派遣したことが記されており、ランナー側の記録としてワット・プラユーン刻文 (第 62 基) (註 30) にはクーナー王が同年、スコタイからスマナ長老と仏舎利を招来してラムプーンのワッ



● 平面図 8 วัดสวนดอก เมืองเชียงใหม่ (ที่มา : กรมศิลปากร)

図27 ワット・ブッパラーム (ワット・スワンドーク) 平面図

図26 ワット・ブッパラーム (ワット・スワンドーク)
北東隅の小仏塔が蕾形仏塔だったことがわかる。

ト・プラユーンに住ませたこと、1372年にはスmana長老をチエンマイに招き、ワット・ブッパラーム (ワット・スワンドーク) を建立し仏舎利を安置したことが記されている (註31)。中心仏塔の周りに7つの小仏塔 (前面にはウィハーンが接続するため、仏塔前面中央の小仏塔は作らない) が配置されている (図27)。仏舎利を安置したのは、中心の仏塔だと考えられるが、周囲に配された北東隅の小仏塔がかつては蓮蕾形仏塔だった。蓮蕾形仏塔は、スコータイから請来した仏舎利を象徴する仏塔として、また、スコータイとの縁を表わす仏塔として建立されたのではないだろうか。

3-3. 仏舎利埋納時期と蓮蕾形仏塔の建立

蓮蕾形仏塔の建立は、14世紀半ばから後半にかけてリタイ王の治世を中心に広まり、それらの多くがスリランカから請来した仏舎利と聖菩提樹の記録や伝承と関係していた。スコータイ時代、多くの僧侶がスリランカやマルタバンを行き来していた。それらに関する記録の中で、ワット・パーマムアン刻文 (第4, 5, 6, 7刻文) 【資料1-3, 1-4, 1-5, 1-6】にはリタイ王の一大事績が記され、中でも1361年にスリランカの大僧正をスコータイに迎え、マハータートの中心仏塔の東に大仏を安置し、王自らが出家したという事績は本刻文中のハイライトとなっている。しかしながら、そこには仏舎利についての記載はない。リタイ王が仏舎利を安置した記録は、1357年のナコーンチュム刻文 (第3刻文) 【資料1-2】であり、そこにはこの仏舎利はスリランカから請来した真舎利であると強調されている。

すでに見てきたように真舎利を請来した具体的な記録は、ワット・シーチュム刻文 (第2刻文) 【資料1-1】である。そこにはスコータイの王族出身 (パーマムアン王家) のシーサッター大僧正が、スリランカ (およびインド) に10年ほど滞在し、シーハラ (スリランカ) を去る際に一群の平信徒を連れてきたこと、スコータイにレンガを積み上げ9つの聖なるものを造り、シーハラのマヒヤンガナ大仏塔からもたらした2つの仏舎利 (仏牙舎利と喉仏舎利) を塔内におさめた、とある。

スコータイ美術研究を続けてきたゴスリング氏は、ワット・シーチュムのジャータカ線刻 (註32) は1330年代に制作され、シーサッターの仏跡巡礼を1335年前後とし帰国を1345年頃と推定した (註33)。一方、コーンアムデート氏は、本線刻は当初からワット・シーチュムに設置されたとし、ボワスリエ氏やプラスート・ナ・ナコーン氏の刻文研究との比較からシーサッターの帰国は14世紀半ばと考え、制作年代を14世紀後半とした (註34)。また、ウッドワード氏も制作年代はシーサッターのスリランカからの帰国後とし、線刻に表わされたモチーフの比較研究などから14世紀後半であるとしている (註35)。帰国時期を14世紀半ばとしているのは、第2刻文建立時期が、同刻文にタンマラーチャー (リタイ王) に関する記述があることや、子音



図 28 ジャータカ線刻（ワット・シーチュム）
バンコク国立博物館

文字の表記法などから、リタイ即位（1346 ないしは 47 年）以後と考えられているからなのだが、同刻文に記されるパームアン王統とプララン王統の世代から考えると、その世代間にやや時間的なずれがある。シーサッター大僧正は、プララン家初代シーインタラーティット王の盟友パームアンの甥にあたる【資料 3-2】。つまり、シーインタラーティット王の第二王子、ラームカムヘーン王と同じ世代か、年が離れていたとしても四半世紀が最大で、50 年の開きになると 1 世代から 2 世代の間隔になるはずである。

ここで、刻文史料からリタイ王の事績についてまとめてみたい。

- ・ 1339 年以前？ 三蔵について名高い高僧から学ぶ。
- ・ 1339 年 -1347 年 リタイ王はシーサッチャナーライを副王として統治。
- ・ 1347 年 スコータイに異変がおきたため父に代わってスコータイの王となった。
- ・ 1349 年 マンゴー林のマハーカセート神殿にヴィシュヌ神とシヴァ神像を安置。
- ・ 1357 年 ナコーンチュムに真舎利安置し、仏塔の後ろに聖なる菩提樹を植える。
- ・ 1361 年 マンゴー林にウィハーンと僧坊を整え、スリランカから大僧正（マハーテーラサンカラート）を招請。大僧正一行はマルタバン（ナコーンパン）経由でスコータイ領域に入り、ワット・マハータートの東門から入り、西側を抜け、マンゴー林に至る。大僧正は、安居入りし、3 ヶ月後に安居があけると、（王は）布施を行い、釈尊と同じ大きさの仏像を鋳造し、スコータイの中央、仏塔の東に安置した。
- ・ 1361 年 9 月 22 日、高僧たちを宮殿に招き、玉座を降り、王宮内の黄金仏の前で沙弥として出家。
- ・ 1362 年 都をソーンクウェー（ピサヌローク）に遷都。
- ・ 1369 年 北の国（ランナー）にスマナ長老を派遣。

第 2 刻文にあるシーサッター大僧正の帰国、仏舎利請来、ワット・マハータートに 9 つの聖なるものを造ったのが 14 世紀半ばならば、リタイ王の治世下であり、ワット・パーマムアン刻文などには王の偉業を伝える事項として必ず記されたのではないだろうか。第 2 刻文の建立が 14 世紀半ばであっても、そこに記されているシーサッターの帰国が同時期である必要はなく、むしろ、シーサッターの縁者が後に大僧正の事績を記録したとしても不思議ではない。シーサッターの帰国を 14 世紀前半と仮定した場合、ワット・マハータートに関しては、以下の流れが想定できる。

- ・ 14 世紀前半 シーサッター大長老の帰国。ワット・マハータートに 9 つの聖なるものを造り、仏舎利を安置する。→中心仏塔と 4 辺 4 隅の小仏塔の建立。
- ・ 1357 年頃（ワット・マハータートの真舎利を発掘し、）ナコーンチュムに新たに蓮蕾形仏塔を建立し、仏塔の後ろに聖なる菩提樹を植える。→真舎利を発掘した際に、中心仏塔を蓮蕾形仏塔に改変したか。
- ・ 1361 年 スリランカから大僧正（マハーテーラサンカラート）を招請。中心仏塔の東に大仏（サーカヤムニー仏）を安置する。
- ・ スマナ長老をワット・パーデーに招き、マハータートを供養し、1369 年に北の国（ランナー）に派遣（この際、仏舎利をランナーに贈る）。

→ランナーに贈る仏舍利はワット・マハータートから取り出したか。中心仏塔とその周囲に配された8基の仏塔が建つ基壇（168 軀の合掌遊行する僧形像）の増築は、このタイミングか。

- ・1368 年もしくは74 年 リタイ王崩御。ワット・マハータート第16 号仏塔に遺骨をおさめる。
- ・1384 年 プラマハーサンカラート（大僧正・法王）がタンマラーチャー1 世（リタイ王）の遺骨を安置した第16 号仏塔を修繕。仏塔の4 辺に新たな仏塔を増築。仏塔の4 辺にブッダ坐像が安置されたのは、建立時（1368 年もしくは74 年）か、修繕時（1384 年）かは不明。

ナコーンチュム刻文（第3 基）【資料1-2】には、ナコーンチュムに安置した舍利の正当性が強調されていた。同刻文は、仏舍利埋納から99 年後に三蔵は失われ、本生譚を暗唱できるものもいなくなり、1000 年後には戒律を知る僧侶はいなくなるが、真舍利は残るということ、正法の世にあるうちに急ぎ功德を積むべきことなどを伝えており、このことから、スコタイにおける末法思想がうかがえるとともに、舍利信仰と具体的な積徳行としての造寺造仏が増大していったものと考えられる。

ワット・アソーカーラム刻文（第93 基）【資料1-8】には、リタイ王より1 世代後のチュラーラック王妃が、仏舍利を埋納するための仏塔を建立したことをはじめ、親族の冥福を祈って多くの功德を積んできたことが記され、それらの功德により未来に男性として生まれ、弥勒仏の教えを拝聴できるようにとの願いが述べられていた。ここで建立された仏塔も蓮蕾形仏塔である。蓮蕾形仏塔は、三蔵をはじめ多くの学問を学んだリタイ王の造形理念のもとに真舍利を安置するために建立された仏塔として、まさに真舎利の象徴として機能していたと言えよう。

リタイ王の時代には、スリランカからもたらされた真舎利や聖菩提樹のほかに、サマンタケータ山頂に残るブッダの足跡を写し、スコタイ領域内4 つの山頂に仏足跡を安置するなど、より真正性の高い聖遺物を請来し、末法の世にあってもブッダの教えが長く続いていき、弥勒が下生する未来に生まれ変わりたいと願ったのだろう。

むすび

スコタイの中心寺院のまさに核をなす蓮蕾形仏塔の建立に焦点をあて、同時代の刻文史料の内容を確認し、仏舍利請来と安置に関するこれまでの説を整理してみた。各刻文を仏舍利安置、仏塔の建立に関する視点で比較してみると、第1 刻文に記されているシーサッチャナーライの中心に仏舍利を埋納するために建立された仏塔の記述と、第2 刻文の内容は一致していた。そして、スリランカからの真舎利の請来は、第2 刻文にあるシーサッター大僧正による直接の請来をのぞき、多くの場合、仏舍利はスコタイないしその領域内の仏塔から発掘されて各地にもたらされたものと考えられる。

在家信者の代表である王族は、積徳行為として造寺造仏、また修繕を行っており、本稿ではいくつかの修繕、仏塔の改修、また変容についても刻文史料と実際の建造物を比較し確認した。ワット・マハータートの中心仏塔は、9 つの聖なるものを建てたというシーサッター大僧正帰国の時期、ナコーンチュムに仏舍利を安置した時期、ランナーに仏舍利を贈った時期に何らかの改修が行われたものと考えられる。

各地への蓮蕾形仏塔の広がりについても述べたが、既存の仏塔を蓮蕾形仏塔で覆った例について触れておきたい。スコタイの旧都城内にあるワット・プラパーイルアンの中心区画には、現在ほとんど崩れてしまった仏塔が残っている。その仏塔からは、本稿の前半で紹介したスコタイ初期の仏像（図14）とスコタイ中期の仏像が重なりあう形で確認されており、元の仏塔（スコタイ初期）を覆っていた仏塔は、高い3 段の基壇を持つ蓮蕾形仏塔だったことが確認されている（註36）。元の仏塔には複数の仏龕が認められ、ハリブンチャイに見られるような重層形の仏塔だった可能性が指摘されている。同寺は、クメールのバイヨン期の3 祠堂も

残るスコタイの中では比較的早い時期の寺院跡として知られているが、いつの時期かにハリブンチャイ方面の仏教文化圏とも繋がっていたことを裏付ける遺構としても重要である。

本稿では刻文史料の内容の確認と先行研究の整理に留まり、新たな知見を見出すには至っていないが、実際の遺構とそれに関する記録をできるだけ結びつけて建立や改修の時期を明らかにすることを心がけた。しかし、同時期の他地域の刻文史料との比較検討は十分とは言えない。リタイ王の時代はランナーやアユタヤー、さらにビルマやクメールとの勢力関係はダイナミックに変動していった時期であり、そうした大きな時代の変化の中で、仏塔建立の背景に見える末法思想の存在は今後も明らかにすべき課題である。これらの課題については別稿に譲りたい。

註

1. ワット・シーチュム刻文 第2面 19-48行 เป็นเรื่องพระมหาเถรไต้ปฐิสังขรณ์วัดมหาธาตุเมืองสุโขทัย, (マハーテーラ大僧正がスコタイのマハータート寺の修繕を行ったこと) <https://db.sac.or.th/inscriptions/inscribe/detail/177>
 ラームカムヘーン王刻文(第1刻文) 第2面 23-26行 กลางเมืองสุโขทัยนี้มีพิหาร มีพระพุทธรูปทอง มีพระอัฐารศ มีพระพุทธรูป มีพระพุทธรูปอันใหญ่ มีพระพุทธรูปอันราม มีพิหารอันใหญ่ มีพิหารอันราม (スコタイの中心には、ウィハーンがあり、金の仏像があり、アッターロット仏があり、大仏があり、中くらいの仏像があり、大きなウィハーンがあり、中くらいのウィハーンがある。) <https://db.sac.or.th/inscriptions/inscribe/detail/47>
2. 仏堂・精舎(พิหาร/วิหาร)「ヴィハーラ」は本来、精舎をいうが、タイでは仏像を安置し、在家信者に説法を行う堂宇を「ウィハーン」と称する。中心仏塔の前面にあるウィハーンは寺院の本堂として「ウィハーンルアン」という。
3. Saisingha 2013: pp.199-202.
4. ワット・パーマムアン刻文〔第4基〕および〔第5基〕に、大僧正が安居入した後に安居があげると布施を行い、仏陀と同じ大きさの仏像を鑄造し、スコタイの中央、仏塔の東に安置したことが記される。
5. ワット・スタットはラーマ1世王(在位1782～1809)がスコタイのワット・マハータートからサーカヤムニー仏を請来するために1807年に建設に着手し、ラーマ2世王(在位1809～24)、ラーマ3世王(在位1824～51)の治世を経て1847年に完成した第一級王室寺院である。仏堂は幅23.8m、奥行26.2m、高さは30mにおよぶ。創建当時はワット・マハースタターワートと名付けられていたが、ラーマ3世が、寺院完成を祝ってワット・スタットテーブワラーラーム(ワット・スタットテーブターラーム)と改名した。また、本尊「プラシーサーカヤムニー」は、ラーマ4世によって命名された。Organizing Committee for the 200th Anniversary Celebration of Rattanakosin 1982: 295-301.
6. ラーマ1世王は、本像がチャオブラヤー川沿の現在のチャーン船着場から城壁内に運ばれ、ワット・スタットのプラウィハーンに設けられた台座上に安置されたことを見届けて、息を引き取ったと伝わっている。Vajiravudh (Rama VI) 1983: 105, 119-110.
7. 頭部を大きくした理由として、本像安置のために設けられた台座はスコタイのワット・マハータートのそれよりも高かったため、礼拝時、体軀に比して頭部が小さく見えることから、ワット・スタットの台座に合わせて改修されたと考えられている。Saisingha 2013: p.200.
8. Saisingha 2013: p.200.
9. Phokhun Ramkhamhaeng, The Inscription in Thailand Database, <https://db.sac.or.th/inscriptions/inscribe/detail/47>
 Phongsiaphian 2020: 149-185.
10. Krairiksh 1989.
11. 赤木攻 2019: 表紙.
12. Chirapravati 2008: 15.
13. ワット・シーチュムの線刻ジャータカ等に関する美術史先行研究については、チラプラバット 2008 および小泉 2021の研究史を参考にした(Chirapravati 2008: 13-49.; 小泉 2021: 551-552.)。
14. Saisingha 2017: 268.
15. Saraya 2001.
16. マハータートとは、偉大なる舍利を意味し、ブツダの舍利を祀った塔に名付けられる。
17. 石井 1975: 320.; 宮本 2000: 20, 74.
18. 石井 1975: 320.; 宮本 2000: 20, 74.
19. 吉川利治氏は、第5刻文(ワット・パーマムアン刻文)の内容の一部を第1刻文(ラームカムヘーン王刻文)のそれを踏襲したとすれば、リタイの2世代前(約半世紀前)の1292年に第1刻文が刻まれたとしてもつじつまがあう、としている。吉川 2010: 14-15.
20. 北タイに現存する年記のあるタム文字刻文は、チエンマイのワット・チエンマンの仏像台座に記されたもので、仏暦2008年(西暦1465)が最も早い時期のものである。

21. この金葉出土場所の記録に混乱がある。サクチャイ・サーイシン氏は、本金葉は、ウィハーナルアンの大柱付近で見つかったものとしている。Saisingha 2022: 434. (本論の初出は 2004 年)
22. Thamrungrueang 2022: 111-112. この金葉についてはタイ刻文データベースや刻文集未収録。
23. Thamrungrueang 2022: 111-112.
24. Griswold, A.B. and Nagara 1971: 192.; Phongsiphian 2020: vol. 2 189.
25. Leksukhum 2001: 44-50.
26. Na Nagara 2001: 14-15.
27. Saisingha 2017: 286-289. 現在の中心仏塔内部に元の仏塔があるかどうか、芸術局によって塔の一部に穴を穿って調査がした限りでは、以前の仏塔についての明らかな痕跡は認められなかったが、元の仏塔の残存箇所にあたらなかった可能性もある、としている。
28. ピサヌロークのワット・チェーディーヨートトーン、カムペーンペットのワット・カロタイ、ナーンのチェーディーユッタハットディー、ベッチャブーンのワット・マハータート、サンカプリー（チャイナート）のワット・トーノットラーイ、チエンマイのチェーディー・ワットタートクラーンなど。
29. Wat Padeang (2), The Inscription in Thailand Database, <https://db.sac.or.th/inscriptions/inscribe/detail/208>
ワット・パーデーンはスコタイの西のエリア、森林住アランニックの寺だと考えられている。
30. Wat Prayuan, The Inscription in Thailand Database, <https://db.sac.or.th/inscriptions/inscribe/detail/188>
31. Saisingha 2004-2.
32. ワット・シーチュムの線刻ジャータカ等に関する美術史先行研究については、チラプラバット 2008 および小泉 2021 の研究史を参考にした。Chirapravati 2008: 13-49.; 小泉 2021: 551-552.
33. Gosling 1998: 123. ゴスリングは、ワット・シーチュムのジャータカ線刻の制作年代はシーサッタ帰国以前の 1330 年として、元はワット・マハータートにあったものだと考えた。
34. Khoramatch 1990: 137.
35. Woodward 1997: 149, 155.
36. Yasri & Wirakul 2022: 17-57.

図版出典一覧

-
- 図 01 ワット・マハータート中心仏塔
 - 図 02 ワット・マハータート図面（部分）タイ芸術局提供
 - 図 03 蓮蕾形仏塔図 Saisingha 2017: 242 より転載（作図は Santi Leksukhum による）
 - 図 04 4 隅の小仏塔図 Saisingha 2004-1 より転載（作図は Santi Leksukhum による）
 - 図 05 4 隅の小仏塔図 Saisingha 2004-1 より転載（作図は Santi Leksukhum による）
 - 図 06 ウィハーナルアン（ワット・マハータート）
 - 図 07 ウィハーナルアン（ワット・マハータート）
 - 図 08 本尊の台座（ワット・マハータート ウィハーナルアン西側）
 - 図 09 サークヤムニー仏（ワット・スタット）藤瀬雄輔氏撮影
 - 図 10 チンナラート仏（ワット・プラシーラタナマハータート）
 - 図 11 チンナシー仏（ワット・ボウオンニウェート）
 - 図 12 アッターロット仏（ワット・マハータート）
 - 図 13 アッターロット仏（ワット・サパーンヒン）
 - 図 14 ブッダ像（ワット・プラパーイルアン出土）ラームカムヘーン王国立博物館
 - 図 15 ワット・チャーンローム（シーサッチャナーライ）後藤恒氏撮影
 - 図 16 ワット・チャーンローム塔身仏龕（シーサッチャナーライ）
 - 図 17 ワット・プラシーラタナマハータート（チャリエン）後藤恒氏撮影
 - 図 18 ブッダ遊行像 ワット・プラシーラタナマハータート（チャリエン）小泉恵英氏撮影
 - 図 19 蓮蕾形仏塔のミニチュア ワット・プラシーラタナマハータート（チャリエン）小泉恵英氏撮影
 - 図 20 ワット・チェーディークラントウン（ナコーンチュム）ルンロート・タムルンルアン氏撮影
 - 図 21 ワット・パーマムアン
 - 図 22 ワット・アソーカーラーム
 - 図 23 ワット・マハータート仏塔 No. 017 Saisingha 2004-2: 図 3 より転載
 - 図 24 ワット・マハータート仏塔 No. 016 Saisingha 2004-2: 図 4 より転載
 - 図 25 ワット・チェットデーオ（シーサッチャナーライ）Saisingha 2004-2: 図 5 より転載
 - 図 26 ワット・ブッパラーム（ワット・スワンドーク）Saisingha 2004-2: 図 12 より転載
 - 図 27 ワット・ブッパラーム平面図（ワット・スワンドーク）Saisingha 2004-2: 図 8 より転載
 - 図 28 ジャータカ線刻（ワット・シーチュム）バンコク国立博物館

文献一覧

- 【タイ語】
Khoraumatch, Banlue 1990.
บรรลือ ขอรวมเดช, รูปแบบศิลปะบนแผ่นภาพจารึกลายเส้นเรื่องชาดของวัดศรีชุม จังหวัดสุโขทัย (The artistic styles of stone-slab engravings representing Jataka at Wat Sri Chum, Sukhothai, Thesis (M.A. (History of art), Silpakorn University).
Krairiksh, Piriya 1989.
พิริยะ ไกรฤกษ์, จารึกพ่อขุนรามคำแหง : การวิเคราะห์เชิงประวัติศาสตร์ศิลปะ, กรุงเทพฯ : อมรินทร์พริ้นติ้งกรุ๊ป(『ラームカムヘーン王碑文 : 美術史的考察』バンコク : アマリン印刷)
Leksukhum, Santi 2001.
สันติ เล็กสุขุม, “เจดีย์บวิหารประจำศตวรรษแปดและพระศรีมหาธาตุ วัดพระศรีมหาธาตุ สุโขทัย”, เมืองโบราณ. ปีที่ 27 ฉบับที่ 3 (ก.ค.-ก.ย. 2544) หน้า 44-50. (『スコータイワットブラシーマハタートの中心仏塔と附属する 8 つの周辺仏塔』『ムアンボーラーン』27-3, pp.44-50.)
Leksukhum, Santi 2006.
สันติ เล็กสุขุม, ศิลปะสุโขทัย, กรุงเทพฯ : เมืองโบราณ (『スコータイ 美術』バンコク : ムアンボーラーン 第二版)
Leksukhum, Santi 2012.
สันติ เล็กสุขุม, คู่มืองานช่างไทยโบราณ, กรุงเทพฯ : เมืองโบราณ (『古きタイの工人との対話』バンコク : ムアンボーラーン)
Na Nagara, Prasert 1998.
ประเสริฐ ณ นคร, สารนิพนธ์ ประเสริฐ ณ นคร, กรุงเทพฯ : มหาวิทยาลัยเกษตรศาสตร์ (『ปราสาท・นา・นาคอน 论文集』バンコク : カセーサート大学)
Na Nagara, Prasert 2001.
ประเสริฐ ณ นคร, ปาฐกถาศิลป์ พิธีศรี ครั้งที่ 6 15 กันยายน 2544 เรื่อง “จารึกกับประวัติศาสตร์ศิลป์”, กรุงเทพฯ : มหาวิทยาลัยศิลปากร (『碑文と美術史』『第 6 回芸術との対話 ビーラーシー』仏暦 2544 年 9 月 15 日開催バンコク : シラパคอน大学)
Organizing Committee for the 200th Anniversary Celebration of Rattanakosin 1982.
คณะกรรมการจัดงานสมโภชกรุงรัตนโกสินทร์ ๒๐๐ ปี., จัดหมายเหตุการอนุรักษ์กรุงรัตนโกสินทร์, กรุงเทพฯ : กรมศิลปากร (ラタナコーシン朝祝 200 年記念委員会編, 『ラタナコーシン朝における保全記録』バンコク : 芸術局)
Phongsiphan, Winai 2020.
วินัย พงศ์ศรีเพียร, สุโขทัยคดี : ประวัติศาสตร์ จารึกศึกษา และนิรุกติประวัติ, เล่มที่ 1-3. นครปฐม: โรงพิมพ์มหาวิทยาลัยศิลปากร (『สโคไตซ์: 歴史・刻文学・言語史』1-3 卷 ナコンパトム : シラパコン大学出版)
Saisingha, Sakchai 2004-1.
ศักดิ์ชัย สายสิงห์, ศิลปะสุโขทัย: บทวิเคราะห์หลักฐานโบราณคดี จารึกและศิลปกรรม: รายงานการวิจัย = Sukhothai art : a view from archaeological art and epigraphic evidence, กรุงเทพฯ : สถาบันวิจัยและพัฒนา มหาวิทยาลัยศิลปากร (バンコク : シンラパコン大学研究機構) .
Saisingha, Sakchai 2004-2.
“เจดีย์ยอดทรงดอกบัวตูมและเจดีย์บวิหาร”, เมืองโบราณ. ปีที่ 30 ฉบับที่ 4, pp. 88-99. (『蓮蕾形仏塔と周囲の仏塔』『ムアンボーラーン』30-4, pp.88-90.)
Saisingha, Sakchai 2013.
ศักดิ์ชัย สายสิงห์, พระพุทธรูปในประเทศไทย: รูปแบบ พัฒนาการ และความเชื่อของไทย, กรุงเทพฯ : สมาพันธ์ (『タイ国における仏像 : 形式・変容・タイ人の信仰』バンコク : サマーパン)
Saisingha, Sakchai 2017.
ศักดิ์ชัย สายสิงห์, เจดีย์ในประเทศไทย: รูปแบบ พัฒนาการและพลังศรัทธา, นนทบุรี: เมืองโบราณ (『タイ国における仏塔: 形式・変容・信仰力』ノンタブรี: ムアンボーラーン)
Saraya, Thidha 2001.
ธิดา สารยา, ประวัติศาสตร์สุโขทัย : พลังคน อำนาจผี บารมีพระ, กรุงเทพฯ : เมืองโบราณ (『สโคไตซ์の歴史: 人、精霊、仏の力』バンコク: ムアンボーラーン)
Sisamang, Surasak 2010.
สุรศักดิ์ ศรีสำอาง, ถิ่นนา-สุโขทัย : จารึก : สวรรค์ทางโบราณคดีและประวัติศาสตร์, กรุงเทพฯ : รุ่งศิลป์การพิมพ์ (『ランเนอร์ - สโคไตซ์ 碑文 : 考古学歴史学の本質』バンコク : ルンシン出版)
Srisuchat, Amara. ed. 2012.
ธรรมราชาธิราช = Dharmarajadhiraja : Righteous king of Kings, กรุงเทพฯ : สำนักพิพิธภัณฑสถานแห่งชาติ กรมศิลปากร (『ダルマラージャティラート : 諸王の中の正法王』バンコク : 芸術局国立博物館部)
Sukkhaphanit, Khachon 2023.
ขจร สุขพานิช, ข้อมูลประวัติศาสตร์สมัยก่อนตั้งสุโขทัยและสมัยสุโขทัย, นนทบุรี: ศรีปัญญา (『歴史資料 สโคไตซ์成立前とสโคไตซ์時代』ノンタブรี : ซี-บันยา-)
Thamrungruang, Rungrot 2022.
รุ่งโรจน์ ธรรมรุ่งเรือง, รู้เรื่องสุโขทัย, นนทบุรี: มิวเซียมเพรส (『仏塔を知る』ノンタブรี : ニューシャムプレス)
The Princess Maha Chakri Sirindhorn Foundation 2013.
มูลนิธิสมเด็จพระรัตนราชสุดา, นามานุกรมพระมหากษัตริย์ไทย, กรุงเทพฯ : นามมีบุ๊คส์พับลิเคชั่นส์ (『タイ王統体系事典』バンコク : ナーンミー出版)
The Inscription in Thailand Database, The Princess Maha Chakri Sirindhorn Anthropology Centre) <https://db.sac.or.th/inscriptions/>
ฐานข้อมูลจารึกในประเทศไทย, กรุงเทพฯ : ศูนย์มานุษยวิทยาสิรินธร (องค์การมหาชน)

Vajiravudh (Rama VI) 1983 [1907] .

พระบาทสมเด็จพระมงกุฎเกล้าเจ้าอยู่หัว, เที่ยวเมืองพระร่วง, กรุงเทพฯ : โรงพิมพ์คุรุสภา (『プルラン (スコタイ) 紀行』バンコク:クルッサー印刷)

Yasri, Pongphol & Wirakul, Tawan 2022.

ปองพล ยาศรี, ตะวัน วีระกุล, การศึกษาประวัติศาสตร์สถาปัตยกรรม : วัดพระพายหลวง วัดเชตุพน สุโขทัย, กรุงเทพฯ : เมืองโบราณ.(『建築史研究: スコタイ ワット・プラパーイルアン、ワット・เชตูปอน』バンコク:ムアンボーラーン)

【英語】

Chirapavati, Pattaratorn 2008.

“Illustrating the lives of the Bodhisatta at Wat Si Chum”, Skilling, Peter.(ed.), *Past lives of the Buddha: Wat Si Chum--art, architecture and inscriptions*, Bangkok: River Books.

Griswold, A. B. 1967.

Towards a History of Sukhothai Art, Bangkok: Fine Arts Department of Thailand.

Griswold, A.B. and Prasert na Nagara 1968.

"A Declaration of Independence and its Consequences; Epigraphic and Historical Studies, No. 1." *Journal of the Siam Society*, 56, no. 2

Griswold, A.B. and Prasert na Nagara 1969.

"The Asokarama Inscription of 1399 A.D.: Epigraphic and Historical Studies, No.2." *Journal of the Siam Society*, 57, no. 1

Griswold, A.B. and Prasert na Nagara 1971

“Vat Jan Lom (1384 A.D.): Epigraphic and Historical Studies, No.8.” *Journal of the Siam Society*, 59, no. 1

Griswold, A.B. and Prasert na Nagara 1972.

"King Lodaiya of Sukhodaya and His Contemporaries: Epigraphic and Historical Studies, No.10." *Journal of the Siam Society*, 60, no. 1

Griswold, A.B. and Prasert na Nagara 1973.

"The Epigraphy of Mahadharajara I of Sukhodaya: Epigraphic and Historical Studies, No.11." *Journal of the Siam Society*, 61, no. 1

Gosling, Betty 1988.

A chronology of religious architecture at Sukhothai, late thirteenth to early fifteenth century, Chiang Mai: Silkworm Books.

Skilling, Peter.(ed.) 2008.

Past lives of the Buddha: Wat Si Chum--art, architecture and inscriptions, Bangkok: River Books.

W. Woodward, Hiram, Jr. 1997.

The sacred sculpture of Thailand: the Alexander B. Griswold collection, the Walters Art Gallery, Baltimore, Md. ; Seattle, Wash.: Distributed in North America by the University of Washington Press.

【日本語】

赤木攻 2019.

『タイのかたち』めこん.

石井米雄 1975 (2003).

『上座部仏教の政治社会学—国教の構造— 東南アジア研究叢書9』創文社.

小泉恵英 2021.

「スリランカの上座部仏教とタイ・スコタイ 王朝序論」立川武蔵・森雅秀編『アジア仏教美術論集 南アジアⅡ ポスト・グプタ朝～パーラ朝』pp. 535-572, 中央公論美術出版.

成田剛 2000.

「タイの建築」肥塚隆編『世界美術大全集 東洋編 12 東南アジア』pp. 165-173, 小学館.

彦坂千津子 2012.

「王の出現: タイ『三界経』と他の仏教経典との比較」『パーリ学仏教文化学』27 pp.67-87.

宮本なつみ 2004.

「タイ語『プラ・マーライ』に見られる「業」と「積善」『南方文化』31 pp.13-35 頁、天理南方文化研究会.

吉川利治 1980.

「スコタイ王朝の王統に関する新しい見解について」『東南アジア—歴史と文化—』9号: pp. 80-102.

吉川利治 1996.

「創られる歴史像—近現代に見るタイの国家意識—」『重点領域研究総合的地域研究成果報告書シリーズ: 総合的地域研究の手法確立: 世界と地域の共存のパラダイムを求めて』12 pp.1-27.

吉川利治 2010.

「スコタイに対するクメールの影響—遺跡と刻文に関する分析—」『カンボジアの文化復興』26号: pp. 5-28. 上智大学アジア文化研究所.

【資料編】スコタイ刻文と仏塔建立：仏舎利安置と蓮蕾形仏塔

東京国立博物館

原田 あゆみ

【資料 1】刻文

記載順は、以下の通り。

登録番号／年代／文字／言語／形状および法量／行数／出土・発見地／出土・発見時期／
所蔵／内容

1-1. ワット・シーチュム刻文〔第 2 基〕Wat Sichum Inscription(註 1)

登録番号：STh. 2〔第 2 基 ワット・シーチュム刻文〕／年代：仏暦 1884-1910（西暦 1341-1367(註 2)）
／文字：スコタイ文字／言語：タイ語／形状：石碑〔幅 67.0cm 高 275.0cm 厚 8.0cm〕／行数：第 1 面 107 行，
第 2 面 95 行／出土・発見地：スコタイ ワット・シーチュム モンドップ外壁内隧道内／仏暦 2430 年（西
暦 1887）発見、仏暦 2451 年（西暦 1914）にバンコクに送られる／所蔵：バンコク国立博物館

第 1 面の冒頭は摩滅等で文字亡失。本刻文建立年、三宝崇拜について記されていたと考えられる（註 3）（1~7 行）。マヒヤンガナ、プラマハーテラ・シーサッター（シーサッター大僧正）の名前が見られ、ポーケン・シーナーオナムトムの事績について、（シーサッチャナーライの）水辺にプラシーラタナマハータートを建立したこと（8~20 行）、シーナーオナムトムの息子ポーケン・パームアンがポーケン・バーンクラーンハーオを誘いコムサバートクロンラムボン（จอมสอาดโขลญลำพง）を撃退したこと、スコタイの創建の事績について、パームアンはヤショーダラプラの王から王女シーコーラ（スコン）・マハーテーウィーと「シーインタラーボーディンタラーティット」という称号、勝利の剣を下賜されたこと、パームアンはその欽錫名と勝利の剣を友人であるバーンクラーンハーオに捧げ、シーインタラーボーディンタラーティット（バーンクラーンハーオ）とパームアンは共にスコタイに入京したこと（21~35 行）、シーインタラーティットの息子、ラームラート王（ラームカムヘーン王）がシーサッチャナーライにプラシーラタナマハータートを建立したこと、（36~41 行）、シーサッター大僧正の言葉と教導によって波羅蜜に至ること（41~52 行）、シーサッターの出家前の来歴、様々な建造物を建立したこと（52~83 行）、篤く仏教に帰依し、31 歳の時に出家し各地を遊行したこと（84~100 行）、各地で行なった造寺造仏、放生会等について記される（100~ 第 2 面 19 行）。

第 2 面には、シーサッター大僧正が「ナコーン・クリシュナ」の中心にある「マハータートルアン」（註 4）の修繕に大量のレンガや漆喰を使用したこと、古い石仏も修繕し仏堂に安置したこと（20~35 行）、パターリプトラ、シーダーンニヤカッターカー（註 5）仏塔の巡礼について（36~39 行）、シーハラ（スリランカ）を去る際に一群の平信徒を連れてきたこと、レンガを積み上げ 9 つの聖なるものを造り、シーハラ（シンハラ）のマヒヤンガナ大仏塔からもたらした 2 つの仏舎利（仏牙舎利と喉仏舎利）を塔内におさめたこと（40~45 行）、スコタイにおける聖遺物（仏舎利）の様々な奇跡（45~95 行）について記される。

※パームアン王統については、王統図参照。

1-2. ナコーンチュム刻文〔第 3 基〕Nakhon Chum Inscription(註 6)

登録番号：KPh. 1〔第 3 基 ナコーンチュム刻文〕／年代：サカ暦 1279（仏暦 1900-1901、西暦 1357-1358）／文字：スコタイ文字／言語：タイ語／形状：石碑〔幅 47.0cm 高 193.0cm 厚 6.0cm〕／行数：第 1 面 78 行，第 2 面 58 行／出土・発見地：カムペンペットのシヴァ祠堂（かつてはカムペンペットとピン川を挟んで西岸に位置するワット・プラボロマタートにあったと伝わる）／仏暦 2429 年（西暦 1886）、ダムロン親王によってカムペンペットのシヴァ祠堂からシヴァ神像とともに、バンコクに運ばれた。仏暦 2464 年（西

暦1921)、ダムロン親王は北部行啓時に、カムペンペットのワット・プラボロマトートの住職から、当該刻文が、ワット・プラボロマトートの南側にあったこと、かつて3基の仏塔があり、中心仏塔はタイ様式の仏塔だったことなどの情報を得る。/ 所蔵: 国立図書館ワチラヤーン文庫→バンコク国立博物館(2021年調査)

第1面はシーサッチャナーライとスコタイを治めるルータイ(リタイ)王タンマラーチャー1世は、プラヤーラータイの息子、プラヤーラームラート(ラームカムヘーン)の孫であること、スリランカから請来した真舎利をナコーンチュムに安置し、この仏舎利をおさめた建物の後ろに聖なる菩提樹を植えたこと(1～14行)、正法の混乱(5つの退法)について記され、正法の世にあるうちに急ぎ功德を積むべきことなどが記される。仏舎利埋納から99年後、三蔵は失われ、マハーチャート(本生譚)を暗唱できるものもいなくなるだろう、・・・1000年後には僧団の規則を誰も知らず袈裟を着るものもいなくなるだろう、しかし舎利は残るだろうと記される(15～49行)。

第2面にはタンマラーチャー1世の言葉として王者の十正道について、主要な場所に建立した石碑や仏足跡について記される。最後には、スリランカのサマンタクータの仏足跡を写して作られた仏足跡を各所(シーサッチャナーライのプラシー山、スコタイのスmanaクート山、バーンパーンのナーントーン山、プラバーンのパークナム山頂)に安置した記述で終わる(51～58行)。

1-3. ワット・パーマムアン刻文〔第4基〕Wat Pa Mamuang Inscription(註7)

登録番号: STh. 3 [第4基 ワット・パーマムアン刻文、99/295/2550] / 年代: 仏暦1904(西暦1361) / 文字: クメール文字 / 言語: クメール語 / 形状: 四面体 [幅30.0cm 高200.0cm 厚29.0cm] / 行数: 第1, 2, 3面各56行, 第4面16行 / 出土・発見地: スコタイ 旧都城祠堂の丘 / 仏暦2376年(西暦1833) モンクット皇太子(ラーマ4世)がバンコクに持ち帰る / 所蔵: 国立図書館ワチラヤーン文庫→カンチャナピセーク国立博物館(2021年調査)

※詳細は[吉川2010: 11-13.] 参照。

※以下は造寺造仏について。

第1面はマハータンマラーチャーティラート(リタイ王)が1349年にマンゴー林にあるマハーカセート神殿にシヴァ神、ヴィシュヌ神像を安置し(50～53行)。

王は三蔵について名高い高僧から学んだことが記される(55～第2面1行)。第2面には、王はまた、バラモンから太陽暦、太陰暦を学び自ら新たな暦を発案したこと(註8)(2～7行)、シーサッチャナーライ、スコタイを22年統治してきた、とある。1361年に宮廷学者を遣わしてマハーサーミーサンカラート(大僧正/法王)をランカードヴィーパ(スリランカ)から招請し、出迎える様々な準備を行い、王侯貴族たちを出迎えに派遣し、チョート、チエントーン、バーンチャン、バーンパンを通して(註9)スコタイに招いたと記される(1～22行)。東の門から西の門まで、さらにマンゴー林まで美しく整え、僧坊、ウィハーン(註10)は日差しで暑くないよう施した(23～29行)。大僧正が安居入した後に安居があけると布施を行い、仏陀と同じ大きさの仏像を鑄造し、スコタイの中央、仏塔の東に安置した(30～33行)。宗教的隠者のように持戒し宮中の仏像に毎日礼拝した(39～41行)。1361年9月22日、大僧正とサンガの僧侶たちを黄金宮殿に招き、沙弥として出家した(42～43行)。

1-4. ワット・パーマムアン刻文〔第5基〕Wat Pa Mamuang Inscription(註11)

登録番号: AY. 1 [第5基 ワット・パーマムアン刻文タイ語第1基、99/31/2560] / 年代: 仏暦1904(西暦1361) / 文字: タイ文字 / 言語: タイ語 / 形状: 四面体 [幅28.0cm 高115.0cm 厚29.0cm] / 行数: 第1面35行, 第2面38行, 3面42行, 第4面摩滅 / 出土・発見地: アユタヤー ワット・マイ / 仏暦2448年(西暦

1905) プラヤー・ボーランラーチャターニン (後の王立学士院副院長) が発見 / 所蔵: バンコク国立博物館 →カンチャナピセーク国立博物館 (2022 年調査)

※詳細は [吉川 2010: 13-15.] 参照 (註 12)。

第 1 面は、以前プラヤー・ラームラート王 (ラームカムヘーン) がマンゴー林を植えたこと、プラヤー・ルータイ (リタイ) は三蔵経を学んだ後、祖父や父に代わってシーサッチャナーライ、スコータイ の王として即位したことが記される (1 ~ 9 行)。皆は王者の十正道護持によって諸々の民を慈しむ慈愛王としてシースリヤボン・ラーム・マハータンマラーチャーティラートの称号を贈った。

王は他人の米を食らず、他人の財を欲しがらない。誰かが間違いを起こしても、自分に誠実でない者であっても、捕虜として捕らえた者であっても、いつでも殴ったり殺すことはないことなど、王の無欲、慈悲の思想が見られる (12 ~ 35 行)。

第 2 面は、プラヤー・シースリヤボン・ラーム・マハータンマラーチャーティラートは、多くのウィハーン、仏塔を建立し、大菩提樹を植え、僧坊を建てて善根を積んだと記される (15 ~ 18 行)。シーサッチャナーライ、スコータイ を 22 年統治してきて、1361 年丑年、三蔵経を知悉する阿羅漢のごとき大僧正、高僧をランカードヴィーパ (スリランカ) から招請した (19 ~ 24 行)。第 3 面は、大僧正は第 3 季に安居入りし (7 ~ 8 行)、安居があけるとスコータイ の中央、プラシーラタナマハータートの東に仏像を安置した (9 ~ 12 行)。安居明けには、水曜日・・・1905 年 (1361)、入滅以来 65 万 5600 日、プラヤー・シースリヤボン・ラーム・マハータンマラーチャーティラートは宮殿に安置された黄金仏の前で受戒し、沙弥として出家した。プラヤー・シースリヤボンは黄金仏、三蔵経、高僧に拝礼して誓った (22 ~ 42 行)。

1-5. ワット・パーマムアン刻文 [第 6 基] Wat Pa Mamuang Inscription(註 13)

登録番号: STh. 4 [第 6 基 ワット・パーマムアン刻文、99/32/2560] / 年代: 仏暦 1904 (西暦 1361) / 文字: クメール文字 / 言語: パーリ語 / 形状: 四面体 [幅 33.0cm 高 130.0cm 厚 26.7cm] / 行数: 第 1 面 24 行, 第 2 面摩滅, 3 面 24 行, 第 4 面 摩滅 / 出土・発見地: スコータイ ワット・パーマムアン / 仏暦 2451 年 (西暦 1908) プラヤー・ラームパックディー (スコータイ 県知事) が発見 / 所蔵: バンコク国立博物館 (2021 年調査)

※詳細は [吉川 2010: 17-18.] 参照。

第 1 面は、布施の波羅蜜においてはヴェッサンタラ王子のごとくであり、持戒の波羅蜜においては、プラシーラワラート (พระสิริราช) のごとくであると記される (3 ~ 5 行)。出家したリタイ王は玉座を降り、マンゴー林に向かう様子が記される (18 ~ 24 行)。第 3 面はリタイ王を讃える偈。正道を達成した阿羅漢のごとく、宗教へ帰依した (5 ~ 7 行)。10 人の菩薩は弥勒となり、徳を備えた人、波羅蜜の備わった人、リタイという名のプラタンマラーチャーは未来に至るだろう (11 ~ 13 行)。

1-6. ワット・パーマムアン刻文 [第 7 基] Wat Pa Mamuang Inscription(註 14)

登録番号: STh. 5 [第 7 基 ワット・パーマムアン刻文タイ語第 2 基、99/18/2560] / 年代: 仏暦 1904 (西暦 1361) / 文字: タイ文字 / 言語: タイ語 / 形状: 四面体 [幅 28.0cm 高 132.0cm 厚 12.5cm] / 行数: 第 1 面, 第 3 面摩滅, 第 2 面 44 行, 第 4 面 51 行 / 出土・発見地: スコータイ ワット・パーマムアン / 仏暦 2458 年 (西暦 1915) プラヤー・ラームパックディー (スコータイ 県知事) が発見 / 所蔵: カンチャナピセーク国立博物館 (2022 年調査)

※詳細は [吉川 2010: 16-17.] 参照。

第 1 面、3 面は摩滅して判読不能。第 2 面判読可能な部分は、・・・の中央に僧房、ウィハーンを建て (1 ~ 4 行)、・・・礼拝し、結界をつくり布薩式を行い (15 ~ 20 行)・・・大僧正を招いて (22 ~ 23 行)・・・ランカー

の高僧たちが(27～28行)・・・プラヤー・シースリヤポン・マハータンマラーチャーティラートが出家すると、マンゴー林の大地が揺れたと記される(30～36行)。

第4面は、・・・地獄に落ちるだろう(4～5行)・・・危機に直面する(4～9行)。タイの丑年44万7539年卯年・・・父息子兄弟(19～20行)・・・。

1-7. チュタームニ大僧正金葉刻文 Cuthamuni gold leaf Inscription(註15)

登録番号: STh. 52/ 年代: 仏暦1919(西暦1366)/ 文字: スコータイ文字・ランナー文字(タム)/ 言語: タイ語・パーリ語/ 形状: 金板状[幅2.02cm 長24.05cm 厚0.1cm]/ 行数: 第1面4行/ 出土・発見地: スコータイ ワット・マハータート布薩堂本尊台座/ 仏暦2484年(西暦1941) 発見/ 所蔵: バンコク国立博物館

小暦738年(仏暦1919/ 西暦1366)、ソムデットプラマハーテラ・チュタームニがウィハーン(พิหาร)を建立し、仏舎利(พระธาตุ)、銀や金やティアック(เทียน ラテライトか)や象牙製の仏像を安置したこと、プラアッタロット(註16)の名が記される。

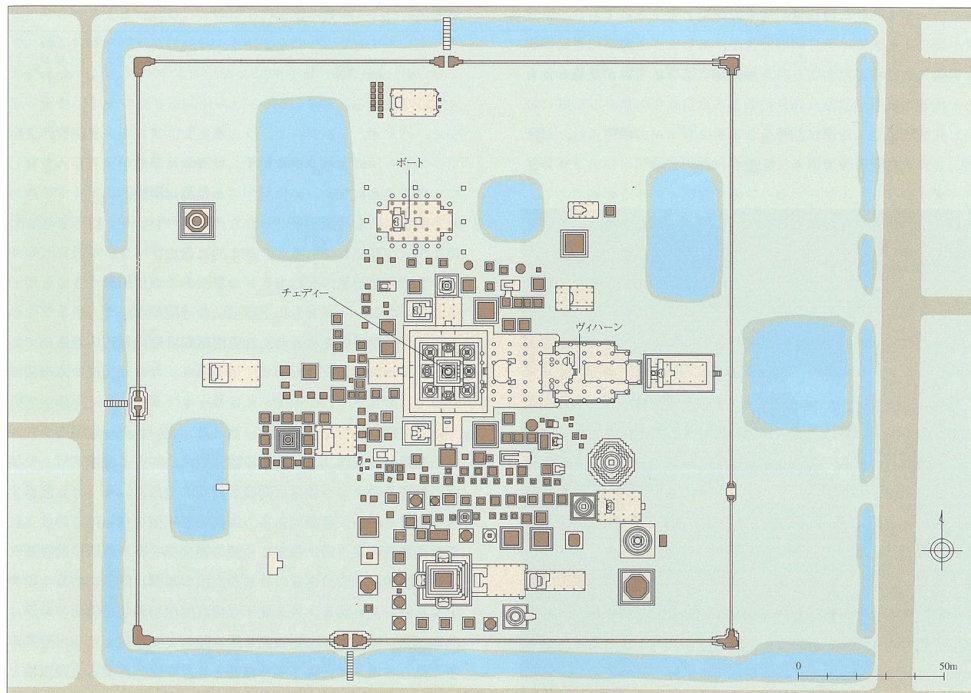
1-8. ワット・アソーカラーム刻文[第93基] Wat Asokaram Inscription(註17)

登録番号: STh. 26 [第93基 ワット・アソーカラーム刻文、99/301/2550]/ 年代: 小暦761(仏暦1942、西暦1399)/ 第1面 文字: タイ文字 言語: タイ語 第2面 文字: クメール文字 言語: パーリ語/ 形状: 石碑[幅54.0cm 高134.0cm 厚15.0cm]/ 行数: 第1面47行 第2面51行/ 出土・発見地: スコータイ ワット・サラットダイ(ワット・アソーカラーム)/ 仏暦2498年(西暦1955) 芸術局発見/ 所蔵: ラームカムヘーン国立博物館→1972年国立図書館ワチラヤーン文庫→カンチャナピセーク国立博物館(2022年調査)

第1面は、スコータイ文字で、プラマハータンマラーチャーティラート2世の王妃であるシーチュラーラックが、2世王、王母、王妃の祖父、王妃の父母の菩提を弔うため、ワット・アソーカラームに仏舎利を埋納するための仏塔を建立するのに4ヶ月かかったこと(1～11行)、ブッダ坐像、立像を安置し、僧房を作り、聖菩提樹を植え、木材で城壁、橋、道を美しく整え(11～13行)、2人の説法僧、学僧ヤーンウォン(ワン)とシーウォンの2僧が三蔵經典を整え、サンガを招きさまざまなものを奉納した(11～21行)。シーチュラーラック王妃は、寺院が整った後に大僧正ソーラパンカテラを招いてアソーカラーム寺院建立祈願を行った(21～27行)。

第2面はクメール文字パーリ語で、第1面とほぼ同じ内容が刻まれている。2人の学僧ヤーンウォンとシーウォンがアソーカラーム寺院で供養を行い、王妃の造寺の功德について祈願した内容、また王妃がその容姿、地位、年齢など、全てに置いて完璧な人間であることが記されている。また、仏塔の建立に4ヶ月かかり、仏像(を安置し)僧坊(を建て)由緒ある菩提樹を(植え)寺院の周壁や橋や道を美しく整えたことが記されている(10～13行)。王妃は、寺院が整った後に、プッタサーコーン大僧正、ソーラパンカという名の僧を招いて建立完成祈願をした(37～40行)。私のこのような功德によって未来に男性として生まれ、弥勒の仏法を拝聴できますように、と願っている(43～45行)。パーリ語による本刻文は、宮廷学士シータンマトライローカが著述した(53～54行)。

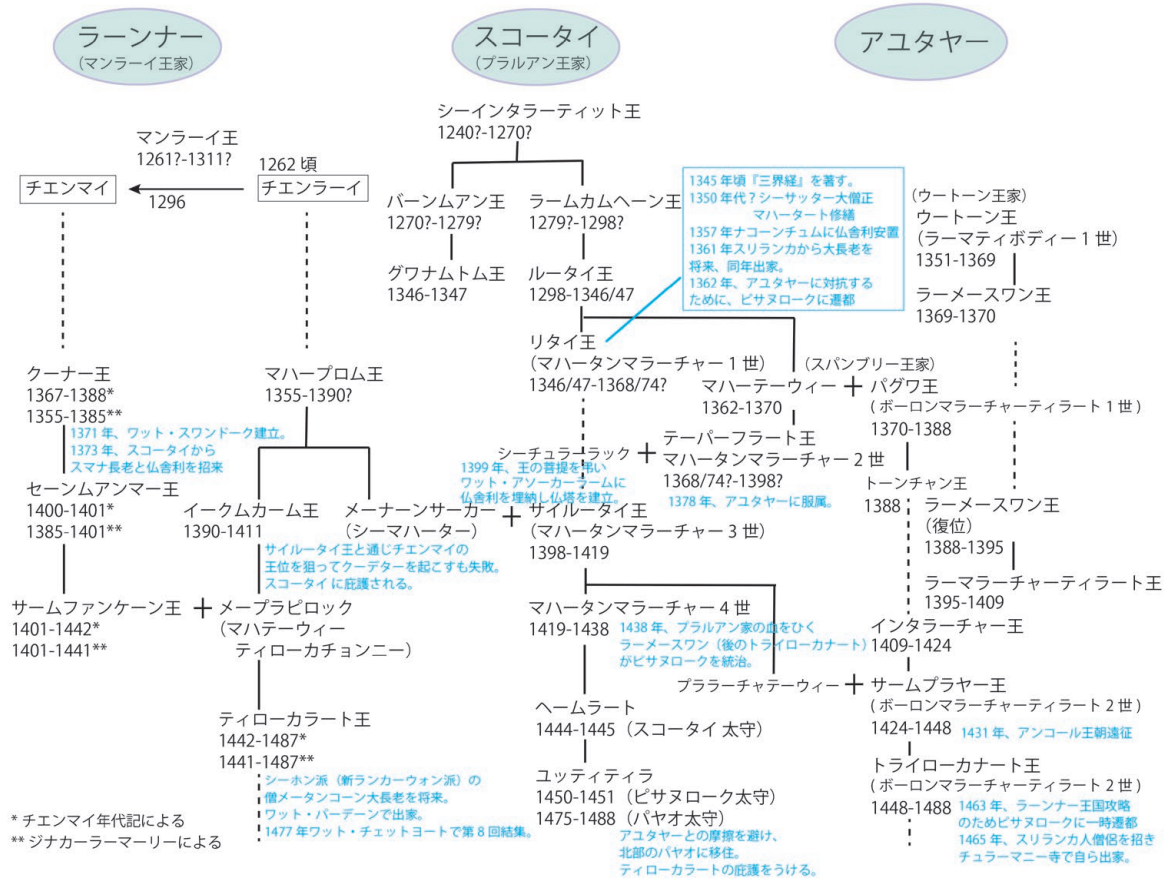
【資料 2】スコータイ ワット・マハータート平面図



肥塚隆編『世界美術大全集 東洋編 12・東南アジア』より転載

【資料 3-1】王統関係図 スコータイ、ランナー、アユタヤー (註 18)

王統関係図 スコータイ、ランナー、アユタヤー



10. 吉川は、ウィハーンを「布薩堂」と訳している。マンゴー林は大僧正たちのための止住する場として「クティ（僧房）」が用意されたことから、受戒を行う場として理解したのかもしれない。しかし、ここに記されたウィハーンは僧侶が修行したり、在家に説法を行ったりする「精舎」として考えるべきだろう。
11. ฐานข้อมูลจารึกในประเทศไทย: จารึกวัดป่ามะม่วง (ภาษาไทย) หลักที่ 1 <https://db.sac.or.th/inscriptions/inscribe/detail/130>
吉川利治 2010: 15-16.; Phongsiphian 2020: vol. 1, 257-269.
12. 吉川は、本刻文 (AY1) をクメール文字、タイ語の刻文として紹介しているが、AY1 はタイ文字、タイ語刻文である。ワット・パーマムアン刻文は全部で 5 基とするが、実際には 4 基である。
13. ฐานข้อมูลจารึกในประเทศไทย: จารึกวัดป่ามะม่วง (ภาษาบาลี) <https://db.sac.or.th/inscriptions/inscribe/detail/191>
吉川利治 2010: 17-18.; Saisingha 2004: 64.; Phongsiphian 2020: vol. 2, 17-21.
14. ฐานข้อมูลจารึกในประเทศไทย: จารึกวัดป่ามะม่วง (ภาษาไทย) หลักที่ 2 <https://db.sac.or.th/inscriptions/inscribe/detail/196>
吉川利治 2010: 16-17.; Phongsiphian 2020: vol. 1, 271-275.
15. ฐานข้อมูลจารึกในประเทศไทย: จารึกลานทองสมเด็จพระมหาเถรจุฑามณี <https://db.sac.or.th/inscriptions/inscribe/detail/171>
Saisingha 2004: 67-68.
16. プラアッターロットはここでは仏像ではなく、「寿ぐ」という意味ではないかとの説もある。Saisingha 2004: 68.
17. ฐานข้อมูลจารึกในประเทศไทย: จารึกวัดอโศการาม <https://db.sac.or.th/inscriptions/inscribe/detail/235>
Griswold, A.B. and Prasert na Nagara 1969: 29-56.; Phongsiphian 2020: vol. 2 187-203.
18. ラーンナー、スコータイ、アユタヤーの王統関係図については、スラサック・シーサムアーンの論文に掲載された系図を参考にした。Sisamang 2010: 51.
19. プラルアン王統については、1977 年にカチョン・スックパーニットが発表した論文「ポークン・シーナオナムトムについて」を参考にした。Sukkhaphanit2023: 244-248.(本論の初出は 1978 年)

はじめに

『ラーマーヤナ』が『マハーバーラタ』と並び、今日もインド人に愛好される国民的大叙事詩であることは言うまでもない。この物語の中で、主人公ラーマは比類ない徳性や信仰心、ならびに武勇を具えた国王の模範として描かれる。妻シーターは、夫に対する献身的で従順な愛を貫き、誘惑や脅迫に反抗して確固たる貞節を持つ女性の理想像として描かれている（註1）。

『ラーマーヤナ』は当初シュローカ（śloka）という韻律で、2行1詩からなる24,000詩頌を含むサンスクリット語で記されていたが、その後インド各地に広まって大衆に流布し、各地で伝本が成立した（註2）。また東南アジアや東アジアを含む広範な地域で受容されると、その土地の言語で伝承されるようになり、各地の文学や美術および演劇に大きな影響を与えた（註3）。本稿では、アンコール王朝（9世紀～15世紀前半）の下で建造された寺院建築に遺る浮彫に焦点を当て、『ラーマーヤナ』の様々な場面を主題とした図像表現を解説する。

1. 『ラーマーヤナ』の概要

『ラーマーヤナ』は7巻からなり、物語は主人公ラーマが魔王ラーヴァナに妻シーターを奪われ、妻を取り戻すために行った戦いを軸に展開する。以下は中村了昭の日本語訳における各巻のタイトルである（註4）。

第1巻 少年の巻／第2巻 アヨーディヤー都城の巻／第3巻 森林の巻／

第4巻 猿の王国キシキンダーの巻／第5巻 優美の巻／第6巻 戦争の巻／

第7巻 後続の巻

作者は詩人ヴァルミーキとされるが、全7巻のうち第1巻と第7巻は第2～6巻よりも後の時代に追加されたと考えられている。吟遊詩人たちによって伝承される中で、長短の様々な詩節を追加することによって作品が美化され、新たな宗教観が加えられたとみられる。第2～6巻がいつ頃作られたのかは不確定だが、最も早い説で前8世紀とするものがある。現存する『マハーバーラタ』に記載された『ラーマーヤナ』の梗概が全7巻の内容と同じであること等から、現在見られる7巻構成の『ラーマーヤナ』は遅くとも後2世紀には存在したとみられている（註5）。

2. 『ラーマーヤナ』の浮彫に関する先行研究

クメール美術における『ラーマーヤナ』の浮彫に関する先行研究のうち、本稿では、特にアンコール期の寺院建築に遺る浮彫を対象とした近年の研究成果を紹介する。

東南アジアに伝承された『ラーマーヤナ』には様々な形式や物語の展開が見られるが、それらがいつ頃、誰によって作成されたのか正確にはわかっていない。カンボジアではプレ・アンコール期にあたる6世紀以降、『ラーマーヤナ』の場面を主題とする浮彫や、『ラーマーヤナ』のエピソードや登場人物を想起させるような記述が碑文に刻まれている（註6）。その後、ポスト・アンコール期にあたる16～17世紀には『リアムケー』が成立し、今日も影絵芝居などの形で継承されている。このように『ラーマーヤナ』は、次第に現地化されながら伝承されたと考えられており、『マハーバーラタ』の伝承がポスト・アンコール期以降のカンボジアにおいては確認できないことと対照的である。

シヨン・ソピアリットは、カンボジアにおける『ラーマーヤナ』の伝承の過程に着目して修士論文を執筆し、それに基づき2本の論文を発表した。1つ目の論文は、6～13世紀のクメール寺院建築に遺る浮彫や碑文における『ラーマーヤナ』の表現と、ヴァールミーキの『ラーマーヤナ』とを比較し、その共通点や相違点から『ラーマーヤナ』に見られる現地化の様相を示した(註7)。ソピアリットは其中で、バプーオンやアンコール・ワットといった11～12世紀の寺院建築に『ラーマーヤナ』の浮彫が多数表現された背景として、この時期にヴィシュヌ信仰が広く受け入れられたことに言及している(註8)。2つ目の論文は、クメール寺院建築で確認された『ラーマーヤナ』に関する碑文に焦点を当てている。碑文の記述内容に含意された政治的表現や宗教的価値観を読み解くことで、当時の社会における道徳的秩序を確立させるために『ラーマーヤナ』のエピソードが用いられたことを指摘した(註9)。なお、ソピアリットはカンボジアの『ラーマーヤナ』に関する19世紀後半以降の先行研究を詳細にまとめており、それらの記述は研究史をたどる上で非常に有用である。

リー・ボレットは、アンコール期のいくつかの寺院伽藍に見られる浮彫装飾の主題や図像表現、配置構成に着目し、それらの研究において『ラーマーヤナ』の浮彫に多く言及している(註10)。ボレットは、バンテアイ・スレイ(967年創建)に遺る『ラーマーヤナ』や『マハーバーラタ』およびプラーナ文献に基づく図像の配置や組み合わせを「picture-perfect pairing(非の打ちどころのない組み合わせ)」と呼称した。そして、同寺院では叙事詩や神話の場面が物語の展開に沿って順番に配置されるのではなく、象徴的な意味を込めて配置や組み合わせが生み出されたと解釈した。例えば、「禁欲」と「愛欲」、「水」と「火」、「保存」と「破壊」、「言葉」とイメージ、「幻想」と「現実」といった対になる概念の他、「王権」と「正統性」というテーマや、権力闘争に関するエピソードを意図的に組み合わせで彫刻を施した可能性を指摘している。さらに、『ラーマーヤナ』で悪役として登場する羅刹王ラーヴァナは、『シヴァ・プラーナ』ではシヴァへの敬虔な帰依者として描かれたことに着目し、シヴァ信仰の寺院であるバンテアイ・スレイでは、シーターが誘拐される場面は羅刹のヴィラーダによるものとして表され、ラーヴァナが悪役とならないよう意図されていることを指摘した(註11)。

また、ボレットはバプーオンの第2周壁西門壁面に遺る『マハーバーラタ』の浮彫に着目した。壁面に設けられた8つの区画のうち、最下部にある2つの主題不明の浮彫を除く6つの区画の浮彫に『マハーバーラタ』のクライマックスである「クルクシェートラの戦い」とその前後の場面であるとした(註12)。なお、それら浮彫の1つに、弓矢を持った2人の人物が並び立つものがある。ボレットは、これらの人物をクルクシェートラの戦場に到着したクリシュナとアルジュナであると指摘した。この浮彫を、少年時代のラーマとラクシュマナとする見解も出されているが(註13)、近接する区画に浮彫された主題との関係性を考慮すると、ボレットの指摘のように『マハーバーラタ』で語られる一連の場面の1つとして表現されたと考えるのが妥当であろう。

ルイズ・ロッシュは、バプーオン(11世紀半ば)の各門の壁面に設けられたおよそ400の区画の浮彫に着目した。それらの浮彫には、『ラーマーヤナ』や『マハーバーラタ』といった叙事詩やクリシュナ神話に基づく様々なエピソードが表現されている。フランス極東学院により長年続けられてきたバプーオンの修復工事が2011年に完了するまで、こうした壁面浮彫について具体的な研究はなかった。ロッシュはこうした浮彫を選定した理由や効果について考察し、そこには11世紀後半のアンコール王朝の宗教や政治等の歴史的背景が色濃く反映されていると指摘した(註14)。

また、ロッシュはバンテアイ・サムレに遺る浮彫についても研究を行っている(註15)。この寺院では碑文が発見されていないことから、これまで創建時期や創建者について様々な説が出されていたが、ペディメントやリントルの浮彫図像や配置構成を細かく整理し、増改築の痕跡なども検討した結果、トリブヴァナーディティヤヴァルマン王の統治期に建立された寺院と考えられることや、ヒンドゥー教や仏教の要素が統合されたハイブリッドな性格を持った寺院であり、10～11世紀のアンコール朝において受容された密教との関連性に言及した(註16)。

ヴィットリオ・ロヴェエダは、クメール寺院建築に施された浮彫資料を広範にわたって収集し、詳細にまとめた。ロヴェエダはその著書の中で、個々の浮彫の主題となった神話や叙事詩などを概説し、『ラーマーヤナ』

についても、物語の展開に沿って多くの作例を紹介している。

ロヴェエダは1997年に出版した著書の中で、クメール美術ではラーマーヤナの第1巻で語られるラーマが誕生する前あるいは幼少期のエピソードや、第7巻で語られるアヨーディヤー帰還後のエピソードを主題とする浮彫はほとんどあるいは全く見られないことを指摘し、その理由として第1巻と第7巻が後世に追加されたものであることを挙げている。その上で、クメール寺院建築において浮彫の主題となった最初の大きな出来事は、ジャナカ王の前でラーマが強弓を引き、シーターの結婚相手となる場面と述べた。彼はその後出版した書籍において、ヴァールミーキがシュローカを発見する場面や、ラーマ誕生前におこなわれた馬祀祭の場面、そしてラーマの幼少期を表すと思われる浮彫についても数点紹介している(註17)。

筆者は、博士論文およびその後に発表したいくつかの論文において、12世紀後半～13世紀初頭のジャヤヴァルマン7世統治期の寺院伽藍を構成する各施設の出入口構成部材に遺る浮彫の図像表現について考察した(註18)。そのうち1191年頃に創建されたプレア・カン寺院は、観音菩薩を本尊とし、伽藍中央部や伽藍東側および伽藍南側では仏教関連の浮彫が数多く認められるにもかかわらず、伽藍西側と伽藍北側の区画にはヒンドゥー教の神話や『ラーマーヤナ』、『マハーバーラタ』といった叙事詩の場面を表す浮彫がみられる。このように、仏教やヒンドゥー教といった宗教の別にとらわれず、さらには祖先崇拜をも含めた様々な諸尊からなる重層的な尊像配置には、寺院を建造した王の統治理念が反映された可能性を指摘した。

本稿ではクメール美術の『ラーマーヤナ』の浮彫に含意された意図を考察するため、ジャヤヴァルマン7世統治期の寺院建築のみならず、建造時期を限定せずに『ラーマーヤナ』の浮彫を収集・確認することにした。収集した浮彫にどのような場面がどう表現されているのか、遺跡や建造時期によって特徴をとらえてゆく。もちろん、建造者の政治的意図や宗教観を考察するには、図像資料による検討だけでなく、同時期の碑文史料の記述内容と照らし合わせることも必要となる。本稿ではその第1段階として、クメール寺院建築に遺る『ラーマーヤナ』の浮彫を収集し、各場面に沿って浮彫の図像を読み解くことを目的とする。その上で、碑文史料を交えた比較研究は次稿で行うこととしたい。

次節では、アンコール地域の諸遺跡で確認された浮彫について『ラーマーヤナ』の物語の展開に沿って紹介する。資料としては、筆者が現地調査で撮影した写真の他、上述した先行研究、およびフランス極東学院による古写真や月例報告書(Rapports de la Conservation d'Angkor、以下RCA)等の記録を用いる。また、図像を読み解くにあたって、岩本裕と中村了昭による『ラーマーヤナ』の日本語訳を参照する(註19)。ただし、登場人物の名前の表記についてはそれぞれの訳において細かな相違が見られることから、本稿では菅沼晃による『インド神話伝説事典』に従って表記する(註20)。

3. 『ラーマーヤナ』を主題とする浮彫

3-1. 少年の巻

ブラフマー神による詩作のすすめ

『ラーマーヤナ』第一巻の冒頭では、『ラーマーヤナ』全編で用いられた詩形であるシュローカを発明したエピソードが語られており、そこに作者のヴァールミーキが登場する。ヴァールミーキが川岸に沿って森を散策していたとき、つがいの小鳥が仲良く戯れていた。その時、邪悪な狩人がやってきて雄鳥を射殺した。悲しげに啼く雌鳥を見て同情の想いに駆られたヴァールミーキは、狩人に呪いを放った。その呪詛によって意図せずしてブラフマー神が現れて、その呪詛の韻律(シュローカ)でラーマの行状を詠うよう要請した(註21)。

この場面を表す浮彫として、バンテアイ・チュマーの第4周壁東塔門西面に遺るペディメントが挙げられる(図1)。蒲鉾型の低い横長の彫刻面には、右端につがいの小鳥と狩人が表される。中央には三面四臂のブラフマーが坐し、左第1手に数珠を執っている。向かって左には立膝をして坐す人物がおり、現在はその頭部

が削り取られてしまっているが、フランス極東学院によって 1921 年に撮影された写真 (註 22) を見ると、この人物は長い顎髭を生やし、両手で冊子のようなものを捧げ持ちながら、ブラフマーの右第 2 手から授けられる筆記用具のようなものを受け取る様子が見られる。ここでは、ブラフマーに要請されたヴァールミーキがラーマの物語を書き始めることを象徴的に表現しているのであろう (註 23)。

馬祠祭執行と四王子の誕生

ガンジス川の北にあるコーサラ国はアヨーディヤーを都として繁栄し、ダシャラタ王が統治していた。ダシャラタ王には長い間王子がいなかったため、王は馬祠祭 (アシュヴァメダ) で息子をもうけるのに有効な犠牲祭を執り行うことにした。その頃、天界の神々は十頭二十腕の魔王ラーヴァナに悩まされていた。そこで神々はヴィシュヌ神に対して、人間界に生まれてラーヴァナを退治するように懇願した。ヴィシュヌ神はそれを承諾し、ダシャラタ王の王子として地上に生まれる決心をした。馬祠祭のあと、月満ちて 4 人の王子が誕生した。第一王妃カウサリヤーはヴィシュヌ神の権化であるラーマを、第二王妃スミトラはラクシュマナとシャトルグナを、第三王妃カイケーイーはバラタを生んだ。4 人の王子の長子ラーマには、父の寵愛が特に深かった (註 24)。

タイのピマーイ寺院の寺域で発見されたリンテルに、この馬祠祭を表したとされる浮彫がある。一列に並ぶ人びとが胸に手を当てて立ち、中央には、水差しを傾けて隣の人物の手に水を注ぎかける人物がいる。その 2 人の間には馬の頭部があり、それは馬祠祭の儀式で捧げられた馬と考えられる (註 25)。

羅刹討伐に臨むラーマとラクシュマナ

やがて、王子たちは徳性と雄々しさを具えた若者に成長した。ラクシュマナは幼少の頃からラーマに献身的に仕えた。ある時、聖仙ヴィシュヴァミトラが王宮を訪れて、祭事を妨害する羅刹たちからの助けを求めた。ラーマとラクシュマナはその求めに応じて残虐な羅刹たちを退治した (註 26)。

バプーオンの第 2 周壁に設けられた各門の壁面には『ラーマーヤナ』の様々な場面が浮彫され、そのいくつかは少年時代のラーマを表す浮彫として解釈されている。第 2 周壁東塔門北側前室西面には、乳房の垂れた女に矢を射る人物が表されているが、これはヴィシュヴァミトラの要求で羅刹女ターラカー (註 27) を誅殺するラーマを表したものであるとする説がある (図 2) (註 28)。

シヴァ神の強弓を引くラーマ

ある時、ヴィシュヴァミトラとラーマ兄弟はヴィデーハ国のジャナカ王を訪問した。ジャナカ王にはシーターという娘がいた。彼女は普通の人間ではなく、王がかつて土地を耕していたとき、大地から出てきたのであった。そこで彼女をシーター (「田のあぜ」の意) と名付け、娘として育てたという。また、ジャナカ王は不思議な強弓を持っていた。それはシヴァ神が王の祖先に授けたもので、王女シーターと結婚するにはこの強弓を引くことが条件とされた。多くの貴公子がそれまでにこの弓を試したものの、誰もがそれを引くことすらできなかった。しかしラーマが試したところ、物凄い雷鳴とともにその弓は真っ二つに折れてしまった。ジャナカ王は大いに喜び、シーターをラーマに嫁がせた。大歓呼のうちにラーマとシーターの結婚式が挙行され、彼らはその後数年間幸福な日々を送った (註 29)。

ラーマがこの強弓を引く姿はアンコール・ワット第 3 回廊北西隅祠堂の壁面浮彫に確認できる (図 3) (註 30)。手前に大きく表されたラーマは右手に弓を掲げ、左手に矢を持って構えている。上方に表された森の向こう側には高い柱の上に設置された車輪があり、その車輪にとまる鳥を標的に矢を放つ瞬間を表したのであろう。標的の周りにはアプサラスが、ラーマの剛腕を讃えるかのように舞い踊っている。

3-2. アヨーディヤー都城の巻

ラーマ追放の計画

老齢となったダシャラタ王は、寵愛する第一王子のラーマを王位継承者にしようと決めた。このことを顧問官たちに諮問すると、彼らはみな喜んで賛同し、即位式の準備は国民の祝福の中に進められた。このことを第三王妃カイケーイーの邪悪な侍女マンタラーが知ると、カイケーイー妃に告げて、王妃の息子バラタを王位に即けるよう王に強要するよう煽動した。その執拗で巧みな誘惑に屈したカイケーイー妃は、バラタを王位に即けること、ラーマ王子を森に追放すること、という二つの願いをダシャラタ王に迫った(註31)。

王は苦悩したが、ラーマはこのことを聞くと、父王が約束を破るという罪を犯してはならないと言って、自ら追放生活を送ることを申し出た。シーターとラクシュマナはラーマへの随行を切望して許された。彼らは樹皮だけをまとして、民衆の同情に見守られながら森を目指して旅に出た(註32)。

ダシャラタ王は息子との別離に対する悔恨に苦しみ、ラーマが出発した数日後に亡くなってしまった。事情を聞いたバラタは母カイケーイーを厳しく責めた。ダシャラタ王の葬儀の後、バラタは大臣たちに王位に即くように求められたが、彼は断固として拒絶し、ラーマの帰国を望んだ。彼はラーマを連れ戻すために軍隊を率いてラーマのいるチトラクータ山に赴いた。ラーマは、父王に約束した森での生活を果たすために、バラタの申し出を拒否した。ラーマに諭されたバラタはラーマの履物を貰い、それを王権の象徴とすることにした。バラタはその履物をアヨーディヤーに持ち帰って王座に安置し、ラーマが帰国するまで政務を代行することにした(註33)。

3-3. 森林の巻

行者の懇願により羅刹と戦うラーマ

ラーマはシーターとラクシュマナを伴ってダндаカの森に赴くと、そこに住んでいた森の行者たちは自分たちの修行の邪魔をする羅刹から守ってほしいとラーマに懇願した。ラーマは彼らを保護することを約束し、その後は魔物との戦闘に忙殺されるようになる。

最初に、人食いの巨人ヴィラーダを殺した。ヴィラーダは巨大な顔に落ちくぼんだ目を持つ形相で、大きな腹で醜悪で凶暴な怪物で、あらゆる動物を槍で突き刺して大きな怒号をあげていた。彼はシーターを見ると大地を震撼させるような恐ろしい怒号をあげ、彼女を掴まえて腰に抱き上げた。ヴィラーダの凶悪な行為に激怒したラーマとラクシュマナはこの怪物に矢を放ち、刀を振りかざして攻め立てた。矢が貫通したヴィラーダは、自分が呪詛のために恐ろしい羅刹の姿になった経緯を語り、ラーマの手にかかって死ぬことを願った。彼はラーマによって穴に投げ込まれることで元の姿に戻り、天国に昇った(註34)。

バンテアイ・スレイの参道北側に復元されて置かれているペディメント中央には、巨体のヴィラーダが腰の左側にシーターを載せ、左腕で彼女の腰を抱えている。右手には槍のような武器を振り上げている(図4)。その左右両側には、ラーマとラクシュマナが棍棒を持って今にも襲い掛かろうとしている。また同じくバンテアイ・スレイのリンテルには、右手に槍を持つヴィラーダがシーターを抱える姿が表され、リンテルの左右両端部にラーマとラクシュマナと見られる男性が配されている(図5)。また、アンコール・ワットの第3周壁北東隅祠堂東面や第3周壁内南経蔵東面のハーフペディメントには、中央にシーターを抱えながら槍を持つヴィラーダがおり、その下方にラーマとラクシュマナが弓を構え、ヴィラーダに向けて矢を放とうとしている(図6、7)。そのうち図6の彫刻面の下部には鹿や猪のような動物たちが表されている。これらは、ヴィラーダが森に棲む動物を槍で突き刺して殺戮したことが語られているため表されたのであろう。アンコール・ワット第1回廊北西隅祠堂の壁面には、ヴィラーダの左膝に抱えられるシーターが浮彫されている(図8)。ベン・メリアの第3周壁内北経蔵のピラスター柱身部下端には、ヴィラーダの膝にシーターが載せられ、その左右下にラーマとラクシュマナが弓を引く様子が表されている(図9)。

ラーヴァナによるシーターの誘拐

その後偶然、ラーヴァナの妹であるシュールパナカーが森に来て、ラーマを見るや恋に落ち、結婚を申し込んだ。ラーマは未婚の弟ラクシュマナのもとに行くよう勧めたところ、ラクシュマナはシュールパナカーを嘲笑し拒絶した。怒ったシュールパナカーはシーターに嫉妬し、彼女を傷つけようとしたが、それを知ったラーマの命令で、シュールパナカーはラクシュマナに鼻と耳を切り落とされた。彼女はランカー島にいる兄ラーヴァナのところに行き、自分のために復讐することを頼んだ（註 35）。同時に、彼女はシーターの素晴らしい美しさを述べて、兄にシーターを掠奪するよう唆した（註 36）。

ラーヴァナは空飛ぶ黄金の車に乗って、海の向こう側に住む羅刹マーリーチャのもとに飛んでいき、シーターを略奪するための援助を求めた。2人はラーヴァナの車に乗ってラーマの住処まで飛んだ。そこに到着すると、マーリーチャは宝石のように美しく輝く小鹿に姿を変え、ラーマ達たちが住む小屋の近くで草を食べていた。シーターはその小鹿を見ると、ラーマにその小鹿を捕えてほしいと頼んだ。ラーマは長く追いかけた後、矢で小鹿を射止めたが、その死に際にマーリーチャは、ラーマの声を真似て「シーターよ、ラクシュマナよ」と助けを求めて叫んだ。ラーマは事情を察して、帰路を急いだ（37）。

一方、マーリーチャの声を聞き心配したシーターは、ラクシュマナにラーマを救援するよう急ぎ立てた。ラクシュマナはラーマにシーターの護衛を頼まれていたが、やむなくシーターを残して出かけたため、シーターは一人になった。すると、ラーヴァナは遍歴行者の姿になってシーターに近づき、言葉を交わした。最後に本来の姿に戻ったラーヴァナはシーターに言葉巧みに言い寄るが、シーターが激しく拒絶したため、彼は大声で叫びながらシーターの身体を抱き上げ車に乗せ、ランカー島に向かい飛び立った。シーターは声高く救いを求めた。その声を聞いた禿鷹ジャターユスが飛んできてラーヴァナの行為を阻止しようとしたが、打ち落されてしまった（註 38）。

ランカー島に到着したラーヴァナはシーターを連れて豪華な宮殿を誇示し、「妻になってくれたらこのすべてをあげよう」と言うが、シーターは憤然としてこれを拒んだ。ラーヴァナはシーターを脅して、もし彼女が自分の意志に従わないのなら、12か月後に食べてしまうといい、シーターを岩窟に幽閉し、羅刹女たちの厳しい監視のもとに置いた（註 39）。

ラーヴァナによってシーターが誘拐される場面はいくつもの寺院に浮彫がみられる。アンコール・ワット第3回廊南西隅祠堂の出入口上部に浮彫された蒲鉾型のペディメントには、中央で弓を構えるラーマが、その左側の鹿めがけて矢を放つ瞬間が表されている（図 10）。ラーマの背後には、6名の行者たちが坐して合掌している。バプーオンの第2周壁西塔門南側前室東面には、ラーマの放った矢が子鹿の身体に突き刺さる瞬間が表されている（図 11）。マーリーチャは命が尽きようとしたときに偽りの姿を捨て、本来の羅刹の姿に戻ったという。バプーオンのこの浮彫には、マーリーチャの頭部は鹿ではなく、頭部に宝冠を戴く一つ目の羅刹の顔に表されており、『ラーマヤナ』で語られる情景が詳細に描写されていることが分かる。

パノム・ルンの前殿北面ペディメントには、複数の場面を構成することによってラーヴァナによるシーターの誘拐の経緯を伝えている（図 12）。ティンパナムの右下には、森の中で弓矢を持ってマーリーチャを追いかけるラーマが表されている。おそらく当初はラーマの右下にマーリーチャが表されていたと推察されるが、現在は欠損している。ラーマの左側にいる人物は、マーリーチャが死に際に放った声に心配したシーターに強要されてラーマを助けにきたラクシュマナであろう。その左には草庵が表されている。ここには、シーターが一人になったことを見計らい、ラーヴァナがバラモンの姿となってシーターに近寄る姿がある。ティンパナム左端に表されていたのであろうシーターは、現在は摩滅している。ティンパナム上部には、草庵でシーターを暴力的に奪い去ったラーヴァナが、空飛ぶ戦車プシュパカに乗り、ランカー島に向かう様子が表されている。ラーヴァナの多面多臂が広いスペースを使って浮彫され、プシュパカの戦車にはラーヴァナに手を掴まれたシーターの姿がみられる。

バンテアイ・サムレ中央祠堂南側前室南面の左右のピラスターには、この場面を表す浮彫がみられる。右のピラスターは、柱礎部に施された浮彫は摩滅した箇所が多いものの、鹿に矢を放つ人物が表されていることから、マーリーチャに矢を放つラーマが表されていたと考えられる(図13)。左のピラスター柱礎部には、多頭多臂のラーヴァナが左膝にシーターを抱いて連れ去ろうとする様子が浮彫されている(図14)。

一方、プレア・カンの第3周壁内北側副次的伽藍中央祠堂主室西面のリンテルには、槍を持った羅刹が左肩に女性を抱え、その左右下には矢を放つ2人の男性が表されている(図15)。この羅刹はラーヴァナではなくヴィラーダであり、彼に対してラーマとラクシュマナが攻め立てる場面のように見られる。

一か所気になるのは、羅刹の足元に鹿のような動物が逆さまではあるが明確に表されている点である。この動物をマーリーチャが化身した鹿とするならば、このリンテルの浮彫はラーヴァナによるシーター誘拐の場面と、ヴィラーダによるシーター誘拐の場面とを混ぜて表現した可能性が考えられる(註40)。もう1つの可能性として、ヴィラーダは森のあらゆる動物を槍で突き刺して殺戮してきたことを想起すると、この鹿はヴィラーダによって仕留められた動物の1つと考えることもできるかもしれない。いずれの解釈が妥当かを現時点で判断することは難しく、ここでは2つの可能性を示すにとどめておき、本稿の最後で改めて言及する。

羅刹カバンダとの戦い

一方のラーマとラクシュマナは、草庵に帰るとシーターがいなくなっているの、あちこちを探し回った。南に行く動物たちについて行くと、ラーマとラクシュマナはシーターの落とした飾りや花を見つけた。するとそこへ瀕死の禿鷹ジャターユスが現れ、シーターが南方へ連れ去られたことを語った。シーターを救おうとしてラーヴァナから致命傷を受けたジャターユスは、話半ばにして息を引き取った。兄弟はジャターユスを手厚く葬った後、さらに南方へ旅を続けた(註41)。

その後、二人が森でシーターを探していると、巨大な身体の羅刹カバンダに出会った。カバンダは「頭のない怪物」という意味で、頭と頸がなく、額は胸にあり、広く長い黄色い眉毛と、たった一つの大きな眼、巨大な口が腹にあった。2本の巨大な腕で様々な獣や鳥を捕えて引き寄せたり投げ飛ばしたりして、森に住む行者や動物たちを恐怖に陥れていた。ラーマとラクシュマナもまた、彼の長大な腕で引き寄せられた(註42)。兄弟に腕を切り落とされたカバンダは、この勇士こそ自分を異様な姿に落とした呪詛から解放してくれるラーマと知って喜び、自分の身体を焼いてほしいと頼んだ。そのお礼に、猿王スグリーヴァの援助を得てシーターを探し出すように勧め、猿王はパンパー湖畔に住んでいることを教えた(註43)。

アンコール・ワット第3周壁北西隅祠堂の出入口上に浮彫された蒲鉾型のペディメントには、カバンダと考えられる羅刹に足を掴まれ、その大きな口に引き込まれかけているラーマとラクシュマナが表されている(図16)(註44)。ラーマとラクシュマナは手に持った剣を振り上げ、カバンダの両腕を切り落とそうとしている。ここに浮彫されたカバンダは大きな頭部と両腕を持った姿で表されており、『ラーマーヤナ』で語られる容貌と整合しない点もある。しかし、両手で兄弟の足を掴み、その大きな口に引き込もうとしており、兄弟も剣を振り上げていることから、この羅刹との場面を描写したものと考えられる。

3-4. 猿の王国キシキンダーの巻

ラーマとスグリーヴァの同盟

ラーマとラクシュマナはパンパー湖畔にやって来て、そこで猿王スグリーヴァに会った(註45)。ラーマとラクシュマナが歩く姿を見たスグリーヴァは、不安と恐怖に打ちのめされて憂い悩んだ。兄ヴァーリンに妻と支配権とを奪われ、王国から追放される苦難を経験したスグリーヴァは、彼らを見て、宿敵ヴァーリンが悪巧みで遣わした勇士たちではないか、と心配したのである。恐怖におののくスグリーヴァを、話術に優れたハヌマーンが励まし、彼らはラーマとラクシュマナのところに行って、何故この森に来たのか、その目的を尋ねる

ことにした。ハヌマーンの仲介のもと、両者はお互いに事情を語り合った。ラーマとスグリーヴァは友好関係を結び、両者は心から喜び、手を握り合った（註 46）。ラーマはスグリーヴァにヴァーリンを殺して彼を王位に即ける約束をし、スグリーヴァはシーターを救出する際にラーマを援けることを誓った。

ラーマとスグリーヴァが同盟を結ぶまでの一連の場面を表す浮彫は数多く確認できる。バプーオン第 2 周壁北塔門東側前室南面には、湖畔にうずくまり嘆き悲しむスグリーヴァの側を、弓を担いで歩いていたラーマとラクシュマナが通りかかり、話しかける光景が浮彫されている（図 17）。アンコール・ワットの第 3 周壁東塔門のハーフペディメントには、左端に坐す小さなスグリーヴァに身体を傾けて話しかけるラーマと、その傍らに弓を持って寄り添うラクシュマナがおり、その下 2 段には猿の群衆が坐している（図 18）。プレア・カン第 3 周壁西塔門南側前室西面リントルには、中央にスグリーヴァと向かい合うラーマとラクシュマナの姿が表されている（図 19）。同様に、トマノン南経蔵主室西面では、左側にスグリーヴァ、右側にラーマとラクシュマナを配したハーフペディメントが見られるが、ここではスグリーヴァは立ち上がり、2 人の姿に驚いた仕草を見せている。トマノンのハーフペディメント上段には、うつむいた姿勢の大きな猿と、少し低い位置で彼と向き合って話す猿とが表されている（図 20）。これらはラーマとラクシュマナを警戒するスグリーヴァと、彼を励ますハヌマーンを表すとも考えられる。

続くラーマとスグリーヴァが同盟を結ぶ場面もまた、非常に多くの箇所で見られる。アンコール・ワット第 3 回廊北西隅祠堂壁面には、ラーマがスグリーヴァと向き合って対話する様子が見られる（図 21）。また、アンコール・ワット中央祠堂西側前室、第 3 回廊西塔門中央主室東面、第 3 回廊西塔門北側主室東面、第 3 回廊西塔門北側主室東面、第 3 回廊北東隅祠堂東面のハーフペディメント（図 22、23、24、25、26）、プレア・カンの第 3 周壁西塔門北側前室東面のペディメント（図 27）や第 3 周壁北塔門北側前室北面のハーフペディメント（図 28）、第 3 周壁北塔門西側前室西面や第 3 周壁内北側副次的伽藍東側広間西面のハーフペディメント（図 29、30）、および第 3 周壁内北側副次的伽藍中央祠堂主室南面のリントル（図 31）には、弓を持ったラーマとラクシュマナ、そしてスグリーヴァが坐して語り合い、その下で列をなして見守る猿たちの姿が確認できる。

矢で 7 本の樹木を粉碎するラーマ

スグリーヴァは友好関係を結んだとはいえ、ラーマにヴァーリンを殺すことができるのか確信できずにいた。そこでラーマは弓と一本の矢を取り上げて引き絞り、サーラの木を狙って矢を放った。ラーマが矢を射放つと、その矢は 7 本の樹木を切り裂いて倒し、再び矢筒に納まった。この光景を見たスグリーヴァは驚嘆し、ラーマに合掌した（註 47）。

バンテアイ・サムレ南経蔵主室西面北側には、樹木に向けて矢を放つラーマを浮彫したハーフペディメントがある（図 32）。

ヴァーリンとスグリーヴァの争い

その後間もなく、ヴァーリンの住む洞窟キシュキンダーの前で、互いに反目していた猿王の兄弟の戦いが始まった。スグリーヴァはラーマの援助によってヴァーリンを打倒したが、兄であるヴァーリンの死を深く悲しみ、兄のために王者に相応しい葬儀を執り行った。スグリーヴァは王位に即き、ヴァーリンの息子アンガダを王位継承者に任命した（註 48）。

ヴァーリンとスグリーヴァの争いを中心とした一連の場面の浮彫は多くの寺院で確認できる（註 49）。バンテアイ・スレイの第 1 周壁西塔門東面ペディメントにも、中央の猿の決闘、右側からのラーマの支援、左下に倒れ込みターラーに抱えられるヴァーリンという順に、一連の出来事が中央で決闘する 2 匹を中心に巧みに配置構成され、異時同図の手法が採り入れられている（図 34）（註 50）。バプーオンでは、第 2 周壁北塔門西側前室北面に設けられた矩形の区画に、猿の兄弟が向かい合って拳を突き合わせる姿や、ラーマがヴァーリンに矢を放ち、矢を受けたヴァーリンが倒れる場面を順番に表した箇所が見られる（図 35）。

また、アンコール・ワットのペディメントやハーフペディメントでは、ティンパナムを2段あるいは3段に分けて、上段に猿の争い、その下の段に矢を放つラーマやヴァーリンの倒れる姿を表している（図36）。また第2周壁西塔門北側主室東面ペディメントでは、ラーマとスグリーヴァとの出会いの場面とヴァーリンの死とを同じ彫刻面に表している（図37）。さらに、アンコール・ワット第3回廊南西隅祠堂の壁面では、広い壁面を使ってこの場面の展開を表している（図33）。中央に激しくつかみ合う猿の兄弟を表し、その傍らから矢を放つラーマ、そして倒れ込むヴァーリンを妃のターラーが抱きかかえている。

戦いに勝利して復権したスグリーヴァの姿を表す浮彫もいくつかの寺院で見られる。チャウ・サイ・デヴァター東塔門南側前室南面のペディメントには、上段にアプサラスたちに支えられる台座の上にスグリーヴァが坐し、下段には敗北したヴァーリンがターラーに抱きかかえられる様子が表されている（図38）。プレア・カン第3周壁内北側副次的伽藍中央祠堂北側前室北面のペディメントには、上段の台座上にスグリーヴァが坐し、その下の2段には手を胸に当てる猿や合掌する猿、両手を挙げて歓喜する猿等がみられる（図39）。

このように複数の場面を巧みに構成した例がみられる一方で、バンテアイ・サムレのハーフペディメントやプレア・カン第3周壁北塔門北側前室北面および第3周壁西塔門主室東面出入口左側のハーフペディメント（図40、42、43）では、上段に猿の兄弟の争いを表し、下段に猿族の列を表すという単純な構成の浮彫も見られる。また、バンテアイ・サムレ前殿北面のピラスター（図41）やプレア・カン第3周壁内北側副次的伽藍東塔門主室北面のリンテル（図44）、第3周壁北塔門南側前室に置かれた崩落リンテル（図45）、タイ、シーサケート県に遺るカンペン・ヤイ東楼門東面のリンテル（図46）では、彫刻面の中央に、組み合って争う2匹の猿だけを単純化した記号のように表している。同じ主題を表す浮彫であっても、場面の数や構成にヴァリエーションがみられることがわかる。

スグリーヴァの復権とシーター探索の開始

ラーマの援助によって王位を得たスグリーヴァは、その恩義に報いるために、数千数百万の猿を動員して全軍を4つに分け、東西南北の各方位に派遣し、シーターの探索を命じた。

スグリーヴァの部下の中でも、風の神の息子ハヌマーンは特に英知に優れ勇敢であった。アンガダの指揮のもとに猿の一団を率いてハヌマーンは南の道を進んだ。数々の冒険の後、彼らは禿鷹ジャターユスの兄サンパーティに会った。サンパーティはラーヴァナがシーターを誘拐し、ランカー島に連れて行くのを目撃していた。サンパーティからランカー島の位置を教わり、猿たちは海へ向かった。しかし、大波のうねる海を見ると、渡ることが困難であることに気が付き困惑した。風の神の息子であり、飛翔力と勇猛さを具えているハヌマーンは敵情の偵察のため海を飛んで渡ることになった。ラーマはシーターに対して身許を証明する品として、自分の指輪をハヌマーンに渡した（註51）。

3-5. 優美の巻

ハヌマーンとシーターの対話

ハヌマーンはマヘンドラ山に登り、山上のすべての生物を脅かすような力強い跳躍で空高く飛び上がった（註52）。四日間飛翔したのち、ランカー島に到着した。彼は身体を小さくして、日没後の暗闇に乗じて都城の中に忍び込んだ。ハヌマーンは、羅刹の都の全体、ラーヴァナの宮殿、ラーヴァナがいつも乗って空中を駆ける戦車プシュパカを見た。なかなかシーターを見つけることはできなかったが、ついにアショカ樹の園林の中で物悲しく沈み込んでいるシーターを発見した。ハヌマーンは自分がラーマの友人であり使者であると告げ、シーターにラーマの指輪を渡した。シーターは非常に喜んだが、ラーマが二ヶ月以内に救出に来てくれなければ自分はラーヴァナに食い殺されてしまうことを告げる。ハヌマーンは、ラーマが必ず彼女を救出に来ることを告げて、慰めた。

ハヌマーンが長い幽閉生活の中で悲しみに暮れるシーターを発見して対話する場面は、バプーオン第2周壁北塔門東側前室北面（図47）、第2周壁南塔門東側前室北面（図48）、第2周壁北塔門西側前室南面（図49）、アンコール・ワット第3周壁西塔門南側主室右側のハーフペディメント（図50）やワット・エク中央祠堂主室東面のリンテル（図51）、カンペーン・ヤイ中央祠堂南面のリンテル（図52）、プレア・カン第3周壁内北側副次的伽藍北塔門東側前室の崩落リンテル（図53）に見られる。それらの多くは、樹木の側で坐し、手で頭部を支えながらうつむくシーターの前にハヌマーンが歩み寄り、ラーマから預かった指輪を見せる様子が表されている。そして、シーターの背後には、献身的に彼女の世話をしたトリジャーターをはじめとする羅刹が控えている。プレア・カンのリンテルでは唯一他の例とは異なる配置でトリジャーターがあり、シーターの背後にハヌマーンが坐し、トリジャーターと推察される羅刹がシーターの左下に小さく表されるという配置が見られる（図53）。

羅刹に囚われるハヌマーン

シーターと無事に対面できたハヌマーンは、ラーヴァナの軍隊の強さを確認しようと、騒動を引き起こすためにアショーカ樹の園林を壊し、シーターを監視する魔女たちを脅すために巨大な猿の姿となった（註53）。羅刹たちとの激しい戦いの末にハヌマーンは縛られ、ラーヴァナの前に連れて行かれた（註54）。ラーヴァナは懲罰としてハヌマーンの尻尾に布切れを巻き付け、油に浸し、火をつけた。この状態でハヌマーンはランカーの街中を引き回されながら、街の様子を観察することができた。シーターが火の神アグニにハヌマーンを焼き殺さないようにと懇願したため、ハヌマーンは焼け死ぬことなく家から家へと跳び回り、燃えている尻尾で全市街を炎で包み焼いてしまった。その後、ハヌマーンは再び海を飛び越えてラーマのもとに帰り、シーターの消息を報告した。

3-6. 戦争の巻

ランカー島への橋の建設

ラーマはハヌマーンが任務を立派に果たしたことを讃えたが、ランカー島に到達するには大海を越えて行かねばならない難しさを考えて力を落とした。スグリーヴァはラーマを元気づけ、ランカー島へ渡る橋を架けることを提案した（註55）。ラーマの要請で、ハヌマーンはランカー島の状況、都市の要塞化と防衛の様子を詳細に報告した。それを聞いた猿たちは、ランカー城を制圧できると言った。ラーマはスグリーヴァに進軍を要請し、その命令で猿の大軍が南方に殺到し、海岸に到着した。

この頃、ラーヴァナはラーマの侵攻を伝え聞き対策を協議したが、弟のヴィビーシャナがシーターを返すように進言したので、腹を立てて彼を追放した。ヴィビーシャナはラーマに保護を求め、同盟を結んだ。ラーマと羅刹のヴィビーシャナが手を結ぶ場面がアンコール・ワット回廊の北西隅祠堂内壁面の出入口上部に浮彫されている。中央向かって右側に弓を持ったラーマが坐し、右手で何かを指示している。その左側に向かい合うように、棍棒を右手に持つヴィビーシャナが坐している。

その後、ラーマはヴィビーシャナの忠告で海神に海を渡る援助を頼んだ。海神は猿ナラに橋を建設させるように助言した。ナラは工芸神ヴィシュヴァカルマンの息子である。ラーマの命令を受けた猿たちは岩や木材を運び、数日のうちに海に橋を架け、猿の大軍団はランカーへ渡った（註56）。

橋の建造の場面は、バンテアイ・サムレ第2周壁南塔門主室北面のペディメント（図54）、アンコール・ワット第3周壁北塔門主室東側のハーフペディメント（図55）の他、ピマーイ中央祠堂南側前室南面のリンテル（図56）に見られる。バンテアイ・サムレのペディメントでは、橋を建設するための材料を運び作業する猿たちがティンパナム一面に表され、中央で指揮を執る大きな猿は芸術神ヴィシュヴァカルマンの息子ナラであろうと推察される。その左には、ラーマとラクシュマナおよびスグリーヴァが立っている（註57）。アンコール・ワット

トのハーフペディメントは、どちらも上部が崩落しているか、あるいは摩滅しているため、当初の浮彫の全貌を確認できないが、残存する下部には猿たちが橋の材料の石材や道具を手に持ち、闊達な様子で議論する様子が見られる。図56のピマリーのリンテルでは実際に橋を建造する様子が表され、多くの猿たちが橋の材料を肩に載せて運び、石を積んでいる姿が見られる。彫刻面の右下には魚やタツノオトシゴといった海の生き物が表されている。

アンガダによるラーヴァナへの最後通告

猿軍がランカー島に渡り、両軍とも戦いの準備を進めていたとき、ラーマはヴァーリンの息子アンガダにラーヴァナへの伝言を命じた。その伝言とは、ラーマはこれから始まる戦闘によってラーヴァナを殺害するつもりであること、もし殺されなければ、即刻シーターを返還するようにという最後通告であった。アンガダがラーヴァナの宮殿でラーマの言葉を伝え、ラーヴァナは激怒し、アンガダは捕えられた。アンガダは、自らの武勇を羅刹たちに示すためわざと捕えられたが、腕にしがみついている羅刹たちを掴み上げて、宮殿の上に跳び上がった。その跳躍が激しかったため、羅刹たちは振り払われて、ラーヴァナの目の前で大地に落ちた。アンガダは高く聳える宮殿の頂上を足で蹴って破壊した。ラーヴァナは宮殿を破壊されて激怒し、ラーマは興奮して叫び声をあげる無数の猿たちに囲まれて、戦いの準備をした。

ワット・プーの前殿東側前室北側のハーフペディメントは、このアンガダが羅刹を掴んで跳び上がる姿を浮彫している(図57)。アンコール・ワット第3周壁西塔門主室北側のハーフペディメント上段中央には多面多臂のラーヴァナが槍を持って坐し、その左右と下段には羅刹が控えている。ラーヴァナの上に差し掛けられた2つの傘の上に表されたアンガダは、両側に立つ羅刹の手を握って持ち上げている(図58)。同様の場面がアンコール・ワット中央祠堂のペディメント(図59)やバンテアイ・サムレ第1周壁北塔門東側前室東面のペディメント(図60)で見られる。それらはアンガダが羅刹を掴んだ両手を高く挙げており、その下には多頭多臂のラーヴァナが坐している(註58)。

両軍の勇士による一騎打ち

こうしてラーマの軍団と羅刹軍との大戦闘が始まり、両軍の英雄たちの間に壮烈な一騎打ちが次々に行われた(註59)。バンテアイ・サムレのペディメントには、ラーマがハヌマーンの肩に乗り、その左に小さく表されたラクシュマナがアンガダの肩に乗ってそれぞれ弓を引く姿がある。その周囲には大勢の猿たちが取り囲みひしめき合っている(註60)。

インドラジットに矢の網で縛られるラーマとラクシュマナ

ラーヴァナの軍団の中では、彼の息子インドラジットは魔法に精通し、いついかなる時も姿を隠すことができた。彼が勝利のための祭式を行ってから出撃するとき、対抗できる者はいなかった。インドラジットは、一度はラーマとラクシュマナに致命傷を与えた。インドラジットは、姿を現したままでは二兄弟を捕縛できず、悪知恵を働かせ、魔法を使って姿を隠し、戦いの中で二兄弟を混乱させることにした。そして、雷電の輝きの鋭い矢をラーマとラクシュマナに放ち、ラーマ兄弟の全身を切り裂き、矢の網で縛り上げた。体の急所を射抜かれて弱り果てた2人は、血を浴び、全身を矢で覆われて、苦しみながら戦場に横たわった。ハヌマーンをはじめとする猿たちはこの上もなく悲嘆にくれ、泣き叫び始めた。彼らは横たわる2人の周りに集まって絶望に沈んだ。

プレア・カン第3周壁内北側副次的伽藍北西側で復元されたペディメントにはこの場面が浮彫されている。ティンパナム下端に表された矢で縛られたラーマ兄弟めがけて、多くの猿たちが集まってくる様子が表現されている(図61)。また、ピマリーの前殿南面の出入口には、上下に配されたペディメントとリンテルの両方の彫刻面を使ってこの場面が表現されている(図62、63)。リンテルには、インドラジットによって矢で縛られ

たラーマとラクシュマナが横たわり、2人の足元や下の段には多くの猿が表されている。猿たちは両手を組んで頭を垂れる者、両手を高く掲げて祈る者、片手を胸に当てて祈る者など、様々な体勢で表現される。ペディメントについては、浮彫が遺るのは下部のみだが、そこには2兄弟の方に集まってくる猿たちとともに、背中に翼を表すガルダも飛翔してくる姿が表されている。ラーマとラクシュマナの救助について猿王スグリーヴァたちが話し合っていると、大きな風を起こしながらガルダが飛んできた。ガルダの姿を見ると、矢となってラーマとラクシュマナを縛っていた蛇たちは慌てて逃げ去った。ガルダが2兄弟の顔を両手で撫でた。ガルダの手が触れると、2人の傷はたちまち治癒した(註61)。

負傷したラーマ兄弟をシーターに見せるラーヴァナ

ラーヴァナは、瀕死の状態のラーマとラクシュマナの姿を敢えてシーターに見せることで、彼女は自分を頼りにするだろうと考えた。ラーヴァナは羅刹女たちに命じて、空飛ぶ戦車プシュパカにシーターと彼女の身の回り世話をする羅刹女トリジャーターを乗せて様々な旗やのぼりで飾られたランカー島を回らせた。すると彼女たちは、ラーマとラクシュマナが矢に縛られて意識がなく、横たわっているのを見た。シーターは悲嘆に暮れて泣き始めたが、トリジャーターは彼女を慰め、ラーマとラクシュマナはきっと生きているから、彼らを心配して自分の命を捨ててはいけない、と慰めた。落胆したシーターは、プシュパカを巡らしてトリジャーターとともにラーヴァナの宮殿へと戻った(註62)。

いくつかの遺跡で、この場面を詳細に表現した浮彫がみられる。まず、パノム・ルン中央祠堂西側前室西面のペディメント(図64)には、この場面が詳細に表現されている。中央には砲弾型の屋蓋を持つ豪華な宮殿があり、その基壇の下にはこの宮殿を飛ばしている大勢の鳥たちが表されている。宮殿の中央の部屋には左手で頭部を支えるようにうなだれるシーターの姿があり、その視線の先には、ラーマとラクシュマナが意識を失って横たわっている様子が見られる。シーターの左側には、彼女を慰めるトリジャーターと思われる女性が表されている。プシュパカを取り巻く下方には、武器を持った猿の戦士たちや、ゆらめく旗やのぼりが表され、上方には、大勢の羅刹の顔が並び、それらに相対するように、猿たちが手に武器を持って立ち向かっている。また、このペディメントに施された浮彫で興味深い点として、ティンパナム右下の斜めに流れる下模様の中に弓矢を持った人物が表されている(註63)。ここには、姿を隠しながらラーマとラクシュマナに矢を放ったインドラジットが表現されていると考えられる(註64)。

パノム・ルンの中央祠堂の前殿北面ペディメント右下端部(図65)には、横たわっている人物の脚が残り、その上方には矛と盾を持ち行進する羅刹の列がある。さらにその上方には、猿たちが下方へと移動する姿があり、これは負傷したラーマとラクシュマナのもとに猿たちが向かう姿と考えられる。さらに、ティンパナム右下には先述のような雲が表され、ここには身を隠したインドラジットが暗示されているのかもしれない。

次に、バパーオン第2周壁北塔門西側前室北面(図66)には物語の展開をより忠実に描写した浮彫がみられる。ここには6つの区画が縦に並んでおり、一番下の区画には、長い柄のついた矛を持つインドラジットが、棍棒を持ったヴァーリンの息子アンガダと戦い、打ち負かされる場面が表される(註65)。下から2番目の区画には、アンガダに敗北を喫し怒りに燃えるインドラジットによって次々と矢を放たれ、矢の網で縛られたラーマ兄弟と、その周りで心配する猿たちの姿がある。下から3番目の区画には、ガルダが2兄弟を救出に来る姿があり、下から4番目の区画にはガルダによって蘇ったラーマとラクシュマナがガルダと話す様子が表される。左端に坐す猿は猿王スグリーヴァであろう。下から5番目の区画には、空飛ぶ戦車プシュパカに乗せられラーマとラクシュマナの惨状を目にして嘆き悲しむシーターとトリジャーターがいる。この場面は時系列でいうと、下から2番目の後に位置づけられるが、ガルダによる救出の場面との連続性を優先させて、シーターの場面に後に配置していると考えられる。そして、下から6番目、すなわち1番上の区画には、ガルダによって復活した王子たちを見て安心し喜びにあふれる猿たちの様子が表現されている。

また、トマノンの前殿北面のペディメント(図67)は、ティンパナム下端に復活したラーマとラクシュマ

ナがガルダと話をしている様子が表されている。ガルダは背中に翼を持ち、その右側で対面して坐す人物は摩滅が進んでいて不明瞭だが、その右側に弓を抱えた坐像とあわせてラーマとラクシュマナであろうと考えられる。また、ラクシュマナの右側に坐すのは羅刹のヴィビーシャナ、ガルダの左側に坐すのはスグリーヴァであろう。ティンパナム上部には、ラーマとラクシュマナの復活に歓喜する猿たちが表している。

眠りから起こされるクンバカルナ

戦況が厳しくなる中、長い間眠りについていたラーヴァナの弟クンバカルナが起こされる。クンバカルナは兄の素行を批判しつつも王国のために戦いに出る(註66)。多くの戦士が犠牲になる中、クンバカルナはラーマとラクシュマナの放つ矢によって戦死する。

バプーオンの第2周壁西塔門南側前室東面(図68)には、深い眠りに落ちているクンバカルナを目覚めさせようと、1000頭の象がクンバカルナの身体に突進した場面が浮彫されている(註67)。このバプーオンの浮彫には、周囲を取り巻く兵士たちよりも大柄に表されたクンバカルナの背中に1頭の象が突進している様子が表されている。アンコール・ワット第3周壁北西隅祠堂北面東側のハーフペディメントには、上段中央に棍棒を右手に持った大きな羅刹が表され、その周囲を猿の戦士たちが取り囲んでいる。この中央の羅刹はクンバカルナであろうと考えられる(図69)(註68)。また、パノム・ルンの東塔門北側前室北側出入口東面のペディメント(図70)にも、巨体のクンバカルナが猿に囲まれ戦う姿がティンパナム全体に表されている。

薬草を山ごと運ぶハヌマーン

激しい戦いの中、ラーマとラクシュマナは再び、インドラジットの矢の網で散々に傷つけられてしまう。負傷した2人は戦いの前線において無力になり、猿の兵士たちは絶望して意気を喪失した。するとヴィビーシャナが皆を励まし、その言葉を聞いたハヌマーンも、多くの猿が戦いで命を落としたが、まだ生きている者たちを元気づけようと思い立った。そして、ハヌマーンは、熊王ジャーンバヴァトから、猿たちを救うため、傷つけられたラーマとラクシュマナの矢傷を治すため、ヒマラヤのリシャパ山とカイラーサ山の峰の間にある薬草の山に行くよう要請された。その山頂には、死者を蘇生する薬草や投げ矢の傷を治癒する薬草など光り輝く4つの薬草が生えていて、十方位を輝かせているのだという(註69)。

ジャーンバヴァトの言葉を聞いたハヌマーンはすぐにトリクータ山の頂上に立って山を力強く踏みしめ、その振動で大地や海を動揺させながら大きな声叫び声をあげ、空へ跳び上がった。風のような速さで進み、瞬く間にヒマラヤの山々を見て、ついに薬草の山に飛び下りて薬を探し始めた。この山に生えていた薬草はすべて、ハヌマーンがやってきた目的を知って姿を消してしまった。これに対しハヌマーンは腹を立て、腕力に任せてその山頂を掴み、猛烈な勢いで根こそぎ引き抜いた。その山頂を担いで、ハヌマーンは猛烈な速さで進み、ランカー島に帰還し、猿軍の中央に降りた。ラーマとラクシュマナは、その薬草の香りをかいだ途端に、その場で傷が治ってしまった。他の猿の勇士たちも起き上がり、死んでいた猿の勇士たちも蘇生し、眠っていた者が夜明けに目覚めたように起き上がった。

ハヌマーンの並外れた剛腕を物語るこの場面は、いくつかの寺院において浮彫が確認できる。トマノンの南経蔵主室東面南北のハーフペディメント(図71、72)では猿が樹木を抱えており、プレア・カン第3周壁西塔門主室西面のハーフペディメント(図73)では、樹木から手を放している。樹木が山を象徴的に示していると考え、これらはハヌマーンが引き抜いた山をランカー島に持ち帰った光景が表されているのであろう。また、いずれのハーフペディメントも、ハヌマーンや樹木の周りに人物や猿が表されている。これはランカー島に帰還し、薬草の効力によって復活したラーマとラクシュマナ、蘇った猿たちを表していると考えられる。

インドラジットの戦死

その後、悪知恵の働くインドラジットは、自分の戦車に魔法で作ったシーターの像を載せて都から出てきて、ハヌマーンやラクシュマナたちの眼前でそれをなぶり殺しにし、頸をはねた。驚いたハヌマーンは、シーターが殺された、とラーマに報告したが、間もなくヴィビーシャナが「これはすべてインドラジットが仕組んだことで、思い違いに過ぎない」と教えた。ラーマはラクシュマナにインドラジットを討伐するため出兵を命じた。ラクシュマナの率いる軍勢によって騒然とした戦いが繰り広げられ、インドラジットは祭式を途中にして立ち上がった。その後、インドラジットはラクシュマナとの激しい一騎打ちの末、打ち倒された。

息子の死に激怒したラーヴァナはラーマやラクシュマナと直接対決し、激しい戦いの中でヤマ神が魔法によって製作し、必ず敵を殺す投げ矢を、ラーヴァナは怒号を挙げながら投げ、ラクシュマナの胸に命中した。ラーヴァナの猛烈な力によってラクシュマナの心臓は割かれ、彼は地面に倒れた。ラーマは、ラクシュマナの胸を貫通した矢を両手で掴んで引き抜き、へし折った。ラーマが投げ矢を引き抜こうとしているときに、ラーヴァナはラーマの全身に矢を浴びせた。これらの矢をものともせず、ラーマはラクシュマナを抱きしめ、スグリーヴァやハヌマーンにラクシュマナのもとにとどまるように言い、自分はラーヴァナを一騎打ちで殺害することを誓った（註 70）。

ラクシュマナのために再び薬草の山を運ぶハヌマーン

ラーマはハヌマーンに、ラクシュマナを蘇生させるために再び薬草の山へ行くように行った。ハヌマーンはすぐに薬草の山に行ったが、薬草を見つけることができず、山の斜面を三回揺さぶって引き抜き、両手で担ぎあげた。驚くべき速度で戻ったハヌマーンは山の峰を下した。最上の猿スシェーナはハヌマーンを称賛し、峰から薬草を見つけて引き抜き、それをラクシュマナの鼻に嗅がせた。それによってラクシュマナの深傷は癒え、苦痛も消えて、起き上がった。ラーマはラクシュマナを抱きしめ、ラクシュマナはラーマに、ラーヴァナを殺戮するよう激励した（註 71）。

アンコール・ワットの第2周壁南塔門主室北面ペディメント（図 74）には、ラーヴァナの矢を胸に受けて倒れたラクシュマナを猿王スグリーヴァが抱きかかえ、ラーマが左脚でラクシュマナの身体を押さえ、ラクシュマナの胸に刺さった矢を両手で引き抜く姿が表されている。

ラーマの左後ろには羅刹のヴィビーシャナが坐しており、彼らの周囲や下段には猿たちが並んでいる。下段に並ぶ猿たちは、心配げに上方を見たり、苦しそうに両目を覆ったりと様々な体勢で表されている。また、ティンパナム上端にはハヌマーンが薬草の山を引き抜く場面も表されている。バンテアイ・サムレ第2周壁南塔門主室南面のペディメント（図 75）にもこれと共通点する浮彫がみられる。ペディメント上段の右下には、猿に抱えられて横たわるラクシュマナがおり、その左上方にはラーマが表され、左脚でラクシュマナの身体を押さえている。現在ラーマの頭部は切り出されており、またラクシュマナの胸から引き抜いた矢も破損しているが、全体の構図と、ラクシュマナの身体を押さえる脚によって主題が特定できる。なお、フランス極東学院による古写真には、ペディメント中央のラーマが残存しており、ラクシュマナの胸に刺さった矢を引き抜く姿が確認できる（註 72）。周囲には大勢の猿が表されているが、ラーマの頭上には空を飛ぶ猿が表されていることから、薬草の山に向かうハヌマーンを表しているのかもしれない。

ラーマとラーヴァナの一騎打ち

ラーマとラーヴァナとの間で激しい一騎打ちが始まり、それは何日にもわたって続いた。最初は互いに馬車に乗って弓を引き、矢の雨を注いだ。両者が放った矢は1本として無駄なものはなく、互いに衝突して地上に落ちた。ラーヴァナは、矢の他にも棍棒、鉄棒、円盤、杵、山の峰、樹木、投げ槍、斧を使って攻撃し、これらを魔法の力で行い、それらの武器は巨大で恐ろしい音を立てた。両者から放たれた矢が空全体を埋め尽くした時、ラーヴァナはラーマの馬を殺し、ラーマはラーヴァナの馬を殺した。二人は互いに怒りに燃え、互いに

突撃し、恐ろしい形相で戦った。ラーマによって放たれた雷電のような矢は何度もラーヴァナの頭をはねたが、そのたびに新しい頭が生えてきて、ラーヴァナの息が絶えることはなかった。

ラーマは、ブラフマー神が三界の征服を願うインドラ神のために製作し、聖仙アガスティヤから与えられた強弓でラーヴァナの心臓を突き刺し、ついにラーヴァナの命を奪うことに成功した。猿たちは勝利を誇って喜び、歓声を上げた。虚空にはラーマを讃える神々の賛歌が聞こえた。羅刹の王が打ち倒されたことで、神々は平和を取り戻した。ラーヴァナは厳粛に葬られ、ラーマはヴィビーシャナをランカー島の王位に即けた(註73)。

ラーマとラーヴァナの激闘を表す浮彫は数多く見られる。アンコール・ワット第2周壁南塔門南側前室ポーチ型出入口南面のペディメント(図76)には、ティンパナム下端部に負傷して横たわるラクシュマナが表され、上部には馬車に乗るラーヴァナと、ラーヴァナの馬の口元を掴むラーマの姿が表されている。ラーヴァナに馬を殺されたラーマが、その報復としてラーヴァナの馬を殺す瞬間を表したのであろう。なお、このペディメントでは、下端部に横たわるラクシュマナが縄で縛られている。ここでは、インドラジットの魔法で負傷した際にラーマとラクシュマナが蛇によって縛り付けられた場面と混同されているのではないかと考えられる。

アンコール・ワット第4周壁西塔門中央西側前室ポーチ型出入口西面のペディメント(図77)やプレア・カンの第3周壁西塔門西側前室ポーチ型出入口のペディメント(図78)では、互いに戦車に乗って弓を引くラーマとラーヴァナの姿が見られる。チャウ・サイ・デヴァター北塔門北側前室北面のペディメントも、ティンパナムの右側が摩滅しているが、おそらく同じ場面を表していると考えられる(図79)。ラーマの戦車は馬が牽いているが、ラーヴァナの戦車を牽いているのは馬ではなく、獅子のような顔をした動物である。ラーマとラーヴァナの周囲には、猿や羅刹たちが躍動的に戦う姿が表されている。

また、プレア・カン第3周壁内北側副次的伽藍北西隅祠堂付近で復元された崩落ペディメント(図80)には、ラーマがハヌマーンの肩に乗り、戦車に乗ったラーヴァナめがけて矢を放つ姿が表されている。バプーオンの第2周壁北塔門東側前室北面の壁面に表された浮彫では、ハヌマーンの背中に乗るラーマと戦車に乗るラーヴァナが対峙して矢を放ち合っており、ハヌマーンはラーヴァナの馬と組み合って格闘している(図81、82)。

バンテアイ・サムレの第2周壁北塔門北面ペディメント(図83)では、ティンパナム中央に戦車に乗って対峙し、互いに弓を引きあうラーマ(右)、ラーヴァナ(左)が見られ、その周囲を猿や羅刹の戦士たちが埋め尽くしている(註74)。バンテアイ・サムレの第1周壁南塔門南面のペディメント(図84)でも、ティンパナム下端に獅子の牽く戦車に乗るラーヴァナと馬の牽く戦車に乗るラーマが対峙している。

現在このペディメントの浮彫の数か所は人為的に切り出されているが、1942年にフランス極東学院によって撮影された写真を見ると、ティンパナム左下の馬車に乗る人物は1頭で頂飾や冠帯を現し、左手に弓を、右手に矢を持つことからラーマであると判断できる。ラーマと対面するようにティンパナム右下に表されたラーヴァナの方を見ると、その戦車の下にはいくつかの切り取られた首が落ちている。激戦の中、ラーマが放った矢によって落とされたラーヴァナの頭部が表現されているのかもしれない。また、ティンパナム中央上部には塔があり、その下には2体の多臂像が上下に並び、飛翔している。現在、多臂像のうち下方の八臂像は頭部が切り出されているが、フランス極東学院による写真を見ると、当初は3面の頭部の上に1面の頭部が表されていたことが分かる。また、上方の像は、両腕と右足が欠損しているが、右肩の残存部分から、当初は多臂像であったことが推察される。これら上下に並ぶ2体の多臂像が誰を表しているのか断定することは難しいが、仮に上部に位置する塔をランカー島のラーヴァナの宮殿とすると、これら2体は羅刹を表すのではないかと考えられる。また塔の周囲には、おそらく羅刹と思われるが、武器を持つ戦士たちや、激戦を目の前に合掌して祈る天人たちが表されている。

なお、フランス極東学院の月例報告書(RCA)では、このペディメントには間違いなく『ラーマヤナ』のラーマとラーヴァナの決闘の場面を表しており、彼らの上方には同じ人物が空に昇り、複数階建ての塔状の建物が表されている、と述べている(註75)。多臂像が空に昇っているのかあるいは空から降りているのかは判断が

難しいが、少なくともこれら多臂像は頭部の数が異なっており、同じ人物を表したものと考えるににくい。また古写真では、下の多面多臂像は左手の1つに何か握っているようにも見えるが、不鮮明であることからそれが何であるかはわからない。

また、前述したバプーオン第2周壁北塔門東側前室北面の壁面(図85)にもこの激戦の様子が浮彫されており、2頭の馬が牽引する馬車に乗ったラーマが弓で2本の矢をつがえている姿が表されている。その左側には、弓を持つラクシュマナと羅刹のヴィビーシャナが控えている。また、別の枠には、獅子の頭を持った魔物が牽引する車に乗ったラーヴァナが5本の矢を次々と放つ姿があり、その周りにはラーヴァナのものと思われる頭部が飛んでいることから、ラーマの放った矢によって頭部が次々と切断され、その度に新たな頭部が生じる様子が描写されているものと考えられる。

その他、戦車に乗ったラーマとラーヴァナの戦闘をあらわす浮彫はプレア・ピトゥ寺院Yのハーフペディメント(図86)、アンコール・ワット第4周壁西塔門中央主室南側のハーフペディメント(図87)、ピマーイ前殿東面のリンテル(図88)、ピマーイ中央祠堂南側前室南面のペディメント(図89)などで見られる。また、アンコール・ワット第3周壁北西回廊の壁面浮彫(図90、91)では、ラーマは戦車ではなくハヌマーンの肩に乗り、戦車に乗ったラーヴァナめがけて矢を放っている。ラーマの左側には弓を持ったラクシュマナとヴィビーシャナが立って見守っている。

シーターの神明裁判

ラーマはシーターに勝利を知らせた。しかし、他人の後宮で過ごした女性を妻とすることはできないという理由で、彼女を遠ざけた。愛するラーマからこのような仕打ちを受けて、シーターは震えおののいた。大群衆の中で、それまでのラーマからかけられたことのない恐ろしい言葉を聞き、恥ずかしさでうずくまり、激しく涙を流した。彼女は無実を誓い、神々の審判を仰ぐことをラーマに求め、自分の貞節と潔白を証明するためにラクシュマナに薪の山を作らせた。シーターは神々やバラモンに拝礼し合掌した。そして火の前で、火の神アグニに対して、いつもラーマから心が離れたことはなく潔白であった自分を守ってほしいと言い、少しも臆することなく燃え立つ炎の中に身を投げた。そこにいる群衆は皆、心が動転し、火の中に入るシーターを見守った。彼女が火に入ったとき、羅刹や猿たちの大きな叫びが起き、女たちは大声で泣き始めた。このように嘆く声を聞くと、法を愛するがゆえに民衆の前でシーターの潔白を証明したいと考えたラーマは憂い悩み、眼に涙を浮かべて瞑想した。火の神アグニは彼女を守り、火傷一つ負わず、以前と同じ美しさを具えた非の打ち所のないシーターを運び出してラーマに渡し、彼女が常に貞節で無垢であることを証言し、彼女を迎え入れるよう命じた。この言葉を聞くと、ラーマの心は喜びに溢れ、愛するシーターと再び一緒にすることを決めた(註75)。

この神明裁判の場面を表す浮彫は、アンコール・ワット第3周壁北西隅祠堂の壁面浮彫ならびに中央祠堂西側前室と第1周壁西門とを連結する回廊北面のペディメント(図92、93)、バンテアイ・サムレ南経蔵前室西面のペディメント(図94)、チャウ・サイ・デヴァター西塔門南側前室南面(図95)やベン・メリア第3周壁内南東側副次的伽藍北東隅祠堂東面のペディメント(図96)で確認できる。それらの中でも、この場面を詳細に描写し、なおかつ良好な残存状況であるのがベン・メリアのペディメントである。ティンパナムは3段に区分され、下段の中央には燃え盛る炎があり、その両側に坐す侍女たちが支える台座上には合掌するシーターが坐し、今にもその身体を炎の中に投げようとしている。上段中央の台座上には火の神アグニが片膝を立てて坐し、向かって右側には弓を持ったラーマ、向かって左には猿王スグリーヴァが胸に手を当てて坐す。3体の情報には合掌する飛天が並ぶ。炎の前方や左右には合掌して坐す猿や民衆のほか、両手を振り上げて大騒ぎして飛び回っている猿の姿が見られ、これはハヌマーンを表しているのかもしれない。

バンテアイ・サムレのペディメントのティンパナムは三段構成で、上段には3つの台座があり、その背後には燃え盛る炎が表され、その上方には華やかな宝冠を身に付けたシーターが表されている(図94)。3つの台座のうち中央の高い台座には右を向いて両手でシーターを抱きかかえるアグニが表され、向かって右側の台座

には弓を持ったラーマ、およびその右下には同じく弓を持ったラクシュマナが坐す。向かって左側の台座には猿王スグリーヴァが坐している。中段と下段には、動揺しながらも儀式での出来事を見守る猿や羅刹が並んでいる。

チャウ・サイ・デヴァターのパディメントには、上段に神明裁判の様子が浮彫されている。アグニが炎の中からシーターを抱きかかえて救出し、その左右にはそれぞれ手に弓を持った人物が坐しているが、彼らは儀式を見守るラーマとラクシュマナと推察される。アグニに抱えられたシーターは合掌し、その左右には2体の飛天が表される(図95)。

アンコール・ワットの第3周壁北西隅祠堂の壁面には、大部分が破損しているものの、大きな炎の中に身を投じたシーターの衣の裾、あるいはシーターを抱きかかえて救出するアグニの衣の裾が確認でき、炎の上方には多くの飛天が集まってきている。向かって左側には弓を持って坐す人物は表面が摩滅しているものの、ラーマを表したものと推察される。炎の右側に坐し左に向けて両手の指をさしている者とその背後に控えている者たちは、その顔立ちから、羅刹の王ヴィビーシャナと羅刹の群衆ではなからうか。その下の段には、合掌して儀式を見守る猿や羅刹たちが並び坐している(図92)。

同じくアンコール・ワットの中央祠堂西側前室と第1周壁西門を連結する回廊北面のパディメントには、ティンパナム上方に炎に包まれるシーターの姿が見られる。シーターは僅かに腰をひねるような体勢で炎の中に立ち、炎の周りには3体の飛天が取り巻いている(図93)。このパディメントは上方部分を除いてほとんど摩滅しており、当初の図像表現を推測することが難しい。下段には群衆が立ち並んでいるのか、あるいは花綱や葉文様が施されていたのか、明確に示すことは現時点で難しい。

アヨーディヤーへの帰還

ラーマとその一行は、羅刹王となったヴィビーシャナに空飛ぶ車プシュパカを用意させた。ラーマはシーターとラクシュマナだけでなく、スグリーヴァや猿軍、ヴィビーシャナと羅刹たちをも乗せた。皆が乗り終わると、鷲鳥の引く車は空高く飛び上がり、これまで旅した場所を下に見下ろしながら、一行はアヨーディヤーに向かった。彼らは民衆の歓呼のうちに入場し、ラーマは王位に即いた(註77)。

ラーマの一行がランカー島を出発し故郷アヨーディヤーへ帰還する様子を表す浮彫はいくつかの寺院において確認できるが、中でも良好な残存状況の浮彫がみられるのがプレア・カン第3周壁内北側副次的伽藍東塔門のパディメント(図100)である。2段に区分されたティンパナムの上段には3つの部屋を設えた宮殿があり、その下の段には5羽の鷲鳥が翼を広げて宮殿を支えており、これが空飛ぶ車プシュパカであることがわかる。宮殿の中央の部屋には弓を左手に持つラーマが台座上に坐し、向かって右側の部屋にはラクシュマナが坐し、向かって左側の部屋には蓮の花を持ったシーターが坐している。宮殿の上方には飛天が飛翔し、ティンパナムの下部両端には脚を交差させて坐す行者が合掌している。

同様に、ラーマとラクシュマナとシーターを乗せた宮殿のような車を鷲鳥が運ぶ様子は、プレア・カン第3周壁西側副次的伽藍北塔門南面のパディメント(図101)の他、プレア・ヴィヒア北塔門南側前室南面やピマーイ北東隅祠堂南面のリントルでも見られる(図97、99)。

また、アンコール・ワット第3周壁北西隅祠堂の壁面(図98)には鷲鳥は表されないものの、宮殿の中央の天蓋で飾られた部屋に坐す男性と、その左右と下段に並ぶ砲弾状の龕内に猿や羅刹の姿が見られることから、自分たちが故郷に向かう際に、猿軍や羅刹軍をもつれてアヨーディヤーに向かう様子が表されていると考えられる。ラーマの左右の龕内の浮彫は摩滅しているが、その痕跡から人物坐像が表されていたことが推察される。また、宮殿の上方には多くの旗が揺らめくとともに傘が差しかけられ、多くの飛天が舞い、王族であるラーマのたちが盛大に祝福されて故郷に凱旋する情景が表現されている。

3-7. 後続の巻

アンコール期のクメール寺院建築に見られる『ラーマーヤナ』の浮彫は、第6巻の「アヨーディヤーへの帰還」以降の場面は確認されていない。ここでは、第7巻の物語の概要のみ紹介する。

ある時ラーマは、民衆の間にラーマに対する好ましくない噂があることを聞いた。魔王に愛されたシーターをラーマが受け入れたという噂である(註78)。ラーマはそれが真実ではないことを知っていたが、この非難が国内の道徳に悪影響を及ぼすことを考慮して、シーターを領土の辺地にあるヴァールミーキ仙の草庵に連れに行くようラクシュマナに命じた。

その時、シーターは身ごもっていたが、彼女はヴァールミーキの草庵で双子の息子たちクシャとラヴァを生んだ。数年が過ぎ、子供たちは成長し、仙人であり詩人であるヴァールミーキの弟子となった。そのころ、ラーマは大規模な馬祠祭を催行し、それにヴァールミーキと双子も参加した。ヴァールミーキはそこで、自らの作ったラーマの物語を双子に朗読させると、それを聞いたラーマは彼らが自身の子供であることを悟った。ラーマはシーターを呼び、彼女がいつもラーマに対して貞節で無垢であることの証を求めた。

シーターは目を伏せたまま合掌して、「私はただの一度もラーマ以外の者を思ったことはありません。私はラーマだけを、心にも、言葉にも、行いにも保ってきました。私は真実を語っており、ラーマ以外の者を知りません。これが真実ならば、大地の女神よ、私のために腕を開きたまえ。」と誓言を唱えた。この誓言が終わるや否や、大地が裂けて、黄金の玉座に坐する大地の女神が現れた。女神はシーターを抱き、そのまま大地の中に姿を消してしまった。ラーマは大地の女神にシーターを返してくれるよう懇願したが、無駄だった。

その後、間もなくラーマは息子たちに国の政治を双子に譲り、自らは天上に昇って再びヴィシュヌ神となった。

4. 『ラーマーヤナ』の浮彫に関する留意点

クメール寺院建築に表された『ラーマーヤナ』の浮彫として、ヴァールミーキがこの物語を語るきっかけとなったエピソードを表す浮彫から、ランカー島で勝利を収めたラーマが、シーターやラクシュマナ、猿や羅刹たちとともに故郷アヨーディヤーに帰還する浮彫まで、100点余を紹介した。現状では、筆者が未見のものや未確認のもの、既に崩落・破損しているために判別が困難なもの、盗掘されて遺失したものも多数存在すると思われる。それらを含めると、寺院建造当初にはさらに多くの『ラーマーヤナ』の浮彫が表現されていたと推察される。本稿で紹介した『ラーマーヤナ』の浮彫に基づき、今後の検討課題として以下3つの留意点を記しておきたい。

4-1. 意図的な場面の選定

ボレットは、10世紀創建のシヴァ寺院であるバンテアイ・スレイではシヴァを崇拝するラーヴァナを悪役として表現しないことを意識して、羅刹ヴィラーダによるシーター誘拐の浮彫が複数個所に見られたと事例紹介した(註79)。

一方で、11～12世紀創建のパノム・ルンやバンテアイ・サムレでは多頭多臂のラーヴァナがシーターを抱えて誘拐する様子を表す浮彫が確認できる。また、12世紀末創建のプレア・カンの北側副次的伽藍のリンテルでは、ラーヴァナではなくヴィラーダによるシーター誘拐の場面であるかのように見せかけて、その下方にラーヴァナによる誘拐の場面に登場する鹿を表すという、2つのエピソードが混在する可能性を指摘した。ただし、この鹿が羅刹マーリーチャの化身したものではなく、単にヴィラーダが森で仕留めた動物の1つとして表したというもう1つの可能性を完全に否定することは難しい。しかしながら、プレア・カンにおいて、北側副次的伽藍はシヴァ信仰を表現した区域であることを考えると(註80)、ここでもやはり、バンテアイ・スレイと同

様にラーヴァナをシーターの誘拐者として表現しないようにする意識があったのかもしれない。

このように、シーター誘拐の場面は、寺院に祀られた主神によって意図的に特定の場面が選定された可能性があり興味深い。その他の浮彫においても、このような視点で浮彫の場面選定について考察を深めていくと新しい発見があるかもしれない。

4-2. 画面構成の手法

画面構成に関連することとして、『ラーマーヤナ』の山場ともいえるエピソードを表現する手法として、壁面やペディメントの彫刻面に複数の場面を物語のストーリーが時系列で伝わるように配置構成する手法が、特にバプーオン様式からアンコール・ワット様式にかけて認められる点である。

例えば、「ヴァーリンとスグリーヴァの争い」の浮彫に着目すると、10世紀後半のバンテアイ・スレイでは、ペディメントの彫刻面中央に、互いにつかみ合って争うヴァーリンとスグリーヴァを表し、その右側には弓を引くラーマ、左側にはラーマの矢を受けて倒れ、妻のターラーに抱きかかえられるヴァーリンの姿が表されている。ここではティンパナムを場面ごとに区分せずに、同一の画面の中に登場人物を繰り返し登場させて時間の経過を示す異時同図の手法がとられている。

11世紀半ばのバプーオンでは、塔門周囲の各壁面をそれぞれ縦に5つほどの区画に分けるようになる。その中にラーマとスグリーヴァとの出会いの場面や、ヴァーリンとスグリーヴァがつかみ合って争う場面、そしてラーマがスグリーヴァを助けるため、ヴァーリンめがけて矢を放つ場面が物語のストーリーの順に表されている。

12世紀前半のアンコール・ワットにおいては、ペディメントの彫刻面に一連の場面を上から順番に配置して、ヴァーリンとスグリーヴァの争いから、ヴァーリンが亡くなるまでの流れを表現している。同時期に建造されたパノム・ルンにおいても、「ラーヴァナによるシーターの誘拐」の経緯を、やはりペディメントの彫刻面を画面構成して表現している。またピマーイにおいては、同じ出入口に設置されたペディメントとリンテルそれぞれの彫刻面を利用して、「インドラジットの矢の網に縛られたラーマとラクシュマナ」の場面を表現している(註81)。

その後12世紀後半のプレア・カンでは、ペディメントまたはリンテルに、ヴァーリンとスグリーヴァの争いの場面を単独で表現したものが主流となる。その多くは、植物文様の中にヴァーリンとスグリーヴァのみを表し、その他の登場人物や背景はほとんど表さない特徴がある。ここでは、バイヨン様式以前の図像表現を継承しつつも、物語のストーリーを順を追って時系列に表現する手法は失われてしまったように思える。

4-3. 戦闘の場面に込められた意味

アンコール・ワット様式やバイヨン様式の寺院では、ランカー島の戦いの場面を表す浮彫が頻繁に認められ、中でも「ラーマとラーヴァナの一騎打ち」の場面が多数を占める。この場面を多く表現した背景には、チャンパーなどの隣国との戦闘が度々起きていたことが想起される。羅刹王ラーヴァナを敵対勢力になぞらえて、ラーヴァナに対して勇敢に戦いを挑むラーマに王の姿を重ね合わせて表現したのではないかと想像される。

戦闘の場面に限らず、その他の浮彫の主題においても、当時の歴史的背景が浮彫にどのように表象されたのか、という問題については刻文史料との比較検討が必要であり、今後稿を改めて考察を深めていきたい。

おわりに

以上、クメール寺院建築に見られる『ラーマーヤナ』の浮彫に関して、現在確認できる資料をもとに所感を述べた。実際には、本稿で提示した浮彫以外にも『ラーマーヤナ』の浮彫は現存する可能性がある。今後も資料収集を継続するとともに、上述の検討課題にも取り組み考察を深めてゆきたい。あわせて、寺院の建造時期に伴う『ラーマーヤナ』の浮彫の主題や図像表現の変遷、寺院伽藍における配置構成といった観点からも考察

を深めたい。

『ラーマーヤナ』の浮彫に限ったことではないが、アンコール遺跡群では、経年劣化や自然的要因による崩壊のほか、内戦時の戦闘や盗掘といった人為的要因によって浮彫が欠損し、原型の把握が難しい箇所が多く認められる。本稿では、フランス極東学院の報告書等や古写真の参照は断片的にしかできなかったことが悔やまれるが、今後は先人たちの遺した研究成果を、遺跡で確認された浮彫の現状と照らし合わせながら考察していく必要がある。

このように、クメール寺院建築に施された浮彫が寺院創建時から現在までたどった長い時間に思いを馳せ、様々な資料に基づき当初の姿の解明を試みることによって、個々の図像表現に込められた意図を読み解いていくことが今後の課題と考えている。

註

1. ヴァールミーキ 2012-2013 (第1巻) : 26-27
2. 『ラーマーヤナ』の伝本や研究書、および各地への伝播については岩本裕による解題に詳細にまとめられている(ヴァールミーキ 1980)。
3. ヴァールミーキ 2012-2013 (第1巻) : 29-34
4. 岩本裕の翻訳では7巻の番号の振り方を「第1篇」「第2篇」...としているが、本稿では中村了昭の翻訳で用いられている「第1巻」「第2巻」...という表記を使用する。
5. ヴァールミーキ 2012-2013 (第1巻) : 26
6. ヴェアル・カンタル碑文(K.359、6世紀、ストウン・トラエン)には、バラモンが『ラーマーヤナ』を毎日暗唱することを定めたとの記載がある(Barth et Bergaigne 1885: 28-31)。プレ・アンコール期(6～9世紀初頭)からアンコール期(9～15世紀前半)にかけての碑文や彫刻において、『ラーマーヤナ』を題材としたものは散発的に扱われており、インドネシア・ジャワ島のプランバランの欄楯に遺る浮彫のように、物語の一部始終が順に表された史料は見られない。
7. Sophearith 2005
8. Sophearith 2005: 101
9. Sophearith 2006
10. ボレットはバプーオン、バンテアイ・スレイ、ピマーイそれぞれに遺る浮彫に関する論考を発表した(Boreth 2003, 2005, 2007)。
11. Boreth 2005: 172-173
12. 「ドローナの死」「アルジュナによるプリスラヴァスの右手の切断」の場面が見られることを指摘した(Boreth 2003: 136)。
13. Roveda 2005: 117-118
14. Roche 2015-2016
15. Roche 2020
16. Roche 2020: 56-57
17. Roveda 1997: 33
18. 久保 2012、2014、Kubo 2020
19. ヴァールミーキ 1980、2012-2013
20. 菅沼 1985
21. ヴァールミーキ 2012-2013 (第1巻) : 38-54
22. EFEO_CAM10879
23. Roveda 2005: 116
24. ヴァールミーキ 2012-2013 (第1巻) : 116-123
25. ピマーイ国立博物館所蔵のリンテル(登録番号 5/2520)で、馬祭祀の犠牲獣として馬の頭部を運ぶ人びとの列が表されている。人びとが腰に巻く布の表現から、12世紀のアンコール・ワット様式の浮彫とみられている。ロヴェーダは、この浮彫をダシャラタ王によって開催された馬祭祀の様子を表すものと指摘している(Roveda 2005: 116、Surasak 2008: 78)。
26. ヴァールミーキ 2012-2013 (第1巻) : 146-164
27. ターラカーは羅刹マーリーチャの母親であり、親子で悪行をはたらき人びとを脅かしていた(ヴァールミーキ 2012-2013 (第1巻) : 139-150)。
28. Roveda 2005: 119
29. ヴァールミーキ 2012-2013 (第1巻) : 284-308
30. アンコール・ワットに関する様々な文献を見ると、その回廊を外側から順に第1回廊、第2回廊、第3回廊と呼称し、自域を取り囲む環濠の内側に周壁がめぐらされていると説明するものと、中央から順に第1周壁、第2周壁、第3周壁、第4周

壁と呼称するものがある。本稿では後者の呼称を用いることとする。

31. ヴァールミーキ 2012-2013 (第2巻) : 66
32. ヴァールミーキ 2012-2013 (第2巻) : 199
33. ヴァールミーキ 2012-2013 (第2巻) : 460
34. ヴァールミーキ 2012-2013 (第3巻) : 20-27
35. ヴァールミーキ 2012-2013 (第3巻) : 83-84
36. ヴァールミーキ 2012-2013 (第3巻) : 138-141
37. ヴァールミーキ 2012-2013 (第3巻) : 175
38. ヴァールミーキ 2012-2013 (第3巻) : 208
39. ヴァールミーキ 2012-2013 (第3巻) : 228-229
40. ロヴェーダは、クメール彫刻ではヴィラーダによるシーター誘拐の場面とラーヴァナによるシーター誘拐の場面が混同されやすいことに触れている (Roveda 2005: 121)。2つの場面の違いは、誘拐の現場にラーマとラクシュマナがいて、羅刹による誘拐を阻止したかどうかで区別できる。ヴィラーダは2王子に矢を射られ誘拐を阻止されたが、ラーヴァナは黄金の鹿によって2王子をシーターから遠ざけ、誘拐に成功した。
41. ヴァールミーキ 2012-2013 (第3巻) : 275
42. ヴァールミーキ 2012-2013 (第3巻) : 279
43. ヴァールミーキ 2012-2013 (第3巻) : 279
44. Roveda 2005: 122-124
45. ヴァールミーキ 2012-2013 (第4巻) : 27
46. ヴァールミーキ 2012-2013 (第4巻) : 27-43
47. ヴァールミーキ 2012-2013 (第4巻) : 73
48. ヴァールミーキ 2012-2013 (第4巻) : 136-140
49. アンコール・ワットのヴァーリンとスグリーヴァが組み合って争う姿を表したとされる彫刻として、コー・ケー遺跡 (10世紀第2四半期) で出土した丸彫像がよく知られている (カンボジア国立博物館、Ka1664)。
50. プレア・ピトウのペディメントでは、ヴァーリンとスグリーヴァの争いと、その傍らで矢を放つラーマの姿のみ表している。
51. ヴァールミーキ 2012-2013 (第4巻) : 196-233
52. ヴァールミーキ 2012-2013 (第5巻) : 16-36
53. ヴァールミーキ 2012-2013 (第5巻) : 165-171
54. この場面を表す浮彫として、アンコール・ワットの第3周壁西塔門主室北側のハーフペディメントの浮彫が挙げられている (Roveda 2005: 130-134)。しかし、ここに表された猿は身体を縛られておらず、両手で羅刹を掴んでいる (図58)。改めて後述するが、この浮彫は、ヴァーリンの息子アンガダが、ラーマの言葉をラーヴァナに伝え、激怒したラーヴァナによってとらえられたが、逆に自ら両手で羅刹たちを掴み持ち上げた場面を表していると考えられる (ヴァールミーキ 2012-2013 (第6巻) : 38)。
55. ヴァールミーキ 2012-2013 (第6巻) : 357
56. ヴァールミーキ 2012-2013 (第5巻) : 438-447
57. EFEO_CAM07588
58. アンガダによるラーヴァナへの最後通告の場面はランカー島の戦いが始まる直前の出来事だが、この中央祠堂の浮彫はランカー島の戦いの場面と解釈されることもある (Roveda 2005: 136)。
59. ヴァールミーキ 2012-2013 (第6巻) : 44-49
60. EFEO_CAM07581
61. ヴァールミーキ 2012-2013 (第6巻) : 77-78
62. ヴァールミーキ 2012-2013 (第6巻) : 62-69
63. アンコール期クメール美術における雲の表現として、太陽と惑星を神像の姿で表す九曜像(navagraha)のラーフが想起される。ラーフの表現として、小さな巻雲が斜めに配列されて筒状になったところから上半身のみ出した姿で表すものが見られ、雲の中に身を隠すインドラジツが、斜めの線で表された雲の中から上半身だけ露出している点に類似性が認められる (Baptiste et Zéphir 2008: 189、浅湫 2019: 238)。
64. Roveda 2005
65. ヴァールミーキ 2012-2013 (第6巻) : 46-53
66. ヴァールミーキ 2012-2013 (第6巻) : 149-155
67. ヴァールミーキ 2012-2013 (第6巻) : 136
68. Roveda 2005: 133
69. ヴァールミーキ 2012-2013 (第6巻) : 233
70. ヴァールミーキ 2012-2013 (第6巻) : 360-363
71. ヴァールミーキ 2012-2013 (第6巻) : 366-369
72. EFEO_CAM07422、EFEO_CAM07416

73. ヴァールミーキ 2012-2013 (第6巻):424-426
74. EFEO_CAM07590
75. RCA, Banteay Samre 1942. Octobre-Novembre
76. ヴァールミーキ 2012-2013 (第6巻):451
77. ヴァールミーキ 2012-2013 (第6巻):493-503
78. ヴァールミーキ 2012-2013 (第7巻):220-222
79. Boreth 2005: 172-173
80. 久保 2014: 70-72.
81. 筆者は、アンコール・ワットと同時期の建造であるチャウ・サイ・デヴァターやトマノンのペディメントにみられる「ヴェッサンタラ本生図」の浮彫に着目した。それら2寺院のペディメントでは、ヴェッサンタラ王子がバラモンに子供たちを布施する場面から、最終的に一家が再会する場面まで、物語の展開に沿って複数の場面が順に配置構成されているが、その後のバイヨン様式の寺院に見られる同主題の浮彫では、そうした配置構成は見られなくなることを指摘した(久保 2023)。

参考文献

- Baptiste, Pierre et Thierry Zéphir. 2008. *L'Art khmer dans les collections du musée Guimet*, Reunion Des Musees Nationaux.
- Barth, A. et A.Bergaigne. 1885. *Inscriptions sanscrites de Campâ et du Cambodge*, 2fasc, Paris.
- Boreth Ly. 2003. "Narrating the Deaths of Drona and Bhurisravas at the Baphuon", *Arts asiatiques*, tome 58, pp.134-137.
- Boreth Ly. 2005. "Picture-Perfect Pairing: The Politics and Poetics of a Visual Narrative Program at Banteay Srei", *Udaya* 6, pp.151-185.
- Boreth Ly. 2007. "Protecting the Protector of Phimai", *The Journal of the Walters Art Museum*, Vol. 64/65, 35-48.
- École française d'Extrême-Orient. *Rapports de la Conservation d'Angkor*.
- Glaize, Maurice. 1944. *Les monuments du groupe d'Angkor* [4e éd. revue et mise à jour, 1993], Paris: Adrian-Maisonneuve.
- Kubo Makiko. 2020. "An Iconological Study on the Arrangement of Images at Preah Khan in Angkor" 『法華文化研究』 46, pp.143-190.
- Roche, Louise. 2015-2016. "Le décor de bas-reliefs en tableautins du temple du Baphuon à Angkor (troisième quart du XIème siècle): des images agissantes pour la royauté khmère ?", *Ecole des Hautes Etudes en Sciences Sociales (EHESS), Master recherche en sciences sociales*.
- Roche, Louise. 2020. "Le sanctuaire de Banteay Samrae à Angkor: une foundation bouddhique du règne de Tribhuvanādityavarman", *Arts asiatiques*, tome 75, pp.43-60.
- Roveda, Vittorio. 1997. *Khmer Mythology: Secret of Angkor*, Thames & Hudson: London.
- Roveda, Vittorio. 2003. *Sacred Angkor: The Carved Reliefs of Angkor Wat*, Thames & Hudson: London.
- Roveda, Vittorio. 2005. *Image of the Gods: Khmer Mythology in Cambodia, Thailand and Laos*, Riverbooks: Bangkok.
- Sophearith, Siyonn. 2005. "The Life of the Rāmāyaṇa in Ancient Cambodia: A Study of the Political, Religious and Ethical Roles of an Epic Tale in Real Time (I)", *Udaya* 6, pp.93-150.
- Sophearith, Siyonn. 2006. "The Life of the Rāmāyaṇa in Ancient Cambodia: A Study of the Political, Religious and Ethical Roles of an Epic Tale in Real Time (II)", *Udaya* 7, pp.45-72.
- Surasak, Srisamang. 2008. *Antiquities: Treasures of Thailand*, The Office of National Museums: Bangkok.
- 浅瀬毅「クメール・アンコール時代の九曜像について — タイ・バンコク国立博物館所蔵のロレイ出土蔵を中心に —」肥塚隆責任編集『アジア仏教美術論集 東南アジア』中央公論美術出版、pp.229-251.
- ヴァールミーキ. 1980.『ラーマーヤナ』1・2、岩本裕訳、平凡社.
- ヴァールミーキ. 2012-2013.『新訳ラーマーヤナ』全7巻、中村了昭訳、平凡社.
- 久保真紀子. 2013.「アンコールのプレア・カーンにおける図像表現とその配置構成 — 出入口に施された装飾を中心に」上智大学学位請求論文.
- 久保真紀子. 2014.「アンコールのプレア・カーン寺院における尊像配置とその意味 — 出入口の浮彫図像と碑文の比較を通して —」『佛教藝術』337号、pp.56-83.
- 久保真紀子. 2023.「アンコール期の寺院建築にみられるヴェッサンタラ本生図の浮彫について」『日蓮教学研究所紀要』第50号、pp.25-46.
- 菅沼晃. 1985.『インド神話伝説事典』東京堂出版.
- 福岡まどか編. 2022.『現代東南アジアにおけるラーマーヤナ演劇』めこん.

【参考データベース】

Carte Interactive Map for Archaeologiques Khmers (CISARK)

(<https://cisark.mcfa.gov.kh/index.php>) 最終閲覧日: 2023年11月3日

Ecole française d'Extrême-Orient, Photothèque virtuelle (<https://collection.efeo.fr/>) 最終閲覧日: 2023年11月3日

図版一覧(本稿に掲載した図版は全て筆者による撮影)

図番号	所在地	寺院名	寺院建造時期 (創建年代)	施設名	部材名	浮彫の主題
1	カンボジア、バンテアイ・ミエンチェイ州	バンテアイ・チュマー	12世紀後半～13世紀初	第4周壁東塔門西面	ペディメント	ブラフマー神による詩作のすすめ
2	カンボジア、シエムレアプ州	バプーオン	11世紀半ば	第2周壁東塔門北側前室西面	壁面浮彫	羅刹タラカーを退治するラーマ
3	カンボジア、シエムレアプ州	アンコール・ワット	12世紀前半	第3回廊北西隅祠堂の壁面浮彫	壁面浮彫	シヴァ神の強弓を引くラーマ
4	カンボジア、シエムレアプ州	バンテアイ・スレイ	10世紀後半(967年)	第4周壁東塔門と第3周壁東塔門の間の参道北側	崩落ペディメント	ヴィラーダによるシーターの誘拐
5	カンボジア、シエムレアプ州	バンテアイ・スレイ	10世紀後半(967年)	中央祠堂西面	リンテル	ヴィラーダによるシーターの誘拐
6	カンボジア、シエムレアプ州	アンコール・ワット	12世紀前半	第3周壁北東隅祠堂東面南側	ハーフペディメント	ヴィラーダによるシーターの誘拐
7	カンボジア、シエムレアプ州	アンコール・ワット	12世紀前半	第3周壁内南経蔵東面北側	ハーフペディメント	ヴィラーダによるシーターの誘拐
8	カンボジア、シエムレアプ州	アンコール・ワット	12世紀前半	第3回廊北西隅祠堂	壁面浮彫	ヴィラーダによるシーターの誘拐
9	カンボジア、シエムレアプ州	ベン・メリア	11世紀後半～12世紀前半	第3周壁内北経蔵?	ピラスター	ヴィラーダによるシーターの誘拐
10	カンボジア、シエムレアプ州	アンコール・ワット	12世紀前半	第3回廊南西隅祠堂	壁面浮彫(蒲鉾型ペディメントの浮彫)	マーリーチャに矢を放つラーマ
11	カンボジア、シエムレアプ州	バプーオン	11世紀半ば	第2周壁西塔門南側前室東面	壁面浮彫	マーリーチャに矢を放つラーマ
12	タイ、プリーラム州	パノム・ルン	11～12世紀	前殿北面	ペディメント	行者の姿でシーターに近づくラーヴァナ、マーリーチャを追うラーマ、ラーヴァナによるシーターの誘拐
13	カンボジア、シエムレアプ州	バンテアイ・サムレ	12世紀半ば	中央祠堂南側前室南面(右)	ピラスター	マーリーチャに矢を放つラーマ
14	カンボジア、シエムレアプ州	バンテアイ・サムレ	12世紀半ば	中央祠堂南側前室南面(左)	ピラスター	ラーヴァナによるシーターの誘拐
15	カンボジア、シエムレアプ州	ブレア・カン	12世紀後半(1191年頃)	第3周壁内北側副次的伽藍中央祠堂主室西面	リンテル	ヴィラーダによるシーターの誘拐?
16	カンボジア、シエムレアプ州	アンコール・ワット	12世紀前半	第3回廊北西隅祠堂	壁面浮彫(蒲鉾型ペディメントの浮彫)	カバンダと戦うラーマとラクシュマナ
17	カンボジア、シエムレアプ州	バプーオン	11世紀半ば	第2周壁北塔門東側前室南面	壁面浮彫	スグリーヴァと出会うラーマとラクシュマナ
18	カンボジア、シエムレアプ州	アンコール・ワット	12世紀前半	第3周壁東塔門南側主室西面北側	ハーフペディメント	ラーマとスグリーヴァの同盟
19	カンボジア、シエムレアプ州	ブレア・カン	12世紀後半(1191年頃)	第3周壁西塔門南側前室西面	リンテル	スグリーヴァと出会うラーマとラクシュマナ
20	カンボジア、シエムレアプ州	トマノン	11世紀末～12世紀前半	南経蔵主室西面南側	ハーフペディメント	ラーマとスグリーヴァの同盟
21	カンボジア、シエムレアプ州	アンコール・ワット	12世紀前半	第3回廊北西隅祠堂壁面	壁面浮彫	ラーマとスグリーヴァの同盟
22	カンボジア、シエムレアプ州	アンコール・ワット	12世紀前半	中央祠堂西側前室北側	ハーフペディメント	ラーマとスグリーヴァの同盟
23	カンボジア、シエムレアプ州	アンコール・ワット	12世紀前半	第3回廊西塔門中央主室東面南側	ハーフペディメント	ラーマとスグリーヴァの同盟
24	カンボジア、シエムレアプ州	アンコール・ワット	12世紀前半	第3回廊西塔門北側主室東面南側	ハーフペディメント	ラーマとスグリーヴァの同盟
25	カンボジア、シエムレアプ州	アンコール・ワット	12世紀前半	第3回廊西塔門北側主室東面北側	ハーフペディメント	ラーマとスグリーヴァの同盟
26	カンボジア、シエムレアプ州	アンコール・ワット	12世紀前半	第3回廊北東隅祠堂東面南側	ハーフペディメント	ラーマとスグリーヴァの同盟
27	カンボジア、シエムレアプ州	ブレア・カン	12世紀後半(1191年頃)	第3周壁西塔門北側前室東面	ペディメント	ラーマとスグリーヴァの同盟
28	カンボジア、シエムレアプ州	ブレア・カン	12世紀後半(1191年頃)	第3周壁北塔門北側前室北面	ハーフペディメント	ラーマとスグリーヴァの同盟
29	カンボジア、シエムレアプ州	ブレア・カン	12世紀後半(1191年頃)	第3周壁北塔門西側前室西面	ハーフペディメント	ラーマとスグリーヴァの同盟
30	カンボジア、シエムレアプ州	ブレア・カン	12世紀後半(1191年頃)	第3周壁内北側副次的伽藍東側広間西面	ハーフペディメント	ラーマとスグリーヴァの同盟
31	カンボジア、シエムレアプ州	ブレア・カン	12世紀後半(1191年頃)	第3周壁内北側副次的伽藍中央祠堂主室南面	リンテル	ラーマとスグリーヴァの同盟
32	カンボジア、シエムレアプ州	バンテアイ・サムレ	12世紀半ば	南経蔵主室西面北側	ハーフペディメント	矢で7本の樹木を粉砕するラーマ
33	カンボジア、シエムレアプ州	アンコール・ワット	12世紀前半	第3回廊南西隅祠堂	壁面浮彫	ヴァーリンとスグリーヴァの争い、ヴァーリンに矢を放つラーマ、ヴァーリンの死
34	カンボジア、シエムレアプ州	バンテアイ・スレイ	10世紀後半(967年)	第1周壁西塔門東面	ペディメント	ヴァーリンとスグリーヴァの争い
35	カンボジア、シエムレアプ州	バプーオン	11世紀半ば	第2周壁北塔門西側前室北面	壁面浮彫	ヴァーリンとスグリーヴァの争い、ヴァーリンに矢を放つラーマ、ヴァーリンの死

図番号	所在地	寺院名	寺院建造時期 (創建年代)	施設名	部材名	浮彫の主題
36	カンボジア、 シエムレアプ州	アンコール・ワット	12 世紀前半	第 2 周壁南西隅祠堂西 側出入口	ペディメント	ヴァーリンとスグリーヴァの争い、 ヴァーリンに矢を放つラーマ、ヴァー リンの死
37	カンボジア、 シエムレアプ州	アンコール・ワット	12 世紀前半	第 2 周壁西塔門北側主 室東面	ペディメント	ラーマとスグリーヴァとの出会い、 ヴァーリンの死
38	カンボジア、 シエムレアプ州	チャウ・サイ・デヴァ ター	11 世紀末～12 世紀前半	東塔門南側前室南面	ペディメント	ヴァーリンの死、スグリーヴァの復讐
39	カンボジア、 シエムレアプ州	ブレア・カン	12 世紀後半 (1191 年頃)	第 3 周壁内北側副次的 伽藍中央祠堂北側前室 北面	ペディメント	スグリーヴァの復讐
40	カンボジア、 シエムレアプ州	バンテアイ・サムレ	12 世紀半ば	北経蔵主室西面北側	ハーフペディメント	ヴァーリンとスグリーヴァの争い
41	カンボジア、 シエムレアプ州	バンテアイ・サムレ	12 世紀半ば	前殿北面	ピラスター	ヴァーリンとスグリーヴァの争い
42	カンボジア、 シエムレアプ州	ブレア・カン	12 世紀後半 (1191 年頃)	第 3 周壁北塔門北側前 室北面	ハーフペディメント	ヴァーリンとスグリーヴァの争い
43	カンボジア、 シエムレアプ州	ブレア・カン	12 世紀後半 (1191 年頃)	第 3 周壁西塔門主室東 面出入口左側	ハーフペディメント	ヴァーリンとスグリーヴァの争い
44	カンボジア、 シエムレアプ州	ブレア・カン	12 世紀後半 (1191 年頃)	第 3 周壁内北側副次的 伽藍東塔門主室北面	リントル	ヴァーリンとスグリーヴァの争い
45	カンボジア、 シエムレアプ州	ブレア・カン	12 世紀後半 (1191 年頃)	第 3 周壁北塔門南側前 室	崩落リントル	ヴァーリンとスグリーヴァの争い
46	タイ、シーサケート 県	カンペン・ヤイ	11～12 世紀	東楼門東面	リントル	ヴァーリンとスグリーヴァの争い
47	カンボジア、 シエムレアプ州	バプーオン	11 世紀半ば	第 2 周壁北塔門東側前 室北面	壁面浮彫	シーターと会うハヌマーン
48	カンボジア、 シエムレアプ州	バプーオン	11 世紀半ば	第 2 周壁南塔門東側前 室北面	壁面浮彫	シーターと会うハヌマーン
49	カンボジア、 シエムレアプ州	バプーオン	11 世紀半ば	第 2 周壁北塔門西側前 室南面	壁面浮彫	シーターと会うハヌマーン
50	カンボジア、 シエムレアプ州	アンコール・ワット	12 世紀前半	第 3 周壁西塔門南側主 室右側	ハーフペディメント	シーターと会うハヌマーン
51	カンボジア、バツ タンバン州	ワット・エク	11 世紀	中央祠堂主室東面	リントル	シーターと会うハヌマーン
52	タイ、シーサケート 県	カンペン・ヤイ	11～12 世紀	中央祠堂南面	リントル	シーターと会うハヌマーン
53	カンボジア、 シエムレアプ州	ブレア・カン	12 世紀後半 (1191 年頃)	第 3 周壁内北側副次的 伽藍北塔門東側前室	崩落リントル	シーターと会うハヌマーン
54	カンボジア、 シエムレアプ州	バンテアイ・サムレ	12 世紀半ば	第 2 周壁南塔門主室北 面	ペディメント	橋の建設
55	カンボジア、 シエムレアプ州	アンコール・ワット	12 世紀前半	第 3 周壁北塔門主室東 側	ハーフペディメント	橋の建設
56	タイ、ナコーン ラーチャシーマー 県	ピマーイ	11～12 世紀 (1108 年)	中央祠堂南側前室南面	リントル	橋の建設
57	ラオス、チャンパ サーク県	ワット・プー	11 世紀	前殿東側前室北側	ハーフペディメント	アンガダによるラーヴァナへの最後通 告
58	カンボジア、 シエムレアプ州	アンコール・ワット	12 世紀前半	第 3 周壁西塔門主室北 側	ハーフペディメント	アンガダによるラーヴァナへの最後通 告
59	カンボジア、 シエムレアプ州	アンコール・ワット	12 世紀前半	中央祠堂北面	ペディメント	アンガダによるラーヴァナへの最後通 告
60	カンボジア、 シエムレアプ州	バンテアイ・サムレ	12 世紀半ば	第 1 周壁北塔門東側前 室東面	ペディメント	アンガダによるラーヴァナへの最後通 告
61	カンボジア、 シエムレアプ州	ブレア・カン	12 世紀後半 (1191 年頃)	第 3 周壁内北側副次的 伽藍北西側	崩落ペディメント	インドラジットに矢の網で縛られる ラーマとラクシュマナ
62	タイ、ナコーン ラーチャシーマー 県	ピマーイ	11～12 世紀 (1108 年)	前殿南面	ペディメント	インドラジットに矢の網で縛られる ラーマとラクシュマナ
63	タイ、ナコーン ラーチャシーマー 県	ピマーイ	11～12 世紀 (1108 年)	前殿南面	リントル	インドラジットに矢の網で縛られる ラーマとラクシュマナ
64	タイ、ブリーラム 県	パノム・ルン	11～12 世紀	中央祠堂西側前室西面	ペディメント	打ち倒されたラーマ兄弟をシーターに 見せるラーヴァナ
65	タイ、ブリーラム 県	パノム・ルン	11～12 世紀	前殿北面	ペディメント	ラーマとラクシュマナの救出に向かう 猿たち
66	カンボジア、 シエムレアプ州	バプーオン	11 世紀半ば	第 2 周壁北塔門西側前 室北面	壁面浮彫	インドラジットとアンガダの戦い、打 ち倒されたラーマ兄弟をシーターに見 せるラーヴァナ、インドラジットに よって負傷した王子たちがガルダに救 出される
67	カンボジア、 シエムレアプ州	トマノン	11 世紀末～12 世紀前半	前殿北面	ペディメント	ガルダに救出されるラーマとラクシュ マナ
68	カンボジア、 シエムレアプ州	バプーオン	11 世紀半ば	第 2 周壁西塔門南側前 室東面	壁面浮彫	眠りから起こされるクンバカルナ

図番号	所在地	寺院名	寺院建造時期 (創建年代)	施設名	部材名	浮彫の主題
69	カンボジア、 シエムレアブ州	アンコール・ワット	12世紀前半	第3周壁北西隅祠堂北面東側	ハーフペディメント	クンバカルナの出撃
70	タイ、プリーラム 県	パノム・ルン	11~12世紀	東塔門北側前室北側出入口東面	ペディメント	クンバカルナの出撃
71	カンボジア、 シエムレアブ州	トマノン	11世紀末~12 世紀前半	南経蔵主室東面南側	ハーフペディメント	薬草を山ごと運ぶハヌマーン
72	カンボジア、 シエムレアブ州	トマノン	11世紀末~12 世紀前半	南経蔵主室東面北側	ハーフペディメント	薬草を山ごと運ぶハヌマーン
73	カンボジア、 シエムレアブ州	ブレア・カン	12世紀後半 (1191年頃)	第3周壁西塔門主室西面	ハーフペディメント	薬草を山ごと運ぶハヌマーン
74	カンボジア、 シエムレアブ州	アンコール・ワット	12世紀前半	第2周壁南塔門主室北面	ペディメント	ラーヴァナの矢を受けて負傷するラクシュマナ
75	カンボジア、 シエムレアブ州	バンテアイ・サムレ	12世紀半ば	第2周壁南塔門主室南面	ペディメント	ラーヴァナの矢を受けて負傷するラクシュマナ
76	カンボジア、 シエムレアブ州	アンコール・ワット	12世紀前半	第2周壁南塔門南側前室ボーチ型出入口南面	ペディメント	ラーマとラーヴァナの一騎打ち
77	カンボジア、 シエムレアブ州	アンコール・ワット	12世紀前半	第4周壁西塔門中央西側前室ボーチ型出入口西面	ペディメント	ラーマとラーヴァナの一騎打ち
78	カンボジア、 シエムレアブ州	ブレア・カン	12世紀後半 (1191年頃)	第3周壁西塔門西側前室ボーチ型出入口	ペディメント	ラーマとラーヴァナの一騎打ち
79	カンボジア、 シエムレアブ州	チャウ・サイ・デヴァ ター	11世紀末~12 世紀前半	北塔門北側前室北面	ペディメント	ラーマとラーヴァナの一騎打ち
80	カンボジア、 シエムレアブ州	ブレア・カン	12世紀後半 (1191年頃)	第3周壁内北側副次的 伽藍北西隅祠堂付近で 復元	崩落ペディメント	ラーマとラーヴァナの一騎打ち
81	カンボジア、 シエムレアブ州	バプーオン	11世紀半ば	第2周壁北塔門東側前室北面	壁面浮彫	ラーマとラーヴァナの一騎打ち
82	カンボジア、 シエムレアブ州	バプーオン	11世紀半ば	第2周壁北塔門東側前室北面	壁面浮彫	ラーマとラーヴァナの一騎打ち
83	カンボジア、 シエムレアブ州	バンテアイ・サムレ	12世紀半ば	第2周壁北塔門北面	ペディメント	ラーマとラーヴァナの一騎打ち
84	カンボジア、 シエムレアブ州	バンテアイ・サムレ	12世紀半ば	第1周壁南塔門南面	ペディメント	ラーマとラーヴァナの一騎打ち
85	カンボジア、 シエムレアブ州	バプーオン	11世紀半ば	第2周壁北塔門東側前室北面	壁面浮彫	ラーマとラーヴァナの一騎打ち
86	カンボジア、 シエムレアブ州	ブレア・ピトゥ	12~13世紀	Y寺院前殿北側	ハーフペディメント	ラーマとラーヴァナの一騎打ち
87	カンボジア、 シエムレアブ州	アンコール・ワット	12世紀前半	第4周壁西塔門中央主室南側	ハーフペディメント	ラーマとラーヴァナの一騎打ち
88	タイ、ナコーン ラーチャシーマー 県	ピマーイ	11~12世紀 (1108年)	前殿東面	リンテル	ラーマとラーヴァナの一騎打ち
89	タイ、ナコーン ラーチャシーマー 県	ピマーイ	11~12世紀 (1108年)	中央祠堂南側前室南面	ペディメント	ラーマとラーヴァナの一騎打ち
90	カンボジア、 シエムレアブ州	アンコール・ワット	12世紀前半	第3周壁北西回廊	壁面浮彫	ラーマとラーヴァナの一騎打ち（ハヌマーンに乗るラーマ、ラクシュマナ、ヴィビーシャナ）
91	カンボジア、 シエムレアブ州	アンコール・ワット	12世紀前半	第3周壁北西回廊	壁面浮彫	ラーマとラーヴァナの一騎打ち（ラーヴァナ）
92	カンボジア、 シエムレアブ州	アンコール・ワット	12世紀前半	第3周壁北西隅祠堂	壁面浮彫	シーターの神明裁判
93	カンボジア、 シエムレアブ州	アンコール・ワット	12世紀前半	中央祠堂西側前室と第1周壁西門を連結する回廊北面	ペディメント	シーターの神明裁判
94	カンボジア、 シエムレアブ州	バンテアイ・サムレ	12世紀半ば	南経蔵前室西面	ペディメント	シーターの神明裁判
95	カンボジア、 シエムレアブ州	チャウ・サイ・デヴァ ター	11世紀末~12 世紀前半	西塔門南側前室南面	ペディメント	シーターの神明裁判
96	カンボジア、 シエムレアブ州	ベン・メリア	11世紀後半~ 12世紀前半	第3周壁内南東側副次的 伽藍北東隅祠堂東面	ペディメント	シーターの神明裁判
97	カンボジア、ブレ ア・ヴィヒア州	ブレア・ヴィヒア	9世紀創建、11 世紀増築	北塔門南側前室南面	リンテル	アヨーディヤーへの帰還
98	カンボジア、 シエムレアブ州	アンコール・ワット	12世紀前半	第3周壁北西隅祠堂	壁面浮彫	アヨーディヤーへの帰還
99	タイ、ナコーン ラーチャシーマー 県	ピマーイ	11~12世紀 (1108年)	北東隅祠堂南面	リンテル	アヨーディヤーへの帰還
100	カンボジア、 シエムレアブ州	ブレア・カン	12世紀後半 (1191年頃)	第3周壁内北側副次的 伽藍東塔門	ペディメント	アヨーディヤーへの帰還
101	カンボジア、 シエムレアブ州	ブレア・カン	12世紀後半 (1191年頃)	第3周壁西側副次的伽 藍北塔門南面	ペディメント	アヨーディヤーへの帰還



図 1



図 2



図 3



図 4



図 5



図 6



図 7



図 8



図 9



図 10



図 11



図 12



図 13



図 14



図 15



図 16



図 17



図 18



図 19



図 20



図 21



図 22



図 23



図 24



図 25



図 26



図 27



図 28



図 29



図 30



図 31



図 32



図 33



図 34



図 35



図 36



図 37



図 38

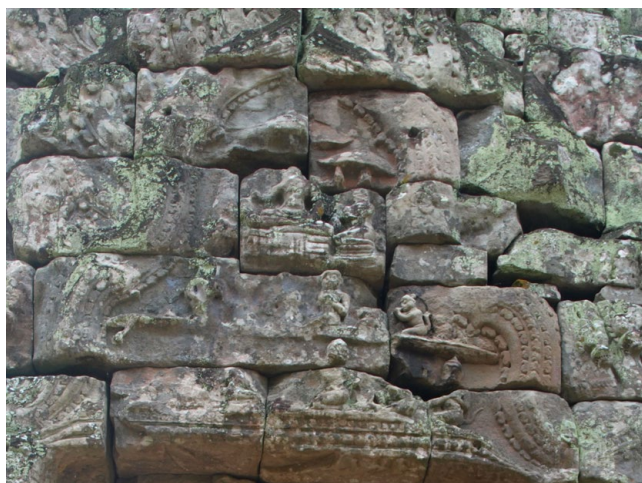


図 39



図 40

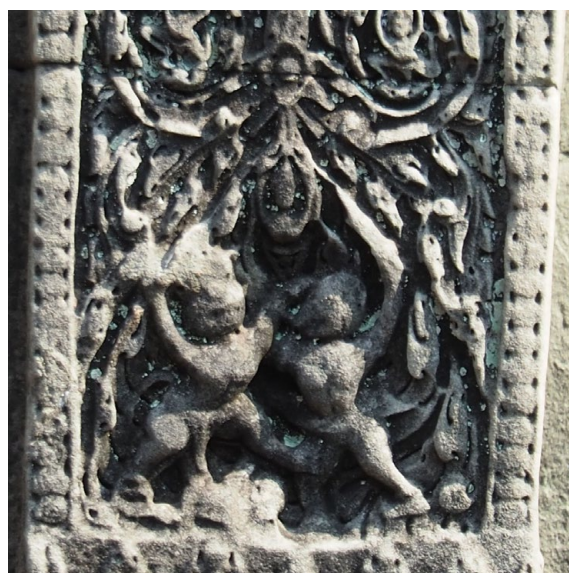


図 41



図 42



図 43



図 44



図 45



図 46



図 47



図 48



図 49



図 50



図 51



図 52



図 53



図 54



図 55



図 56



図 57



図 58



図 59



図 60



図 61



図 62



図 63



図 64



図 65



図 66



図 67



図 68



図 69



図 70



図 71



図 72



図 73



図 74



図 75



図 76



図 77



図 78



図 79



図 80



図 81



図 82



図 83



図 84



図 85



図 86



図 87



図 88



図 89



図 90



図 91



図 92



図 93



図 94



図 95



図 96



図 97



図 98



図 99



図 100



図 101

肥塚隆氏追悼

深見 純生

1. 東南アジア彫刻史科研・古代史科研

科研にお誘いいただいて初めて面識を得た。肥塚さん編集の小学館の『東南アジア』（世界美術大全集東洋編12、2001）はすでにもっていたが、その編者についてまったく知るところはなかった。また正直なところ、この本は買ったもののほとんど見ていなかった。理由は簡単明瞭、重すぎて手軽に見ることができないのである。なんでこんな重い本を作るのだろう。それはともかく、インド（南アジア）の美術史においてすでに立派な業績のある方が東南アジアを研究するのは、ともすればインドの文化的植民地と見なされがちな東南アジア史を研究する者からすると不思議だった。ついでにちょっとやってみようかという Greater India 的な発想かなと思ったりしたが、そうではなく本気だった。小学館の全集ではインドⅠ・Ⅱが肥塚隆・宮地昭両氏の編集で、東南アジアは肥塚さん単独の編集である。東南アジアをインドⅢとせず独立の巻とするのは肥塚さんが強く主張して実現したという。この巻は国別編成を基本としつつも、「総説」では東南アジアを一体として扱い、さらにその最後で「東南アジア美術はインドのその一部でもなければ、亜流でもない。」と宣言し、「インドにはない独自の文化を育てたこと」を強調する（16頁）。この点は後に再び取り上げる。

こうした肥塚さんのリーダーシップのもとで、通称肥塚科研あるいは彫刻史科研は3期10年続いた。なお、肥塚さんには初めての研究代表者だそうで、いずれも基盤研究(A)である。メンバーの入れ替わりがあるが私は3期とも分担者にさせていただいた。

1. 東南アジア彫刻史における<インド化>の再検討（2002～2004年度）
2. 環タイ湾地域におけるインド系文化の変容に関する基礎的研究（2006～2008年度）
3. 南アジアおよび東南アジアにおけるデーヴァラージャ信仰とその造形に関する基礎的研究（2009～2012年度）

肥塚さんは2005年大阪大学を定年退職し大阪人間科学大学の学長になられたが、第2期はちょうどその時期のものであり、第3期は大阪人間科学大学退職後だが研究会の会場にはこの大学を使わせていただいた。

3期いずれの成果報告書にも詳細な活動記録がついている。現地調査の際に綿密なメモを取る肥塚さんの几帳面さがこの活動記録にもよく表れている。現地調査は4+6+7=17回、東南アジア各地、インド各地とスリランカそして最後にはヨーロッパを訪れた。科研メンバー以外の参加もあった。研究会は18+20+28=66回行い、東南アジア彫刻史研究会とも称していた。科研メンバー以外の参加も多い。いま数えてみると発表・報告は計125にのぼる。連名の場合もあるが、最多は肥塚さん21回、ついで深見16回である。

つづいて形成された、深見を研究代表者とし仲間うちで古代史科研と呼んでいるもの（東南アジア古代史の複合的研究、2013～2015年度）は一面で彫刻史科研を継承しつつ、西村昌也氏を中心とする考古学研究と青山亨氏を中心とする刻文研究が合流したものである。その後古代史科研は青山氏を代表者として2期（2016～2018年度、2019～2022年度）続き、いまその2期目の報告書を書いている。肥塚さんは古代史科研には3期とも連携研究者として参加された。

やがて肥塚さんを東南アジアに引きつけたものは2つあると思うようになった。第一に人気（ひとけ）の柔らかさ、立ち居振る舞いの穏やかさである。若いころインドに留学してインド人とのつきあいに慣れているはずなのに、東南アジアにおける人々の穏やかさが嬉しいという。やはりインド留学の経験がありヒンディー語の専門家であり、調査旅行に常に同行された美和子夫人も同じ思いであるという。美和子さんはインドネシア語教室に通う熱心さだった。この穏やかさはじつは作品世界においても東南アジアの特徴であると肥塚さんが捉えていることは後に触れる。

二つ目は、こちらが本質的により重要かもしれないが、東南アジアにはインドを質量ともにはるかにしのぐインド起源の説話の浮彫りがあることである。インド研究者には自明かもしれないが、ふつうインドをよく知

らない東南アジア研究者には思いもよらないことである。私にとりわけ印象的だったのは『ラーマーヤナ』である。インドの浮彫りでよくもち出されるのはエローラ第 16 窟にある横長帯状画面を 8 段重ねたものである。このカイラーサナータ寺自体の壮大にして華麗な岩石寺院は東南アジアには比すべきものがないが、その内庭を飾る『ラーマーヤナ』を見上げて私はがっかりした。ジャワのプランバナンのの方がはるかに詳細で立派であり、見やすいのである。肥塚さんの考えの一端が理解できた気がした。

2. 肥塚美術史の到達点

古代史科研が始まった 2013 年に、中央公論美術出版が「アジア仏教美術論集」の刊行を計画していて肥塚さんが『東南アジア』の巻の編集を担当する予定と知らされた。古代史科研としてはもちろん大歓迎である。この論集では全 12 巻の 1 巻が東南アジアに当てられた。一地域に 1 巻を当てるということではチベット、朝鮮半島と同じだが前者は中央アジアⅡ、後者は東アジアⅥという位置づけなのに対して東南アジアは独立している。南アジアⅠ・Ⅱと並ぶ東南アジアである。美術史の学界において東南アジアが南アジアの付属ではない独立した地域であると認められているのである。東南アジアを独立させたのは先の小学館以来の肥塚さんの功績といってよいだろう。そして今回の『東南アジア』の編者に肥塚さんが最適なのは疑問の余地がない。やがて 2015 年には刊行計画が確定し、『東南アジア』は 2019 年 2 月に刊行された。「総論」以外の掲載論文 18 点の 7 割は古代史科研関係者のものである。

この「総論」の執筆は、研究者人生の後半を東南アジアにかけてきた肥塚さんにとっては、研究総括の格好の機会を与えられたことになる。東南アジア美術史家としての肥塚さんの到達点を示すもの、いわば肥塚東南アジア美術史の集大成というべきものである。美術全集と美術論集というシリーズのもつ本来的な違いがあり、またそれゆえ字数も異なるのだが、今回の「総論」にはこの間の科研などの研究成果が現れていて、前者において萌芽的に記されていることが今回は全面展開しているという印象である。その一つはよりいっそう全域史を目指していることである。個別地域の寄せ集めではない一つの東南アジア史を書くのである。この全域史指向は、小学館の「総説」にすでに表れており、肥塚さんにとってはインドから東南アジアに重点を移したことに伴う当然の選択だったのだろう。今回の「総論」ではこれが徹底している。

「総論」には「東南アジアの古代中世美術」というタイトルがついている。この東南アジアは仏教とヒンドゥー教が伝わった部分をさす。「異なる文化環境」にあったベトナム北部を何度か取り上げているのは全域史指向の表れであろう。古代と中世という時代設定についてとくに説明はない。15 世紀までを古代とすることに他地域（他の巻）の読者に違和感がありうることへの配慮であろう。東南アジア史では中世という時代設定をしないで古代の次を近世とすることがめずらしくない。国家でいえば古代はマジャパヒトまで、マラッカから近世が始まる。15 世紀が分かれ目である。いま報告書を書いているこの科研も 15 世紀までを古代と称しており、15 世紀を下限とすることについては青山氏の説明がある。

「総論」は 7 節からなり、「最近の東南アジア研究」と「初期国家の誕生」の 2 節につづいて、おおきく 3 つの時代区分を提起する。第一を「古典様式の形成」として 6-7 世紀、8 世紀の下位区分を設け、第二に「古典様式の完成」として 9 世紀、10 世紀、11-12 世紀、13 世紀を取り上げる。そして「地域様式の台頭」として 14 世紀と 15 世紀以後を論じる。この新しい試みにはそれぞれの地域や分野の専門家から批判もありうるだろうし、肥塚さんとしても批判的意見は大いに歓迎するところであっただろう。

私をもっとも注目するのはこれにつづく第 6 節「東南アジア美術の独自性」のとくに後半である。第一に、東南アジアではヒンドゥー神像が穏やかに表現され、また女性像も官能的になるのを避けて穏やかなことである。第二に、東南アジアにおいて仏教説話（とくにボロブドゥル）とヒンドゥー教の二大説話（とくにプランバナナ、またアンコールワット、バイヨン）を表現した浮彫りがインドより（場合によってはアジア全体において）はるかに詳細に表現されていることである。その由来について肥塚さんなりの解釈が示されており、その妥当性は今後おおいに検討されることであろう。こうした穏やかさと詳細な作例という 2 点、とくに後者は、

インドを知らない東南アジア研究者にも、東南アジアを知らないインド研究者にも新鮮な響きをもつことであろう。

合評会をしたかったがその具体化より前にコロナ禍が始まってしまったのは残念なことであった。

3. お世話になりました。

私事が多くなるがご許し願いたい。その仏教論集で私は7世紀半ばの東南アジアでインド文化と仏教の弘布に努めた中インド出身の那提三蔵を取り上げた。那提は大乘だけでなく小乗も4つのヴェーダも根底から理解していて諸学に通暁する希代の学僧であり、千年に何人もいない優れた知識人としてきわめて高く評価されている。当代一流の知識人が明瞭な使命感をもって布教に当たったと知って嬉しかった。植民地時代には本国で食い詰めた浪人者やろくでなしの渡来が多かったことを知っている私には、インド化の担い手が（私がかつて想像したような）落ちこぼれのバラモンではないと例証されたのが嬉しいのである。

肥塚さんが那提にも比すべき逸材という褒めすぎかもしれないが、私たちインドを知らない東南アジア研究者に出し惜しみすることなく資史料や知識を提供する肥塚さんを私はひそかに那提に重ねていた。インド史をいっそう勉強するようになって気づいたことだが、『南アジアを知る事典』（辛島昇他監修、平凡社、初版1992、新訂増補版2002、新版2012）において「美術」の大部分に始まって「ヒンドゥー教美術」など美術史の項目のほとんどは肥塚さんの執筆である。ここで面白いのは「イスラーム美術」が肥塚さんではないことである。古代の彫刻を中心的な研究対象とする肥塚さんはいわば偶像教徒であってイスラームとは性が合わないらしいとは調査に同行して感じたことである。とはいえ展覧会図録『インド宮廷文化の華 細密画とデザインの世界』（1993）を編集しているのでイスラーム美術も守備範囲に入っている。ともかくも当代一流のインド美術史家が明確な問題意識をもって東南アジアに重心を移したのを那提三蔵の東南アジアにおける仏教弘布に重ねるのはあながち的外れではなからうと自分では思っている。

肥塚さんのお蔭をこうむった東南アジア研究者は多いはずである。インドをよく知らない東南アジア研究者がインドについて（あるいは東南アジアの他地域について）質問するとたいはいすぐその場で答えてもらえる。ほとんど歩くカタログのような博覧強記は、とてもありがたい存在であった。ついながら、肥塚さんは2004年8月19日調査中のカーンチープラムで脳梗塞を起こし急遽帰国した。阪大病院の措置は的確だっただろうし、もともと頑健な脳だったのか、その後の養生（あの重煙家がタバコをやめた）が良かったのか、ともかくも幸いなことに記憶力や知力、行動力、また思考の柔軟性に陰りはまったく見られず安心した。

最もお蔭をこうむったのは私かもしれない。というのも私は2004年から高校の世界史教科書の執筆に加わっていた。当初は東南アジア史だけだが全面改訂を機に南アジア史も担当した。もちろん自ら志願したのではなく成り行きによる。従来南アジア史や東アジア史の専門家がついでに東南アジア史を書くのが普通だったので、東南アジア史出身者が南アジア史も書くのは世界史業界始まって以来の快挙である（と自分では思っている）。その「世界史B」（2013年4月供用開始）のために2009年秋から1年間猛勉強することになった。インド現地調査による土地勘を含む肥塚科研で得た知見が支えになっている。折に触れて肥塚さんに質問できたのはありがたいことだった。また2015年3月のコルカタでは肥塚さんが言い出してタムルック（タムラリプティ、法頭の多摩梨帝、義浄の耽摩立底）を訪れ、東南アジアでは見たことのない大河に呆然となった。チャンドンナガル（フランス名シャンデルナゴル）に行くとき近くにポルトガル町があったことを知った（教会は現存）。プラッシーも訪れた。だだっぴろいベンガルの大平原をコルカタから5時間あまりで戦いの記念碑に至る。こうした史跡探訪とそれによる土地勘はすべて肥塚さんのお蔭である。その教科書は改訂を経て今年2023年4月から科目名も「世界史探求」と変えて供用されている。そこには肥塚さんから提供された図版も複数掲載されている。まったくのこと、お世話になりました。

肥塚隆先生略歴・主要業績

青山 亨 編

肥塚隆（こえづか たかし）先生略歴

1941 年 8 月 21 日、兵庫県姫路市に生まれる
1964 年 京都大学文学部哲学科卒業
1974 年～1976 年 大阪大学文学部 助手
1976 年～1979 年 大阪大学文学部 講師
1979 年～1989 年 大阪大学文学部 助教授
1989 年～1998 年 大阪大学文学部 教授
1998 年～2002 年 大阪大学大学院文学研究科 教授
2002 年～2005 年 大阪大学総合学術博物館 教授
2005 年 定年退官、大阪大学名誉教授
2005 年～2009 年 大阪人間科学大学 学長
2022 年 9 月、逝去

肥塚隆先生主要業績

（とくに注記がないものは単著）

1967 年 「瞑想と造形—インド美術における一つの基礎概念」『南都佛教』20: 60-79.
1972 年 「Satavahana 朝の仏教石窟」『日本仏教学会年報』35: 39-57.
1973 年 「南インドのヒンドゥー教石窟」『佛教藝術』93: 37-65.
1974 年 「南インドのヒンドゥー教石窟—承前—」『佛教藝術』98: 3-28.
1975 年 「アイホーレの初期チャールキヤ彫刻」『佛教藝術』102: 3-22.
1975 年 「インドの仏伝美術」『南都佛教』35: 87-111.
1976 年 「インドにおける仏誕生の図像（含 インドにおける仏誕生図の遺例）」『美術史』23(2-4): 58-71.
1978 年 「「從三十三天降下」図の図像」『待兼山論叢』（美学編）11: 29-48.
1979 年 「エローラ第一石窟のヒンドゥー教図像」『美学』30(3): 46.
1979 年 『美術に見る釈尊の生涯』肥塚隆解説，田枝幹宏写真．平凡社．
1979 年 『世界の聖域6 ガンジスの聖地』中村元，肥塚隆著．講談社．
1981 年 「インドの涅槃図」元興寺文化財研究所篇『涅槃会の研究：涅槃会と涅槃図』綜芸舎．
1983 年 『天竺への旅 第2集 仏像の源流をたずねて』肥塚隆編著，丸山勇撮影．学習研究社．
1984 年 「マトゥラーにおけるグプタ古典様式の展開」『佛教藝術』156: 80-96.
1985 年 「二つのインド・ガンダーラ美術展」『フィロカリア』2: 198-200.
1985 年 「大乘仏教の美術—大乘仏教美術の初期相」平川彰，梶山雄一，高崎直道編『講座・大乘仏教 10 大乘仏教とその周辺』春秋社．
1986 年 「日本にもたらされた仏教美術のながれ 2 仏像の出現とイラン文化（四天王像）」肥塚隆，田辺勝美著『日本の美術』84-86.
1987 年 「ボロブドゥールの説話図とテクスト—「スダナ王子とマノーハラーの物語」浮彫の検討」『民族藝術』3: 77-90.

- 1988年 「釈迦信仰の遺産（仏伝図）」肥塚隆，百橋明穂著『日本の美術』267: 86-96.
- 1989年 『アジアの仏像 岩宮武二写真集 上・下』肥塚隆，大西修也，東山健吾解説，岩宮武二写真，集英社.
- 1990年 「莫高窟第275窟交脚菩薩像と健陀羅的先例」『敦煌研究』22(1): 16-24.
- 1992年 「古代インドの入口文様」『世界の文様 インド・東南アジアの文様』石沢良昭，肥塚隆，小笠原小枝，小西正捷編，小学館.
- 1992年 「インドやジャワの美術にみる猿」『日本美術工芸』640: 7-17.
- 1993年 『インド宮廷文化の華 細密画とデザインの世界 ヴィクトリア & アルバート美術館展』肥塚隆編・訳，NHK きんきメディアプラン.
- 1993年 「インドの巡礼」懷徳堂友の会編『道と巡礼 心を旅するひとびと』81-114, 和泉書院.
- 1994年 「アマラーヴァティー彫刻」『大英博物館所属仏像とヒンドゥーの神々』17-24, 朝日新聞社.
- 1999年 『世界美術大全集 東洋編 第13巻 インド (1)』肥塚隆，宮治昭編，小学館.
- 1999年 「グプタ時代の美術」肥塚隆，宮治昭編『世界美術大全集 東洋編 第13巻 インド (1)』201-216, 小学館.
- 1999年 「ジャイナ教美術」肥塚隆，宮治昭編『世界美術大全集 東洋編 第13巻 インド (1)』329-336, 小学館.
- 1999年 『世界美術大全集 東洋編 第14巻 インド (2)』肥塚隆，宮治昭編，小学館.
- 1999年 「中世インドのダイナミズム—ヒンドゥーとムスリムの美術」肥塚隆，宮治昭編『世界美術大全集 東洋編 第14巻 インド (2)』9-16, 小学館.
- 1999年 「ヒンドゥー教美術の興隆」肥塚隆，宮治昭編『世界美術大全集 東洋編 第14巻 インド (2)』41-56, 小学館.
- 1999年 妹尾河童・肥塚隆「巻頭対談 多様な国インドを覗く」肥塚隆，宮治昭編『世界美術大全集 東洋編 第14巻 インド (2)』2-5, 小学館.
- 1999年 『世界美術大全集 東洋編 第14巻 インド (2)』肥塚隆，宮治昭編，小学館.
- 1999年 「ボロブドゥールの説話図浮彫」『適塾』32: 19-24.
- 2000年 「功德の廻向」『懷徳』68: 2-4.
- 2000年 『世界美術大全集 東洋編 第13巻 インド (1)』宮治昭，肥塚隆編，小学館.
- 2001年 『世界美術大全集 東洋編 第12巻 東南アジア』肥塚隆編，小学館.
- 2001年 「東南アジア文化と『東南アジア化』」肥塚隆編『世界美術大全集 東洋編 第12巻 東南アジア』9-16, 小学館.
- 2001年 「プレ・アンコール期の彫刻」肥塚隆編『世界美術大全集 東洋編 第12巻 東南アジア』86-90, 小学館.
- 2001年 「インドネシアの彫刻」肥塚隆編『世界美術大全集 東洋編 第12巻 東南アジア』243-252, 小学館.
- 2001年 国谷裕子・肥塚隆「巻頭対談 自然に融和したアンコール遺跡」肥塚隆編『世界美術大全集 東洋編 第12巻 東南アジア』2-5, 小学館.
- 2002年 「クシャーン時代のマトゥラー彫刻」『インド・マトゥラー彫刻展』68-73, NHK/NHK プロモーション.
- 2003年 「〈展示評〉 ついに実現した南アジア彫刻展の同時開催」『奈良国立博物館だより』47: 4.
- 2003年 『アフガニスタンの美術—文明の十字路の古代と現代』畑田家住宅活用保存会.
- 2005年 『東南アジア彫刻史における〈インド化〉の再検討（論文編・資料編）』肥塚隆研究代表，平成14年度～平成16年度科学研究費補助金研究成果報告書，大阪大学総合学術博物館.
- 2005年 「9世紀以前の東南アジア彫刻とインド」肥塚隆研究代表『東南アジア彫刻史における〈インド化〉

- の再検討（論文編）』10-21.
- 2006 年 『芸術学フォーラム 4 東洋の美術』山岡泰造, 肥塚隆, 曾布川寛編, 勁草書房.
- 2006 年 「ヒンドゥー教美術」山岡泰造, 肥塚隆, 曾布川寛編 『芸術学フォーラム 4 東洋の美術』59-74, 勁草書房.
- 2006 年 「インドネシアの古代美術」山岡泰造, 肥塚隆, 曾布川寛編 『芸術学フォーラム 4 東洋の美術』102-120, 勁草書房.
- 2008 年 「インドの美意識」なら・シルクロード博記念国際交流財団 / シルクロード学研究センター編 『インド世界への憧れ 仏教文化の原郷を求めて シルクロード・奈良国際シンポジウム 2007』なら・シルクロード博記念国際交流財団 / シルクロード学研究センター.
- 2008 年 「ボロブドゥールの善財童子歴参図浮彫について（特集 民族藝術と巡礼）」『民族藝術』24: 25-32.
- 2012 年 「書評 宮治昭 『インド仏教美術史論』」『南アジア研究』24: 142-150.
- 2012 年 『環タイ湾地域におけるインド系文化の変容に関する基礎的研究』肥塚隆研究代表, 平成 18 年度～20 年度科学研究費補助金研究成果報告書, 大阪人間科学大学.
- 2012 年 「南アジアのマカトローラナの形式変遷」肥塚隆研究代表 『環タイ湾地域におけるインド系文化の変容に関する基礎的研究』27-45.
- 2013 年 『南アジアおよび東南アジアにおけるデーヴァラージャ信仰とその造形に関する基礎的研究』肥塚隆研究代表, 平成 21 年度～24 年度科学研究費補助金研究成果報告書, 大阪大学大学院文学研究科.
- 2013 年 「パッラヴァ朝の王名を冠した寺院と王の彫像」肥塚隆研究代表 『南アジアおよび東南アジアにおけるデーヴァラージャ信仰とその造形に関する基礎的研究』13-27.
- 2013 年 「造形芸術と時間—古代南アジアの説話浮彫を中心に—」近藤寿人編 『芸術と脳—絵画と文学、時間と空間の脳科学—』154-175, 大阪大学出版会.
- 2014 年 「古代インド美術の乳房表現」乳房文化研究会編 『乳房の文化論』129-148, 淡交社.
- 2016 年 「中部ジャワの花綱文様の編年」深見純生研究代表 『東南アジア古代史の複合的研究』平成 25 年度～27 年度科学研究費補助金研究成果報告書, 75-86, 桃山学院大学総合研究所.
- 2019 年 『アジア仏教美術論集 東南アジア』肥塚隆責任編集, 中央公論美術出版.
- 2019 年 「総論 東南アジアの古代中世美術」肥塚隆責任編集 『アジア仏教美術論集 東南アジア』3-59.

2019 ～ 2022 年度科学研究費補助金
(基盤研究 A 課題番号 19H00538)

東南アジア「古代史」の下限としての 14・15 世紀に関する地域・分野横断的研究

2023 年 12 月 10 日 初版第一刷発行
2024 年 4 月 1 日 第二刷発行
編者 青山 亨
発行 東京外国語大学
〒 183-8534
東京都府中市朝日町 3-11-1

東南アジア「古代史」の下限としての
14・15 世紀に関する地域・分野横断的研究

2019 ～ 2022 年度科学研究費補助金
(基盤研究 A 課題番号 19H00538)

研究代表者 青山 亨 (東京外国語大学)

2023 年 12 月